

狐ちゃん奮闘記

moti—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

先生に拾われた狐の話。

目次

一章

第1話

1

第2話

6

第3話

14

第4話

23

第5話

32

第6話

43

第7話

54

第8話

61

第9話

69

第10話

77

第11話

88

幕間・彼ら彼女らから見たアノ子

第12話

97

第13話

102

第14話

111

二章

第15話

119

第16話

127

第17話

135

第18話

146

第19話

154

第20話

161

第21話

171

第44話	第43話	第42話	終章	第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	三章	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話	第24話	第23話	第22話
385	373	365		354	343	334	324	313	305	294	287	278	270	262	254		245	237	228	219	211	202	192	183

第45話
あとがき

403 396

一章

第1話

ぼくは狐なんだろうと思う。

と、いうのも普段のように目を覚ますと、どことなく頭が冴える感覚——そして、普段とは異なる体の感覚。そして普段より広がった思考力。知識も増えたのか、自分がいわゆる狐と呼ばれる動物と同じ姿をしていることを認識したからだ。

よつてぼくは狐であると思われる。

「……………」

一つ鳴いてみた。こおん、と小さく声が漏れる。喉は普段と変わっていないようで、いや、少しばかり違うような気もする。

とりあえず、自分に変化があるということを確認した。それはたぶん間違っていないことだった。なんせ、昨日までの自分がこんなふうを考えることなんてできなかったのだから。

ならばこうして考えられるようになったのはなぜなのだろうか。

推測すると、自分の体になにかが起こった——そのなにかが、わからないのだけれど。

ともあれ、自然界を生きるための力になってくれるだろう。どことなく身のこなしも普段より軽い。たった一夜でステップアップ、ということではないだろうが、しかし確かに能力が向上している——よし、がんばる、そうとだけ考えて、ひとまず自分の能力の把握をすることにした。

闇雲に走っていく。あちら、こちら、どちら？ そちら。

あっちへこつちへひらひらと——体を動かしてみる。自分の想像を裏切らない動きを体はしてくれた。多少の無茶にもしつかりと応えてくれる。これは、ぼくが体の動かし方をわかってきたってことなんだろうか？ それはわからないけれど、たしかに身体能力は向上している気がする。

身体能力の把握は終了——結論は、多少自分の意識通りに動かす

ことができる、といったところだろうか。いやはや、これはほくも進歩したものだ。そう思いながら、今自分は獲物を探す——なんというか、とつても一気にお腹が空いた。

身体能力や思考力の代わりに、エネルギーを多く使うらしい。とつてもお腹すいた。燃費悪くなったのは辛い。

周囲を探る——目も良くなったのか、すぐに獲物は見つかった。

◇

それはいわゆる、イノシシと呼ばれるものだろう。

それを見て、まだなんにも気づいていないそいつにアドバンテージを持っていて、という事実が体をわずかに鈍らせる。

確実に殺すべきだろう。しかしどうやって？ 普段どおりにできるものか。そもそもイノシシなんかには普段は勝負を挑まない。冷静じゃない。一旦落ち着けぼく。なんでイノシシなんかの前にいるんだ。

普段は昆虫とか、そういうちっちゃいのばかり食べてただろ？ それでいいじゃないか。

なんて躊躇するのは一瞬。飢餓感が体を支配し、体を勝手に動かした。隠れた草むらの中からイノシシの前に姿を出す。

向こうも気づいたのか、こちらを見て、警戒を見せている——それが痛いほど伝わってくる。

どうする？ 噛み付く？ どう殺す？

どうやったら戦えるのか、そう考えた。しかし答えは出ない。自分がどうすればいいのか、なんて咄嗟には出てこない。何分経験が少ないし、ぽんぽんと冷静にとるべき行動は出てこない。

結局、突撃することにした。せつかく頭脳を手に入れたのに、全部を無駄にするかのごとく突貫。脳みそちっちゃいんじゃないかなって思う。しかし、自分の体はすでに行動している。あとから考えている状態になった。こうなったら、自分にはどうしようもない。

あとはただ、流れに任せるだけだ。

イノシシはこちらの動きに触発され、そのまま突進してきた。それはとても怖いという感情を携えている。とても早い。当たれば未だ子供の自分は死ぬだろう。だったらどうしたらいいのか？ わからない。わからないけど、ただ闇雲に正面から突っ込んだ。

衝突する——起こる衝撃に備え、瞳をつむった。痛いのは嫌だから。ぼくはまだ死にたくない。なのに、なんでこんなバカみたいなことをやっちゃったのかな。そんなことを若干後悔しながら、そのまま突進する。

そして、衝撃。体に激痛。いたい。しかしそれは一瞬だった。あつという間に痛みは引き、自分の瞳をまんまるに開かせた。

……想像したよりは、痛くない。

と、というか。そもそもイノシシと衝突したら吹っ飛んでいるはずだろう。そう思ってたぼくは周りを見た。イノシシがこつ然と消え去っていて、どうにもわからず首をかしげる。

自分の体が濡れている、ということにその時気づいた。自慢の毛は濡れて気持ち悪い。一体なんだ、雨は降ってないよね？ と思いながら、自分の視線を落とす——赤い。

赤い？

ひよつとして、と思つて、後ろを振り向いた。

イノシシが死んでいた。



ちょうど、顔からおしりまでに一直線に穴がある。それはちょうどぼくくらいの大きさだった。そのことから考えられるのは、ぼくがこのイノシシとぶつかつて、そして勝つたということだ。

わからない。

なんでぼくが勝つたのか、その理由も。体格的には完全に負けている。イノシシみたいな大質量に、小柄なぼくが勝てるわけないのだ。それが常識なのだ。

じゃあ、なぜ勝つたのか。

……ひよつとすると、ぼくは自分の体を自在に強化できるのかも？
もしくは単純に、イノシシよりぼくの力が強くなっているか。どう
なのだろう。ためしにイノシシを運ぼうと口に咥えた——重すぎ
て断念する。

なので、この線はないだろう。

じゃあ、最初の考えが正解なのかも。自分を強化できる。それも、
小柄なぼくがイノシシに勝てるほどに。なんだそれ。とっても強い。
先程からの飢餓もこの力の影響なのだろうか。

まあ——そんなのは、今のところどうでもいい。とりあえず、ぼ
くはお腹が空いている。殺したイノシシの、そのお腹。それを噛みち
ぎって、飲み込んだ。

美味しくはない。でも虫よりはまし。なんだ、だったら虫を食べる
必要はないかなあ。と思いつながら、二口目をいただく。

肉を喰らうたび、耐えきれないほど膨れ上がっていた空腹がやんわ
りと安らいでいく。イノシシを食い尽くす頃には、その苦しみは全部
消え去っていた。

なるほど。

なんとというか、——でかいやつでも、動物なら全部食い殺せそう
だ。

じゃあ基本、見つけ次第喧嘩を売っていいだろう。そうしようか。
ついでに、自分の力がどれほど強化できるのか——それが気にな
ったので、意識して足に力を込めていく。

血で体が気持ち悪い。水場に向かうついでに、この力を試しておく
のだ。

そう思い、一歩足を踏み出し——制御しきれずに吹っ飛んでいっ
た。

大きく飛び上がり、木々にぶつかり、それらをなぎ倒しながら、ぼ
くは水場に向かって進んでいく——ここまで自分の身体能力を底
上げできるのか、と驚きながら、ぼくは川へと着水した。

◇

それからだいたい不自由もなく、好きなきに起き、好きなきに寝て、好きなきに適当な動物を殺して食べる生活をしていた折のこと。

「これが——いや、君が世にも珍しい動物の《個性》持ちかい？」

あんまりに唐突に人生が^{狐生}終わりを告げた音を聞いた。

第2話

あんまりに唐突すぎる死がそこにやってきたので体は硬直した。怖い。動けない。助けて。だれか。

そう思った——いや、思えたのもつかの間だ。気づけば自分から正常な思考は奪われていた。いや、思考力が芽生えてからなんども考えていたことが、突然できなくなった——ただ、ろくに考えることもできないまま、目の前の生き物の恐ろしさに体を震わせることしかできない。

こわい。

「この個性——たしかに強力だけど、リスクーだ。人を食わないと死ぬようにできている。なるほど。これは僕には……要らないな」

それがこちらの前にゆっくりと腰を下ろす。怖くて動くこともかなわない。ゆっくりと手が伸ばされる。なにをされるのだろう。いや、抗うだけ無駄だ。どうせ死ぬ。

死ぬ。

と、思っていたのに。

軽くその男がぼくに触れると、冷静な判断が帰ってきた。と、いうよりは思考力だろうか？ 少なからず、ぼくの頭の中はものを考えられるくらいには冷静さを取り戻したのだった。

「その個性は返してあげる。さて……しかし、弔へのお土産にちやうどよさそうだ」

体がゆっくり撫でられる。その指が骨の隙間を通って内臓を潰すのを幻視する。

怖い。ゆっくりと殺されそうな気がしている。その予感が消えない。

「君、連れて帰ってもいいかな」

「……………!!」

あんまりに怖くて全力で首を縦に振る。

「そっか……よかった。じゃあついてきてもらおうよ」

そう言って、首ねっこを掴まれて——そのまま服のポケットに収

納された。

「さあ、行こうか。君の新しい家族のもとへ」

◇

今まで生まれ育った森から出て、人の街に出た。これははじめての経験だ。

しかし、うるさい。人の街とはこんなにうるさいものなのか。

『ヒーローになりた』『クソが全員死ね』『あー個性ぶつ放してえ』『我々異能解放軍の力を』『金がねえ』『死ね』『課金は楽しい』……。

たくさん聞こえてくる雑音。聞くにたえないそれを、耳をふさいでも流し込まれるからどうしようもない。

雑音だけではなく沢山のイメージも流し込まれた。人と人が裸で重なっている情景、なにかを殺したいという衝動、物語を作り上げる人の肥大な想像、なんらかの機械の工作予定図——たくさんものが、頭の中に流れ込んできた。

ポケットの中で丸まっていると、男はぼくの背に触れる。そういえば、このひとからは全くなんのイメージも伝わってこない。どうしてなのだろうか。

「君の個性はいろいろなことができる」

と、内心を見透かすように男は告げた。

「人の心を読んだり、なんでも自由に変身したり、傷ついた体を癒やしたり、体を尋常じゃないほどに強化したり——君の個性は、それこそ性能でいえば世界で一番強いものだろう」

それこそ、可能性とするならばワン・フォー・オールより。

男はそうつぶやいた。

「君が今感じているすべてが、人の心の中なんだ。君の個性はそれを覗き見てしまう——望もうと、そうでなかりうと。どうだい？ 気分は。最悪かい？」

「……………」

小さく頷いた。

「そうか、最悪か……君が望むのなら、その雑音を消すことだってできる。どうする？」

首を振った。

「そうか。嫌なのか。……うん。長々と人混みにいるのはよくないね。急いで帰るとしよう」

男はそう言つて、歩く速度を早めたのだった。

◇

男に連れ帰られた先で、ポケットから出されたぼくは机の上に下ろされた。それを見ると、自分がいかに小さいのかを実感させられる。まあ、男の手のひらに収まるくらいなのだから、自分が小さいことなどわかりきっていたことなのだが。

ともあれ、ぼくは男に連れ帰られた。

「そういえば、自己紹介がまだだったね」

と、男はいう——彼は、自らをオール・フォー・ワンと名乗った。「この家には君と、もうひとり子供がいる。その子の遊び相手になつてやってくれ。……弔！」

男は、だれかの名前を呼んだ。すぐに一人の少年がやってくる。かちやりと扉が開いて、ゆつくりと歩いてきた。

「はい、先生」

「この子は君の弟だ。かわいがつてやってくれ」

「え……狐？ が弟つて、どういうこと……ですか？」

「この子は世にも珍しい、天然物の動物の個性持ちだ。人の言葉がわかるくらい知能を持っているし、ケアはしないとイケないが——個性も強力だ。うまく使えば、優秀な手駒になつてくれる。それとは別に、まだ子供だから遊び相手にできるんじゃないかと思つてね」

「……はあ。頭がいい、ねえ」

男の呼び方は先生らしい。なるほど……これからは先生で統一していこう。

手駒などと不穏な言葉が聞こえた気がするが、しかしまあ、変なこ

とをしないかぎりは悪くは扱われないはずだ。そう伏せながら思う。先生の心は読めない。しかし、弔と呼ばれている少年の心はよく伝わってくる。

そこにあるのは好奇と、一つの怖れ。

ゆつくりと少年が手を伸ばした。そして、手袋越しにぼくの体に指が触れた。

安堵と、緊張。

背中を撫でる指の動きがぎこちない。けど、なんというか、どこか懐かしいような気がして、ぼくは指に体を擦り付けた。

緊張。手が硬直して、そのままゆつくりと離れていった。

何故なのだろう。

手に触られることを嫌がっている？

「どうだい？ 君の生活の中に、この子がいて大丈夫かな？」

「……ええ、先生。……生き物って、あつたかいんですね」

「……そうかい」

少年の荒みきった心は、わずかに晴れたように見えた。

ぼくはそれを感じ取って——急にやってくる、空腹。なんでこんなときに、なんて思いながら、それをアピールするためにこてんつと横に倒れたのだった。

「……眠いのかな」

「いや、どうだろう。空腹かもしれない」

先生がそう言ったので、起き上がって首を縦に振る。

そう、ぼくはお腹が空いたのだ。なにかご飯をくれると嬉しい。そうアピールすると、先生はだれかに話しかけ始めた。

「ドクター。持ってきてくれ」

『わかった』

と、どこからともなく（近くに置いてあったスピーカーが発生源だろうか）聞こえてきた男の声。

まもなく、部屋の扉がちやりと開き、一人の老人が肉を運んできた。

「指定されてた肉じゃわい。死柄木は絶対に食うなよ」

「食うなって……ドクター。それなんの肉だ？」

「人の肉じゃ」

あつさりとした解答に、少年はこれまたあつさり「ふーん」とだけ返したのだった。

人の死に対する反応が淡泊——これは、人間にしては珍しい反応なのではないだろうか。ぼくだって知り合いが死ねば心を痛めるくらいはするし、虐げられる同族は助けようと思う。

しかしだいたいそんなものかもしれない——ぼくだって、いろいろ殺して食っている。同族が食われるくらいじゃあ、心はあんまり傷まない。当然だと思っただけである。

ならば、きつとそれと同じ心理なのだろう——机からびよこんと跳ねて、潰されてペースト状になった人肉に口を付ける。別に、人を食うのがはじめてというわけじゃあない。時々森で死んだ自殺者の死体を食うことだってあった。

……要するにぼくは、人を食べ慣れているのだ。

人肉は特にぼくの飢餓感が癒えるから、見つけたらなるべくたくさん食べていた。だから、今こうして餌としてもらえるのであれば、ぼくはとてもうれしい。

「……人肉って美味しいのかな」

「生態が根本的に違うだけじゃ。人が食ったら脳みそが縮むぞ」

「うっへえ……まじか。食わねえほうがいいな」

「逆に食おうとしたのかお前は」

久しぶりに食べる人の味は、美味しくおもえた。しばらくわずかに残っていた空腹感も、これで一気に解消される。

「そういうえば、名前を付けてなかったな……弔。君の好きな名前をつけなさい」

少年は、少し考えるそぶりを見せ、

「……ジョン・ドウ」

「……死体か。良い名だな。それじゃあ、この子のことはこれからジョンと呼ぼう」

「わかった。ジョンよ、ワシがお前の食事を用意する人間じゃ。ドク

ターで覚えてくれ」

と、指で撫でながらぼくの名を呼ぶ老人——つんつん、と最後に指先で突かれた。なるほど、ドクターか。把握。

ドクターは「それじゃあ」と言つて、早々に部屋から出ていってしまった。毎日肉を冷蔵庫に入れておくとのこと。

……そんな人に人の肉つてありふれてるのか。

社会を知った気分になった。

「……じゃあ、ジョン。個性の把握をしようか」

先生の言葉に頷いて、今までやってきたように体に意識を向ける。

「ジョンの個性は弔と同じ、突然変異の個性だ——ただ、出来ることの幅が広すぎる。手札に迷うくらい」

「つてことは……先生みたいに、いくつもの能力が合わさってるつてことか？」

「というか——本人の思いつき次第でなんでもできる個性だ。デメリットとして、食事を取らないと栄養不足で死ぬんだけど」

「最悪じゃねえか」

「そのケアはちゃんとするよ。まず、常時発動しているものとして【人の心を読む能力】。これは今は相手の感情などの漠然としたものしか見えないだろうけど、やがて相手の心を完璧に読むことができるようになると思うよ」

「……普通にクソ強いっすね」

「まだあるよ。たぶんだけど、身体機能の強化ができるようだ。こんな小さい狐が熊を殺して食べるんだから、当然この系統はあるよね」

「……それ、自分にだけしか効かないやつですか？」

「いや。この子の個性は生命力と引き換えに発動している。生命力というか……もつと別の何かなんだろうけども。所謂魔法みたいなものだ。自分だけではなく、他人に使うこともできる。治癒能力も高められるようだから回復要員としても使えるかな」

「……先生。能力のわりにデメリットが少くないか？あとやけにこいつの個性について詳しいけどどうやってるんだ？」

「僕ほど個性に造詣のある人間はそうはいない。一度扱ってみたんだ

から、それと合わせてある程度は想像できるものさ。デメリットが少ないのは……そうだね。獣からすると少ないと思うよ。ただ、人間からするとこの個性はとんでもないデメリットを課せられている」

「ああ……人食か」

「正確には【個性持ち】の捕食だけだね。自分の力で生命力を回復させ切れないのだろう。足りない部分を食事で補っているみたいだ」

「グルメにならないといいけどな」

「君次第だ」

弔がぼくの耳に触れる。そのまま降りてきて、鼻に触れた。なんだろう。それで集中が途切れたので、目を開けて弔を見る。そこから読み解けた感情は、期待と尊敬の念。褒められてるみたいだ。えへん。少しだけ得意げになってみる。

先生が声をかけてきた。

「ジョン。弔をよく見ろ」

と、言われたので弔に視線を集中させる。幼い少年だ。その目は、まるで世界の深淵に立たされているかのような昏さと年齢に見合う後期で彩られていた。

「見たかな？　じゃあ、弔になれ」

「……は？　先生、何言ってる……」

ぼくは言われた通りに弔になろうとする。なる、と意識した瞬間に、ぼくの体は変質していった。激痛が伴う。痛い。脊髄を引き抜かれているような気分になる。いたい。

けれど、そんな痛みはほんの一瞬だった。すぐにそれは収まり、ぼくは周囲を見る余裕を確保した。

「……うわぁ」

「やっぱり持ってたね」

視点が普段より高い。それも、かなり。ぼくは先程まで立っていた机に、尻をつけて座っている。弔が少し小さく見えた。さつきまであんなに大きかったのに。先生は……さつきと比べるとまだ小さい。

「変身する個性——一人でどれだけの力を扱えるのやら」

弔が部屋に設置されている鏡を指差す。そこから見えたぼくは、弔

の形になっていた。

わあ。

「なあ、もういいだろ？　自分と同じ姿のやつが目の前にいると落ちて着かねえ」

「あつ、ちよつと待って。弔の個性が使えるかどうかだけ確かめさせてくれ」

と、いつて先生は腕を差し出した。どうするのか、と首をかしげると、「その手で握れ」と言い出した。指の使い方はままならなかったし、違和感があったが、それでも腕を動かすだけならまだいける。先生の腕をぎこちなくもつかみ、

——そうしてなにも起こらない。

「個性の再現とまではいかないみたいだ」

「元の個性は使えるんだよね？」

それはいける。弔の問に答えるため、なるべく派手な力を見せる――

——てのひらに火を灯した。

「炎まで使えるのか」

「いよいよ汎用性の高い個性だね。あ、もう戻っていいよ」

言われて、体に戻る。

そしてぼくは体をこてんと倒したのだった。

第3話

ドクターがわざわざ肉を持ってきてくれて、それを美味しく頂いたあとのこと。

「読心以外は燃費が悪いようだね」

と、先生が言った。曰く、変身が使えるのは二回までが限界だろうとのこと。それ以上使ったら生命力不足で死ぬらしい。

とはいえ、変身自体はかなり便利な能力なのでリスクを管理しつつ使うのは問題なさそうらしい。これ、ぼくは褒められてるものと受け取っていいのだろうか。うれしい。

◇

弔と二人になった。

なんでも先生は忙しいようで、ぼくの個性の確認を終えたとたつたかとお出でいってしまった。ドクターはこの家にいるようだ。ぼくの食事を補充するためらしい。すこし申し訳なくなる。

弔は、こちらのことを気にしながらも、あんまり近寄ってはこない。声は聞こえる。その声に耳を傾けると、彼は決まってこう言っている。

『もうだれかをバラバラにしたくない』。

まるでぼくからすると意味のわからない言葉だが、彼からすると大きな意味を持っているようで、ぼくを遠ざけている。

話しかけてはくるのだが、しかし一定の距離を置かれている。ぼくが床のうえでごろごろ転がっていてもスルーした。

ひどい。

仕方ないのでぼくのほうから近づぐことにする。とてとて、と歩いて、にじにじと弔の側に近づいていく。ほんとにちよつとずつ進むから、弔は気づいていないようだ。これは勝った。そう思って、しかし警戒を解かず、にじにじと進んでいると、機械に向き合っていた弔はこちらを向く。

そして少しだけ距離を離した。
どう考えても露骨に避けられているので、ぼくはわずかに落ち込んだ。

ということでも弔に近づく方法を考える。

個性を使つて身体強化、そうして追いかけるのが一番いいのだろうが……加減を失敗して弔をこっぴどみじんにしたりしたらしやれにならない。実際、全力で発動したら尻尾で叩くだけで熊を仕留められるくらいに強化されるのだ。

臆病にだつてなる。

よつてこれは却下だ。さすがに殺してしまうかもしれないことをやるのは避けたい。ぼくは弔を殺したいわけではないのだ。ただ、せめて遊んでほしいだけなのだ。

かわいらしく鳴きながら（こうして甘えた声を出すのは虫唾が走るのでわりと自爆攻撃）、弔にアピールをする。

恥ずかしいつたらありやしない。そういえば、森にいた時代に甘えた子供のイノシシを殺した覚えがあつたつ。しかたない。あの殺伐とした環境のなかで、媚びた声で鳴くなど恥ずべき所業なのだ。

恥ずべき畜生。

ともあれ戦果。「なんだよ……」という言葉とともに、弔から置いてあつたハエたたきで背中を撫でられた。汚い、と思うことはなかった。それを嬉しいと、ぼくは思ったのだつた。

翌日。

弔はこちらに少しだけ慣れたのか、紐をぼくの前に吊り下げてくる。そんなものでぼくが釣られるわけがないだろう、と思つて無視しようとしたが、目の前で振られると獲物と思つて狙つてしまう。噛み付くと宙に釣られた。

そんなものでぼくが釣られるわけがあつた。

「これじゃあ首を痛めるな」

と、いつて弔はぼくをゆつくりと下ろす。そうして昨日のようにハエたたきではなく、普段体にくつつけている手の一つを使つてぼくを

撫でた。昨日より断然心地よかった。

さらに翌日。

弔が付けているモニターから、ゲームの映像が映し出されている。弔はもうぼくに慣れたのか体に触れる範囲にぼくを置かないが、しかしそれでも側においてぼくとゲームの画面を共有していた。

「……ちッ、あーだめだ反確取られたはいフィニッシュ対戦ありがとうございまして畜生！」

荒んでおられる。

「あー……駄目だ。やっぱリーチ長いのが正義か？ クソ……いやもつと技撒いていったほうがいいなこりやあ。クソが、俺も全部の指が使えれば負けねえってのに……あーマジでクソゲーやる気なくした」

やさぐれはじめた。

弔はゲームを終了し、また別のソフトを起動し始めた。アクションゲームはコントローラーをうまく握れないから、RPGをするつもりらしい。

ぼくは口ではどうこう言いつつ、感情では楽しんでる弔を見ながら床にだらーっと座り込む。

口ではどうのこうのと言うが、弔はゲームをやっているときにはかなり落ち着いている。それは普段から心の中が苛烈で、悍ましいほどの苛立ちに塗れているからだ。

ぼくが弔の心の中を上手く声として覗けないのは、そういった理由も関係しているのだろう。安堵、尊敬、感謝、怖れ、好気、親愛、痛快、——全て、その根底にある憎悪と比べるととても小さい。

それが死柄木弔だった。

だからこそ、なんだかんだと僕を気にかけてくれるのは、なんだか嬉しい。

「RPGの醍醐味は低レベクリアだよなあ」

などと言いながら、弔はゲームをさくさくと滑らかに滞りなく進めていった。

戦略は意外に丁寧で、攻撃役を二人用意し、攻撃倍率の高い技を習

得させている。回復に特化したキャラが一人。サポートが主になるが、万が一のさいに回復に回れるキャラが一人。

安定攻略においてはこれ以上ないだろう、というほどのパーティである。レベルは低い、立ち回りも安定しているためにボスで苦戦することもなく、ゲームをさっさと進めていく。

「そういえば」

ふと、弔が声をかけてきた。

「お前、喋れねえのか？」

問いには、首を横に振ることで回答を示す。

しゃべると言っても、やりかたがわからない。どうすればいいのか、その方法がわからないのだ。人の言葉はわかるけど、自分の喉を震わせる感覚がいまいち理解できない。

「んー……でもさ。ゲームとかだと喋る狐って意外といるんだぜ？」

喋ってくれるところちもわかりやすいというか」

わからないものはわからないのだ。

ただ、人間の体になったときはどうであるかはわからない。試さずに結論づけるのもどうか、と思う。

なので変身を使うことを決意する——のはいいが、だれに変身しようか迷う。

弔はこのまえ「止める」と言われたし、先生は恐れ多くて無理だ。ドクターもドクターで、あのひとはあんまり観察する時間がなかった。デイテールが崩れておぼけみたいになりそうな予感がする。

どうしようか——と考えていると、ちょうどゲームの画面が目に入った。そうだ、このキャラクターに似せた人間の形になればいいんじゃないだろうか。

そういう考えから、キャラクターの動作を観察する。パッケージにデザインされている人物の造型を見て、意識してその体になろうとしてみる。

激痛。

なんとというか、変身のたびにこれがあるし、一気にお腹が空くからそんなに使いたくない。やむを得ない場合には躊躇しないが、感覚的

に3回目を使おうとした瞬間に死にそんな気がするので怖いのだ。体が痛い。激痛だ。ゆっくりと目を開けた。床が目に入る。自分が倒れている、ということに自覚して、腕に力を込めて起き上がった。普段より足が長いから、動かすのに少し苦勞する。膝を足代わりに使うのが、ちょうどいい具合に前の感覚に近いので、そうして動くことにする。

振り返ると、弔が驚いているのを感じた。へへーんどうだ。と、得意げになるのは一瞬で、造型の失敗の可能性を考えて鏡を探すことにした。

部屋の中に設置されている鏡は、洗面所に一つだけある。そこまで這って行き、手すり代わりに洗面器の端っこを使い、立ち上がった。鏡を見ると、顔の造型は成功している。首を下にして見ると、体の造型も成功している——服ごと造型したので、ちゃんと服もある。よし、成功。

弔のもとまで這って歩き、指を立てた。

「なんでもありかよ……」

弔がぼそりとつぶやいた。

◇

お腹が空いて寝転んだぼくのために、弔がご飯を持ってきてくれた。

指の扱いが難しいので、四苦八苦しつつもなんとか皿の上の肉を掬う——取りやすいように、弔はスプーンを渡してくれた。

とはいえ、これも持ちづらいから弔と違い、握りしめるような持ち方になっている。難しい。指って長い必要ない。なんなら必要すらないかもしれない。

弔はなんだかんだで一本だけ指を使わずに料理をつまんでいる。器用だ。羨ましい。

食事を終え、弔が話しかけてくる。

「なんでいきなりそんな姿になったんだ」

そういえば、甲にはなにも伝えてないか。どうしよう。せつかなので、話せるかどうか試してみる。

「……うゆう」

「……………」

「ゆ」

「……………」

「ミッ」

「あーわかった。喋りたいんだな？」

頷いた。

甲はすごい。ぼくの言いたいことをなんとなくわかってくれる。

「そうだなあ……母音から練習か」

母音、というところ「あいうえお」だろう。なるほど、そこから練習したらいいのか。

さっそく、頭の中にある音とイメージを合わせるために声にしてみる。

「ううう……うやあ」

「……若干近いな。その調子で慣らしていこう」

「おういえあ」

「お前実は喋れるだろ」

そんなわけではない。

しかし、甲曰く近いらしいので、このままゆっくりと発音していくことにする。

「うあ」

「惜しい」

「ゆあ」

「ちよつと遠くなった」

「わ」

「惜しいな」

「あ」

「その調子」

「あ」

「そう、それが『あ』だ。もう一回」

「あ！」

「あと二回くらいやるか」

「あー！ あー！」

「よし、覚えたか？　じゃあ次は『い』かな」

「おういえあ」

「なんでそれは言えるんだよ」

「これはぼくにもわからない。」

しかし、「おういえあ」か。これ、地味に母音が全部入ってるからこれ練習したら話すことはできそうだ。

『『い』……いけるか？』

「おういえあ」

「なんか流暢になってるし……まあいいか。その調子だ。そこから『い』だけを抜き出してみろ」

「い」

「なんだ、早いじゃねえか。『う』は？」

「う」

「え」

「えー」

『『お』は？』

「お！」

「子音をくつつけていこうか」

「おういえあ」

弔は近くにおいてある、モニターの電源を入れる。少しして、モニターから声が聞こえ始めた。

『どうした弔』

「先生。ジョンが話せるようになりそうだから、子音の教え方を教えてくれ」

『ん？　もうそこまで来ているのかい？　……うん。じゃあちよつと待っててくれ。僕もすぐにそっちにいくから』

と、という言葉の通りに先生はあつという間に部屋に帰ってきた。

ちよつと早すぎると思う。ひよつとしたら転移の個性でも持つているのだろうか。

部屋に帰ってきたばかりの先生は、ぼくを見て珍しく硬直した。

「……これは、弔の趣味かな」

「違うからな、先生。断じて違う」

「しかしなんというか……やけに扇情的というか。肌を出しすぎじゃないかい?」

「俺に言わないでくれ先生。あれは全部あいつが勝手にやったことだ」

ふうん、と言って先生はぼくが参考にしたゲームのパッケージを手にとった。

「このキャラかな」

「そうですね」

「このゲーム、レーティングがR15だね」

「そうですね」

「弔、こういう趣味だったんだね」

「ゲーム性評価して買っただけなんですけどオ!？」

「隠すことじゃないよ」

「あーッ……もう、いいからジョンに言葉を教えてやってくださいよ」

「ああ、そうだったそうだった。ジョン、口を開けなさい」

ぼくは言われたとおりにする。

先生に舌を摘まれた。

「これは弔にはできないからね……うっかりミスってこともあるし」

と、言いながら先生はぼくの舌の奥を、喉の天井に付ける。

「ここを弾きながら『あ』って言うんだ」

「……かー」

「そう、これが『か行』。『さ行』は息の通る道を小さくしながら、息を吐く」

「……すー」

「そう。これが所謂S音だね。ここに母音を乗せていく。ためしに『あ』を乗せてみようか」

「さー」

「そう。これが『さ行』。じゃあこの調子で『わ行』まで行こうか」
舌に触れながらの先生の言葉に、ぼくは小さく頷いた。

第4話

「とむらあ、とむらあ」

「あー……なんだ、ジョン」

「とむらとむらとむらとむらとむらとむら」

「なんだ」

「とむらとむらとむらとむらとーむらーらー!」

「うるせエ」

なんとか喋れるようになった。

時々舌がもつれるが、それは早口のときくらいなのでそんなに問題ない。変身は、元に戻るときにも変身という判定があるようなので、あれからずつと人の姿のままだ。

なので、そろそろ人の姿にもなれてきた。

繊細な指の動きとはいかないが、それでもなんとか指だつて扱えるようになった。その証拠として箸で豆をつまむことだってできる。まれに弾いてふつとばす。

なので、ぼくも遊びたい。

「あそんでよとむらー!」

「うるせえ。そこにゲーム機あるだろうが」

「ぼくはとむらであそびたいんだよ」

「人で遊ぶな解バラすぞ」

なんて言いながらなんだかんだ怒ってない弔好き。

現在ぼくは一つの壁に行き当たっている。

——暇。

そう、暇なのだ。ぶつちやけめちやくちや暇なのだ。毎日毎日特にやることはない。ぐでーつとだらけているだけだ。人によつてはそれでもいいのだろうが、しかしまったくアクションがないと暇でしかない。

ぐでぐでとしているからか、個性を全く使わないから燃費はいい感じだけれど、それでもやっぱり暇なのはつらい。森の中だったら個性を試して遊んでいたのに、今は狭い室内だ。暇でしかない。

「お前さア……暇だとか言ってる暇あるんだったらその舌っ足らず直せよ」

「ひまだとかいってるひまがあるからひまなんだよ!」

「ちツ……じゃあわかった。一緒にゲームやってやるから来い」

そう言つて、弔はモニターの側にあるゲーム機の、一本のソフトを起動する。

弔が前荒んでおられたゲームだ。格闘ゲーム。ぼくは喜んでコントローラーを受け取った。

絶対勝つ! と望んでキャラクターを選択するのだった。

「……………」

「新参には負けねえに決まってるんだろ」

このやりとりではつきりとわかるとおり、ぼくは敗北した。

「とむらひどり」

「俺酷くない。練度の差だろ。お前は初心者俺は慣れてる。な? そりゃあ俺が勝つさ」

「なぐさめはいらないんだよ」

「折角の人の好意を……………」

「つぎはかつもん」

二戦目、以前弔が言っていた、リーチ差でハメようと考えて、ぼくは剣持ちキャラを選択した。

これなら勝てる、と思いたい。

弔は基本的に素手のキャラを使うので、殴られる前に攻撃が届くのだ。相性的には勝ってる。なら勝てる、と思いたい。

対戦が始まる。これならぼくが勝てるだろう、と思いながら、コントローラーを強く握るのだった。

「しよぼん」

「口で言うのか……………」

敗北。なんというか、そう——弔強い。

そう、弔が強いのだ。ぼくが弱いわけじゃない。しかし、そうか。

ならばぼくも本気を出すしかない。再戦を要求し、先程と同じキャラを選択。そして対戦を開始する。

そしてぼくは個性を使用した。

眼を強化し、相手の攻撃を確実に見てから行動する戦法に入ったのだ。大人気ないと言われても、そもそも初心者に花を持たせようという甲に問題がある。ぼくは悪くない。そう言い訳しながら、ぼくは先に相手の残機を減らしたのだった。

「……………」

「お前個性使ったなおい」

「くふ」

「負けてるんだから威張れねえよ」

善戦はしたでしょうに。

対戦ではどうやっても勝てないと判断したぼくは、甲の膝に頭を乗せた。ちくしよー。絶対いつか勝つ。そう思いながら、腰をホルルドするように手を回して、丸くなる。

「邪魔だ」

自分の体を揺すってぼくを剥がそうとするが、しかしぼくは離れない。離れてやらないのだ。

その感情には、怖れと緊張。やっぱり。

人との触れ合いを極端に避けている印象がある。

いや、それは仕方ないのかもしれない。こんな場所で、しばらくの間を一人で過ごしているのだ。人に慣れるわけがない。

それは、少し悲しいなあ、と思つてへばりついたままの姿勢をキープしていると、諦めたのか甲はインターネット回線を通じて人と対戦を始めた。

見ているかんじ、かなり余裕そうな立ち回りだ。成長が早い。この間と比べて相当強くなっているんじゃないだろうか。

動きが細かく、ところどころフェイントを交えつつの攻防だ。見ていてかなり意外に思うが、そういえば甲はなかなか堅実な立ち回りをするタイプだったと思ひ出す。そりゃあうまくいくよなあ、と思つて

いると、部屋の扉が開いた。

「ふたりとも、少し社会見学的时间を——……」

先生だった。

先生はぼくと弔の格好を見ると、固まった。先生のこんな姿は本当に珍しい。というかぼくが見るのは二回目だ。いつも先生は毅然としているので、動揺することがない。

となると、これは今とてもレアな光景なんじゃないだろうか。

相手をきつちり仕留めて勝利した弔が、ゲームをスリープモードにして振り向いた。

「社会見学ですか？」

「ああ、うん。まずジョンを振りほどいたらどうかな」

「全然離れないんだよこいつ。おい、退けって」

「うん………なんというか、仲がいいことは伝わってきたんだけど」

先生はぼくを見て、

「この格好はちよつと教育に悪いよね」

「たしかに」

なんで？

たしかにヘソ出しパーカーにショートパンツという服装だし若干露出は多いかもしれないが、これはゲームのキャラが着ていたものだしれっきとした服装なのではないだろうか。

「着替えたほうがいいと思うよ。というか見た目幼いんだし服装とのギャップがすごい」

「でもぼくもとのすがただとはだかだよ」

「人の体で露出が多いと問題になるんだ」

「なるほど」

じゃあ、着替えたほうがいいのかもしれない。

「女子用の服はないから、今度買ってくることにするけど………今回はこれでいいか。弔、準備してきなさい。終わったら出るよ」

「あの、せんせい。しゃかいけんがくって？」

「ん？ ああ、ジョンは初めてか。簡単さ」

顔に笑みを浮かべつつ、

「――裏社会のお仕事の見学」

◇

先生に連れられやってきたのは、山奥の小さな集落だった。

「ここに住んでる人は全員 敵だよ」
サイラン

と、先生は言う。

先生は正面から乗り込んだ。ぼくと弔はその後ろについている。

「静かだ」

「いつ襲いかかれるともわからないからね。気をつけたほうがいい」

「なんで襲いかかってくるんだ？」

「根城だからだね」

「勝手な奴らだ」

と、弔が言いつつ自分の頭を押し下げ腕を振り翳す。

弔の手が横合いから出てきた人の脇に触れた瞬間、『崩壊』が始まった。

弔が崩壊していく体の中に手を突っ込んでいく。ゆっくりと崩壊を待つのではなく、確実に殺すという意志で腕を振り切り、

わずか数秒で人の体を二つに裂いた。

つよい。

「先生、どいつもこの程度か？」

「いいや……少しおもしろい個性を持った人間がいるよ。と、その前に」

先生は、弔が殺した死体の腕を引きちぎり、ぼくに渡してきた。

「食べるかい？」

「あ、はい。いただきます」

邪魔な袖を取り払って、その肉を噛みちぎった。うん。人の口は小さいから、ちよつとずつしか食べれない。ちよつともどかしい。

ただ不味いわげじゃない。全然食べられるし、腕だから内臓みたい

に汚く感じることもない。両手が使えないのも問題なので、腕を啜えながら歩くことにした。

「どういう個性の人間がいるんだ？ 先生」

「そうだね……身体能力の強化だ」

「どこにでもあるぜ」

「とはいえ純粋に強い個性だ。僕としても何個もストックはほしい」

「んむっ……せんせい、ぼくのこせいは？」

「君の個性はリスクが大きすぎるからね。僕には合わない……いや、人には合わない個性だ」

「ふーん」

「そうだ。ジョン、君が戦うかい？ 死体からでも個性は回収できるしね」

「わかった！」

と、言いながら進んでいく。

驚くくらい人がいない。奥へ、奥へと進んでいると、一つだけ大きい家が見えてきた。

「あれだね」

先生が躊躇もなく乗り込んでいったので、弔とぼくもそれに続く。人が動きやすい広さの玄関が顔を出した。

そこに、たくさんの人がいた。

その中心の、一際大きい体つきの男が話しかけてくる。

「お前等が天槍テンソウを殺したやつか」

「……ああ、ジョン。その腕の持ち主だ」

「んむ？ んー……このうで、いります？」

「要らねえよガキが。ほしいのはお前等の命だけだぜ」

わかりやすい。腕を噛みながらぼくはそう思った。先生を見ても、なにを考えているのかわからない。意図して無視していた周囲の声に耳を傾ける。

『馬鹿な奴等だ……親分が万全の状態のときにここにくるなんてよ』

『供犠を使えばたかが三人、一瞬で終わるだろ』

「くぎつてなあに？」

「——!!」

「誰だ！ クソツ！ 天槍が漏らしやがったか！」

「あははは、ちがうよ。みんないつてるじゃん」

『なんだあのガキ!?』『いやまて、まだ供犠はバレても問題ねえ!』『どこから漏れた……! クソツ、みんな言ってるだど!? ひよつとしてあいつ、心でも読んでやがるんじゃ……!』

「ジョン。供犠と言ったね？」

「はい」

「どういうものか解るかい？」

「たぶんこせいです」

「誰のかは？」

「わかんない」

「しよががないか……適当に殺して教えてもらおう」

「テメエらツ！ やれ!!」

突然、ぼくの体を倦怠感。吐息に血が混じっているような気もする。熱い。これはなんだろう、と考えていると、声が詳細を伝えてくる。

『一度食らったら生きて帰れるものはいねえ、俺の【呪い】だ！ これならあいつは絶対に死んだだろ!』

「のろい、ねえ」

「……!？」

「おい！ 心を読まれてやがる！ あのガキを早く殺せ！」

「了解——!!」

狼のような見た目の男が、ぼくを押し倒した。首筋に噛み付く。そのまま噛み千切られた。

痛い、が……触れてみると出血はない。噛みちぎられたぶんの肉を、変身を使って再生しながら身体強化を併用する。握力の強化だ。

狼男を、握りつぶした。

わりとあっさり潰すことができた。腕に力を入れるまでもなかった。ただ、蚊を押しつぶすような気軽さで、人の頭を潰すことができた。血が溢れて、解けた脳みそがこぼれて、ぼくを汚す。気持ち悪い。

「うん、よわいよわい」

つぶやきながら、今殺したばかりの死体の肩を噛みちぎり、飲み込む。再生でちよつと消費したぶんを、それで回復する。

「だーれーにーしーよーうーかーなー」

「……………!!」

伝わってくるのは、怯え。でもそんなの今更だろう。ぼくは、先程攻撃を仕掛けてきた男の頭を蹴り飛ばし、次の敵をどうするか考える。

そのとき、親分と呼ばれた男以外がばたばたと倒れていくのをみて、ぼくは首をかしげた。

「……………これが供犠かな」

「味方を殺す個性じゃねえか」

「というよりは、味方を殺してそのぶんの恩恵を自分が受ける個性だろう。あんまりほしい個性ではないかな」

そもそも盾なんか使わないしね、と先生は言った。

「それ、もう殺していいよ」

先生は冷たく言い放った。先生からのお言葉なので、せっかくなので自分の能力を最大限まで引き上げつつ戦うことにする。

「団員全員殺したぶんのパワーだぜ」

と、親分と呼ばれた男はぼくに言った。

「……………今の俺は、だれにも負けねえ」

瞬間、目にも留まらぬ速度で迫ってくる男。なんとなくの予測で直線機動のそれを回避し、視力の強化に少しばかり多くリソースを回して、背後から殴りかかってくる男を視認。

振られる腕を捕らえて、巻き取るようにしてその体を押し倒す。

「がっ……………この……………ッ!」

「せんせー、これ、たべていいんですよね」

「ああ、いいよ。食べなさい」

振りほどこうとする男だが、他の部分に回していたぶんの強化を力にまわして、まずは腕を引っこ抜く。暴れないように両腕だ。

次に、逃げられないように足を千切る——これは、ぼくだけでは

できないので、弔に手伝わしてもらおうことにする。膝あたりを触れた弔の個性で、両足が体から切り離される。

弔の崩壊は、発生部を切り落とさないかぎり続く。勝手に壊れられても困るので、足はさっさと食べることにした。食べようとして、まづ壊れかけてる部分から口にしたが、不味かったので捨てた。さつきから響く懇願がうるさい。

「あ、あ、あああああ……やめてくれ……」

まだまだ可食部はありそうだったが、しかし弔の崩壊が回っている。これはもう手遅れかな、と思い、ぼくは彼の上から退いた。ゆつくりと下半身から塵になっていく男を眺めながら、ぼくはその肉を食んでいた。ざわめく雑音も既がない。それはこの中に、ぼくたち以外生きているものはいないことを示していた。

あっけなく男は塵になった。腕だけ残して消えていった。

男の腕を食べるぼくと、それを優しくな笑みで見守る弔に、先生が「帰ろう」と声をかけるのだった。

第5話

「そういえばお前さア、首噛まれてなかった？」

「かまれたね」

「とうるか千切られてたよな」

「ちぎられたね」

「……痛くないか？」

「へんしんでなおした」

「やっぱチートだ、その能力」

まあ手札が強いのはいいことだ、と弔。

褒められた。

最近の弔は上機嫌だ。なにが楽しいのか、よく鼻歌なんかを歌っていたりもする。だいたいがゲームミュージックなあたり、弔の環境を感じさせるものがある。

弔はゲーム以外の娯楽を知らない。それがいいことなのか、わるいことなのかはわからない。けれど先生がそのような環境をよしとしているのだから、それはいいことなのかもしれない。

弔はテレビを見ない。それをなによりも嫌っている。どいつもこいつも気味悪い報道ばかりだから、とぼくは前に聞いたことがある。

弔は娯楽を解さない。楽しいこと、好きなこと。それを問うとゲームと答えるんだろうが、それ以外の娯楽を知らない。あるいは興味ない。

だから、いろんなことを楽しんでしまう裏の世界の支配者——先生の後継になる、なんていう理想を胸の内に抱えている、ということぼくは弔から聞いている。その行為を楽しんでいるし、それによって生み出されるだろう犠牲のそのすべての命を奪うことを楽しみにしている。

ぼくはそれが弔のやりたいことだ、と知っているから、何もいうつもりはない。弔から誘われるならそれを手伝うつもりだ。それが間違っているとしても、ぼくは弔の味方をするつもりだ。

とはいえ、今消費できる娯楽がゲームだけでいいのか？

もつと他にもなにか楽しめるものがあるんじゃないのか？

と、いうことでぼくは弔の趣味にできそうなことを探すこととなった。

◇

今すでに趣味としていることがあるかもしれないので、疑問という体を装って、聞き出すことにする。

「ねえとむらー、げーむいがいにすきなことってない？」

「……ゲーム以外か。……ねエな。あ、一つある」

「えー！ なに!？」

「お前で遊ぶこと」

「えー!? ひどいひどいひどいよとむらあ」

「お前が最初に言ったんだろうが」

そういえば、そんなことを言ったような覚えもある。

根に持ってたのか……。

「えー？ ほんとになにもないの？ おんがくとかきかない？」

「音楽とか時間の無駄じゃねえか」

「げーむは?」

「楽しい」

「じゃあえいがとかみないの?」

「ヒーローが評価されるクソB級しかねエだろ制作会社全部潰れろ」

荒んでおられる。

と、こんな感じで見事に弔は好きなことがない。ほんとはあるのかもしれないけど、それはわからない。ぼくの個性じゃあ弔の心の中を覗くまで足りないのだ。

暇が有り余っているので、弔の心を読むようにするのが一番早いのかもされない。

となると——【個性】の訓練の時間かな。

「とむらー… しょうぶしよー!」

「んー……何の?」

「げーむ」

「ああ……お前、アレ好きなのな」

「とむらにまけてることにはらがたつ」

「おいお前先生に与えられてるジヨブ的には俺のが兄だぞ敬えよ」

「おにいちゃん」

「やめてくれ鳥肌物だ」

「どうしろって言うの!」

理不尽じゃないか。

「……折角だ。対戦して負けたほうが勝ったほうの言うことを聞くなんてのはどうだ」

「え、なにきゆうにこわいよ」

「いや……普通に戦うってのも退屈だ。せめて罰ゲームくらい用意しようぜ」

「どうするの? まけるたびにぬぐ?」

「んな野球拳みたいなことしねエよ脱ぎたくないし」

「え? とむら、ひよつとしてぼくにまけるのがこわいの? ひよつとしてとむらってよわよわさんなの?」

「上等じゃねえか」

と、いうことで負ける度に服を脱いでいくというルールで勝負が開始されたのだった。

「……………」

「煽つといて負けんなよ」

「まだいちまいだけだもん」

「全部合わせて5枚しか着てないだろ? 一枚って問題でしかねえじゃん」

「なんでしってるの」

ぼくの問いに、弔は黙ってキャラを選択した。

「なんでしってるの」

「あのゲーム、キャラが脱ぐシーンあるんだよ」

「へえー」

「なんだよ」

「吊ってそんな趣味？」

「ゲーム性で買ったつつつってるじゃねえか先生みたいな勘違いしてん
じゃねえ」

わりと本気っぽいので、ぼくはそれ以上追求しなかった。

とりあえず、約束は約束だ。一枚脱ぐ。パーカーを脱いで、放り投
げた。

へそ出しTシャツである。

この下はブラジャーなので、なるべく死守したいところである。
と、いうことで弔にガチガチの対策を決めるためにいつものように、
リーチの長い剣士を選択するのだった。

対戦開始。

なんでぼくが脱がないといけないのだ。弔が脱げ。そういう思い
を燃料にして、ぼくは視力を強化する。

弔は、基本的に無駄な動きをしない。さらにフェイントが上手だ
し、戦闘中に相手の癖を暴いてそこを殴ってくる。コンボもどこまで
ならば繋がるか、などを把握してるし、いうなら単純に強い。

ぼくが目を強化してるのに気づいたのか、弔は確定コンボを主な火
力ソースとして振ってくる。普段はもっと大胆に技を振ってくるし、
妨害を撒いてくるが、今はそういうのを抜きに堅実に殴ってくる。

だんだんと撃墜圏内に近づいていることを悟って、ぼくは少しだけ
焦った。とはいえ、相手も意外と削れているし、こっちは撃墜力が高
いキャラだ。ふっ飛ばしに優れているのだから、ダメージが近いとい
うことはぼくのほうが若干優位に立てているということでもある。

最悪、こっちは道連れができるので勝ち筋は全然ある。とはいえこ
のペース、少しでも気を緩めると負けそうだ。ガードをキャンセルし
て投げ、弔が焦って空中回避をした。取れる、と判断し、咄嗟に横振
りを入力する。弔のキャラクターがふっ飛ばされ、撃墜された。

「あークソツ、プレミした……！」

「あーこれはかったかなーとむらのみすのおかげでー」

「うっわうぜえ」

降りてきた弔が上投げから下必殺技でコンボを決めてぼくのキラは死んだ。

「あつれ!? おつかしいなあこっちがプレミしたのに何故かイーブンだなあどういうことだろうなははははははははははははッ!!」

「むぐぐう……!」

結果発表、負けました。

「いやあの、別に脱ぎたくなければ脱がなくていいんだぞ」

服を脱ぎ捨てようとしたぼくに、弔は今更ながらそう言った。ちよつと困惑する。いや、別にぼくは脱いでも構わないんだけど。むしろ裸のほうが落ち着く。

この間先生に諭されたけど別に弔相手にだったら見せて全然問題ないと思うし、別に脱ぐくらいだったらいいでしょと思う。

と、いうことで脱いだ。

「……………」

は、いいのだけれど。

造型の際に服の下の部分までは見ることができていなかったの、なんというか、マネキンのような体だ。これ、あんまり見せておくのも気持ち悪いなあ、と思ってぼくは服を着た。

弔からはなにも言われなかった。

◇

弔の好きなことを思いつかなかったぼくは、折角なのでこの家の、違う部屋にいるドクターを尋ねることにした。ぼくに配慮してなかはわからないけど、かわいらしい木の看板にこれまたかわいらしい飾り付けで『どくたあの部屋』と書かれている。

その扉をノックした。

『……………誰じゃ』

「あ、ぼくです。じよん・どう」

『ぼほうー!』

がちやり、と扉が開き、その中へと引きずり込まれた。ちよつと強引にひっぱられたため、少しよろける。

部屋のなかはとても暗く、そして広い。あちらこちらに薬品や機材が置いてあつて、いかにも研究室といった容貌をしている。

座った椅子が勝手に移動しているのを見て、どういう技術なのだろう、と疑問に思った。

「……それで、どういった要件じゃ?」

「あー、えと。とむらのすきなことつてなにかなあつておもひまして」「死柄木の好きなことか……そうだな。好きなこととは違うが、あいつは誰かとのふれあいに飢えておるだろうな」

「……どういふことですか?」

「そうか。お前さんは知らんのか。ならば教えてやろう。死柄木弔はその個性から、人から愛されなかつたのじゃよ。握手した者すべてを塵にしてしまう、あの子供は……の」

「え?」

「死柄木の個性は『崩壊』。掌、あの五指に捕らえられたものは例外なく粉々にされる。そういう個性じゃ。死柄木本人にも制御はつかん。そういう個性の影響もあり、あいつには愛を注いでくれる人間がいなかつた」

「……………」

「あいつは、愛に飢えているだろうよ。なによりも望んでいるだろうことじゃ」

「……………」

なるほど。ぼくは一つ、納得する。なんだかんだ弔がぼくを受け入れてくれていた理由も。弔があれだけ先生を尊敬している理由も。世界に対する苛立ちも、嫌気も。

そのすべての理由がわかるような気がした。

「……どくたー」

「ん? なんじゃ?」

「……ぼくを」

やつぱり、自分の口から言うのは恥ずかしい。けれど弔のためだ。

ぼく個人の感傷や感情なんて捨て置いて、吐き出してしまえ。言っ
てしまえ。

「ぼくを、おんなにしてください！」

その言葉に、ドクターが少し困惑したような気がした。

◇

「……あー、すまん。ジョンよ。おまえはメスだったのか？」

「? いえ、おすですけど」

「ならばなぜ女になど?」

「え? おとこのひとっておんながすきなんじゃないんですか?」

「……いや、別に生まれ持ったの性別を捨て去ってまで女になる必要はないじゃろうに」

「でもおとこのひとっておんなのひとがすきですよね?」

「それは否定せんがな」

「とむらもたぶんおんなのひとがすきです」

「それはどうかわからんがな」

「ならばぼくもとむらがうけいれやすいからだのほうがいいでしょう。

つまりおんなになったほうがいい」

「その場合受け入れるのはお前のほうじゃがのう」

どういう意味だろう。

とはいえ、ぼくの理論は間違っていないはずだ。わざわざキャラク
ターが着てる服の枚数まで覚えていたし、きつとそれだけぼくが変身
したキャラが好きだったんだらう。

最初はなんとなくで変身したが、今ではこの姿に変身して正解だっ
たと思う。

「ふうむ……しかし……よし。折角じゃ! ワシの学術的興味も含
め、お前を女にする手伝いをしてやろう!」

「わーいー!」

やったあ。

「というこじや。まずはその変身の精度を確かめる。服を脱げ」

「はい」

服を全部脱ぎ捨てる。その服はドクターがすべて回収した。ぼくの変身でできたものだから、その性質を確かめたいとのこと。なるほど。

ドクターに招かれるままに、寝台の上に寝かされる。ぼくの体を観察しているドクターは、それだけで見て取れるものを指摘した。

「なんというか……細部というか、服に隠れている部分の作りが甘い」

「……じかくしてます」

「例えば肌自体はよくできておる。声のできもいい。ゲームキャラを基にしているのなら、そのキャラの声が地声になる声帯を作り上げたということか。判断材料さえあれば、ある程度アバウトでも作れるようじやのう」

問題は、と言って、特にぼくが造型のわからなかった性器の部分と、胸の部分を指した。

「なんというか……ここに関しては人の形ですらないからの。そもそも性器に当たる部分が存在しておらん。……直接的な外見に影響しておらんし、別にそこはいいんじゃないかな。」

ドクターは次に、ぼくの体を触って内部の構造を確かめ始める。

「……ふむ。どうしてこれで生命維持ができていいのかわからん」

「さじをなげた!？」

「いや、これどう考えても内臓作られてないしの。声帯、あると思ったら体の中じゃないし。どうやって喋っておるんじゃない」

「えーと……きあい？」

「それで喋れたら盲目だって気合で治るわ」

総評、と言って、ドクターはぼくの作った体の問題点を指摘した。

「見えない部分の作り込みが甘い」

「……だってわからないんだもん」

「まあまあ。それを勉強するのじゃ。特に、女になるというのなら今作りこみの甘い2つの部分をしっかりすることじゃな。そもそも存在しておらんもん」

マネキンみたいな体を見て、ぼくは小さくため息を吐いた。

「さて、ここからはワシの純粋な興味じゃが……頼みがある」

と、ドクターはぼくに言ってくる。わざわざ改善点を指摘してくれたドクターの頼みをぼくが断るわけがない。その頼みに、「任せてください」と返事をする。

「オール・フォー・ワンから『首を噛み千切られても血を流さなかった』と聞いてのお……その体がどうなっているのか、確かめたいのじゃ！」

◇

ゆつくりと揺すぶられる感覚で、ぼくは意識を取り戻す。やけにお腹が空いた。異常だ。危うくドクターにすら襲いかかるところだった。死ぬ。飢餓感に殺される。そんなぼくに、何故か少し焦りながらドクターは肉を差し出してきた。

たつぷりと食べながら、事情を聞く。なんせほとんどすべて記憶が飛んでしまっているのだ。どういふことなのか、教えてもらわなければ。

「いやあ、すまん。少し張り切りすぎた」

と、笑うのはドクター。映像を撮っていたのか、ぼくにそれを見せってくる。

ある液体をかけられた画面の向こうのぼくが壊れていく。ぐずぐずと溶けていくように、ぼくの形が崩れて壊れる。あつという間に跡形もなくなつたあとに、ゆつくりとその体が逆再生のように作り直されていった。

「……………どくだー」

「悪かったと言っておろう！ 悪かった！ 死んだらワシの首が飛ぶからの。危うかったわい」

とはいえ、とドクターは続ける。

「ジョンは生命力さえあれば、たとえ跡形もなく消え去ってもその体を再生することができるということじゃな。つまり、実質的に生命力

が切れるまでは絶対死なない」

「……ふーん。あ、じゃあとむらのてもにぎれるね」

「毎回握るたびに粉々になるのは大変じゃろ。一つだけ実験に付き合ってくれ。うまく行けば、おまえの望み通り死柄木と自由に握手ができるぞ」

と、いうドクターの言葉に乗せられて、ぼくは再び寝台に寝転がった。

ドクターが言ったとおりに、自己治癒能力を、できうる限り全力で発動する。その状態で、ドクターがぼくに薬をかけた。

……とてもあついし痛いのが、先程とは違い溶けた瞬間に再生する。なるほど、たしかにこれならば弔に触れられても問題なさそうだ。

「……実験は成功じゃ！ いやあよかった！ こうまで良質な実験体を確保できるとうのう！」

「とむらとあくしゅしてもだいじょうぶですか」

「ああ、全然問題ないだろうよ。再生力が高すぎて、死柄木の個性じゃあ敵わんだろう」

「やったー！ どくたー、ありがとうございます！」

「こつちもいいデータが採れたからの、ウィンウィンじゃよ。……今度なにかの実験があるときに、協力してもらってもいいかの？」

「あ、はい。それはせんぜん」

やつほい、と腕を振り上げるドクターに送り出されつつ、ぼくは部屋を出ていったのだった。

◇

「とむらー！ とむらとむらとむらとむらとむらとーむらー!!」

「うるせエ！ 聞こえてるんだよ……！」

「こつちむいてとーむらっ！」

ぼくのお願いに顔を背けた弔の手を引っ張る。手袋なんてつけていない、むき出しの腕だ。ぼくは、それを治癒能力を引き上げたうえで、握りしめた。

「……………ツ!？」

弔は、わかりやすく焦った。そうして手を引き剥がそうとする。そうはさせない。少しだけ自分の力を強化して、弔の手を離さないようにした。

「…………ツな、なんで…………」

「はなさないもん」

とはいえ、強引に掴んでいるのはぼくとしてちよつと許しがたい。しっかりと、手と手を絡めて、握手の形に整形し直す。

「これであくしゅだね」

「——お前…………」

「ぼくはさわってもこわれないからさ。とむら、ぼくにはおびえないでいいんだよ?」

「……………ツ!」

弔は、少しだけ涙目になりながら大きく息を吐く。緊張も一緒に吐息に溶かして、ゆっくりと——とても優しい笑みを、浮かべたのだった。

第6話

普段より少しびりびりとした空気だった家の中。その日、ぼくは先生の敗北を知った。

それは先生の宿敵と言える相手との一騎打ちによる結果だったそうだ——先生は一命をとりとめ、しかし満足に体を動かすことも難しいらしい。ぼくの個性で元の人の姿に戻すことはできたが、しかしそれでも万全とは程遠い。

そういう事情もあり、回復に専念する先生の補佐にドクターは出ていき、ぼくと弔は二人暮らしをすることになった。



部屋に戻った弔にそろそろ言い慣れた「おかえり」を言う。

弔の体はボロボロで、外行き用に体中に手をくっつけていた。

先生が動けなくなって、後継としての修行を積んでいる弔。すでにある程度体はできてきており、人の姿のとき、ぼくのほうが高かった身長はいつの間にか追い越されてしまっている。

「ご飯がいい？ お風呂に入る？」

「飯。風呂はいい」

「血塗れなんだから、あとでちゃんと入ってよね」

「……わかったって」

何年もこの体ですごしたとあり、ぼくもある程度の言葉を操ることができるようになってきた。むしろ、元の体よりこちらのほうがうまく動かせるまでである。こっちがもとの体になってしまっている。

ぼくはこの数年で、ドクターの力を借りて体を人間のものに限りなく近づけた。よって、少しばかり体に変化はあるが——表面に現れるもので、変化と呼べるようなものはない。

それはぼくのこの体が仮初めのものであるということ、なによりも雄弁に伝えてきた。

「あ、とむらとむら。治療してあげよっか？」

「別にいいよ」

「ぼくの治療は治癒力の活性だから筋肉つけれるよ？」

「……別にいい」

「遠慮しないでいいのに」

ぼくの頭を撫でながらそう言う弔に、ぼくはいつものように崩壊を食い止めながら言った。

そういえば、弔の呼び方だけうまく言葉にできなかったから、舌つ足らずなものになっている。それを媚びてるとなどと言いながら、満更でもなさそうな弔の感情は、とつてもわかりやすいものだった。

台所に置いてあるお盆の上に、ごはんと味噌汁、唐揚げを載せた皿を載せて、こぼさないように少しだけ気を配りながら机に座っている弔の前に出した。

珍しくテレビをつけて見ている弔は、少しばかり楽しそうだ。珍しい、と思つてテレビに目をやる。

『地方を守るヒーロー・「アルバンス」が昨夜、正体不明の敵に襲われ死亡しました。体が真つ二つにちぎれており、遺体の両腕、両脚が切り離されていることから、最近世間を騒がせている人食いによるものと考えられます。今回の事件により——』

「とむら、また殺したの？」

「ああ。お土産は玄関に置いてあるクーラーボックスの中にある。賞味期限が切れる前に食つとけよ？」

「ん、大丈夫。前みたいに腐らせないから」

「結構強い個性のヒーローだったから味は良いと思うぞ」

「ん、ありがとう」

最近の弔の忙しさは、先生がいなくなったことによりぼくの食事を供給してくれる人がいなくなったからだ。弔は人を殺して、そのなかでもぼくがよく食べる腕と足を切り離して持って帰ってきてくれるのだ。

それと同時に、先生の課題をこなしている、という理由もある。

ご飯を食べ始める弔を見て、ぼくも自分のご飯を持つてくることにする。最近はずいぶんお腹が減るから、人肉の消費量がかなり多い。

売ってる店もないし勿体ないなあ、と思いながら、しかし食べなければぼくが死ぬのでどうしようもない。

冷凍庫に保管されてある肉を、固まったまま取り出した。賞味期限が今日までのやつだ。忘れぬうちに食べておかないと。人の腕まんまその姿のそれを皿に載せて、弔の前にぼくは座った。

賞味期限、というのは、肉を食べて空腹感を解消できるぎりぎりの期限のことだ。だいたい二週間程度は持つから、それまでに食べないといけない。

これは何年も過ごしていくうちに判明した事実である。

「……なあ、ジョン」

「なあに？ とむら」

「お前、俺といて退屈じゃねえか？」

「全然？」

「マジで？」

「まじまじ」

「そうか」

「どうしたの、急に」

「いや、なんでもねえ。忘れてくれ」

弔は、最近よくこういうことを聞いてくる。

「とむら」

「なんだ」

「ひよつとして、ぼくといって退屈？」

「全然」

「ほんと？」

「マジだよ」

「そっかあ、まじかあ」

「なんだよ」

「ぼくたち、一緒だね」

「そうだな」

骨を噛み砕いた。硬い肉でも、食えないことはない。ばりばりと噛み鳴らしながら、ぼくは今日のぶんのエネルギーを補給した。

『……二人とも。元気かな』

「あ。先生、ひさしぶりです」

『うん。久しぶり、ジョン』

「何のようだ先生」

『いきなりすまないがね、——その家、バレるのも時間の問題だろう。ジョンも弔も見た目はまだ幼い。育児放棄を疑われるかもしれない。駅に運び屋ポーターを用意しておいたから、僕の手配した新しい家に移ってもらえないかな?』

「あ? それだけの理由でか?」

『それとは同時に、最近噂の敵である【人食い】の被害が君の近辺でしか出ていないだろう? そろそろ一帯を搜索する動きが出てくるはずだ。そうなると動きにくいだろう? それを避けるために、一刻も早い移動をするんだ』

「……なるほど。荷物はどうするんだ?」

『運び屋に君達を移動させてもらってから転送してもらおう』

「わかった。すぐ動く」

『すまないな、弔』

「別にいいよ先生。……じゃ、もう動くか」

先生の指示通り、ぼくと弔は移動することにしたのだった。



「なんか変なきぶんだねー」

「そうか? 慣れっこだろ」

「とむらは人目を忍んでるからそうかもしれないけどさー」

「忍んでねえよ。つーか、外に出るのは久しぶりだよな? 気分とか

悪くないか?」

「とむらが心配してくれてる……」

「そりゃあ心配するに決まってるんだろ」

「……え、あ、う、え、うん。……ありがと」

びつくりした。

弔ってこんなに素直だったっけ……？ と、疑問に思いながら歩く。

暑い。鉄板で焼かれているような気分になる。基本的に、先生の計らいで部屋にはずっと冷房がついているから、こうなると一気に汗が吹き出てくる。とても暑い。

体が焼かれるような気分を味わいながら、歩く——平日だからか、街を歩き交う人は少ないらしい。学生などがいないぶん、かなり空いていると弔はいう。

ぼくからすると、人ごみが多いような気分になるのだが。それは慣れていないからなのだろう。ぼくも外に出たほうがいいのだろうか、弔から家に来てくれと言われるのだ。

よって、ぼくはあんまり外に出ない。

買い物くらいはぼくが行ったほうがいいと思うのだが、弔はそれを許してくれない。たまに出るときは先生の治療を手伝いにいくときだけだ。

しかしそれも先生が運び屋を用意してくれるので、家から家へと一直線なのだ。

先生には頭があがらない。

『——人食いを——』

わずかに聞こえてきた声のなかに、最近聞き慣れたワードがあった。思わずぼくは弔の手を握る。

「どうした」

「……ヒーローが近くにいる」

「マジか。……堂々としてけばバレねえよ。——関わらなければ、それでいい」

「……うん」

と、言いはするが、弔の手は離さない。少しだけ怖かったからだ。弔がバレて、ぼくの前から消えてしまうことがなによりも怖い。

きつと、長い長い生活のなかで、ぼくは弔以上のものを見つけられなくなっているんだ。弔がいればそれでいいと思ってしまうている。ぼくは弔が大切だ。それは、先生よりも。

だから、弔がいなくなるのは悲しいし、弔の敵はぼくの敵だし、弔のためならばくはなんだって殺してみせる。

それがぼくには容易にできる。自分をその手で殺すことだってできる。自分で自分の首を絞め、窒息に耐えながら死ぬことだってできるだろう。

だから——もしヒーローに見つかって、万が一にも弔が捕まってしまうたら、という怖れがある。

「……なに沈んでんだよ」

「沈んでないよ」

「嘘つけ」

「沈んでないもーん」

と、言いながら、ふと思う。

「ねえとむら」

「なんだ」

「なんかこれってデートみたいだね」

「……引っ越しだろ」

「傍からみたらってことだよ！ とむらったら風情のないことだね」

「……………」

黙っっちゃった。

周囲の声を聞くと、ヒーローはどうに通り過ぎてしまったようで、「人食い」の名をそれ以上聞くことはなかった。それですこし安心して、弔の手を離す。

「……………」

あれ、離しちやだめだったかな。

手を離れた弔が若干落ち込んでるように見えて、ぼくはちよつと悪い気分になった。

あいつも変わらずに人の声はぼくの頭で鳴り響く。少しだけうざつたい。

どれもこれも、大しておもしろみのないことばかり。人も獣もあんまり変わることはないな、ということぼくに教えてくる。

人の本性だとか、そういつたものを暴いてしまうぼくの個性は、見
てしまうとすぐに人に幻滅してしまう——だからこそ、弔や先生、
ドクターのような中身に深い闇を携えた人に惹かれるのかもしれない。
い。

そんなのはただの推測で、正確かどうかなんてわからないけれど。
なんて考えていると、ぼくの頭の中に絶叫にも似た声が微かに届
く。

「……あれ？」

「どうした？」

「いや……なんか今、変なのが聞こえたような……」

「変なの？ ……どんなのだよ」

「うーんと……なんとというか、うまく言えないけど。人が死にかけの
ときの声みたいなの……」

「関係ないだろ。放っておいていくぞ」

「えー。でもおもしろそうじゃん」

「……駄目だ。無駄なことに首を突っ込むな。近くにはヒーローがい
るんだろ？ 見つかったらどうするんだ」

「大丈夫大丈夫！ それより、うまくいったら一食分確保だもん。

……だめ？」

「………わかった」

長老の末、弔は許可を出す。それに喜び、ぼくは弔の腕を引いて、声
が聞こえたと考えられる路地裏へと向かうのだった。

◇

弔とはぐれた。

いや……いや。ぼくも一応、弔の近くを歩いていたつもりだったの
だ。しかし、気づいたら弔がいなくなっていた。これはどういうこと
だろう。なにかのマジックだろうか。驚嘆する以外の何物でもない。

と、いうことでぼくは現在一人ぼっちで路地裏を徘徊している——
弔を探すために。こういうとき、弔の特性が少し邪魔になってく

る。甲の心の声は聞こえないし、感情もあんまり面に出てこないのだ。だからこそ、追うには少しわかりづらい。

「むう……」

仕方がないので、ぼく一人で事件現場を探すことになった。ぼくの勘違いにすぎないのかもしれないけれど、だからといってなにもしないわけにはいかないのだ。

上手くいくと食材確保のチャンスだ。

嬉しい。

期待しすぎるといけないのだけれど、だからといって期待してはいけないというわけではない。よってぼくは死体を求めて今日も行くのだ。

きよろきよろと周りを見渡していると、頭の中に人の声が響いてくる。いつか聞いたようなもの——この悪辣さは、ぼくが昔食べ殺した敵の親分に近いものを感じた。

これは本当に当たりだろう。ぼくは嬉しくなって走る。人影があつた。ぼくは無遠慮にそこに近づいていく。

倒れている女の人に、押し掛かっている男がいた。女の方は口から煙を吐き出している。頭の中に響いてくるものは——ない。つまり、死んだということだろう。

男はぼくのほうを見た。

「なんだ……君みたいなのがこんなところにきたら駄目だろう？」

「そのひとはどうなったの？」

「肝が据わってるねえ。死んだよ。俺が殺した」

「どうやって？」

「教えると思ってるのか？」

男がぼくに向かって走ってくる。ぼくはそれに抵抗しなかった。首を掴まれ、押し倒される。地面に頭を打った。ちよつと痛い。

でも、崩れるのよりは痛くない——なんだ、なら全然痛くないや。息に熱が混じり始めた。体の中が熱い。体の中が燃えているみたいだ。

いや、実際燃えているのだろう。相手はごく丁寧に、頭の中で個性の

解説をしてくれている。

——個性は『燃焼』。内臓を燃やして、体の中から人を焼き殺すのが趣味らしい。なるほど、気持ちが悪い。けれど数えられないくらいの人頭の頭の中を覗いてきたぼくは、もっと気持ち悪いものを見てきた。

それとくらべたら全然マシなくらいじゃないか。生産性のない行為。それに、どれだけの理由が伴っているのか。ぼくは疑問に思っただけで聞く。

「……ねえ、これって楽しいの？」

「楽しいに決まってるんだろ！ こうするとさ、誰もが俺に許しを請うんだ。気分が悪いわけがない！」

「そっか。つまんないね」

言い捨てる。

つまらない。体を燃やすくらいじゃ死なない人間だっているだろうに。このひとは全くつまらない。

ぼくは彼の目をじっと見た。体は毛深く、まともな手入れがされていないものとわかる。……あんまり美味しくなさそうだ。あつちの女の人に期待かな、と思いながら、ぼくは小さく息を吐いた。

「つまんない。きみの人生つまんない。どうしようもなく小物だね。先生や、とむらとは全然違う」

「……………」

「どうしたの？ 力が入ってないよ？ ぼくを殺すんでしょ？ ほんら。もっと絞めてよ。それでぼくを殺してよ。きみのその手で殺してよ」

「……なんだ、おまえ」

「ぼくはね、今少しいらいらしてるんだ。きみととむらが、同じ敵として扱われてることがなにより気持ち悪い。世間も全くわかってないよね」

「なんなんだよ！ お前はア！」

「とむらは敵の王様だから……今、世間でとむらが小さく扱われているのに、ぼくは納得してないんだよ」

「誰だよ』とむら』って!」

「俺だよ」

——男の首が崩壊する。

ぼくの顔の上に落ちてくるのを、弾いて避けた。ゆっくりと男の体が朽ち果ててるのを見て、ぼくはそれを退かして起き上がった。

「やつほーとむら」

「……………」

無言で頬を抓られた。

「いひゃい」

「じゃあはぐれるんじゃねえ」

「ごめん…………いひゃいひゃいにやんでひっひやるによ!」

「…………よく伸びるな」

「そんな理由で引つ張られたの!?!」

「半分は危ないことしたからだだからな。忘れんなよ」

「うっ…………わかったつてば」

「……………はあ」

ため息だ。

ぼくは悲しい。

ぼくは、当初の目的である女の人の腕を引きちぎった。もう死んでいるのだから、別にいいだろう。両腕をちぎり、足もちぎる。弔が鞆の中に、片腕と足を突っ込んだ。

「んむっ…………あ、焼いたら意外と美味しいね」

「焼かれてんのか? それ」

「中からじつくり」

「へえ。肉って旨味が逃げるから、最初に強火のほうがいいらしいぜ」

「そうなの!?! もったいない…………」

一本はぼくがもらう。弔と触れる時間が多かったから、治癒の維持でかなりお腹が空いたのだ。さっさと腕一本を平らげて、ぼくは弔の後ろに立つ。

「じゃ、いこっか」

「おう。…………待て。なんで背中にくつつく」

「肩車してよ」

「断る。今補給したばっかだろうがもつたいない」

「えー……わかったよお」

ほくも弔も、後ろを向きはしなかった。

第7話

パソコンのモニターに向かい合っている弔が、「はあ」と息を吐き出した。

夏の暑さに頭をやられているぼくは、アイスを口に啜えたまま弔の方を見た。

このアイスはぼくが外から買ってきたものだ。弔の外出許可が下りたから、ときどき外に出て嗜好品を集めている。

さてそんなぼくを弔はなんとなく察知したのか、振り返ることすらなくモニターを指した。気になってぼくもモニターに視線をやる。

『本物か!? 有名RPGゲームのアノキャラに似てる少女が話題に』
「……え、なにこれ」

「だから外に出したくなかったんだ……」

そこには、ぼくの写真が載せられていた。

◇

ウェブサイトに書かれている文面を見ると、ぼくの写真をこっそり撮って、SNSに掲載した人がいるらしい。その人のつぶやきが拡散され、ネットニュースに取り上げられるくらいの出来事になった、ということだろう。

業界用語では、これを『バズる』と呼ぶらしい。

「……と、とむらあ。どうしよう……」

「変身で違う見た目になればいいんじゃないのか?」

「今更言われても、これがもうぼくの姿だよ……」

「あー……馴染んだ、ってやつか。たしかに何年もずっとこの姿だったしな」

ぼくの頭を撫でながら、弔は唸る。

PCを操作し、キャラクターの画像を画面に広げた。

「うーん……別のキャラにするっていつても、同じことが起こらないとは限らないしな」

「どうしたらいいの?」

「……あーもう! 泣くなつて……! くそっ、こういうときどうしたらいいんだ!」

「とむらあ……」

撫でる速度が加速した。

ぼくは今までずっとこの姿だったのだ。今更変えろと言われても、失敗するイメージしかない。そしてそのイメージがぼくの変身の成功率を極限まで引き下げていた。

「うっ、うう、ううううう……」

「あー! だから泣くんじゃねえ! ……っ、こうなったら……他の奴の手を借りるか」

「……え? どうやって……?」

「こうやってだよ」

と、言つて弔はパソコンを操作する。タイピング音が部屋の中に響いた。操作は終わり、ほっぺをつままれながらぼくは画面に表示されている文字を読んだ。

【自由に変身できる狐にどんな姿をさせたい?】

1 名無し

どうする?

版權モノなしで

「えっと……なにこれ?」

「掲示板だよ。社会の底辺が集^{たか}る場所だ。こういう質問だと普通に考えるやつが出てくるだろ」

弔がページを更新すると、すでにコメントがいくつも寄せられている。それを読んでいくと、このように書かれている。

2 名無し

版權ナシ? はーつつかえ

和風ロリかな

3 名無し

耳と尻尾は必須

これは譲れない

4 名無し

なんかこう、絶妙にドレスが似合う感じの……

5 名無し

和風口リつつってんだろ
!!!!!!!

6 名無し

うるせえ!! 狐Ⅱ和風のじゃ口リババアとか安直に考えるからテ

メーは駄目なんだよ!

7 名無し

はー? はー? 俺全然駄目じゃないんですけど?? ちよつと何

言ってるかわかりませんねそのからっぽの頭の中にタバスコ突っ込んでやろうか貴様

8 名無し

落ち着け

和風や口リである必要はないだろう?

9 名無し

貴様……まさか……

10 名無し

……………。

11 名無し

そう——全裸パーカーが似合う茶色短髪の髪ぼさな常時ジト目な気怠げ美少女

12 名無し

性癖の告白いただきましたー

13 名無し

茶髪にするくらいなら金髪でよくな?

14 名無し

バカ野郎髪ぼさが金髪で映えるかアホ
黒か茶色だよ

「とむら、じと目ってなに?」

「じとーっとした目だ」

弔は検索して、キャラの画像をぼくに見せる。なるほど、これがジ

ト目というのか。……ちよつとだけ想像できたような気がする。

そういえば、大前提として語られていることがある。

「とむらはぼくの耳としっぽがあつたほうがいい?」

そう、このコメントを寄せている人は全員、なぜか耳としっぽがあることを共通認識としている。そのことについて、不思議でぼくは耳に聞いてみた。

「……………別になくてもいい」

と、多少迷うような響きがあつたのでおそろくあつたほうがいいの
だろう。あとは……茶髪で、髪を短く、ぼさぼさに。

「……なんというか、これならかんたんに設定できそう」

「お、まじか」

まじなのだ。

頭の中でイメージが固定して離れないのだから、体つきなどは今の
ままでもいいだろう。なので、体格は大きくかわらない——これは、
ぼくにとつて非常に助かるポイントである。

ぼくは体を大きく変えることが、きつとできないだろうからだ。ぼ
くの人としての姿は今のままで固定されてるわけで、あんまり大きく
変えると頭のなかでこんがらがって口が鼻になるなどの不具合が起
きるだろう。

しかし今の体をベースにし、ちよつとした飾りだけ変えるのならば
意外とすぐにイメージできる。

要望のように、目を少しだけト目にして、髪の毛は茶色に、そし
て短くイメージする——耳としっぽは、自分の元の体のものを投影
し、これで大まかなイメージが完成した。

あんまり整形もしてないから、これならすぐに呼び戻せそうだ。

早速ぼくはイメージの姿に変身する。……そりと生命力のような
ものが、削られた感覚。突然お腹が空くような感覚がした。

目を開いて、自分の体の中を走る触覚に新しいものが増えているこ
とに気づく。耳と、しっぽ。成功だろう。ぼくは目を開き、少し驚い
ている巾を見た。

「こういうことだよねっ!」

「ああ……いや、お前はそれでいいのか？」

「とむらがこれでいいならこれがいい」

「ああ、俺は別にいいんだけど……なんだかなあ」

手招きされる。ぼくは誘導されたとおりに、弔の膝に座った。

弔の手がぼくのしつぽを掴む。

「わうひやつ!？」

「うおっ……」

「……ごめん……」

「いや、こつちもすまん。創作物じゃあ尻尾は敏感って言われるが……その通りなのな。耳は？」

「ああ、ふあひっ」

「こつちもか」

「……大丈夫だよ？」

「嘘つけ」

「ひゅっ!？」

ヤバイ。

想像以上に触られるのが気持ちいい。

これは弔の撫でるのが上手なのか、それとも単純にぼくが触られ慣れてないからなのか……どつちなのだろう。

わからないけど、ぼくのしつぽをわさわさとして撫でる弔はどことなく楽しそうだったから、ぼくはなんとか声を抑えるのだった。

◇

「……ん……」

目を覚ます。しつぽに触れている感触がある。朝一番だというのに、それで目が冴えてしまった。荒く息を吐き出して、なんとか平静を保とうとする。

「——っひやつ……っ」

しつぽが撫ぜられる。駄目だ、これ。どれだけ長々と触れられていたのかはわからないが、かなりお腹も減ってきている。これはまず

い。早く振りほどかないと。しつぽを振り、僕は甲の手を剥がす。そして冷蔵庫に直行した。

「ん——……なんだ？」

人の腕を食べているぼくに、寝起きの甲が聞いてきた。

「だれかさんが人のしつぽを触るからだよっ」

「……すまん」

「そんなに触りたいならもっとかしこまってぼくにお問い合わせすべきじゃないかな」

「調子に乗るな」

「えへへ、ごめん」

甲のほうへと向かう。人の腕はかんたんに食べられるから、基本的に甲の近くで食べることにしている。

冷房が効いた部屋の、甲の布団の中に忍び込んだ。

「ふあ……あつたかいねえ」

「……………」

食事を終え、甲の枕を借りて横で寝ることにした。甲の腕を絡め取り、足の間に挟むことで人肌の暖かさも確保する。

ちよつと寒いくらいの冷房だから、このくらいがちょうど温かいのだ。

満足である。

「おい」

「んふふ……だめかな？」

「せつかく起きたんだしもつたいないだろ」

「でもとむら、毎日午前中はほとんど寝てるじゃん。まだ朝早いし、一緒に寝ようよ」

「寝てるときにお前の生命力が足りなくなったらどうするんだよ」

「うーん……とむら、調整ががんばって！」

「はア!? 俺に丸投げかよ……まったく」

んふふ。

甲の首に手を回して、引っ張った。抵抗はなく、ぼくの腕の中に甲が収まる。同時に甲がぼくの背中に手を回す。お互いがお互いを包

み込んでいる。

あつたかくて、ぼくは目を瞑った。そのまま意識が落ちていく。

「……………これじゃ、寝れねえよ」

弔の声が、聞こえた、気がして…………。

第8話

吐息を空に重ねる——空気は心地よい。夏は過ぎ去り、気づけば過ぎしやすい毎日で、冷房も切れた。

快温。

気温を示す言葉としてどうなのかはわからないが——しかし、それが今の季節を表すのに一番いいような気がした。

秋である。

木々は彩りを増し、日々は急くように暑い日々から涼しい日々へと移り変わっていく。

……なんというか、完全に飼いならされているような気分がして、弔が出かけている間に先生に電話を掛けたのだった。

『どうしたんだい』

1コールで出た先生に、ぼくは自分の悩みを打ち明けようとする。その際に言葉を少しだけ考えた。しかしそれも一瞬。告げる言葉はすぐに決まる。

「先生、ぼくは最近まったく運動してないです」

『うん……うん？ それがどうしたのかね？』

「弱くなった気がします」

『ああ、それは安心しなさい。君の戦い方は個性依存だし、戦闘力が衰えるということはないだろう』

「だめギツネです」

『そう卑下することはない。むしろ君は強くなっているはずだ』
「……え？」

困惑するぼくに、先生は言って聞かせる。

『個性は成長するものなんだ。君は個性を毎日使っているだろう？』

だからこそ、君の個性は昔よりも強くなっている——ずっと、ずっとだ』

「えーと……全然そんな実感ないですよ？」

『自分の体のことは自分で案外気づけないものだ。弔から聞いているよ。半日で限界が来ていた治癒も、まるまる一日掛けっぱなしにでき

るようようになつたみたいじゃないか』

たしかに、言われてみると弔と触れ合う時間は増えている。

しかしそれはぼくに触れるとき、弔が手加減をしてくれてたものだ
と思つていたのだが……実際、最初に比べて弔の崩壊の速度は遅く
なつてるし。

そうになると、それはぼくの成果というより弔の成果なんじゃないだ
ろうか？

『心当たりはあるだろう？ 君の個性が伸びているという、その実感
も』

「……えと……はい。でもあれは、とむらが手加減してるからだと思
うんですけど」

『弔が手加減している、ということとは間違いないだろうさ。けれど、だ
からといって君の個性が成長してないというわけにはならないよ。
……なんだったら、試してみるかい？』

「えっ？」

『次の弔の仕事についていくといい。基本的に二人で足りているが、
人数がいて困ることはないからね』

「……………」

『嫌かい？』

「いえっ、がんばりますー！」

ぼくは両手を持ち上げて、やる気アピールをした。画面の向こうで
先生が笑っている。

『仕事の仲間には弔以外にももうひとりいる』

「……だれです？」

『君も会ったことがあるだろう。運び屋さ』

「……ああ！ あのひと」

覚えている。霧みたいな人だ。ワープゲートだったはず。

『彼とは長い付き合いになるだろうから、仲良くしておくんだ』

「はいー」

ぼくは笑って頷いた。

◇

ということを知らせると弔が首を掻いてぼくの顔を引っ張ってきたが、そんなことはさておき。

先生に指定された場所へとぼくと弔は向かっていた。そこで運び屋さんと待ち合わせ、そこからさらに移動するらしい。

先生から下されたオーダーは、小規模な反社会勢力のトップを生け捕りにすること。なんでも個性が強いらしい。

最近なにかを企んでいるらしいから、そこからリーダーの個性が判明したとのこと。

「個性は【纏雷】。雷を纏う個性らしい。俺らのような近接タイプには少しキツイが……まあ、なんとかなるだろ」

「先生はいい個性を見るとほしくなっちゃうもんねー」

「個性自体はかなり強い。近接キャラには強く出れる。……が、先生に必要な個性かと言われると迷うなあ」

「先生、もう衝撃反転持つてるもん。たぶんいらないと思うんだけどなあ」

「ま、そこらへんは実際に戦ってから見てみるかとするか」

「先生にどうやって届けるの？」

「黒霧に指定した場所に届けてもらう」

「運び屋さん便利だね」

たわいない会話をしながら、ぼくと弔は指定地に向かっていく。

そしてたどり着いた。

そこにはすでに、何度かあったことのある姿がある。

「おや」

「こんにちわー！」

「えーと……誰で？」

「ジョンだよー！」

「ああ、あの女の子ですか。かなり見た目変わりましたね……？」

「無駄な会話してんじゃねえ」

「おや、死柄木弔。嫉妬ですか？」

「減らず口を……壊すぞ」

「怖い怖い。ええ、黙ることにしましょう。私も馬に蹴られたくはないので」

「ならさっさとゲートを開け」

「わかりましたよ、死柄木弔」

運び屋が転送の個性を発動する。弔に続いて、ぼくもそれに飛び込んだ。

たどり着いたのは……豪邸の手前。

「忍ぶ気あんのかよ」

門を粉々にしながら、弔が呟いた——そして、警鐘がなる。これは殺意の声か？ 弔を引っ張り後ろに飛び退くと、先程立っていた場所になにかが振り下ろされていた。

少しばかり、リーチが長いように思える——薙刀の、その先に鉄の棘を付け加えたようなものだ。

「……狼牙棒かよ。いよいよ忍ぶ気ねえな」

「ははははッ！ この門を壊して正面突入とは豪気な侵入者よ！ ようこそッ！」

それを持つ男は、短い髪を後ろに流しており、足の長さに見合った袴を履いている。

「そして疾く死ねイ！」

「お前が死ね」

弔が一步踏み込んだ。武器に触れ、そして丸腰の相手を断割するだろうという未来を幻視する——しかし、そうはならなかった。

狼牙棒と呼ばれた武器が縮み、踏み込んだ弔を横合いから殴りつける。

それをしゃがんで躲そうとする——のを読まれ、上から武器が叩きつけられた。低い姿勢で横に飛び、弔はそれを回避する。

「縮むのかよ」

「伸縮自在だ！」

「あー……怠い……おいジョン、黒霧。先に行け。俺はこいつを殺してから行く」

「わかりました。——では行きましょう、ジョン・ドウ」

「ははは！ いかせると思うか——!?!」

「逆に行かせないと思うかよ」

弔がコンクリートに触れる——周囲の地面が捲れるように崩壊していくのを尻目に、ぼくは屋敷の扉をぶち抜いたのだった。

◇

「別に扉を壊さなくてもよかつたでしょうに」

「強度確認なんだよ」

「結果は？」

「やる気がないね。豆腐より柔らかい」

「それはそれは、警備もザルですなぁ」

どうせぼくたちの侵入はバレているのだ。ならば、いつそ目的が自分から出張って来てくれるように景気よく壊していったほうがいい。

問題はこうまで暴れているとヒーローが飛んでこないか、ということにある。だから、ヒーローがやってくる前に始末するのが目標になる。

玄関を抜けると、夥しい数の扉が現れた。

「どうします?..」

「待ってね……全部壊そう。逃げるより先にぶっ壊したら勝ちだもんね」

速力の強化に可能な限り割り振り、そして扉を壊せるだけの筋力も強化しておく——そして、周囲の扉全部を破壊するために、走る。まず一番右端の扉。蹴り飛ばし、早すぎて中が見えない。視力の強化に割り振り直してから扉の中身を見て、次の扉に向かう。

武器庫や来客用なのであろう整備された部屋などがいくつもある——ほとんどを壊しながら向かっていると、左から六個目に階段が見つかった。戻って、黒霧を捕まえてから引っ張って走る。

「うおっ、おとおおおおおおっ!?!」

「ごめんねたぶん道見つけた!」

「はやっはやあああああ!?!」

Uターンするように階段が置かれている——しかし、自分じゃあ曲がりきれない。なので後ろの壁を蹴り、そこから自分の体を飛ばすようにして階段を登った。

発砲音。

聞き逃すことはなく横に逸れて回避——と思ったが、追尾してきたので黒霧を抱える手を離して銃弾を正面から受け止める。

腕を貫通し、喉に当たって体内で爆発した。

「あっはは! 侵入者と言っても早いだけであんまり強くないみたいだね! どれ、おまけだ。受け取るときなよ」

続けて、三発撃ち込まれる。今度は頭二発と心臓に一発。なるほど、頭のほうは脳みその位置から若干逸れるようだ。だから二発。

戦い慣れているな、と判断するが、しかしぼくに限ってはどれだけの攻撃を食らったところで無駄。既に体は修復し終わっている。

「な……なあっ?! アンタ、なんで死んでないんだ!?!」

銃を構える女の人の——違う。これは先生が求める個性の人じゃない。雷なんてまどつてないし、銃弾の軌道を捻じ曲げた。なるほど、強い個性だ。しかしそれだけで、ぼくや例えば黒霧さんにとってはカモと言えるくらい相性のいい敵である。

撃たれた喉を撫でながら、ぼくはためいきと共に言った。

「……弱いね」

「……ッ!!」

「今はお喋りしてる状況じゃないか。全く。時間制限系って嫌いなんだよね」

実際、ぼくはゲームとかで時間制限が表示されると途端に弱くなる。余裕を見せつけられなくなるのだ。心が逸って焦ってしまう。

「ただ一つ言えるとしたら——ぼくを消し炭にできるだけの火力があつたらよかつたのにね」

心の声が聞こえてくる。怯えと焦りの声だ。と、同時に黒霧のものだろう困惑も伝わってくる。

『な——なんで死なないの!? ありえない、人間じゃないのかよ

……!」

「そのとおり、ぼくは人間じゃないね。ほら、見てよこの耳と——このしっぽ!!」

速力を強化した。しっぽに筋力強化を掛け、走ってしっぽで殴る。重い手応えと共に、何か吹っ飛んだ。なにかと見たらそれは頭だった。なるほど、ぼくのしっぽは人を殺せるくらいまで強くなってるのか。

……いや、少し計算外だった。こんなに脆いとは思ってなかった。普通、もうちよつと硬いだろ。気合で粘ってくれないとこつちも格好がつかない。

「あの……ジョン・ドウ」

「あ! はいはいなになに黒霧!」

「早くも呼び捨てに……喋っていてよかったですか? 急いだろうがいいのでは」

「あつ! そうだそうだ。……たぶん、この無駄にでっかい扉の向こうにいるよね?」

「たぶんですが」

「じゃあいこつか。逃げそうだったらお願いね」

「了解です。……あの、なにをしているので?」

「栄養補給」

殺した女の人の腕を千切りながら言う。大盤振る舞いに個性を使ったので、戦闘中にお腹が空かないとは限らない。一応補給しておいたほうがいいだろう。

腕を食べながら、ぼくは扉の前まで歩いた。
蹴り破る。

——そこには、一人の男の姿があった。

「ようこそ」

「殺しにきました! あ、じゃない。殺しちやいけないんだ」

「ははは、正直なお嬢さんだ」

髪型は大きく逆だつていて、目は殺意でギラついている。ミリタリーコートは特別仕様なのか、電気をたくさん貯めていた。触れると

静電気で痛そうだ。

「異能解放軍下部組織、神獣のリーダー……ためなしひかる為ヶ陽火流だ」

「そう。どうでもいいよ」

体を強化する。纏った雷の上から、蹴りかかった。

それで足を斜めに切り落とす。

「……あれ？」

想像以上に弱かった——ひよつとしたら、先生の言ったとおりぼくはかなり強いのかもしれない。

どことない不完全燃焼感に苛まれながら、黒霧に男を渡す。ワープで指定された場所に置きにいったのだろう。すこしだけどこかへと消え、すぐに戻ってきた。

黒霧を連れ外に出ると、体を壊された男と、半ばから折れた狼牙棒の残骸がある。自分の手をぶらつかせながら、弔はこちらに手を振ってきた。

「弱かった？」

「ああ、雑魚だ」

「なでなで」

「やめろ」

「ふふ……遊ばれてますね死柄木弔」

「次不快なこと言ったら殺すからな黒霧」

第9話

吐息が白く染まる。

——冬。

現在、ぼくは服を着込んでゆつくりと街を歩いている。日本各地を転々と回るような旅なので、ぼくは街の移り変わりなどに関して実感することは無いのだが、しかしイルミネーションが出来上がっていくのを見ると、なんとというかクリスマスが近いのだ、という感傷に浸る。あんまりにも寒いので、さすがにパーカーではいられない。もともとことしたコートで覆っているし、こっそりと体内に火を灯しているので一応快適に過ごせている。

これでぼくが氷も使えりと夏の対策ができるのでなおよしだったのだが、しかし残念ながらそういうことはなく、ぼくは炎しか使えない。それもごく小規模なものだ。

思うに、ぼくに遠距離攻撃の適正はないのだろう。そんなことをする暇があるのなら、走って殴れと言われているような気分になった。

冬は意外に嫌いではない。何故だかわからないけど、寒さが昔を思い出させるのだ。

ひよつとすると、ぼくの生まれは冬なのかもしれない。

——そういえば、甲の誕生日は春はじめだったなあ。

そんなことを思い出して、せっかくなので今のうちから誕生日プレゼントを考えることにしようと思った。そもそもぼくに短い間で誕生日プレゼントを決められるわけがないのだ。期間が近くなつて慌てるぼくの姿が目に見えかぶ。

と、いうことで大型ショッピングモールに行くことにした。

ここにくれば、だいたいのは揃うだろうからだ。そういう触れ込みなのだから、そういうものなのだろう。それを信用してぼくはそこに入る。

お金はそこそこ持っている。先生からお金をもらっているからだ。先生の仕事を手伝うと、お小遣いという形で先生がくれる。

……が、それがあまりにも大きい額なのでもらった額を使い切るの

はいつになるのかなあ、といった感じである。

シヨツピングモールの中で、弔が一番喜ぶところといえば？ ……ゲームだろうか。なんのゲームがいいのだろう。周囲をちらちらと見回して、宣伝文句を見回していく。

弔はなんだかんだどういうゲームでも好んで遊ぶ。最近忙しいのであんまりやっている姿を見ないが……しかし、なんだかんだ弔は難易度の高いゲームが好きのように思える。

どれがいいのかなあ、と思っていると、話しかけてくる姿があった。「どうしたの?」

「……あ、ぼくです?」

「ええ、そうよ。あんまり唸ってるから、なにを悩んでいるのかなって」

「あー、とむら……えつと、友達……? の誕生日プレゼントで迷って」

「ふんふん。その子とはどんな関係?」

「え、えと? どんな関係って……」

どんな関係、か。ぼくと弔の関係ってどんなものなのだろう。考えるとわからなくなってくる。

……ぼくは狐で、弔は人だ。そしてぼくはほとんど弔に養われている。

……これは?

「……ペットとご主人様?」

「…………わあ」

こちらを見る目が少し、変わったような気がする。

「……ひよつとして、恋人?」

「うえつ? ……いや、とむらとぼくはそんな関係じゃないですよ?」

「でもペットとご主人様って……」

「あ、あの……それは言葉の綾というか……」

「あっ! わかった! 片思いでしょ!」

これは名推理だ、と言わんばかりに彼女はこちらを指差す。

……片思い、なのかなあ?

いやでも、待て。ぼくはオスだ。いや、今の姿こそ女のものだが、それでもぼくはオスなのだ。

同じ男の弔に恋するなんてありえない。え、でも、弔と一緒にいると落ち着くし、なんだかんだかなりくつついてるし、かなり変な気分になるけど弔にしっぱ触られるの嫌いじゃないし。

……ひよつとして、これ、片思い？

耳がぴこぴこ動く。しっぱがぼくの処理能力オーバーに高速で回転した。

ぐいんぐいんぐいんぐいん。

「うわっ、なにそのしっぱすごっ?! ……なのに顔は無表情なのね……」

「あんまりにテンパると感情がしっぱに出るのです」

「あら、じゃあさっきのは凶星ってこと？ ふーん……その『とむら』って子のこと、好きなのね」

「……恋愛的な好きではないと思うのです」

「まあ、好きにもいろんなかたちがあるからねえ。恋とか愛とかだけが恋愛ってわけじゃないもの。もっと別の好きだって、当然あるか」

「そ、そういうものなのです」

「うーん……あ、そうだ。あなた、これから時間ある？」

「……え？ ありますけど」

どうしたのだろうか。時間自体はたっぷりある。弔も今日はお仕事で、とあるバーに泊まりだと言っていた。なのでぼくはひとりぼっちで部屋の中だ。

悲しいので、なるべく遅くまで外にはいたい。

「じゃあ、あたしとデートしてみない？ あなたの恋愛相談に乗ってあげる」

◇

——というわけで。

ぼくは怪しい女性とその日を過ごすことになった。と、言ってもな

にをすればいいのかなど全くわからないので、エスコートやらなにやらは向こうに任せることになった。

ぼくの着ている服は防寒性があればそれでいいや、という考えで選んだので、見た目に統一感があまりない。

服屋に行つて服装を整えられた。

その際に「体温高つ!？」と言われたので、内部の炎をさらに大きくすると触れないくらいになるんじゃないだろうか。

ともあれ、ぼくは服を着替えた。見た目を意識したもので、ぼくにしては珍しくスカートと組み合わせた衣装。冬場にスカートつて寒んじゃないだろうか、と思うが、その際に長い靴を用意されたので、靴下のもこもこも含め案外耐寒性は高い。

個人的には納得。彼女もやりきつたような表情だ。

「これでよしなのです?。」

「うん、いいと思うわ! やっぱり女のコはおめかししないとね!」

ぼくはその皮をかぶっているだけなのですが。

まあ、別によしとしよう。代金は払ってくれた。ぼくも全然払えるが、向こうが払ってくれるというのでそれに甘えることにする。

しかし、そこそこの額はしたというのにさらっと払えるあたり、彼女はいったい何者なのだろうか。

少なくとも、かなり稼いでいるのは間違いないだろう。近くの自動販売機で買ったお茶を飲みながら、そんなことを思う。

まあいいか。そんなことを気にしている余裕があるのなら、今の困惑をどうするべきか考えたほうがいい。

『うわ……あの耳の子めっちゃかわいい』『すげえ映えるな』なにあれ、モデル? 『二次元から出てきたのかよ……』『隣の人もすごい……』どういう付き合いなんだろ』

聞こえてくる心の声がぼくを褒めているようで気分がいい。

最近感情表現が尋常じゃなく活発なしつぽがぐいんぐいんと回転を始めた。それを見て、彼女がくすりと笑う———そういうば、ぼくはこのひとの名前を聞いてなかったような気がする。

さて、この場合どうやって聞けばいいのだろう。と思ったが、そん

なに気を銜わずに普通に聞けば教えてくれそうな気もする。

ならばさつきと聞いておいたほうがいいだろう、聞かなかつたことで悶々とするのは面倒なのだから。

「あの……お姉さんって、どんな名前なんです？」

「あー、そうね。自己紹介忘れてたわ。今のいままで忘れてるなんてどうしちやつてたのかしら……」

と、苦笑して、

「香山睡^{かやまねむり}。あなたはなんて名前？」

なるほど——じゃあ、睡さんと呼ぶことにしよう。

「ぼくはジョンです。ジョン・ドウ」

「………個性的な名前ね」

「とむらが付けてくれました！」

「………そ、そう？ よかったね」

睡さんの困惑が伝わってくる。心の中で、なにかを疑っているらしいことが伝わってくる。

あんまり聞くのもプライバシーとか、そういうものの侵害かな、と思つてぼくは睡さんの心の声を極力無視するようにしていた。わりと意識からシャットアウトすることができるのだ。

……しかし、身長が高いように思える。弔よりも高い身長だ。大人の女性はここまで大きくなるのか、ということに驚かされる。

ぼくは成長しないが、……弔が望むのであれば身長を伸ばすのもありかもしれない。

いや、弔のことだからどうでもいいだとかいうんだろうけど。

「………そろそろお昼だね」

「あれ？ もうそんな時間です？」

「服選びに時間使っちゃったからねえ。どこに食べに行く？ 希望があれば連れて行ってあげるけど」

「ジャンクなかんじがいいのです」

「え、ほんと？ 値段気にしてるんだったら別にお金もこっちで持つよ？」

「実はぼく、あんまり外に出ないので。コンビニとかはいつたこと

あってもファストフード店に行ったことないんです」

「ああ……なるほどね。じゃあ、希望通りにしよう。二階にフードコートあったし、そこでいいかな」

「はい。……あの、睡さんはそれでいいんです？」

「いいのいいの。10秒チャージだけとって食事とか言い張る人も知ってるしね。それよりはずっと健康的だわ」

「……それは……」

さすがにどうなのだろうか。

あんまり知らない人にこうは言いたくないが、そのひと人間味が足りてなさすぎるような気がする。

と、いうことでフードコートに着いた。いくつか出店されているようで、どここの店を使うか迷う。ぼくは財布を取り出して、その中に入っている額を確認する。まだまだかなり——それこそ、新しくゲーム機が3つほど買えるくらいあるので、人が多いところに適当に並ぶことにした。

ちなみに、今日買った服はだいたいゲーム機一つ分換算である。そう考えると高いような気がする。

長い列に並んで、レジにたどり着くまで待つ。レジの効率は良いようで、レジが動く速度はとても早い。かなりの人数がいるのだが、それでも二分ほど待てばぼくの番になるだろう。

と、そこでした。ぼくが握られる感覚を覚えた。

声はあげなかったが、体が跳ねる。びっくりしながら後ろを見た。

ぼくのしつぽを掴んでいるのは、まだ幼い女の子だった。

「すみません！ すみません……こら、やめろ」

お父さんだろう。その人が、ぼくに謝り、その子の手を剥がす。

「……いや、すみませんね。この子、好奇心旺盛で」

「あ、いえ。ぼくは別に大丈夫です」

「そう言ってくれれば助かります……わっ、ばか。手を伸ばすなって」
ぼくの耳に伸びてくる手を遠ざけようと、彼はその子を抱える手を後ろに引いた。

「あー……いや、別にぼくはいいですよ？」

「いえ、一度許すとそれで慣れちゃいますから、駄目なことは駄目って教えないと」

……そういうものなのだろうか？

いや、でもたしかに、先生は弔の反省点を指摘したりなどしていたような気がする。ならば、そういうものなのだろう。

レジでぼくの番になったから、手早く注文を済ませた。ぱつと見一番人気そうなものを注文しておいた。

そして出来上がったものを受け取り、睡さんを探す。席を取って来ていたようだ。手を振る姿に近づいて、ぼくはトレーを机におろした。

「まあ、ファストフードと言ったらよね」

「そんなに定番なんです？」

「……………ええ。世界的に有名なチェーン店だし。ファストフードの原初、といってもいいかもしれないわ」

「へえー……………知らなかった」

と、言いながらぼくは包装を解いて食べ始める。すごい楽だ。片手で食べられるのだから、アイスのような感覚を思わせる。

「……………美味しいです？」

「なんで疑問形なの？」

睡さんはラーメンを啜りながら言った。

「いや……………味の基準がよくわからなくて」

最近ほとんど調理してない人の肉だ。黒霧がたくさん調達してくれるので、あんまり温存を考えなくてよくなった。

基本的に、逮捕されたりするようなレベルの敵を殺したものらしい。これだと先生の監視下なので、証拠を揉み消せる。

それとは別に、純粹に黒霧自体が状況証拠を残さず人を殺せるという部分もある。

と、いうことで、ぼくは最近気兼ねなく肉を食べれている。しかし、その代わりにぼくは味に関して減法弱くなってしまったらしく、何を食べても人肉と比べたら美味しいという評価しか出せなくなってしまうのだ。

そういう意味でぼくは疑問に思っていたのだが、睡さんがどここな
く深刻な面持ちで、ぼくの頭を撫でる。

「……あなたは、その『とむら』って人のことが好きなの？」

……どうなのだろう。ぼくにとって弔は一体なんなのか。ぼくの
感情は好きでいいのか、どうなのか。

そんなのはわからないけど、一先ず、今は。

「……はい。たぶん、好きなんだと思います」

「……そっか。うーん……助言をしようと思ったけど、要らないみた
い。余計な真似してごめんなさいね」

「あ、いえ。全然」

「……。ねえ、このあとも一緒に遊ばない？ 時間があるんだったら

でいいけど」

「え？ 最初っからそのつもりでしたけど……」

「あら、そう？ 要らない質問だったわね。じゃあ、食べ終わったら今
度はゲームセンターにでも行ってみる？」

◇

そして今日一日を遊び倒し、別れ際のこと。

「今日はありがとう。あ、これあげる。あたしになにか用があつたらこ
の番号に電話して。そのときはまた一緒に話したり、遊んだりしま
しょ」

渡された名刺は、『ヒーロー・ミッドナイト』のもの。

つまり。

「……あ、あの。睡さんってヒーロー……？」

「ん、そうよ。今日はオフの日！」

「……へー、そうだったんですね」

……これ、知らない間にヒーローと遊んでしまっていた、というこ
とじゃ。

弔にバレたら怒られる。

やばい。

第10話

結局、弔には睡さんのことは言えなかった。歩きながら、ぼくがどうするべきかを考えた結果、弔に報告することはできなかった。

冷静な判断では、言ったほうがいいのだろう。実際ぼくもそうするべきだと思っていた。

しかし、それをしようとしたが、ぼくはどうしても言えなかったのだ。

——感傷か。なんなのか。

ぼくに無駄な感情などいらないのだと思う。実際、ぼくはいろんなことを知っているけど、知っているだけでわかってない。

人の感情を模しているだけで、ぼくが抱いている感情が、果たして実際に抱いているものなのかも証明できない。

ベッドに転がりながらぼくは考える。

天井の暗さが、光を遮っているということをぼくに伝えてくる。伸ばした手を握りしめた。部屋という箱。箱といっても箱庭の部類だ。

そこから抜け出すことが、なぜだかとても恐ろしくなった。わかっている。

余計な感傷でしかない。ぼくに求められている役割ではない。みんなの、ぼくじゃない。だからこそ、すべてを気の所為にして眠ることにした。部屋の中に入って持っていたかばんを投げ捨て、着替えることも億劫だったので睡さんに仕立ててもらった服のままぼくは布団に突っ伏した。

弔の影はない。今日は弔はいない。電話で報告は終わっている。今日は楽しく過ごしたとだけ告げた。帰りながらだったから、ひよつとすると周囲の音が入ってるかもしれない。

「あ……」

お腹が空いたから、這いずりながら冷蔵庫をひらき、腕の肉を引っ張り出す。部屋は汚くない。やることがなさすぎるから、毎日部屋を掃除するようにしているのだ。

服にシワがよるかもと思ったが、この姿で寝ようとした時点で今

更だ。

「あ……ん」

やっぱり、買って食べるものとか、自分で作って食べるものよりはるかに味は劣る。どうにかできないかなあ、と思うが……まあ、食べれないわけではないのだ。ちよつと味が微妙かなってだけで。

いけない。昔の弔が危惧しているみたいにグルメになっている。一旦どこかで舌を痛めつけたほうがいいな、と思った。

シヨック療法である。

布団に潜ってテレビをつけ、しつぽを振り回していると、そこにはさつきまで会っていたヒーロー・ミッドナイトの姿があった。

テレビの姿は、今日の私服と違いかなり際どい恰好をしている。いや、今日はコートを着ていたので、その下は薄着だったのかもしれない。い。

個性の発動条件にその薄着が深く関係しているようだ——なるほど。確保に限ってはかなり強いかもしれない。

場合によっては逃げの手段の黒霧を封じられるかもしれない。そう考えると、かなり強い個性だと思った。

「ねむい……」

枕に顔を埋めて、ぼくは小さくつぶやいた。

純粋に体力がないのかもしれない。今日一日遊んだくらいで、体が疲れている。

どうにかして体力伸ばさないとなあ、と思いながら、目を閉じて眠ろうとした。

そのとき、ぼくの個性に反応があった。

『やあ』

「……だれかな」

『特に名乗る名前もない』

『声』でぼくはだれかが来たことを察する。顔を上げて、だれだろうか、と確認する。

「……あれ？ 今日のこと」

そうだ。

今日、ぼくのしつぽを握った女の子。

「どうして君はここに居るのかな」

『お前を殺すため』

心の声で返答される。なるほど、ぼくの個性が暴かれちゃってるパターンのような気もする。

「わあ、物騒。久しぶりにびつくりしちゃったかもしれない。ところでお父さんは？」

『バカにい父なら』

そう言つて、彼女は腕を振り上げる。

『外で個性の準備中』

振り下ろされた。布団から飛び跳ね、天井を蹴つて少女の頭を蹴り飛ばす。

べちゃり、という感触と共に、攻撃が透かされた。

距離を取り、ぼくは先生に連絡をつなぐ。すぐに先生は出てくれた。

『なんだい』

『ごめん先生、家割れた』

『なるほど……ヒーローじゃないのかい？』

『違います』

『わかった。じゃあ、命知らずな襲撃者に楽しんでもらいなさい』

「はーい！　どんな感じがいいです？」

『そうだね……地獄へようこそって感じかな』

「わっかかりましたい！」

炎を灯した。体の中にじやない。掌に、だ。それも今まで使つていなかったようなレベルの、大きな炎。

あんまり具現化するような能力は得意じゃないのだけれど、触れない敵への対応にはこれが一番いいだろう。

「そいつ」

炎を投げる。下から、だ。地を這うように疾走るそれを、床に入つて回避しようとした少女からの悲鳴が響く。

よし、と思いながら、ぼくは一つ息を吐いた。そして床に火が点い

ているのを見て、やってしまったとすぐに気づく。

「……先生、許してください……」

『別にいいよ。君もかなり成長している。今の炎、消費はどれくらいだ?』

「変身よりちよつと少ないくらいです」

『あんまり効率はよくないね。途中でガス欠するだろう。補給用にいくつか肉を持っていきなさい』

「はい」

『じゃあ切るよ。……ああ、弔に連絡したほうがいいかい?』

「別にいい。ぼくひとりでも大丈夫、です」

『……連絡しておこう。万が一があっても困る』

大丈夫なのに……。

とりあえず、先生に言われたようにいくつか腕を持ちだしておく。リュックの中に突っ込んで、そして靴を履いて玄関を出る。

「——陽火流の仇イ！」

人の頭サイズの鉄塊が飛んできた。

ぼくの頭を吹き飛ばしながら、部屋の中を進んでいく。

「……やったか?」

『バカに父。それフラグ』

「うるせえ! 頭ぶつ飛ばして死なない奴がいるかよ!」

『あそこに』

なるほど、楽しそうなり取りだ。しかしそのやり取りを聞いているだけで頭痛がしてくる。心を読む個性の消費さえも厳しくなった。

かばんを開き、腕を取り出して食べる。まさか初っ端から蘇生を使うことになると思わなかった。

ドクターに溶かされたとき以来だろう。そこそこの肉体強度はしているはずなのだが……それを超えるほどの威力だった、ということだろう。

それでも金属バットで殴打されても耐えきれられる程度の耐久はある。

——それが突破されたとなると、なるほど。強個性であると思われる。

「おいおい……こつちも結構ためこんだんだがな？　頭飛ばされたんだから死んどけよ」

『父。^{バカにい}補給してるし消費激しいんじゃない？』

「おつ、マジか。でもさっきのもう一回やれっつのは厳しいぞ。溜めてる時間がねえだろ」

『だから、父^{バカにい}戦って』

「……お前なあ……」

二人が話している間に、生命力はいい具合に回復できた。身体強化を使いながら、ぼくは足を踏み込む。

速力とは地面を蹴る力によって得られるものだから——そのまま真っ直ぐ体を飛ばす。近くのブロック塀などを使って立体的な移動を考えながら、ぼくは二人に——父親のほうに、近づいた。

「速あつ!」

『父。^{バカにい}喋ってる暇ない』

「残念ながらっ!」

父親は小さめの鉄球を取り出し、それを空中に置く。

「速いだけなら対応できるんだなあ」

それを殴った。ぼくのほうに飛んでくるのではなく、二人の周りを守るように縦横無尽に駆け巡る。

これでは踏み込めない。足を止め、鉄球の空白を伺う。……完全にランダムなのか、動きには統一性がない。時々自分たちに当たりそうになるのを避けているので、操作は完璧ではないらしい。

「……そういえば。陽火流って誰だっけ?」

「はあ!?　忘れたとは言わせねえぞ!」

「忘れたんだけど」

「お前らが個性を奪ったやつだよ!」

……今まで何度も奪ってきたらうので、今更そんなことを言われなくても困る。

しかし——最近のことだろうか。少しばかり、覚えがあるような気もする。

「たしか、黒霧との初めての仕事のときだったかな……」

「……その感じ、人違いとかじゃねえんだな」

「え、人違いの可能性あるとか考えてたの？ 人違いかもとか思いながら人のあたま吹き飛ばしてたの？ こーわいんだーこわいんだー！」

「確認だわアホお！ ……つたく」

『父バカにいの反応するから面白いよね』

「わかる気がする」

「なあにくだらねーことで意気投合してんだ!？」

「こーいうふうにつっこみが返ってくるどころとか楽しい。」

しかし……仇討ちか。理由としてはちゃんとしているように見えて、だからといって個性を奪われるといった可能性があることを知りながら向かってくるのは変だ。

——いや、あの男が先生じゃないと個性は奪えないということを教えていたのなら、その警戒は無駄だろう。

「なあるほどねえ」

「ん？ なんだ？」

「いや、理由がそれだけだと弱い感じがして」

「……デストロさんは仲間思いだからな」

「……デストロ？ なにそれ」

「俺らのリーダーさ」

そして、彼は少女を引き寄せながら、こちらに指差す。

「俺たちは異能解放軍。同じ志の仲間をやられて黙ってられる人間じゃないのさ」

『父バカにいがカッコつけてる。ダサにいだ』

「おい!! お父さんカッコつけたんだから褒めろよ!」

『やだよ。お母さんがおばあちゃんって知ったときのわたしの気持ち考えれないからバカにはバカにいなんだよ。人のこと道具扱いだし』

「いやそれ俺のせいじゃないからね!? 押し倒してきたのあっちだからな!」

「……なかなか闇が深い家庭のようで……?」

「ほらあ！ 敵からも同情されちゃってるじゃん！」

『だいたい父バカにいのせいだと思っ』

そんなバカ話をしていると、鉄球がごとりと地面に落ちた。

「あっ」

『あっ』

「……………」

無言で踏み込んだ。

『父バカにいほんとバカ』

「うおおおこうなったら一騎打ちじゃあバカ野郎!!」

先程からの攻撃を見ると、砲台として戦えるのは父親のほうだろう。ならば先に潰しておく必要がある。

娘を先導させた———ということは、おそらく近接戦闘は苦手とするところだろうからだ。

だから、踏み込んで殴りかかった。

それを、娘が腕を伸ばしてガードする。液体を叩くような感触だ。

時々いる、スライム系の敵だろう。

「サンキューー！」

『娘に助けられるのってどんなきぶん？ ねえどんなきぶん？』

「うるせっ…………」

一体いくつ隠し持っているのか。

男は鉄球を取り出し、それを手のひらに構えた。指でそれを弾き飛ばす。

どんな膂力をしているのか。かなりの速さで撃ち出された鉄球は、ブロック塀を紙のように貫き、そして彼の手元に帰ってくる。

「え!? なにそれずるいー！」

「ズルくない！ こっちもベクトル計算とか頑張ってるの！ ズルいで済まさないでー！」

「それはごめん！」

『仲良しじゃん』

「仲良くは———ねエなっ！」

今度は指ではなく、投げたものを後ろから殴りつける形になった。

しかし殴りつけられた鉄球はその場に停止し、彼の手元に戻る。

「それじゃ二発目だ」

くるりとその手の中で鉄球を半回転させつつ、デコピンで弾き出す——先程のように、高速の弾丸が迫る。

ただ、直線だから読みやすい。少し横に逸れると、それだけで回避できる。

逆再生のように戻った鉄球を、当たり前のように彼は受け止めた。
いやそれありえないだろ。

大きさこそ違えど、威力はかなりのものだ。ぼくでも怪我をするかもしれないと思うほどのもの。そんなものを当たり前のように受け止めてる時点でなにかがおかしい。

「あー……ベクトル計算ダルい……マジ無理病んだ」

『急にギャルにならないでよ父。^{バカにい}計算くらいがんばってよ』

「じゃあお前は積極的に近接戦闘がんばってな？」

『父 防御力クソ雑魚だから守ってあげてるのに……』

「俺は鉄球バリア張れるから……」

「娘がどうなってもいいの……?」

「おう！俺が無事なら！……あ、ごめんうそうそ、大嘘だから蹴るのやめてな。痛いから」

この二人動画投稿者にでもなればいいんじゃないだろうか。

それくらい掛け合いがおもしろいのだが……しかし、この掛け合いを見ているとこちらも少しやる気が萎えてくる。

襲撃犯ではあるのだが。

と、ここでふと思う。

「どうやってここがわかったの?」

「ん? ああ、今日こいつが尻尾触っただろ? そのときに毛の中に

発信器をぺたり」

『わたしが作りました。生産者まーく』

「作ってないだろうが。わたしがやりましたのほうがよくないか?」

『そう言ったら犯罪者みたいになるじゃん父^{バカにい} ったらほんとセンスないよね』

「おう、ここで親子兼兄妹喧嘩やるか？ 負けねえぞ」

『父は私を貫通できる火力がない。さらに娘に手をあげる父親はクズ。よって父はクズにいでありザコにい。よってクソにいはクソ。やーいクソやーい』

「娘じゃなくて息子だったら腹ぶち抜いてた」

『ナチュラルに我が子を殺害しようとする沸点の低い人間のクズ』

「沸点高くない!? いや俺けっこう耐えたと思わない!? ねえねえその狐耳美少女！ 俺めちやくちや沸点高いと思うんだけどっ！」

「あ、うん。仲いいね？」

「おいあれ絶対よくわかってないぞ。とりあえずそうだねとか言っとけばいいとか思ってる感じのやつだぞ」

『父もときどきやるよね。死ねばいいのに』

なんとというか、戦闘という雰囲気じゃなくなってしまった。今日のところはもう解散でいいんじゃないだろうか。ぼくも眠いし。

そう言い出そうとして——二人の背後に、誰かが立っていることに気づく。

『——ッ！ お父さん！』

そう言って、少女は父を突き飛ばした。父はわけもわからぬと言うような表情だった。

直後、少女の体が弾け飛ぶ。

水が散るように。

氷を破壊するように。

彼女の体が砕け散り——周囲に散った。

「——ッ!? スイコ!?!」

少女の体を吹きちらしたのは、筋肉で体を固めた巨大な男。

拳を振り下ろした体勢だ——ひよっとして、殴って散らしたのか。

「……なんだお前」

「デストロさんに遣わされた。お前の仲間だよ」

「……人のガキ殺してなに言ってるやがるよ」

「うるせえ。バカ騒ぎしてたから殴ったら散った。大事な任務で遊ぶバカは異能解放軍に要らない。……お前らの自業自得だ」

「殴る方が悪いに決まってるんだろ」

彼は取り出したデカイ鉄球を指で弾く。

至近距離から放たれたそれは、バカでかい筋肉のその男の腹に当たり、——そのまま何十メートルもぶっ飛ばした。

その隙に、彼はこちらに寄ってくる。さすがに殴るのもどうなのか、と思つて拳を止める。

彼はぼくの横に立って、筋肉だるまに中指を立てた。

「ああ！ わかったよ！ 異能解放軍って組織から抜けてやる！ 抜けてやる——俺は、こつちの味方をしてやるよ！」

「え、それでいいの？」

思わずツツコんだ。

彼は頭を搔いて、恥ずかしそうにぼくに言う。

「いや……異能解放軍なんて入ったのも全部娘の為だしな。その妹を殺しやがったやつらに協力する必要もない」

「え、友達殺されたんじゃないの？」

「じゃあ逆に聞くけど、友達と家族どつちが大事だよ」

「なかなか秤に掛けづらい質問だね……」

「俺にとつては家族。だからいくら友達がいようとも、家族を殺したやつの所属する場所には居られねえよな」

「こう言い切るあたり、このひとも良い人そうに見せかけ、敵ザイランなのだなあ、と思う。」

「ぼく君が頭吹き飛ばしたの許してないよ」

「それはマジですまんかった」

「……まあ、別に楽しかったしぼくはいいけどね。君の気持ちもわかるし。これからぼくたちに協力してくれるっていうんなら、別に許してあげてもいいよ」

「そのくらいで許されるんならいくらでもやってやる。んで、早速すまないけどあいつ殺すの手伝ってくれない？」

「わかったけど——君の個性ってどんななの？ 全く想像つかない」

「いんだけど」

「それはあとで教えてやるよ。とりあえず——」

彼はポケットの中から、小さい鉄球を一つ取った。

「あいつを仕留めようぜ」

「ん、わかった」

彼の指が弾かれる。

銃弾より速いだろう速度で、鉄球は弾き出されていった。

第11話

まず最初に、父親は全く怒っていない。

娘が殺されたから抜けるという理由はその通りなのだろう。だからといって、口にするすべてが正しいとは限らない。

たしかに彼自身は一度告げていた。

自分が無事ならそれでいい、と。

冗談であると否定していても、実際はそのとおりでしかないのだ。むしろ仲間が死ぬことなんてなれっこ。それに対して今更なかを感ずることはない。娘だから少しばかり感ずるかもしれないが、自分が死ぬ恐怖に比べると微々たるものでしかない。

少なからず動じたのは、母親に殺されるかもしれないという危惧。しかしそれも異能解放軍と敵対し、こちら側に入ることによって隠れながら生きることができるといふ考えができたことにより、

体のいい言葉を紡ぎ、それらしく仲間になろうとした。

——これが、父と呼ばれる男がぼくたちの仲間になった理由である。

心の声はなによりも雄弁だ。ぼくは彼の打算を全て理解できる。だから、彼の参加を許すことにした。

敵対しないというのであれば別に仲間になってもいい。ぼくのほうから弔に推薦することもできる。裏切られるかもしれないが——そのときは、別に温存など考えず叩き殺すだけだ。

別に、全身を全開まで強化していると勝てない相手じゃないのだから。

すこしだけ厄介なのが娘だ。それがいなくなった段階で、彼を殺すのは容易い。

というか、娘がいても意外とかんたんだろう。全力で殴って散らせると、ぼくも同様にそうすればいい。

と、いうわけで。

現在の共闘に至る。

全身を強化する——多少温存はする。この共闘のあと敵対され

ると面倒だからだ。

「あ、そうだ。君の名前はなんていうの？」

「ん？」

「いや、知らないと呼ぶとき不便だなんて」

「ああ……茶味ちやあじだよ」

「おっけー茶味。チャージって呼ぶね」

「どっちもそんなに変わらないと思うんだけど……」

鉄球が撃ち出される。

それを正面から打ち砕きながら進撃する男を見て、息を吐きながら踏み出す。鉄球が、今度は二発放たれた。どちらも尋常じゃない速度だ。しかし、先程よりは威力が劣っている。

一息に距離を詰め、そのまま腕を振り抜いた。腹部を打撃するが、全く効いた様子もなく相手はそのまま拳を振り下ろす。左腕を持ち上げ、いなそうとする——しかし失敗した。左腕が引っかかり、殴打される。地面に叩き潰されながら、次に来る足を横から払い、起き上がる。

高防御のからくりが読めない。ひよつとすると素の防御力で耐えているのかもしれない。こうなると、ぼくの火力じゃ足りないだろう。弔がいればこういう相手は問答無用で即死なのだが……今はないので、仕方ない。

なら、貫通するだけの火力を用意するだけだ。もしくは柔らかい部位を潰すしかない。

「チャージ！」

「なんだよ！」

「なんか……こう……いい感じに攻撃力のあるやつお願い！」

「はあ!? ……わかったよ！ 時間稼げ！」

時間がかかる——ということとは、ぼくの頭を吹き飛ばしたあれを撃つのだろう。準備に時間がかかると言っていたが、どういう準備なのだろうか。

ちらりと見ると、浮かべた鉄球を何度も殴っていた。絵面だけ見たらとんでもなく地味だ。

しかし、こう見ると、鉄球の中に力を溜め込むことのできる個性と推測できる。弾さえ大量に用意していれば、大量に高火力の攻撃が撃てるのは強いのではないだろうか。

腕が振り下ろされる。今度は回避し、膝を強化し、蹴り飛ばす。

今度はチャージの初球のように、遠くまで吹き飛ばせた。こうみると、やっぱり腕と足に同じ強化倍率を乗せた場合でも、足のほうが格段と破壊力がある。

しかしそのぶん隙ができる。これは欠点だ。なるべく最速で、最短の動きで蹴りを放てるようになるべきだろう。

「驚いたぜ……」
「？」

ここで、相手の男が話しかけてくる。後ろのことには気づいているだろうに、悠長なことをする。

「お前、増強型の個性か。男で筋肉さえあればもっと強かっただろうのになあ……」

「……なに言ってるのかわからないんだけど」

「お前の攻撃は、軽い。お前の攻撃で俺は倒せない。今の攻防ではつきりわかった」

「……そっか。じゃあ、もっと強くするね」

足の強化倍率を最大に。

温存だなんて考えない、純粋な最大威力。

それで以て、相手の顔面を蹴り飛ばした。

近場の家に激突し、その壁を破壊して、さらに奥に吹き飛んでいく。全力の強化倍率でこうだ。あんまり効率がよくないから、普段はやらないのだが……ともあれ、失ったぶんをバッグから肉を取り出して食べることで回復する。

「お前！俺が溜めてた意味あるのかよ！」

「あるよー！おおありだよー！」

「にしたって大技だな……それ、消費激しいだろ」

「そりやあね。大技ってほどでもないけど結構消費する」

「ははははは！　なんだ！　今のが全力か!？」

「うっわまだ生きてる……」

「なにあいつクソ面倒だな」

跳躍し、大きく地面にクレーターを作りながら着地する大男。単純に、肉体強度が尋常ではない。これはやっぱりぼくでは貫通できそうにないなあ、と思い、チャージを見た。

「おっ、撃ったほうがいい？」

「どうぞ」

「じゃあ」

彼はその場に鉄球を構えた。今回は——中くらいの大きさだ。前のように巨大なものではない。

それを、宙に浮かべて、彼は後ろから殴り飛ばした。

瞬間の閃光。なにが起きたのかわからないほどだった。瞬間的に、放たれた鉄球は相手に向かって飛んでいき、その腹部を吹き飛ばした。それだけでなく、その後の風圧で鉄球より大きい穴を広げている。

「——狐に使ったぶんの四倍だ。さすがに死ぬだろ」

そういって、彼は腕をだらんと落とす。ひよつとすると疲れたのかもしれない。はあ、と息を吐いて、自分が今吹き飛ばした男を見る。

「……いやあ、強敵だった」

「いや君ほとんどなんにもしてないよね」

「相手が受けるタイプだったのが悪い。俺の技は基本火力特化だからな」

そういって、彼は手をあわせた。

「どうだ……スイコ。お前の仇、俺がとったからな……」

『すまんかった。お前も安らかに地獄に行つといてくれ』

「こいつほんと畜生」

殴ったほうがいいだろうか。そう思って、拳を構える。チャージがそれをみてあからさまに怯えた。ちよつと楽しいかもしれない。一応、頭に軽く拳骨を落とす。ぐろぐろと地面に転がり悶える姿は、見

ていておもしろい。

そうして遊んでいるとき。

——男がゆっくりと起き上がろうとする。

「うわっ!? まだ生きてんのかよキモいな」

「……でも、たぶんもうなにもしなくても死ぬよ」

「なんでわかるんだ?」

「狐の感」

と言ってみたはいいが、男がこちらに向かって超速で走ってきたあたり狐の感は外れていたようだ。手で押さえようとしたが、そのまま押されるままに後ろに進んでいく。

幾重もの壁を貫通し、周囲の悲鳴を聞きながら、ぼくは負った傷をそのたび治していく。

死にかけの最後の意地のようなものだ。放っていても、そのまま死ぬだろう。とはいえ——この状態は、少し面倒だ。体勢が崩れるので手は使えない。バランスを崩すかもしれないので足を使うのも少し躊躇う。

どうするべきか——そう考えた瞬間、相手の傷口を水が浸っているのを見た。

「あれ——」

言葉にするよりも早く、その水が急激に体積を増して人型になり、心臓を握りつぶす。

そのあと、少しの時間が経って男の力が抜けていった。ぼくを下敷きに、倒れる男を体の上から退かし、ぼくを見下ろす水の体のそれを見る。

『ぶく』

そう言っつて、指を二本立てているのは、間違いなく叩き潰されたはずの少女だった。

「生きてたんだ……」

『まああれくらいで死ぬわけがないよね。父はあれ喰らうと死ぬけど』

「あ、そうなんだ……」

だから庇った、と。

なるほど……ちよつと予想外だった。そんな簡単に集合できるものなのか。

とすると、彼を仲間にするのは少し逸ったかもしれない。なにぶん耐久という観点で見ると強すぎる。液体だから、弔が触ることもできない。

総評すると、強すぎる。

とりあえず、吹き飛ばされたぶんを死体を引きずりながら歩いて戻る。その間、彼女と少しだけ話をしていた。

「どうやってあいつの体にくっついてたの？」

『まず全身をもとに戻して、そこから地面で様子を伺ってた。腹に穴が空いたからその隙に体の中に忍び込んだぜいえーい』

「意外とバレないものなんだね」

『あいつがバカなだけだと思おう』

そんな話をして、もとの場所へと戻ってきた。

チャージが幽霊を見たような顔で彼女を見る。

それに対し、彼女は中指を立てて返した。

『父は自分の娘を捨てる人間のクズー！ クズにいー！』

「人間が悪い！ 俺は単純に、お前が死んだと思ってこんな組織にいられるか！ って思ったただけだって」

『それできつねさん。ほんとのところは？』

「自分が死なないならいいやだって」

『ギルティ』

「いたたた！ なんでそつちの証言優先するんだよ！」

『だってこのひと、たぶん心読めるし』

そういうと、彼は固まった。こちらを見てくる顔にぶい、と二本指を立てる。そして渾身のドヤ顔だ。

「いや……いやいやいや、ちよつと待て。心が読めるってなんだよそのチート」

「読んで字の如しだよ！」

「じゃあ俺の考えてたこととか全部気づいてたわけ？ 初めてあつた

ときとか」

「……ん？ なんのこと？」

「おっとこれはセーフだったぜ」

『父バカにいさちつと墓穴掘るのやめようね。ほんと馬鹿だから』

ほんとになんのことだかわからないのだが、初めてあったときになにかあったらしい。思い出すこともできないので、それは放置する。

ワープゲートが開いた。

「……あ、とむら。お帰り」

「……お前……今何時だと思ってるんだ……」

首を掻きながら寝間着の弔はこちらを睨んだ。

顔が怖い。

「死柄木弔。あなたためちやくちや心配してたでしように」

「いらんことを言うなよ黒霧。殺すぞ」

「……それで、この死体はともかくそちらの二人は？」

「寝返ってくれたよ。仲間になってくれるって」

「………」

弔は無言で二人を見つめ、

「………まあいい。お前の推薦だったらそこそこ信用してもいいだろう。とりあえず、面接だ……この惨状だとヒーローが来るだろ。黒霧、場所を変えるぞ。全員いつもの場所に連れて行け。……その死体もな」

「わかりました」

「あとは……部屋の荷物を全部運べ。ヒーローに搜索される前にな」

「……はい」

展開されるワープゲートに、弔が一番最初に入っていった。次にぼくが入り、二人は少し悩みながら、ワープゲートに入ってくる。

着いたのは、古いバーだった。最低限寝泊まりはできるように整理されている。布団も用意されているようだ。しかし、それしかない場所だった。

弔は椅子に腰掛けながら、頭を掻いて二人を見下ろす。

「……それじゃ、面接の時間と行こうか。お前らの個性は？ 何がで

きる?」

二人は、顔を見合わせて、

「俺の個性は「チャージ」。鉄球に力を溜めることができる。その死体の腹の穴を作る程度には火力を出せる」

「ふうん……まあ、物理系の遠距離攻撃と考えると……悪くはない。次、お前は?」

『わたしは「液体化」。体を液体にできる。基本的に物理攻撃は効かないかな。弾けとんでも復活できるよ。ただ火はちよつとごめんです。蒸発しちやつて死んじやいます』

「なるほど……要は、ゲームに出てくる強キャラのスライムか。液体は……なんだ。金属のものにはならないのか?」

『ちよつとずつ体に金属を混ぜていつたらできるかも?』

「マジか。じゃあ目標はメタルスライムだな」

「お二人さんちよつと意気投合してないか? ……それで、判定はどうなんだよ」

弔は少しだけ悩むそぶりを見せる——そぶりだけだ。実際には、もう答えはでているだろう。そういう悩みかただ。

「……まあ、合格だ。これからもよろしく」

「おう。わかった」

「じゃあ俺は寝る。あとのことは黒霧に聞け」

そういって、弔はぼくを手招きした。どうしたのか、と思って駆け寄ると、抱きかかえられる。

そのまま布団の中まで連行された。

「あの、あの……とむら? とむら?」

リュックを枕元に置くことはできた。しかし、布団に入った瞬間反応がない。逃げ出そうにも抱きつかれているので抜け出せない。

どうすればいいのだろう。とりあえず、腕の中で少しだけ動いて、靴を布団の外に出した。

「……仲のいいことぞ」

『あ、父^{バカに}嫉妬してる。嫉妬だ嫉妬。うらやましーんだ嫉妬しつとー』
「うるせえ、お前俺のことお父さんって呼んだの気づいてるからな?」

煽られても痛くありませんよーだ！」

外野がうるさい。

……そういえば、ぼくも寝る寸前で襲撃されたんだっけ。

そのことを思い出すと、自然と瞼は落ち——ゆっくりと意識は落ちていく。

幕間・彼ら彼女らから見たアノ子 第12話

幼い頃、頭を誰かに撫でてもらった記憶。

——あのぬくもりは、誰のものだったのだろうか。

◇

ある種の平凡が確実性を以てやってきた日の次の日——つまり、どうしようもなく退屈でくだらない一日の翌日。わたしことスイコは、暇を持って余し狐と遊んで暮らしていた。

わずかな仮眠を取っていた間に、狐はなでなでとわたしの頭を撫でている。なるほど。だから変な夢を見てしまったのだろう。

こんなセンチメンタリズム、わたしには似つかわしくない。もっともつと心を研ぎ澄まさなくちゃいけない。

——そうすることが、正しいのだろうか。

目を覚ましたわたしの頭を未だに撫でている狐に負けじと、わたしはしつぽに指を這わした。弱点のようで、おもしろいくらい反応を見せてくれる狐は、父バカにいと並んでおもしろい。おもちゃにするには逸品だ。毛の流れに逆らうように指を通すと、それがぞわぞわするようわたしの手を掴んできた。

狐はこころを読む能力を持っているだなんて言うが、なんだかんだで精度は低い。そうじゃないとわたしのこういう感情も、まったく見抜けないのはおかしいから。

狐は人間じゃない。

それはリーダー——死柄木弔から聞いている。この狐は、元々ほんとに狐だったようだ。だから、狐。耳はコスプレで着けていたわけじゃなかったらしい。

狐は人じゃないから、人の心がわからない。認識はする。認識はしても、理解はしない。

それはすごく、残酷なことなんだと思う。

そもそも狐は人間として生きるには欠陥が過ぎるのだ。それっぽい愛嬌を持つてはいるが、その全てが借り物でしかない。歪すぎて気持ちが悪い。

善性の強い人間ならば、その違和感をあえて無視するかもしれないが、わたしたちのように影に潜むものならわかる。

狐の感情は、あくまで人の感情を模しているだけにすぎない。

狐は感情を解しているように見せているが、その実ただの機械のようにはしか見えない。自分で考え行動するポンコツな機械だ。

例えば今、こうして仲良く過ごしているように見えるわたしだつて、死柄木弔の命令が下ればたやすく八つ裂きにするだろう。

関わった相手に対して、驚くほどになにも感じてはいない。

だからこの狐は——絶対に、正義では救えない。

『……はっ、父がピンチの予感……!』

「え、急にどうしたの」

『父がなにかをやらかしたときにわたしのセンサーは反応するんだ』

「え、チャージはなにやったの」

「爆速だぜええええええええ——」

なにか声が聞こえたような気がする。いや、間違いなく聞こえた。

間違えようもなく父の声だ。なにをやっているのか、と思つて、体を

床へと溶け込ませ、扉から顔を出す。

父が高速で壁に突っ込んでいった。

なにをやっているのだ。

人型に穴が空いている壁をの向こうから父が顔を出す。こちらに気づいたのか、顔を向け、親指を立てた。

「バイク……楽しいな……!」

『ああ、うん。とりあえず死ねば?』

「父ちゃんライダーになるわ。なんかこう、全身をこう悪役っぽく塗装して……」

『蛍光ピンクのインクに溺れて死ねばいいと思うよ』

「やっぱ時代は悪役だぜ。正義のヒーローはどいつもこいつも必ず最

後に勝ちやがるからな」

『ああうん。こつそり主役アレルギーだよ。悪役大好きかよそんなんだから貰うチョコレート毎年ブラックなんだよ』

「お前は今までにもらった血が入っているチョコレートの枚数を覚えていいるのか？」

『わたしはあげる側なんだけど』

「俺は数え切れない。お前の母親が毎年致死量寸前までのものを混ぜて大量に贈ってくるからだ」

『お前の母親でもあるんだよ。というか父はお母さんと何があったの……っ？』

「ある夏休みのことだった」

『独白が始まった』

「と思ったけど面倒だからいいや。もうひとつ走りしてくるな」

『二度と帰ってくんない』

手を振りながら走っていく姿を見送る。前を見ずに、こちらに手を振ってくる父の進行方向には壁があった。事故を起こす姿を見送って、わたしは部屋に戻ったのだった。

部屋に戻ると、狐はしつぽで地面を掃除していた。ぺたんと女の子座りでだ。

女子として負けた気がする。

「おかえりー」

『ただいまー。狐って女子力高いよね』

「女子力……？ なにそれ。女の子の力？ ぼくにはないんじゃないかな……っ？」

『それで女子力がないと申されるとわたしの立つ瀬がないんだけど』

「え、でも……だって、ぼくオスだし」

……………？

『もきゅ？』

「あつスイコちゃんが意識が宇宙に溶けたみたいな顔をしてる……！」

『いやいやいやいや……それでオスは無理でしょ』

「オスだよ?」

『よしわかった服を脱げ』

うん、と言われるがままに服を脱ぎ始めた狐の胸は、確実に大きい。というかなんなら下着までつけている。わたしですらまだ着けていないというのに狐のくせに生意気である。

『この時点でオス主張は効力を成さない』

「事実なんだけどなあ……」

『すれ違う男たちが誰もが振り返るような見た目をしておいてなにを』

「ああ、それはきれいな顔を参考にしたからね」

参考、とは。

この狐、ひよつとするととてもずるい方法でこの美貌を手に入れたのかもしれない——まあ、狐は人に化けるものだ。たしかに顔のいい女性に化ける方法がないとは限らない。しかし、なるほど。

オスだというのにきれいな女子の姿になったのは、趣味だろうか?

わたしは訝しんだ。

『……趣味?』

「趣味? ……しゅみしゅみー」

『は?』

「うえ!? なんか間違ってた!」

『間違いもクソもそもそも最初の論点から間違いすぎてて困る』

「語彙がたんのうだね」

『……あの、その見た目は自分の趣味?』

「……あえー……あー……違うよ!」

『その間はなんなの』

「……いや、とむらはこういうのが好きなのかなあって思ってたんだけど……」

『……あー』

つまりこれは……。

『びー』と『える』で構成されている的な関係なのでは……?」

わたしは訝しんだ。

さつきから訝しんでばかりだな、と思わなくもない。

しかしまあ……一部の方々が喜びそうな展開ではないか。そのうえしつかりと良妻してるのがなんとも恨めしい。

わたしより女子力完璧じゃないか。死柄木弔もここまで慕われていて男冥利に尽きるというものなのだろう。

そのことが嬉しいのかどうかはさておいて。

わたしがはあー女子力と思っていると、電話が掛かってくる。スマホを手に取り、相手を確認する。

バカにい
父からだ。

なんだろう、と思つて電話に出る。

『はい、もしもしー』

『あ、スーちゃんね！ ママだよママ！ 久しぶり！ T字路でパパと運命の出会いをして食パン落としちゃったから久しぶりに会いたいなーつて思つて電話かけちゃった！ 会えない？』

T字路で運命の出会いで食パン落とすつてなんだ。

相変わらず発言からキャラの濃いお婆ちゃん——兼、お母さんの発言を聞きながら、わたしは思う。

これ、一混乱が起きそうな予感——！

第13話

今更母親の奇行になにか苦言を呈することはないし、今更バカにい父のダメっぷりにどうこう言う気はないのだけれど、せめてわざわざ人目のつかないところに拠点を設けているのだから隠してほしかったというのが本音だ。

「あ、おねえさんこれはこれはありがとうございます。このバカ息子って最近どんな感じですか？　いつもどおり脳みそ蒸発させてる？」

『蒸発させてんのはお前だよ』

しれっと生活空間の中に現れた闖入者。その名は母。今、家庭訪問の時間が始まる――！

なんて冗談は置いといて、とりあえずこの状況をどうにかしないといけないと考える。

母親が押しかけてきた。

◇

気絶して母親に捕まっている父バカにいのことは放置しておくとして、第一になにをしにきたのが一番気になる。とはいえ、わたしはこの母親と話したくない。

なんとというか……絶妙に気持ち悪いのだ。

狐の抱える気持ち悪さとは別のベクトルで。恐ろしいくらいに狂人だから。それを包み隠そうともしていないあたりが、どうしようもなく大嫌いだ。

机に置かれている焼き菓子をとって、口に入れる。これは狐が作ったものらしい。お前の女子力くれ。わたしは女子力欠乏症だ。外部から女子力を摂取する手段があればいいのに。なんて思ったたりして、わたしは口の中に広がる甘さに一時の意識を溶かす。

「……それで……なにをしにきたんです？」

狐が聞いた。グツジョブ。

「やだなあ、娘に会いに来ただけだよ。このバカのバイク借りてちやちやつとね」

「……それだけです?」

それだけではないだろう。どうせ他に目的があるに決まっている。そう確信できるのは、忘れもしない小学校での出来事。

いじめられていたわたしの前にやってきて、いじめつ子全員を不登校にさせたときのこと。

それ以来、わたしは母親のことを同じ人間と信じていない。なにをやったのかは知らない。何をしたのかは知らない。けれど、その不登校児共は揃ってこういうのだ。

怪物を見た。

……わたしは母親の個性を知らない。だからこそ、その個性になにか秘密があるんじゃないかとか思っている。わたしの個性が『液体化』であり、父の個性が『チャージ』である以上、液体に関係がある個性であることは間違いない。

——これ以上考えるのは、怖い。深淵を覗いている気分になるから。

ほら、今も母の闇以外を感じさせない瞳がわたしのほうを見ている。こわい。けど、もう慣れた。

「まあぶつちやけそれだけじゃないんだけどね。安心して、及第点だから。あとはスーちゃんの調子を見るだけなんだけど……」

「……及第点?」

「そ、及第点。異能解放軍を蹴って入った組織なんてのがどれだけのものかと思っただけけど……まあ、そこそこいい感じじゃん? だから及第点」

「そうじゃなかったらどうしてたつもりなんです?」

「そうねえ……」

——全員、殺しちやつてたかも。

やっぱこいつラスボスだよ。

前に通話だけした『先生』に似たものを感じる。いや、先生のほうがよっぽど恐ろしいのだが……母親の場合、なんとというか——

——心を壊されそうな怖さ、というか。

先生の恐ろしさが身も心も捧げてしまいたくなるカリスマ性だとすると、母親の恐ろしさは話していると巨大な生物に捕食されるような気分になるところか。

父はよく耐えられるなあ、と思った。それどころか、この母親との間によく子供を作ったなと思う。

気絶していた父が目を覚ました。

「……うわああああああ!!? 冥府の番人!?!」

「おいだれが冥府の番人だ。こんなに美しいお母様に向かってなにを言ってやがるかつこはーと」

「口で言っっちゃうあたり終わってるんだよ年齢考えろクソババア」

「チャージ……せつかくお母さんがいるんだし、そんなこといっちゃだめだよ」

「狐さんまで洗脳しやがって……!! ぶっ殺してやる」

「洗脳されてないんだけどなあ……」

こいつがいるだけで雰囲気が変わるのほんとどうかしてる。

そんな騒ぎの中、わたしはふと気になって腕を見る。違和感があったからだ。

無数の眼球と目が合った。

『きやああああああああ!!?』

「ああっ!! スイコちゃんまで!!」

「どうしたバカ娘! クールぶってる癖に意外と悲鳴はかわいいじゃねえか!?!」

『おとつ、おとつお父さんこれなに助けてええええええ』

「うっわなんだそれ気持ち悪っ!」

「一つもらっていい?」

狐の反応が怖い。

ぶつぶつとした目は、ぎよろりとわたしのほうを見たと思うと、閉じられて消えていった。その様子を見て、わたしと父は閉口し、狐だけが少し残念そうにし、母はどこことなく嬉しそうに笑みをこぼす。

唐突なホラー映像に珍しく狼狽えてしまったが、反応を見るに母親

はなにかを知ってそうだ。うるさい心臓を深呼吸して鎮静させつつ、母親に向かつて視線をやる。

「……………」

サムズアップされた。

『違う！ 説明してってこと！』

「あ、そういうことね。スーちゃんだったらまったくわかりづらいんだから……………」

『どう考えてもいまの流れでわかると思うんだけど！』

はあ、と胸に溜めた息を吐き出す。心臓は少しだけ落ち着いた。よし、これで問題はない。

「といってもそんなに大した説明はできないのよねー。言えることがあるとしたら……………経過は順調、ってことかしらね？」

『……………は？』

まったくわからない。

ひよつとして、わたしの個性は『液体化』ではなくもっと別の、おぞましいなにかだとも言うのだろうか。いや、でもたしかにそうかもしれない。死柄木弔に言われたように、わたしの個性は金属化ができるように少しずつ成長している。

その成長の終着点が、さっきのような無数の目玉の怪物だとすると

すこし、恐ろしい。

「私達の個性は代々血を濃くしていくことによって先祖の力を強くしているのよねー。兄妹ができなかった場合なんかは、娘とかと交わるわけなんだけど」

『家系単位で狂気に溢れてる』

「おいババア、それ聞いてないぞ」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ まあいいや。でね、私の場合お父さんが生まれてくる前に死んでたから、外部からの血を交えるしかなかったわけ。それでできた子供が男だったから、子供をその間で作っただけだ」

「……………やっぱり闇が深い家系だあ」

狐のしつぽがへによんとしている。

顔は無表情なのに。

「まあ、それでできたのがスーちゃんってことね。こっちのバカの影響で体の中にいろんな性質を取り込めるようになってるから、これはきつと私達の最高傑作になるって考えてた」

『最高傑作って……』

人をなんだと思ってるのだろうか。

まるで子供の気持ちを理解していない、同意のない人体改造と同じようなお話だ。そういえば、個性婚というものがあつたか。それとやっっていることはほとんど変わらない。

個性のために。

義務的に子供を作っているだけだ。

「スーちゃんの才能はすごいよ。ひよつとしたら、ご先祖様に匹敵するくらいのもがある。……ひよつとしたら、ご先祖様に会ってるかもしれないわね」

『……ご先祖様に会うって。無理じゃないの？ どういうこと？』

「私達は歳を重ねる段階で、ご先祖様の面影を見る。こうした交配の理由がなんであるのか、それを知る。……このバカはその記憶を覗いてないみたいだけど、スーちゃんほど才能があればひよつとしたら見ることができるかも」

「ご先祖様の面影、ねえ……まあ、個性という超常の力は未だにながあるのかわからない。

個性特異点なんて話があるが、先生みたいな個性が生まれてしまっているあたり、超常黎明期の個性のほうがおそろしいものがある。

——ひよつとして、考えたこともなかったが、我が家は先生のよくな化物を先祖に持つ家系だったりするのだろうか。

『まあ代は浅いから先祖がどうこうとか言ってる場合じゃないんだけどね』

「……それより、そんな理由があつて俺を押し倒したのかよ」

「ん？ ああうん。普通ならこんなバカ息子を相手にするわけないじゃん」

「お前も年考えろよ」

「ん？ 久しぶりに親子喧嘩する？ いいよ？ 絶対負けないから」

「それはやめてほしいんですけどー……こうん」

狐が突然のあざとさアピールをし始めた。

手持ち無沙汰になったので、狐のしつぽをに触れる。「ひゃあ!？」だなんていつもおもしろいリアクションをしてくれる。しつぽの先をいじくった。体を震わせて、くすぐったさに耐える狐はなんというか……こう、虐めたくなる。

楽しい。

耳のほうに手を伸ばす。狐が涙目でこちらを見て、弱々しく首を振った。

わたしは耳を握った。

「ふやあ!？」と、狐の弱々しい叫び声があがる——そんなわたしたちを、^{バカにい}父とお母さんは毒気が抜かれたような表情で見ているのだった。

◇

その晩、夢を見た。

空は藍色で、テロリズムが協奏曲で40ページの大長編がちんちろと今日も同じようなフレーズを繰り返しているような世界で、わたしは鳴り響く心音に似たドラムの音を聞きながら歩く。

足音をバックグラウンド・ミュージックに、転調を始める三千世界をわたしは夢に見ていた。近場にあったコンビニへと入り、おにぎりコーナーに置いてあったイヤホンを店員がいないのでお金を払い購入し、包装を開いて食べる。

——ここは、誰の夢だろう。

昨日は一日が始まった。今日も一日が始まるだろう。明日は一日が始まるのだろうか。

長大な交差点。広い街の中、ぽつんと一人だ。駅前で騒ぎ立てるブリキのギヤングが、藍色に飲み込まれて溶けていった。

わたしは後ろを振り返らない。一歩止まると、わたしのぶんより足

音が多い。だれかが後ろにいる。そんなこと、とつくの昔に気づいている。

空に浮き上がる横断歩道を、軽やかなステップで走っていった。一歩ごとに、ドソラソホへと妙ちくりんに音がなる。冷静さを喪失した世界で、慌ただしくもわたしの後ろの足音が喧騒と幻想を表現していた。

何に突き動かされているのだろう。そんなことはわからない。わたしは、ただ胸の焔に呪われたように足を動かす。藍色の空はやがて眩んできて、世界はホワイトアウトした。何もみえない銀世界。走ってゆくのはたしかにわたしで、道などなくてもどこに行くべきかがわかったような気がした。

やがて世界はモノクロへ。飛び交う電信柱を足場に、どこかへと向かっていく——飛んだスペースシャトルは数秒で落下した。爆発はコミカルに。爆風に煽られ、わたしは落下した。

地面に落ちた——わたしの上に、真っ黒で、到底視認に堪えないなにかが落ちてきた。

とぶん、と。

地面の中へと——地の底へと落ちていく。

『ようこそ』

と、お前は言った。こともなげにおまえは言った。無責任が服を着ているように、厚顔無恥が騒ぎ立てるように、静寂を突き破りオマエはたしかに言い切ったのだった。

『ここにくるのは二回目だね』

そこにいたのは——わたしだった。

鏡で見るわたしのように、小綺麗に見えはしていないのに。なぜだかそれはわたしに見えた。

『ひきしぐり』

久しぶりであるかはさておいて——お前はだれだ。わたしはそう言おうとして、口の中が黒い液体で満たされていることに気がついた。どろりどろりとわたしを侵食していく。飲み込もうもしなくても、勝手に喉を押し広げて入ってくる。その感触がなによりも気持ち

悪かった。

おまえはだれだ。

『わたしはあなた。——なんて、答えは求めてないんだろうね。でも正しくわたしは君であり、君はわたしである。どちらかと言ったら後者が正しいかな——君はわたし。君はわたしの、うつしかがみ』
そのうつしかがみ、鬱死鏡とか読まないだろうな。

わたしはそう呟いて、眼球を圧迫するその黒に逆らうために目を細める。全身を犯されているような気分になる。この黒はなんなのだろうか。

『それは、わたしたちが代々受け継いできた……個性の正しい在り方』
へえ。随分と訳知り顔をして。知ったような口ぶりをしている、というわけじゃあなさそうだ。

わたしは『黒』に抗った。体が痛い。飲み込まれる意識は、目覚めに向かっている証明だろうか。

『時間がない——か。ほんとは全部教えたかったんだけど。それは今度でもいいかな』

そういつて、鏡の向こうのわたしは、わたしの頭を撫でた。そうしてわたしに口吻する。

……………。

——!?

『あ、赤くなった。初心なんだーい』

そういたずらっぽく笑って、わたしはわたしの頬の感触を楽しむようにつつく。

『わたしたちの【個性】の在るべき姿——その制限を解除したよ。君ならわたしに到達できるからね』

その言葉に、ひよつと思ひ出すことがあった。

——ご先祖様、だろうか。

『およう?』

わたしがそう考えたとき、意外というふうには彼女は目を見開いた。その後、その顔が笑みに変わる。

『うん、正解。……もう時間だね。また今度、いつかの夢で逢いませよ』

う?』

彼女は頭を撫でる。その暖かさは、どことなくいつかの記憶を彷彿とさせて――

◇

目を覚ます。わたしは体を見下ろした。澄んだ水のように、肌は透き通っている。

髪を見た。日本人らしい黒の髪は、透明度の高い海のように、蒼い髪へと変化していた。

第14話

「それじゃあ、行ってくる」

「あ、うん。いってらっしゃーい」

死柄木甲
リーダーを笑顔で見送って、少し。表情を凍てつかせ、そして感情を表現する尻尾がへによんと下へと落ちる。

わかりやすく落ち込んでいる。リーダーの布団へと向かい、それに包まりばたばたするくらいには落ち込んでいる。なるほど、それだけリーダーの存在が大きいのだと思わされた。

リーダーに頼まれ、リーダーが見ていない間の観察記を書くことになったのだが、なんというか……読心にひっかからない範囲から望遠鏡で覗く、という状態になっているから、早いところ出かけてもらいたいところだ。

そこから少しの間、うつ伏せで停止する——そのあと、布団から抜け出し、間の抜けた笑みを零しながら冷蔵庫を開く。なるほど、いつもの食事だろう。

人を食う姿を見ていると、やはり人ではないのだな、と思わせる。しかしそうでもないとリーダーが心から信頼を寄せるわけがないか。そう考えると、納得する。

口元を血で汚し、肉を食べきった。普段は丁寧に食べるが、しかし一人になったときはそうでもないらしい。女子力のメツキが少しだけ剥がれた、といったところだろうか。

しかしすぐに良妻ぶりを発揮した。食事を終え、すぐにテレビをつけて掃除を開始。あの部屋の清潔さはこうやって保たれているのだと感じさせられ

(ここですこし途切れている)

……対象に勘付かれかけた。少し不安げに、こちらが隠れている場所を見ている。……ひよつとして、距離感覚を失敗したのだろうか。そう思ったが、視線はすぐに外れたので、野生の勘のようなもので把握されたのだと考えた。

尻尾でぺしぺしと床を叩きながら、テレビを見ている。その尻尾に

仕込んだ盗聴器から聴こえる音声で、なんとなくその内容を確認した。ヒーローに関してのニュースらしい。

無表情だが、不満を感じさせる表情で床を尻尾で叩いている。ペしペし、だった調子がどんどんとぼしぼしに変わってきている。聞こえる内容は、どうやらオールマイトのことらしい。

リーダーが嫌いなものは嫌いなようだ。とはいえ、ミッドナイトのスクープのときだけはそういった感情を感じさせるものはない。これはどういう理由だろうか。謎だ。

時計を一瞥し、そこからテレビを消し、リュックを背負う。出かけるようである。今日はリーダーが一日帰らない、ということをかきかき聞かされてから、遊んで時間を潰すのかもしれない。家の中は退屈だしね、と補佐のスイコが補足した。

退屈らしい。リーダー、なんか遊び道具とか構えてやったらどうだ？

◇

家の中では無口なのに、街に出たら「はえー」だの「ほえー」だの「とむらあ……」だの間の抜けた声をぽつぽつとこぼすため、ひよつとするとお外恐怖症なのかもしれない。

尾行していると、向かった先はショッピングモールだ。どうやらだれかと待ち合わせしているらしい。待つこと少し。向こうからやってきた人影は、なんと驚くことにヒーロー・ミッドナイトその人だ。

すわ裏切りかなどと邪推したが、リーダー至上主義な対象がそんなことをするはずもないので、いつものようにポンコツを發揮して気づいたら仲良くなっていたに違いない。

まったくきつねさんは

◇

「……………」

「どうしました？ 睡さん」

「いや……だれかに見られてるような気がして。ひよつとしてストーリーカーかしら？」

「あははは、そうかもしれないですねー。睡さん美人だから」

「あら、そう？ ジョンちゃんも美人さんよ？」

そんな当たり障りのない会話が楽しく感じられるのだから、この少女は不思議だ。

香山睡は、この狐っ娘の持つ魅力について、なんともいいがたい感情を覚えている。

かわいい——のだけれど、美しくもあり。箱入り娘のような無垢な可憐さで、されど野生動物のように獰猛な鮮烈さを持ち合わせているその少女を、なんと形容すればいいのかわからなかったのだ。

所謂『萌え』という感情であるのだが——彼女がそれを知るのは、まだ先の話であり、

『あつぶねえええええええ……』

ともあれ、尾行作業中の二人は一難が去ったことについて深い溜息を吐き出した。

◇

勘付かれかけた。女って怖い。

さて、気を取り直してレポートの執筆を続けることにする。さすがにこれ以上の難題はこないと思うが、しかしバレルだけなら別に偶然を装えばいいのだ。セーフセーフ。

ただ、これは俺達がいらない中での対象の行動を調査するものだから、あんまりバレルのもよくはない。ので、なるべくがんばって気配を消して行動しようと思う。

どうでもいいが初手ミッドナイトとかの爆弾ぶちかましてくるあたりやっぱ狐さんパねーっすわ。

対象はミッドナイトと共に、まず百均コーナーを確認しにいった。リーダーの誕生日プレゼントを探すとのことだが、まず百均にリー

ダーが喜ぶプレゼントがあると思っっているのだろうか。つーかりーダーは誕生日プレゼントなにがいいんだ？ 一応俺らも考えとくけど、なにか希望があつたら教えてくれ。

しかしリーダーは愛されている。対象はリーダーの『いいところ』をたくさん挙げながら、ミッドナイトと歩いていた。

百均にはめぼしいものがなかったようで、次に目指したのはレジャー用品店。

「とむらは朝帰りが多いんですよ」

「……へえー。へえー……」

リーダーへの熱い風評被害。

なんとというか、狐さんほんとポンコツだなど思わされる。言葉のチョイスが壊滅的。ミッドナイトの中のリーダー像がどうなっているのか、少し気になってきたところだ。

とはいえ、^{サイラン}敵活動のことについては全く漏らしていないので、意外と頭は使っているらしい。ポンコツなのは言語能力だけのようだ。「とむらはねー、クールで、とつても頭がキレるんですー。ときどき子供っぽいところもあるけどそこがいいよね。なんだかんだ、夜はぼくを抱いて寝るし」

「……………へー。へー」

風評被害が衝突事故を起こしやがった。

リーダーへ提出するレポートだからあんまり書きたくはないことだが、しかし俺を責めないでほしい。なぜならこれはすべて狐さんが実際に発言した言葉だからだ。これに関してはこちらよつと惜しいと俺も思う。抱くじゃなくて抱きしめるだったら誤解を招くことはなかった。

狐さんOSの深刻な言語能力はさておいて、レジャー用品店に入った二人は、まずテントを見に行つた。なぜだ。というかそもそもものレジャー用品というチョイス自体が謎だ。リーダーあんまり野宿とかしないだろ。

めぼしいものはなかったらしく、そのまま退店していった。対象の尻尾は少しだけ落ち込んでおり、へによりと垂れ下がっている。

そろそろなんでこの尾行をしているのか謎になってきた。リーダーのここすきポイントをずっと聞かされる俺の気持ちを考えてほしい。

そうそう、我が娘はこのとき俺を置いてゲーセンに遊びに行っていた。ド畜生だ。

「とむらはねー、カッコつける癖して意外と子供舌で。こういうところかわいいなあって思うの」

「……これが人を騙す妙技なのかしら……？」

ミッドナイトの勘違いが凄まじい域にあるが、俺にはどうしようもない。リーダーがクズ男になっていることに対して俺は何を言えればいいのだろうか。リーダー、強く生きてくれ。

次は本屋に行くようだ。どうやらプレゼントに おすすめなものを探しに行くらしい。このとき、狐さんにスマホを渡しておけばよかったなあ、と思う。

本屋に着いた。対象はふと悩んで、漫画コーナーへと向かっていく。リーダーが好むとしたらこういうものだろうから、これは上手な選択だと言える。

陰から対象を見守っていると、対象はエロ要素が過分に含まれる少年漫画を物色しだした。

違う、そうじゃない。

いや普通にちよっとダークな少年マンガでいいだろうが、たとえば正義側が当たり前のように死ぬ漫画とか。そう思っていたのだが、対象はリーダーをそういうものが好きのように捉えているらしく、わりと本気なほうでエロを押し出している漫画を悩み始めた。

そして結局なにも手に取らなかった。セーフ。

次に対象は料理本のコーナーへと向かった。ここは自分の目的だろう。レシピ本と少しにらめっこして、すぐに購入を決意したらしく、何冊かの本を手にとった。

それを購入して本屋は終了。

俺もせっかくなので漫画を購入しておいた。今度読むことにする。「とむらが好きなものって、やっぱりゲームなのかなあ」

「ゲームはよくやってたって聞いたわね。でも最近はできてないんでしょ？」

「最近忙しいからねー。あんまり時間を食わないゲームとかだったら喜ぶかなあ」

「じゃあゲームを見に行く？」

「うーん……じゃあ、ゲームを見に行きましょう」

こういうやり取りの末、対象、ゲーム販売店へと向かう。

ソフトを物色していると、人目を集める容姿である対象に、話しかける姿があった。

チャラチャラとした金髪の男性だ。ぱつと見ですぐわかることだが、おそらくナンパである。

以下、やりとり。

「あの……君、ゲーム好きなの？」

「とむらが好きかなあ」

たった二言で撃退する狐さんマジで狐さん。

あつさりとナンパを撃退した強者である対象は、少し悩んで一本のゲームを手にとった。携帯ゲーム機のRPGゲームだ。このゲーム機はリーダーがときどき遊んでいたというのもあって、かなり無難な選択肢なんじゃないだろうか。

ソフトを買って、誕生日プレゼント選びは終了したようだ。

そのあと、ミッドナイトとは少しだけ話してお開きになった。完全に誕生日プレゼントを選ぶのに付き合ってもらっただけらしい。仕事があるだろうに、休日こんなことをしていて大変だろうとは思う。

我らが狐さんはそのまま家に直行する。

そして、ゲームソフトをこっそりと隠して、そのままリーダーの布団で昼寝を始めた。

時折寝言でリーダーのことを呼ぶくらい、リーダーに心底入れ込んだ様子で。

◇

いようにしないと無理だ」

「……それは流石にないでしょう」

「そしてそれとは別に、俺に風評被害を齎す」

「そっちが本音じゃねえか!？」

いやいや、違う違う、と死柄木は手を振った。

しかし、せっかくのこの関係——利用しないのは勿体ないだろう。どうかかして扱う方法を探さなければならぬ。

「……先生。この場合、どうやってあいつを利用する？」

『……そうだね。いや、ジョンがここまで優秀だとは思わなかった。……一番活用できる方法は、ヒーローの下に置くことだろう』

「……なんでだ」

『弔。僕がジョンの個性を取らない理由を思い出せ』

「……デメリットか」

そう、と先生——オール・フォー・ワンは、喜びを讃えた声音で言う。

『ジョンは逸材だよ。ヒーローが祭り上げられるこの社会に、風穴を空けるのに役立つってくれるはずだ』

「……なるほど」

『あの子の性格も丁度いい。どんな人からも好かれやすい、元気のある性格をしている。だがその奥には——闇だ。虚無に親しい、人外故の昏さ。なにがどのような作用しても、ジョンはこの社会を壊すのになによりも役に立つてくれる』

「……変身もできて、とんでもない逸材、か」

死柄木はそう言って、少し悩む素振りを見せ、告げた。

「先生、ジョンの経歴を作れないか？ 雄英に入学させる」

二章

第15話

流石の先生も中学校の卒業経歴までは騙せないということで、安全を期して中学校に入学した。ぼくだけではなくスイコちゃんも一緒だ。

狐の時間間隔は常人より長々としている。つまりたった三年。ぼくにとつては一瞬の出来事だった——それは過言なのだけれど、少なからず退屈しなかったというのは本音だ。

先生の手下に当たる相手が管轄していた中学校だったので、比較的快適な学生生活を過ごした——ぼくはこれまで学校などというきらびやかな場所へと入り浸ったこともなかったもので、これはかなり新鮮な経験だったと思う。

三年は長いが。

と、いうことで無事雄英を受験することが可能になった。確実な学力を確保できただろうし、おそらく合格は容易——と、いつてもそんなに目立ちたくないのですこそそこで抑えることにする。

推薦入試と一般入試、どちらがいいのかを冷静に考えた結果、一般入試のほうが確実に楽だということに気づく。推薦だつて取れはするが、推薦枠は一般より人に紛れることができない。本気を出してしまふとまず負けることはないだろうから、人に紛れるのが容易な一般入試に参加することにする。

雄英に受験するのはぼくだけではない。スイコちゃんも同じく受験する。ぼく一人だけだと心配だから、らしい。

先生からもそういう評価を下されているあたり、なんとも言い難いものがある。

なんだかんだでスイコちゃんも勉強はできるので、あんまり心配することはないだろう。

と、いうことで本番。

とは言つても筆記試験は既に終わっている——ので、実技試験

だ。尋常ではない人数がいるので、少しだけ頭の中が騒がしい。ショッピングモールのほうがまだうるさいので、このくらいはもう慣れたような気分ではある。

「わー雄英だよ雄英。ヒーローがいっぱいいるんだろなあ。ヒーローだって。あはは、ヒーローだってさ」

『狐が普段より三割増しくらいで壊れてる……』

ヒーローは嫌いなのだ。

まあ、上つ面を塗り固めるのにはもう慣れてるから、別にこれを外で出すことはないと思う。自制のできる狐なのだ。

とつてもえらい。

「雄英だー……雄英だよ雄英。知ってた？」

『うざい』

「あははっ、スーちゃんつたら辛辣う」

『お母さんを思い出すからその呼び方やめて』

辛辣だ。

そんな話をしながら、試験の説明を受けに校内に入る。連番であるのでスイコちゃんとは隣同士だ。自分の指定の席に座り、置かれてあったプリントを見る。試験内容と、自分の試験内容が書かれていた。スイコちゃんの持っているものと比較すると、試験会場が違うだけであとはほとんど同じらしい。

「わくわくするねえ。みんな緊張してるっばいよ？」

『そりゃあ一世一代の試験だもんな。留年生はいるの？』

「いるんじゃないかなあ。人多すぎるしわかんないけど」

そう話していると、人も揃ったのか壇上に一人の男が立つ。

行われるのは試験内容の解説。制限時間は十分で、『**仮想敵**』サイランという、今回のまはそれぞれ3種類。そのどれもにポイントが用意されており、仮想敵を行動不能にするとポイントが獲得できるという仕組み。

プリントには4種類の敵が載っているが——それはあくまでもお邪魔要員として載せられており、各会場に一体しか存在しない。

0ポイントの仮想敵。

こいつを狙うことは無駄でしかない行為である、ということ解説された。

『……このお邪魔、なんで存在してるんだらう』

「邪魔だから存在してるんじゃないかなあ」

◇

スイコちゃんと別々の試験会場に分かれる。

到着した試験会場を見て、あんまりの広さにぼくにとしては珍しく固まってしまった。きよろきよろと辺りを見回すと、そこそこの市街地として完成した場所であることが伺える。

なるほど、でかい——と思うが、試験会場と思わなければそうでもないので、とりあえずの落ち着きを得た。

『はいスタートー!』

と、そうして焦っていたからか。

その言葉に、瞬時に反応できなかった。

『どうしたあ!? 実戦じゃカウントなんざねえんだよ!! 走れ走れえ!! 賽は投げられてんぞ?!』

開始前から動いていいぶん実戦と試験じゃかなり変わると思うんだけどなあ。

そういうツツコミはなしにしておく。ともあれ、開始の合図は呑み込めた——個性を発動し、身体強化をする。そこそこの倍率でいいだろう。

どうせ試験ででてくる敵なんて、大したものじゃない。

そう思っ、走り出した——しかし、せつかくの的が奪われそう。これはいけない。一先ず足の倍率を最大まで跳ね上げた。そして、軽く地面を蹴る。

それだけで瞬間的に加速し、狙われかけていた2ポイント仮想敵にひつつけた。あとはやることは変わらない。軽く足で蹴ってやれば、

それだけで機械はかんたんに壊れた。

情報戦というか——索敵が早いほうがいいのだろう。せつかくだ。

強化した足で、今度は垂直に飛ぶ——それでビルの屋上へと登り、周囲を見渡した。

開始位置近くは混戦地帯になっている。遠くのほうではまだ人の手が進んでいないが——しかし、奥にいくよりはビルなどが邪魔で向かいづらい場所に向かったほうがいいだろう。

そう考えて、ビルから飛び降りる——途中、窓枠に指を引っ掛け減速しながら、六階付近までの高さからノンストップで降りる。

ついでに近くにいた3ポイント仮想敵を踏み壊し、これで合計5ポイント。

「うわっ、なんだあ!？」

「あー、ごめん。人いたんだね」

「いや、それはいいんだけどよ……お前今上から降ってこなかったか!?! 大丈夫かよ!?!」

「あーうん。全然平気だよー!」

「お、おう……」

じゃあね、と手を振って、次の敵を探す。

せつかくなので、倒した3ポイント敵の脚を引っ剥がして持っていることにする。これで遠距離攻撃手段の確保だ。

投げられる鉄の塊となると、当然強いに決まってるのだ。しかしそこそこな重さがある。

少しだけ腕の強化倍率を引き上げ、道中に2体ほどいるまだ退治されてない仮想敵を発見した。とりあえず、的が大きい3ポイントに腕を投げつけて、小さい的の1ポイントを蹴り碎く。

これで9ポイント。

どのくらいがボーダーになるのかわからないけど、少なくとも最低でも50はあったほうがいいだろう。50を狙っていいこうか。

周りに人が多い——手奥から顔を出した1ポイント敵を走って捕まえ、その頭をもいだ。

これで2つの弾を確保。ここから目指すのは、試験会場の奥のほうだ。

そちらのほうに、大量の仮想敵がいるのは先程確認した。そこまで到達している生徒もまだ少ない。大量にいる中で、5、6人ほどしかそこにいないのなら——そちらが狙い目になる。

走って、奥へと向かう。その最中で、苦戦していると思わしき仮想的を蹴り壊しながら進む。

「よいさっ」

「うおおクソはええ狐っ娘!？」

「ぴーす」

「お、おうピース……」

「それではさよならっ!」

『なんだあの子』

冷静に心の中で突っ込まれた気がする。

ともあれ、ぼくからしたらどれも変わらないように思うが、3ポイントはどうも強さが変わっているようだ。ぼくのようにどれも一律かんたんに倒せるようになってないと厳しいのではないだろうか。

ともあれ、いまので13ポイント。いい調子だ。うまい具合に入り組んでいるこの試験会場は、動きづらい位置にいくらかの仮想敵がセツトされている。

そういうやつらは、ぼくのように機動力に優れている個性持ちからすれば狙い所にある——たとえば、入り組んだ裏路地で頭だけ出している敵などを、機動力を生かして、ノンストップで破壊する。今は1ポイントか。これで14ポイント。

壁キックで再びビルの屋上に登る——少し遠くの位置にいる、ノーマークの3ポイント敵を持っていた残骸を投げつけ破壊する。

これで17ポイントだ——残り33ポイント。

まだ少し遠くにいる3ポイント仮想敵を壊し、これで20ポイントになる。

残り30ポイント……かなり楽なように思える。まだ開始なから二分しか経っていない。この調子なら全然いける。

よし、次だ。誰もいない空白の場所を見つけた。そこには、……だいたいの合計12ポイントほどの敵がいる。だいたい目星は付いたから、足の強化値を最大まであげ、飛んだ。

試験会場の端から、ビルを伝って跳躍していく。向かう先は先程の地点。そこならば、人はいない。

——着地した。

ビルからそのまま飛び降りたので、着地で足を痛めた。しかしその瞬間、治癒を発動して痛みをすぐにぼやかす。傷が治ったのだから全然問題なく動けるだろう。

今はだれもない空間。ぼくだけが独占している空間だ。突っ込んでくる1ポイント敵を、少し体をずらして、蹴る。ぼくの身長的に、とんでもなく足をあげないと頭までは届かないのだが、それはそんなに課題にならない。体が硬い、という感覚がないのだから。

全開まで開脚し、頭を破碎して、1ポイントの敵を右肩に担いだ。砲台の完成だ。向かってくる1ポイント敵を、左手で頭をもぎとり、それを投げる。2ポイント確保。合計22。

そして、担いだ1ポイントを投げた——少しだけ力を込めて投げたら、木っ端微塵に碎け散る。いまのが3ポイントなので、合計25。ついでに左手に持った頭を投げ、2ポイントを破壊。27ポイント。

あとは5ポイント——2ポイントが2、1ポイントの合計3。踏み込んで、2ポイントの頭を掴む。

そして持ち上げた。振り上げた2ポイントを、1ポイントへと叩きつけ、体を回して次の2ポイントを狙う。投げた。

粉々に碎け散った——巾のようにきれいな粉々さではないけれど、まあポイント獲得は獲得だ。

現在、32ポイント。

制限時間残り七分。



制限時間残り六分。50ポイントを早々に獲得したはいいが、人通りの多いところに行つて声を聞いたところ、45ポイントを獲得している男子がいるのを知った。もう少し確保しておくべきか悩んで……やめた。

彼がいた場所は混戦地帯なので、このポイントを追い越さないだろうと推測できる。

周囲を見渡せば、意外と得点を取れてない生徒もいる。急いでここまで取らなくてよかつたな、と思いながら、これ以上得点は必要ないので、ビルの屋上から下を見下ろす。

ちようど、混戦地帯の真上。

そこでぼくは人ががんばっている姿を見る。

——残り、一分。

「うわあ、壮観」

とんでもなくデカイ仮想敵が出現した。

——0ポイントだろう。

ビルを破壊して進んでくる。ぼくが座っていたビルもかんたんに引き倒していくので、危ない。とりあえず隣のビルに飛んで回避する。

「どうなるのかな……」

人は散り散りに逃げ去っていて、これはもう全員これ以上の得点を期待できないだろう。0ポイントが塞いでいるのが、ぼくが狩場としていた奥のほうだ。向こうに行くのが難しい以上、これは得点も頭打ちだ。

そう思って、成り行きを見守っていた。そう、ぼくは一切目を離していなかった。だから見逃したということはありません。けど、だけど。

——0ポイント 敵が、崩壊した。

空に小粒ほどに浮かんでいる姿がある。男子生徒のようだ。おそらく、それがあれを破壊したのだろう。しかしぼくにはその姿が見えなかった。——0ポイント敵を壊すその動きも、一切。

「……………」

ビルを飛び降りる。ちらりと見ると、その男子生徒が倒れている姿を見つけられる。

残り時間は……二十秒ほどもない。

「ぐっ……づづづづづづうううう……せめて……1ポイントでも……!!」

腕と足が破裂するように折れているその少年を見る。治癒を掛けるべきか。しかし時間はない。いや、迷っている場合だろうか。ぼくは治癒を掛ける。

腕と足が治ったことに困惑している彼は、はっとぼくのほうを見た。手を振っておく。

「……っ！　ありがとう！」

と、言つて、彼は走り出そうとした——そのタイミングで、

『終了——!!』

終わりの合図が告げられた。

「……………あ」

やっぱり駄目だったか。そう思いながら、ぼくは声を掛けるべきか迷う。

呆然と佇む彼に、結局ぼくは声を掛けなかった。

第16話

「いやあ——やっぱり今年は豊作だ！」

雄英高校の校長である根津がそう言った——ヒーロー・ミッドナイトは再生されている動画を見て、思う。

——あの少女は、いったいなんなのか、と。

死体を意味する名を嬉しそうに名乗る彼女が実は中学生だったと知ったのは少し前。久しぶりに会って、そう聞かされた。年齢詐欺にもほどがあるだろうとは思ったが、顔はたしかに幼いのだ。

精神面も、ときおり見せるぼわんぼわんとした姿は年相応であると言って問題ない。

とはいえ——さすがに戦い慣れているし、個性も尋常ではない。彼女が知っている彼女はほんわかとして、尻尾に感情がとても表れて、特定の人物の話をしているときに普段の無表情が嘘のようにへんにやりと崩れるような、かわいらしい姿だ。

まるで遊び感覚で、あくまでお邪魔と見たとしても一切の躊躇なく——その顔面を叩き壊す行為は、そんな彼女を知っているぶん、少しだけそのギャップに困惑させられる。

「開始から三分で50ポイントを稼ぎ、そこから静観……ねえ」

「実力はたしかにあるんだろうが……あれじゃあさすがに手を抜きすぎな気がするんだが」

「……いや、しかしそれも別の側面から見れば正しい行動だろう」

少なくとも、壊しやすい設計であるとはいえ、さも当たり前のように巨大な——それこそ身長以上のサイズの鉄の塊を、あっさり引き裂くその姿。

ここだけ見れば増強型の個性だ。それも、かなりレベルの高いもの。ふと見せた跳躍に関してなど、オールマイトにすら匹敵するかもしれないほど。

それほど強力なのだから、それ特化であるとしても十分すぎるほどだ。しかし、最後に彼女が見せた——

「——治癒。あくまで回復要員として見たとき、あの行動は最適以

外の何物でもない」

「……たしかに。最低限自分の点数は稼いでおいて、あとは重傷者をすぐに癒せるように周囲を見張りつつ、リソースの温存……回復役の立ち回りとしては最高だ」

そう。

彼女は、両足と片腕をボロボロに壊した少年の傷を一瞬で治してみせた。回復役としての性能も超一流のそれ。

純粹に、強すぎる。

「本人の強さも置いておいて、この回復についてはかなり将来性のある個性だよな！」

「しかし……あれだけの回復能力を見せるとなると、あの身体能力は素である、となりませんか？」

「そこは謎だね……本人からの個性届には『妖狐』と書かれているけど、あの耳と尻尾が関係するのかな？ なにはともあれ、僕はちよつと親近感を感じるよ！」

「妖狐……？ ……詳細がわかりませんね。しかし少なくとも、いくつかの個性が統合されているような状態なのは間違いないでしょう。……強すぎる」

たしかに個性については謎だ。少なくとも増強系の個性と、治癒系の個性が混ざり合っているのは間違いないだろうが……『妖狐』だと、それ以外にもなにかできるような気がする。

今度聞いてみようか、とミッドナイトは考えた。

「この子に関しては文句なしの合格でいいよね！ それだけの実力はある！」

「……まあ、落とすほうが難しいでしょう」

「しかし今回は難しくないですか？ 合否判定——現在の候補が四十二人。こうなると、選別も厳しいでしょう」

「あれ？ 言っただけじゃなかったっけ。今年のヒーロー科定員は一クラス二十一人だよ」

「あー……すみません、忘れてました」

「うん。一人くらいは増やせそうだったからね。奇数になるし望まし

くはないんだけど……それでも、今年は特に優秀だったからね。増やして正解だったよ」

「じゃあ、これで合格者はもう決定ってわけですね」

うん、と言つて、根津は少女の名前と共に、合格を告げる。

「死染妖狐——合格！」

◇

「ん」

「ん」

弔の呼びかけに、醤油を渡す。作った目玉焼きにそれを垂らし、ぼくに返してきたそれを元の場所に戻す。

「熟年夫婦か!!」

『ばかにい父うるさい。リーダーと狐の夫婦感は今に始まったことじゃないでしょ』

「いや……でも……俺の心がそう叫べて……」

「チャージ、ごはん中だし叫ばないで」

「あっはい」

今回は普段のバーでなく、先生が用意した家にいる。二つ部屋を隣同士にとつてくれたので、親子もいつも食事に交ざりにくるのだ。

時々黒霧もやってくる。

「……雄英の合格発表今日だろ。自信はあるか？」

「うん！ ばっちり」

「お前がそういうと少し信用できないな」

しつぽを撫でる弔の手に、されるがままになりつつぽくも腕に手をつけた。

「……料理、上手くなったか？」

「え？ そう？ ……えへへ、そうだといいなあ」

『滲み出るリア充オーラ』

「非リアには眩しいぜ……！」

「……お前らはなにを言っているんだ？」

「いやリーダー。あんたらやってること夫婦のノリじゃん眩しいなあ……」

「いやこれくらい普通だろ。別に騒がれるほどでもない」

「うーん価値観の相違」

『……リーダー、狐の顔』

弔がこちらを向いた。
にばー。

「今日も元気だな」

「元気が一番なのです」

『完全にメスの顔してる』

「女の子がそんな言葉遣いすんなよ……」

『でも今更修正不可能じゃない?』

「それもそうか」

弔がしっぽを撫でる——指が毛を梳く感覚が、とても心地良い。
そのとき、ワープゲートが開いた。

「死柄木弔。雄英から手紙が届いていますが……」

「適当に置いとけ」

「はい。……しかし、もう完璧に相思相愛じゃないですか」

「は? 何言ってるんだオマエ。次戯けたこと抜かしたら粉々にする」

「相思相愛じゃないですか」

「よっしわかった崩れろ」

弔が立ち上がった。しかしワープゲートで防御している黒霧には、そのすべてを透かされる。

「……チツ」

「あの、流石に怒り過ぎでは……」

「別に怒ってねえよ」

弔は、ぼくを少し抱き上げ、自分の股の間に置いた。すっぽり腕に包まれる感じになる。

「ごうん」

『まーた狐ポンコツ化した』

「こおんだろ普通」

「ぼくはこれがデフォなのです」

頭の上にはちょうど、弔の顎が乗る感じになる。耳に触れる息が少しくすぐつたい。

弔が、少し残っていた食事を摘んでぼくの口元に差し出した。

「あむ」

「最近ちよつと量多くないか？」

「……んっ、そうかなあ……配分わかんなくなってるのかも」

「いや、すまん。俺が食わないだけかもしれない」

弔が頬を撫でる。そこから、少し摘んで伸ばす。むにーつとぼくの頬はよく伸びた。

「……んで、雄英からの手紙だったか？ 合格通知だろ」

「……ん、あ、二つある。こつちがスイコちゃんのぶんかな」

『ん、ありがとう』

中から機械のようなものを取り出し、ぼくはそれを起動した。かすかに起動音がした後、空間に映像が投影され、現れたのは――

『私が投影された！』

弔の腕が映像のオールマイトを掠めた。

「……クソが」

「ちよつと落ち着いて」

『いやあ、私がここにいる理由なんだが、雄英に勤めることになったからなんだ』

「……ほら。これ、いい情報でしょ」

「……たしかにな」

雄英にオールマイトがきたということは、殺す機会ができたということだ。一点に留まってくれるというのならばなによりも楽。世界中をあちらこちらへと縦横無尽に移動するのが面倒だったのであって、確実に喧嘩を売れる場所ができたということは、こちらも万全の準備をして戦うことができる。

『死染君は筆記・実技ともに好成績だ！ 特に実技。たった三分で50ポイントを集める実力。両足が折れ、動けない少年を助けたというその実績！ その2ポイントで、ヒーローとして十分な素質を持っていると判断した！』

「的外れなこといいやがって。なあ？」

「とむらあ、なんですごい抱きしめてきてるの？」

「つと、すまん。ちよつと手に力が入った」

「別にいいよ」

しかし——ぼくがヒーローか。

それとは正反対の存在なのに。たしかに、言われてみると少しだけおもしろい。ヒーローとして十分な素質？

ぼくはもうどうしようもない人殺しだというのに。

『雄英は敵 ヴァイラン ポイントだけでなく、もう一つ見ていたものがある。それは救助活動 レスキュー ポイント！ ラストの治癒で加点され——敵 ヴァイラン ポイント50、救助活動ポイント75！ これは二位の成績だぞ！ ——死染妖狐、合格だ！』

「合格だとよ」

それを聞き終え、弔は機械を破壊した。

「——はは、はははははははははは!! 面白いなあ、面白いなあ！

なあ?! 雄英は間抜けか?! あつさり ヴァイラン と敵の侵入を許してんじや

ねえか！ は、ははは、はははははは！ 最高の気分だ!!」

「んにゅ」

「これだけおもしろいことはないよなあ！ よくやった！ よくやったよ！ 最高だ！ 最高だ！ これで——この社会を、盛大にぶち壊せるだろう！」

「……むぎゅ」

弔が、笑いながらぼくの頭を撫でる。久しぶりにこんなふう ふう に笑っているのを見た気がする。抱きしめられ、少しだけ潰されるようになるながら、ぼくはこくりと頷いた。

「黒霧」

「なんでしよう」

「折角だ。仲間探しを頼む。良さげなやつを見つけたら連れてこい。オールマイトをぶち殺せるチャンスがあるとでも言えば釣れるだろ」
「わかりました」

「茶味」

「はーい？」

「黒霧の補佐だ。お前の戦闘力はよくわかってる。準備は早いほうがいい。弾を作っておけ」

「あいよ！ 幾つくらいだ？」

「持ち運べるだけありったけだ」

「了解！」

「ああ、あと。お前の言う母親に協力してもらえないかどうかを頼んでくれ」

弔のその言葉に、露骨にチャージは嫌そうな顔をした。

弔がそれを見て、少し考える。

「……無理そうなら別にいい」

「いや、無理じゃねえ。無理じゃねえんだけど……リーダー、大丈夫か？ あれの本気とか俺は絶対見たくないぞ。直視したら気が狂う」

「いいじゃねえか。見たら発狂、なんとも敵らしいだろ？」

「……まあ、リーダーからお願いだ。別にいいよ」

弔が立ち上がる。ぼくはその場に残された。

「先生、それでいいだろ？ あの平和の象徴をぶち壊せる可能性ができた」

『……良い。良いよ、弔。とてもいい判断だ。生徒を巻き込めばヒーローであり教育者である以上、奴の動きを抑制できる。僕からも餞別を用意しよう。それで』

——平和の象徴を、削ぐ。

先生は笑ってそういった。

◇

「そういえば弔、ちよつとびっくりしたんだけどね」

「ん？ なんだ？」

「オールマイトみたいなパワーを持った生徒が受験生にいたよ。これ
どう思う？」

「……………先生」

『……………そうか。ふふふ、ふふふふふ……………その生徒もなるべく優先して
いいね。オールマイトと、その生徒。それを狙って挑むことにしよ
う』

弔はぼくの頭をなでた。にこりと残酷に微笑んで、そして背中を叩
く。

「いい情報だ。この調子で——入学してからも頼むぞ」

「……………えへへへ」

頼りにされている、ということは毒だ。ぼくは弔がお願いするんな
らなんだってできるけど、そういうふうに言われちゃあ頑張りたくな
る。ずるい。

ぼくは笑って、こくりと頷いた。

『……………そういえば、わたしも合格だったり』

「なんだ、二人とも合格か……………これは……………いいな。本当に」

『狐の暴走を止めるのは任せてちょうだいぶいぶい』

「ちよつ!?! ぼくがよく暴走するみたいな言い方じゃん。酷いよそれ
は」

「……………まあ、あんまり的外れじゃないけどな。よろしく頼むぜ、こいつ
のこととか」

『任せてちょうだい』

ある程度の方針は固まった。

ぼくたちは虎視眈々と機会を伺う——平和の象徴を退場させる
準備を水面下で整えながら、

ぼくの雄英高校入学が決定した。

第17話

今日は入学式。

ぼくは着替えを終え、出かける準備を終えようとしていた。かばんの用意はしてある。ひとまず、必要なぶんのいろいろなものを詰め込んでおいた。服はもう制服だ。似合うか聞いたら「そこそこ」とのこと。

家を出て、スイコちゃんと合流しそこからいろいろを乗り継ぎ、雄英高校に到着。あまりの広さに迷子になりそうになりながら、自分のクラスへと向かう。

そういえば、スイコちゃんとはクラスが分かれた。スイコちゃんが1―B、ぼくが1―Aだ。ぼくと違ってそこそこおとなしめだったらしいので、そのくらいの点数は当たり前かなあ、といった感想である。ともあれ、ぼくは教室に到着した。大きな扉を開くと、こちらを向くのは多くの瞳。それに臆さずにてけてけと、自分の席はどこかと探した。

席は指定されていた。とりあえず自分の席に座り、かばんを置く――どうしていいのかわからなかったので、とりあえず自分の足元に置いておくことにする。

……暇だ。せっかくなので、心の声でも聞いて遊ぼうと思ったが、それはそれで煩わしいのですべてを無視することにする。

心の声を無視するのにも慣れてきた。昔のおぼつかなさが嘘のようだ。とりあえず、机に顔をくつつけた。眠くはない。眠くはないが……どこことなく退屈。

退屈なのだ。

と、思っていたらとてとてとこちらに向かってくる姿があった。

「俺は市立聡明中学の飯田天哉だ」

「よろしくー。んーと……死染妖狐。気軽にジョンとかって呼んでね。たしか試験会場一緒だったよね？ ああの速い人だ」

「君はあの、腕を治療した人なのだろう？ 君ならば合格するのも納得だ。これからよろしく頼む」

「うんうん。よろしくね」

「こちらこそ」

「よろしくね」

「ああ、こちらも……って何回やるんだこのやりとり!？」

よろしくねは相手が打ち切らない限り続くものだと思ってた。

手持ち無沙汰にしっぱを撫でる。

時間を見ると、まだまだ余っている。少し早く来すぎたかなあと
思いつつ、耳をぴこぴこ動かし遊んだ。

てしてし。しっぱがゆらゆら揺れる。

がらりと扉が開かれた。

「……………」

入ってきたのは、目つきの悪い一人の男子。入学初日だというのに
制服を着崩している。雑に扉を閉めて、彼は自分の机へと向かって
いった。

そのまま椅子を引き、机に足を乗せた。

「——ちよつ、君!」

「あア?」

「机に足をかけるな! 雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと
思わないか!？」

「思わねーよてめーどこ中だよ端役が!」

……これはこれは、なんともヒーローとは思えない言動だ。

ひよつとするとぼくと同じような形で、敵がツイン潜入しているのかも
しれない。そうだったら仲良くできそうだ。棘のある性格も、弔が
怒ったときと考えれば途端にかわいらしく見えてくる。

「ぼ……俺は市立聡明中学出身、飯田天哉だ」

「聡明——!? クソエリートじゃねえかぶつ殺し甲斐がありそうだ
な」

「君酷いな!?! 本当にヒーロー志望か!?!」

うん。

これは間違いなくぼくたちの仲間だ。適当に話してみて、場合に
よっては協力関係に持ち込めるかもしれない。

軽く探ってみるべきだろう。ひとまずぼくは彼を同盟相手予備として記憶しておく。

「お友達ごっこしたいなら他所へ行け」

ぬつ、と。

扉の向こうにだれかがいるのを見て、ぼくは少しだけ目を疑った――疑うほどの視力ではないのだけれど、それでも目を疑った。くつきりと見えているが疑った。

「ここはヒーロー科だぞ」

寝袋のままゆっくり起き上がる。邪魔だったのか、寝袋を脱ぎ捨てながら立ち上がった。

誰だろう。生徒であるとは思えないが、と思って、ならば先生だろうと推測できることに気づく。

「はい、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠くね」

その言葉でぼくの推測は確実なものになった。さすがぼく。ポンコツだポンコツだと最近ずつと言われているが、少なくとも馬鹿みたいに偏差値の高い高校に合格しただけあってそれほど頭は悪くない。つまり、ポンコツじゃない。

「担任の相澤消太だ、よろしくね」

担任らしい。……そういえば、先程一息で十秒チャージを啜り上げたような気がする。

睡さんが昔言ってたのはこの人だろうか？ たしかに、見た目は不健康そうなものだ。睡さんの懸念も理解できる。

しかし、先生である以上はしっかりと活動できるだけのエネルギーは配分しているのだろう。だとするとあんまり心配することはないのかもしれない。

全部ぼくの素人考えだから、なんともいえない。

「早速だが」

そう言って、相澤消太と名乗った先生は寝袋からなにかを引っ張り

出した。

「体操服レを着てグラウンドに出ろ」

◇

「個性把握……テストお!」

とりあえず、体操服に着替えてグラウンドへと。言われたとおりの行動をして、そこで告げられたのは、今しがたオウムのように返されたこの言葉。

「入学式は!? ガイダンスは!?」

「ヒーローになるならそんな悠長な行事出る時間ないよ」

「ヒーロー過酷すぎだと思っう。」

「雄英は『自由』な校風が売り文句。そしてそれは『先生側』もまた然り」

たしかに、自由といえば自由だけれど……となると、睡さんのあれは自由に休暇を取って遊んでいたのだろうか? いや、あのひとに限ってそれはないと思うんだけど。

どうなのだろうか。この型破りな姿をいざ見せられると、少しばかり疑問になってくる。

「爆豪。中学の頃ソフトボール投げ何メートルだった」

「67メートル」

呼ばれて、返事をしたのは推定敵サイランの少年。

「じゃあ個性を使ってやってみろ。円から出なきや何してもいい。はよ。思いつきりな」

「……んじやまあ」

そう言っつて、ボールを受け取った彼は振りかぶり、

「死ねえ!!」

瞬間で、ボールが吹っ飛んでいった。爆風が周囲をかき乱す。ぼくの耳が風で揺らされた。

「まずは自分の最大限を知る」

相澤先生が測定器を見て、それを生徒に見えるように差し出してき

た。

「それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

「見せられたその記録は——705.2メートル。」

「だいたい1キロ。がんばったらぼくでも飛ばせそうだ。」

「なんだこれ！　　すげー面白そう！」

「705メートルってマジかよ」

「個性思いつきり使えるんだ！　　さすがヒーロー科！」

「……………面白そう、か」

あがった声の一つに、先生が反応する。

「ヒーローになる為の三年間、そんな腹づもりで過ごす気にいるのかい？　　…………よし。トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、除籍処分しよう」

爆弾を投げ込んだ。

ひよつとすると普段ぼくが投げてると言われるものよりもよっぽ

ど大きいそれを。

「生徒の如何は先生俺たちの『自由』」

ひよつとして、最下位になるかもしれない、とふと思うと、少しだけ恐ろしく感じた。

手を抜こうだなんて考えていたが……………それをしてしまうと、ひよつとして最下位になるかもしれない。

よし、本気、だそう。

「ようこそ、これが——雄英高校ヒーロー科だ」

ヒーロー科怖い。

◇

第一種目は50メートル走。

ぼくより少し前の生徒が飛んでいたのを見るに、飛ぶのはありなのだろう。だとすると、一歩で50メートルぶんを飛んでしまえば一番早いのではないだろうか。

人数が奇数な以上、二人ずつの計測の場合だれかが一人にならなけ

ればならない。その枠にぼくが入ったので、周囲の邪魔を気にせず全力で走ることができる。

「よーい」

その言葉で、一気に足の倍率を引き上げた。

「どん」

そのまま、地面を踏みしめ、そのまま前方へと体を飛ばす——そのつもりが、うっかり上方向へと体を向けすぎた。

「あーれー!?!」

予定よりも大きく飛び上がり、50メートルのラインを飛び越えてしまった。回転しながら、地面へと着地する。

「……4秒2。一応言っとくがそれ走ってないからな。立ち幅跳びの分野だぞ」

失敗しなければ、もっと早いタイムだっただろう。力の入れ方とか、もうちよつと練習するべきかなあ、と思っていると、驚いた顔でこちらを見る姿がちらほら。

「50メートルだぞ? たったの一步って……」

「というか耳と尻尾かわいい」

「あの尻尾、どうやって出してるんだろ……体操服からそのまま……つまり、ワンチャン脱げる……!?!」

「個性は回復のはず……となると素の能力だろうかしかしそれにしても強すぎるだとするとなら一つの何個も同じ個性を持っている形になるんだろうか? いやそれ強すぎないか純粹に戦闘の場面で一人いたらほとんどが解決してしまう強いなこれ」

よくわからないが、なにやら褒められているらしい。

手を振った。

振り返された。

第二種目、握力測定。

これに関してはあんまり成績が振るわなかった。というか、ぼくの個性は攻撃力だとかそういうものを引き上げているようで、これに関してはいくら鍛えても強くはならない。

記録は20。普通ならこれでもがんばってるくらいだと思うが、し

かし540キロが現れたためぼくの記録は底辺にも等しい位置であるのだった。

第三種目、立ち幅跳び。

余裕の390メートル。1キロの三分の一と考えれば、そこその記録は出せている。少なくとも本気でやればかんたんにそれくらいは出せるということだ。実戦では足場なども多いぶんこれだけ出せても無駄なのだけれど。

第四種目。反復横跳び。

これに関しては、体の扱いには慣れていているから、足がもつれないように気をつけながら、足の強化だけで終わらせた。記録は140。

第五種目、ボール投げ。

∞を出した女子がいた。正直わけがわからない。無限ってなんだ無限って。そう考えて、やってきたぼくの番。

これは適当に腕の強化倍率を引き上げ、投げた。だいたい400メートル。

「あまくみてた……」

がんばったら行ける、などと考えた自分を殴りたい。かなり恥ずかしい勘違いじゃないか。

列に戻ると、速い人——飯田君が、こちらにやあと声を掛けた。

「順調な成績じゃないか！ 君の個性は『治療』じゃないのか!」

「あはは、違うよう？ あれはあくまで個性の応用……とっていいのかわからないけど、応用みたいなもの。応用ばかり使っちゃっていつの間にか治療が基礎みたいになってるけどね」

「む……応用で治療ができる個性か。見た感じ、増強型なのだろう？ どのように応用したら治療ができるのかわからないのだが」

「かんたんだよ？ 増強型っていつでも、ぼくのはちよつと特殊だからね。他のひとと事情は違うんだけど」

「その効力か？ そういえば、握力はふるわなかったな」

「そう。ぼくの個性、生命力を消費するんだけどねー。それを使って、魔法みたいに発動させるの。ゲームという戦闘中に使う強化わざ。積み技ってやつかな？」

「……なるほど。君は生命力を他人に分け与えることで治癒をしてる、ということか!」

「んー。わかんない」

「……違うのか?」

「いや、なんで治癒できるのとかわかんない。ぼくはなんとなくそれができる。できると思っただからできた、っていうのが正しいかんじで、たぶんあんまり理論なんて意味がないんだよ」

「そんな無茶苦茶な……おっと、次は緑谷君か。彼はこのままだと不味いぞ……?」

「つたりめーだ無個性のザコだぞ!」

「ここで、すぐ側にいた敵 サイラン 仲間の少年が交ぎってきた。

「無個性!?! 彼が入試時になにを成したのか知らんのか!?!」
「は?」

「それはそうと、飯田くんこのひとの名前なに?」

「爆豪君と呼ばれていた」

「爆豪勝己だクソ耳! 知つとけ!」

「知つとけもなにも自己紹介されてないもん」

「うるせえわ察しろ!」

「こうんこうん」

「急に媚びるな」

「あおーんわんわんにやーん」

「お前狐だろうが! てか統一しろ!」

「飯田くん、このひとひよつとしたらしい人かもしれない」

「しつかりツツコむんだな……すまない爆豪君! 君を誤解していた!」

「うるさいぞそこ」

先生から注意された。

緑谷、と呼ばれた少年が、ボールを振りかぶった。

「46メートル」

「——!?! な……今、たしかに使おうって……」

「個性を消した」

こともなげに、あるいは気怠げに。

相澤先生は、その髪を逆立てて言い切った。

「まったく——つくづくあの入試は合理性に欠くよ。おまえのような奴も入学できてしまう」

「消した……!? あのゴーグル……そうか！ 抹消ヒーロー・イレイザーヘッド！」

……個性を消す個性。

つまり、弔を一般人と同じレベルまで格下げしてしまう能力。それはこの社会において、とんでもないメタを張れる能力だ、と一瞬で悟った。

この社会において、個性を消すというのは強制的な殴り合いを用意できるということだ。それを考えると、強すぎる。

……素の能力がずば抜けているモノを使わないと、だめだろう。

「指導を受けていたようだが」

「除籍宣告だろ」

耳がいいので、前後のやりとりもすべて聞こえていたが……しかし、除籍宣告というのは正しい。実際にそのとおりだ。

緑谷くんは振りかぶった。

「——見込み」

しかし——その個性を発動するタイミングが、違う。

「ゼロ……」

今回は、全力でありつつ、また別——指への発動。

「——!?!」

指一本を破壊するのと引き換えに、その一投は尋常ではない破壊力を叩き出した。

「……先生……! ——まだ動けます」

それが明らかに、オールマイトのような威力と例えられるものだとするのはぼくでもわかった。だからこそ、思う。

——危険だ、と。

弔には警戒度を上げるように伝えないといけない。この敵は、全身をボロボロにしても尚立ち上がる。何度でも這い上がって、倒すべき

敵を確実に地獄へと引きずり込む。それまでは絶対に死なない、と、
そう断言できるような、
そういう、恐怖されるべき存在だ。

◇

すべての種目が終わったあと。

「んじやぱぱと結果発表。トータルは単純に各種目の評点を合計した数だ。口頭で説明するのは時間の無駄なので一括開示する」
そこまで言って、先生は機械を操作。

「ちなみに除籍は嘘な」

「んにやっ!?!」

ぼくは思わず声をあげた。

「君等の最大限を引き出す、合理的虚偽」

嘘だあ。

「あんなの嘘に決まってるじゃない……ちよつと考えればわかりますわ……」

嘘だあ。

「そゆこと」

嘘だあ。

ぼくに嘘は通用しないんだぞ。

先生が超本気であったのは、なによりもはつきりぼくがわかってい
る。心の中を覗いたからだ。そこでは、本気で緑谷くんを落とすつも
りだった。

となると初っ端から人数が減って20人になるところだったのか
……と考えたところで、

「死染」

先生に名前を呼ばれた。なにか、と問い返す。

「緑谷の傷治してやれ。できればいい。一応保健室利用書も書いて

るからな」

「やれます」

「じゃあ頼む。明日からもっと過酷な訓練の目白押しだ」

そう言っつて、先生は去っていった。

緑谷くんの傷を手早く治して、釈然としない思いのまま身体測定は終わっていった。

第18話

最低限の栄養補給に用意した食事と、嗜好品として楽しむために食堂でかんたん定食を購入。

席取りは任せていた。こちらに向かって手を振る姿がある。そのほうへと向かってみると、スイコちゃんがいた。

「席ありがとー」

『狐はポンコツだからわたしに気づかないかもと思ってた』

「最近ちよつとぼくのことなめすぎじゃない？」

『そう取られる態度なのが悪いんだよなあー……それはそれとして、午後はヒーロー基礎学だね』

「あー、うん。B組もそうなんだ」

『さすがにヒーロー科は共通させてると思うよ。合同授業とかの関係もあるし』

そう言つて、スイコちゃんは白米を口に放り込んだ。うまい、と呟いて、野菜炒めを箸で捕獲する。

ぼくは生命力確保に作った人肉のハンバーグを一口で頬張り、飲み込んでから定食のほうに手をつけた。

『携帯食料はまだできてないんだっけ？』

「うん。おやつみたいな感じにするのにはまだちよつと足りないっぽい。ドクターも、そういう方面が得意なわけじゃないし……それにしてもそこそこはできるのがすごいけど」

ドクターは天才だ。自分の分野でないこともそれなりにやってのけられるほどの実力がある。だからといって、まったく未体験の分野を始めるには少しだけ時間がかかる。

これをあつさりやられるようだったら天才すぎるし才能に嫉妬するから、ドクターもそれなりにできないことがあってよかった。

それでもぼくなんか凌駕しているのだが。

「ヒーロー基礎学、スイコちゃんは どうする？」

『ん？ あー……全力だと人が死ぬし、さすがに抑えてやるよ』

「本気を出したら人が死ぬって……どんな感じ？」

『お母さんの個性を1としたら1000くらいの狂気を見たものに付与する』

「発狂死確実なんだけど」

……そういえば、この間チャージの必死の説得で母親が仲間に加わった。雄英襲撃作戦は順調に進行している。

弔も珍しく本気で、最近は戦闘勘を磨くために本気のチャージと死なない程度に殴り合っている。

チャージ、あれでも脆いだけで強いのだ。

少なからず、鉄球に溜め込んで余剰だったぶんのエネルギーを体の中に蓄えているらしいから、ただのパンチでも腹を抉り、人を殺すことができる程度に凶悪だ。

そんな本気のパンチを何発も受けて笑っているのが弔になる。

さすがに何度か治癒をしているが、しかしチャージの本気を三発は生身で耐えられるあたり弔は順調に強くなっている。

まあ、それは当然なのだけど。

なんせ未来の王だ。殺す気ならば一瞬で勝てるだろう。無個性の状態で戦って、尚チャージと互角だと、そのことがはつきりわかる。

ちなみに、エネルギーの無駄撃ちではない。弔に殴られたぶんの衝撃を蓄えているらしいので、最初とエネルギー残量はほとんど変わっていないらしい。

基本的に、吸収のほう効率がいいらしいので、わりとすぐに溜まるとは本人曰くだ。あんまり強すぎると溜め込めないが、幸いそこまで強すぎないため、吸収しきれる威力とのこと。

ちなみに強すぎる攻撃を受けようとすると吸収しすぎて死ぬらしい。なので火力の高い相手はそのまま食らうしかないだとか。

「なんでそこまで強化されてるの？」

『んー……かんたんな話、先祖返りが正しい感じかなあ。突然変異にも似てるけど、正しい表現はそっち。とんでもなく扱いづらくてさー、まともに使えるようになったのは最近』

「そういえば、髪が蒼くなったのはなんで？」

『先祖返り。というか、なんとというか——くすみをとれた、というの

かな。こつちがほんとの姿だよ』

「そうだったんだ。その髪、ぶよぶよで気持ちいいよねえ。枕にちよ
うどいいんだ。ペによんってしてうとうとしちゃ」

『おい』

ぼくがそう言うと、スイコちゃんは怒りを露わにする。

『わたしそれ知らないぞ。いつやった。吐け』

◇

午後の授業の始まりである。スイコちゃんに怒られたあと、教室に
戻ってから机でしくしくとすすり泣く。ちよつとだけ個性を開放し
ていたのだろう。尋常じゃなく怖かった。

こんな感覚を覚えたのは——先生と初めて会ったとき以来か。
それとはまた別のベクトルだろうが、なんだかとても恐ろしかった。
さらに驚くべきことなのが、周囲はまったく気に留めなかったとこ
ろだ——ぼくにだけ個性の効果が作用していたのだろう。それだ
け細かい個性制御なのだろうか。

ともあれ、午後の始まりだ——涙を引っ込め、先生の到来を待つ。

「わーたーしーがー!!」

その声を聞いてすべてのやる気がなくなった。

いや、そんなのはもちろん表皮には出さないのだけれど。

「普通にドアから来た!」

嫌いだ。

と、そういうのはあくまでぼくの感想でしかないわけで、周囲から
してはすごい人認定らしい。

そりゃあそうか、と思い、ひとまずぼくの個人の感情をリセットす
る。オールマイトを好いていることのほうが自然なのだろう。なら
ばぼくはそれを演じる。

そう、オールマイトを尊敬している。ぼくはオールマイトを尊敬し

ている。

駄目だ、むり。ぼくオールマイトきらい。

……そうとは言っていられないので、それを表皮に出さないようにする。幸い表情が動きづらい。しっぽにさえ気をつければ問題ないはずだ。

「ヒーロー基礎学！ ヒーローの素地をつくる為様々な訓練を行う科目だ！」

と、言つてオールマイトは札をぼくたちに見せる。

「早速だが今日はこれ！ 戦闘訓練!!」

——なるほど。

手加減できるか不安になるが、そこらへんはまあ、大丈夫だろう。しかし奇数だが、どう分配するつもりなんだろうか。

「そしてそいつに伴つて……こちら！」

教室の壁が動きはじめた。そこからゆっくりと、なにかが引き出されていく。

「入学前に送ってもらった『個性届』と『要望』に沿つてあつらえた、コスチューム戦闘服!!」

「おおお!!」

周囲から歓声があがった。

「着替えたら順次グラウンド・βに集まるんだ！」

「はーい!!」

そう言い残して、オールマイトが出ていった。全員がコスチュームをとりにつたのに、少し遅れてぼくは自分のコスチュームを持つ。向かったのは更衣室だ。昨日体操服に着替えるのに使った場所。女子の団体とともに移動し、ぼくはコスチュームを取り出した。

「ねえねえ、えーと……妖狐？ でいいんだよね？」

「あ、うん。えーと……」

「ウチ、耳郎響香。好きに呼んで」

「うん。響香ちゃん。なにかかな？」

「いや、ちよつとどんなコスチュームか気になって。ほとんど素のままでもいいんじゃないかなって思うし」

「こんなの」

ぼくは広げたコスチュームを体にかぶせるように浮かべた。

「……………なんで腕が付いてるの?」

「ちよつとやる気になれるのです」

「ヒーロー向きっぽくないし外しておいたほうがいいと思う」

「あれ、そう? ん……………じゃあ退けとくね」

と、言っただけはコスチュームの飾りである腕を取り外した。あくまでアクセサリのようなものであるから、すぐに取り除けるように設計してもらっている。

服を脱いで、手早くスーツを着た。それですこし動いてみて、どうだと響香ちゃんのほうを向く。

へー、と言っただけ。
「すごい似合ってるじゃん。やっぱりこれ、とても薄いけど近接戦を意識してる?」

「ビジュアル面には疎いけど戦闘面では強いのです。ぼくは特に暑いところに弱いので、うまく熱を逃がすようにできる設計なのですよ」
「耐久度も高そうだね。結構びつちりな感じだけどそれもわざと?」

「体にくっつくほうがなびいたりしなくて便利なので。ちよつとした重心の動きも変わったたりするからねー」

「うわあ……………そこまでガチで考えてるのね」

「しっぽのところが耐久性が弱点かなあ」

「まあ、それは仕方ないね」

ぼくのコスチュームは単純。近づいて殴る、それだけなので、あまり余計なものが必要としていない。

スーツだけで終わりだ。代わりに、そのスーツはぼくができないことを補えるように設計している。

と、いつでも寒さに耐えられて、あとは各種の攻撃耐性のある素材を用意してもらったただけなのだが。

切断にも強く、生半可な刃なら通さない。顔が少し出ているのは別に問題ない。最悪蘇生があるからだ。そもそも、ぼくの頭を弱点扱いできるのはチャージ級の火力が飛び出してこないかぎりないだろう。

よって、コスチュームはそこまでの機能性を求めていない。

着替え終わったのでグラウンドへと向かう。その最中、すでに向かっていた生徒と合流したので話しかけることにした。

「おーいなのです」

「あ……妖狐さん、ですわね」

「そうなのです。そういうあなたは八百万さん……ですわね？ この間のテスト、一位おめでとうなのです」

「あら、どうもありがとうございます。妖狐さんは4位でしたわね。それとは別に他人の治癒も行えるようで。様々な状況に対応できる個性……ヒーローにとっても向いてると思いますわ」

「やろうと思えばもつといろんなこともできるんだらうけどわねー。だけど今はやれる気がしないのです。だから今できることをがんばるのです」

「もう十分通用とすると思いますが……そうですわね。向上心を持つのは、ヒーローとして必要な素質なのでしょう」

話している間に、グラウンドへとたどり着く。男子生徒はすでにちらほらと姿を見せていた。

その中で、一人の生徒がこちらに話しかけてきた。

「よー」

手を振って返す。

「……そういや自己紹介の時間すらなかったんだ。俺は切島鋭児郎。よろしくな」

「うん。ぼくは死染妖狐だよ。てきとーにジョンでも狐でも妖狐でもなんでも呼んでね」

「いや、ジョンはどこから出てきたんだよ」

「……あだな？」

「うーん、わからん。ま、よろしくな死染」

「よろしくなのです。ところで」

と、ぼくが続けると、彼は疑問そうに「ん？」と言った。

「服装がすぐくすぐいことになってるんですけど……」

「ああ、下手なものだと自分の個性でコスチュームが傷つくからな。

あえて上半身は出してるんだ」

「どんな個性なの？」

『『硬化』。だから戦闘力を売ってく感じだな』

「なるほど……強そうだね」

「お、そうか？ まあ対人戦ならそこそこ粘れるほうだと思っぜ。さすがに馬鹿みてーな火力を出されると削られるが」

と、なると入試でもそこそこの点数を取れていたことだろう。

純粹に強い個性だ——ゆつくりと個性を伸ばしていけば、ひよつとするとヒーローとして大きく名を残すかもしれない。

今後の成長次第では、警戒に値するだろう。

——と、ここで全員が集合した。

「始めようか有精卵共！ 戦闘訓練のお時間だ!!」

オールマイトが、そう叫ぶ。

そこから、訓練の説明が始まった。

二人一組でペアを組む。それはくじで決まるものらしい。

「せんせー。このクラス21人なんですけど、それはどうするべきですか？」

と、ここでぼくが聞いた。そりゃあ疑問だからだ。ハンデ付きで参戦するにしても、正直段取りが悪い。その場合どうするべきか——と、考えていると、オールマイトはすこし申し訳無さそうに言った。

「その……なんだ、死染少女。申し訳ない。君は今回、負傷者の治療の当番をお願いしたいのだが……」

「あー、なるほど。了解です」

と、いうことはぼくはこのメンバーから外されるということだ。しかしそれは、一つの信頼と受け取ってもいい。

評価されている。つまり褒められている。

ぼくはえへんと胸を張った。そして、くるりとクラス全体のほうへ振り返ってから、いう。

「ということなので、みんなじゃんじゃん怪我してね！」

『『絶妙なワードチョイスの下手さが尖ってる』』

みんなに心で突っ込まれたような気がする。

「あー……怪我することは喜ばしくないから、みんな重傷は負わないよう気をつけて」

◇

対人戦闘訓練、終了。

そこそこの数を治癒してちよっとだけ空腹なぼくは机にぐでーつとしながら放課後の訓練の反省会に参加していた。

すでに今ここにいる面々との自己紹介は終わっており、各々の問題点の指摘をしている。現在いないのは緑谷出久。

ヒロイズムの塊だ——理想のヒーローを追い求めてやまない、狂氣的なまでのそれへの執着を持ち、傷つくことを恐れないという恐ろしきをもった少年。

今回もまた腕を破壊してしまった。治癒で治してはいるが、今回はかなりの重傷だったので保健室に連れて行った。

その姿を思い出しながら、ぼくは周囲と話す。あの姿——鬼気迫る、その姿。何よりもぼくが恐ろしいと思うものだ。

手負いの獣のような、なにをするのかわからない怖さだ。

——それが、今回はつきりと明らかになった。だから、警戒しなければならぬ。

頭の中では彼の恐ろしさに若干怯えながら、

それでも時間は進んでいったのだった。

第19話

人生は生まれた頃からルールが敷かれていて、テキトーに生きてもそこから逸れることはない。
そういうものだと思うていた。

◇

——今回、お前は俺たちに敵対しろ。

本心が読めない微笑みで弔はぼくにそう言った。

本日、雄英襲撃日。

襲撃することにした理由はひとえに、今日の訓練が外界と隔離される一番最初のチャンスだったからだ。バスで移動する関係上すぐに人はやってこない。

オールマイトが授業に参戦し、さらに現場が広い。戦いやすい空間ができていることは間違いないのだ。

よって、今日が雄英襲撃日となった。

今回、ぼくは弔を知らないふりをしないでいいと言われた。よって、弔について知っていることは包み隠さないようにする。

ともあれ。

訓練場へとたどり着く。

すごく広い場所だ。なるほど、遊園地みたいな容貌をしている。遊びたくなる心地を抑え、先生の話を聞くことにした。

スペースヒーロー・十三号は災害救助活動を得意とするヒーローだ。そんな彼の訓練場の紹介を聞き、そしてふと疑問に思った。

——オールマイトがいない。

読まれたか？ と一瞬不安になるが、しかしそういうことはない。どうやらただ、活動限界だから来れないらしい。

相澤先生の話盗み聞き、なるほどと思う。そして一ついいことを聞いた。

オールマイトには活動制限がある。

うまくこれを利用すれば、オールマイト殺害も成し遂げられるだろう。

スペースヒーロー・十三号の言葉を聞き、ぼくはふと意識をそらした。

「そんじやあまらずは……」

相澤先生が、そう言おうとする——が、それより先にぼくは気づく。

ワープゲートの存在に。

空間を挟り取る黒色の歪みから、ぬるりと弔が顔を出した。

「——ひとかたまりになって動くな!!」

相澤先生がそれに気づき、即座に反応する。生徒で気づいたものはいない——よって、呆けた反応をしてしまうのも仕方のないことである。

切島くんが、危機感のない表情で疑問を口にした。

相澤先生は即座に否定し——そのゴーグルで視線を隠す。

「動くな、あれは——敵だ」

ぼくの視界の中で、弔はその爛々と妖しく光る瞳を揺らし、小さく告げた。

「——蹂躪しろ」

その言葉で、^{ザイラン}敵が全員戦闘態勢に入る。

——それは圧倒的な、王の素質。

ただの子供にすぎない死柄木弔が順調に成長し、王の後継者としての片鱗を見せ始めた……そのカリスマの、発露。

「俺達の姫を取り返せ、象徴を崩せ、悪意で以て蹂躪しろ。殺すも犯すも好きにしろ——俺達の、全身全霊ですべてを穢せ。冒瀆しろ」

と、弔は言った。そしてその瞳がぼくのほうを向く。

互いの瞳が交錯し、

——にやりと弔は笑う。

「……狙いは……死染と、オールマイトか」

相澤先生がそれを見て、少し悩むようにし、手短かに発言した。

「緑谷！ 敵が来たら死守を守れ。お前の個性は相性がいい。できるか!?」

「——っ、やります!」

「十三号！ 避難開始！ 学校に連絡試せ。駄目なら駄目でいい。上鳴、お前も個性で連絡試せ——あとは任せる」

「……先生は!? 一人で戦うんですか!? あの数じゃいくら個性を消すって言っても……! イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛だ。正面戦闘は……」

「二芸だけじゃヒーローは務まらない」

そう言っつて、相澤先生は敵の群れに飛び込んだ。

数稼ぎの雑魚だろう敵を千切つては投げ千切つては投げと……そのまま、順調以上に戦い進める。

「強いな、とぼくは思った。やっぱり素の能力がずば抜けている——
—弔と互角ほどはあるだろう。」

弔の勝ち揺るがない。

黒霧が隙をついて、生徒たちの前に姿を現した。

「……っな!」

「——初めまして。我々は敵^{サイラン}連合。僭越ながらこの度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは」

そう言っつて、ぼくに視線を向けた。

緑谷くんが反応し、ぼくをかばうように立つ。

「平和の象徴オールマイトに息絶えて頂くことと同時に、私達の姫を連れ戻しにやってきました」

と、その言葉の瞬間に、生徒の目がぼくのほうへと向く。

ぼくは黒霧を見つめた。なにか発言するべきかと考える——いや、いいだろう。

今回の襲撃の設定。

それは、ぼくを敵の王の許嫁という扱いにし、そしてそこから逃げ出したお姫様という設定にしたということだ。

一人でも、様々なことを記入しておけば親がいなくてもなんとかなる。というかぼくの個性は変身も内包している。それを使えばいいのだ。だからこそ、ぼくはそういった手口で入学したと言い訳することも可能であり——

——この設定に、信ぴょう性を持たせることができる。

「それで、戻ってくる気はありませんか？ 今なら手荒な真似をする必要ありません。さあ、こちらへ……」

そのワープゲートで囲んだ手を、こちらに向けてくる。

ふと、ぼくは一步だけ踏み出した。どうするべきかを悩んだままに。そして二歩目を踏み出そうとして、緑谷くんがその行く手を阻む。

「……駄目だよ、死染さん。——連れ戻しに、つてことは、敵から逃げたつてことだろ。……なら君は僕たちの仲間じゃないか。……細かいことは放っておいて、仲間をみすみす行かせるなんて、そんなのは僕にはできない」

「……緑谷くん」

「そうですね……ならば、当初の予定通り」

と、言つて黒霧はワープゲートを展開した。

全員を飲み込み、隔離する目的のものを。

◇

——霧に飲み込まれる中、緑谷出久は必死の思いで死染妖狐の腕を掴んだ。狙いは、同じ場所に飛ばされること。

そしてその目論見は成功した——狙い通り、同じ場所に転送されて、地面にべちよりと不格好に落ちる。

痛みに耐え、体を起こすと、呆然とした表情の少女がいることに気づく。すぐに飛び起き、声を掛けようとする——

そのタイミングで。

横合いから、なにかが飛んできた。

それは死染妖狐という少女の胸を吹き飛ばし、その中から血を溢れ

させる。

「……あ」

こぼり、と口から血を零す少女が、ゆつくりと倒れる様まで呆然と見届け、そして、鉄球が飛んできたほうを見る。

そこに、一人の男が立っていた。

手のひらで鉄球を弄ぶ、暗い瞳の男だ。その見た目に特筆すべきようなどころはない。なによりも、普通といった男だ。

だがまとう雰囲気尋常ではない——まるで、死、そのものを纏っているような剣呑な雰囲気漂わせている。

「……死染さん」

緑谷出久は小さくつぶやいた。

返事はない。穏やかで、きれいな表情をした狐耳の少女は、瞳を開かない。

「……守るって、言ったのに……!」

それは後悔。それは懺悔。そしてそれは——憤怒。

彼の個性——ワン・フォー・オールは、それに呼応するかのよう
に奔流した。

怒りが、後悔が、感情が緑谷出久をゆつくりと覚醒させていく。目の前で人が死んだ。その事実を受け止めよう。
しかし。

だからといって——受け入れるとは、言っていない。

「ワン・フォー・オール」

そう呟いた。個性に語りかけるように。制御が安定しているような気がする。いまなら、なんとか制御しきれられるかもしれない。
失敗してもそれでいい。

今はただ——確実に仕留めるだけの、力があるのだから。

ゆつくりと横を振り向いた。怖い。勝てない。個性を扱えるのかわからない。これで戦闘なんて不可能に決まっている。しかし、だからといって関係ない。無理を無茶にして押し通すのがヒーローだから。

緑谷出久は拳を握りしめ——地面を踏みしめる。

瞬間で加速した。容易に動くことができた。男が反応しようとする動き、それを上回り、その顔面に一発拳を叩き込む。

男はそれにあっさりとは吹き飛ばされた——いや、わざと吹き飛ばんだ。体を回転させ、衝撃などなかったかのように着地する。

「……やりやがったな。あー、やりやがった」

男は言った。

「別に姫様なら死んじやいねえよ。あの程度で死ぬようなタマならとつくに死んでる」

「……それは……」

どういう、と問うまえに、男は答える。

「俺らのリーダーと握手できるのは原則死人だけだ。けど、唯一姫様だけは触れても問題ねえんだ——あの治癒力が、死すらも阻むからな」

「……………」

「死ぬ寸前まで消耗するけど別にいいだろ」

「いいと思ってるのか」

「まあそう逸るな。いいか。姫様はヒーローの元では絶対に生きていけない。俺たちと一緒にくるべき存在なんだ」

「……………」

「せざるをえない——つてわけだ。ヒーローは絶対に姫様の味方をしない。できない。なら、あの子は俺たちと生きるしかねえだろ」
「いったいどういう事情だということか。」

様々な困惑が頭の中で広がる——しかし、その一つひとつに意識を向けている暇はない。今は、なにが必要かということを考える。

「だからといって」緑谷は言った。「彼女を渡す理由にならないだろ」

「なるんだよ。——まあ、ヒーローは納得できやしねえよなあ。」

「じゃあ仕方ない。仕方ない。……自己紹介といこうか」

男は、特になにを考えているのかわからない顔で。

「茶味——俺の名前だ。あんたの名前は？」

「……緑谷出久」

緑谷は返す。

「へえ。良い名だな。……今日は天気もいい。死ぬには良い日だろうか？」

「良すぎる日だし死ねないね……！」

鉄球が放たれた。

それを手で弾こうとする——が、しかし、まだ安定して引き出せる3パーセントの出力ではまだ足りない。触れた箇所が抉られた。

それだけの威力だというのに、ふざけたことに茶味はそれを平然と連発する。

二射目が放たれた。茶味の腕はたしかなようで、確実に殺すために顔面へと向けて放たれる。

——回避できない。

そう判断し、……そして、緑谷は早速切り札の一つを切った。

即ち——指での、100全パーセントカ。

放たれたそのデコピンは、鉄球を飲み込み、それをこの世から消し去りながら、風圧で茶味を吹き飛ばした。

「——う、ぐっ……！」

「……は……ははは、はははは。何だよそれ。なんだその威力……クソいてえ……！」

指の一本を引き換えに放った一撃は、どうやら茶味に通用したらしい。

——いける。

耐久力が高くないことがはっきりした。勝てる。ふと、そう思った。だからこそ、指の痛みなんか気にしていられない。

自損してもいい。いくら砕けても、勝つ必要があるのだから。

「お前らに……死染さんは渡さない……！」

「吠えたなヒーロー……その選択、後悔するなよ」

拳を握れ。足を進めろ。戦え。

だれかを守るために、お前はヒーローを志したのだから。

第20話

「脳が鳴らす警鐘をすべて無視し、己の肉体を信じて放たれた攻撃をその身で受ける。」

弾き飛ばされ、硬化した皮膚が少しだけ痛む。それでも、気合と根性さえあれば負傷をもともせずには戦える。

——切島鋭児郎は、現在一人で耐久戦を強いられていた。

（——クソっ、決め手に欠ける……！）

相手にしているのは、その姿すら不鮮明で、性別さえもわからないローブの人物。

人というにはあまりにも歪な触腕を見るに、どうやら異形型の個性らしい。

（殴った感触はやわっこくてダメージなし）切島は考える。（瞬間的に腕の硬化の強度を上げれば……打撃じゃなく斬撃のダメージで仕留められるか？）

硬化は固めていくたびに鋭く、刃のように鍛え上がる。ならば、その硬化の強度を上げ切断方向のダメージを増やしたほうがいいのかもされない。

……問題は、硬化しすぎると自分の肉体が耐えられないということにある。

いくら戦闘に秀でた個性とはいえ、未だ未熟。なればこそ、その個性の応用とも呼べる分野へと手を出すには習熟が甘かった。

せめて、緑谷ほどの火力があれば——と、思うが、しかしあれは自らの体を傷つけることを引き換えに放てる技。

だからこそ、それを羨むのは違う。できないのは自損覚悟で戦えない臆病な自分のせいだ。

触腕が伸びてきた。それをいなしてガードするには、技量が足りない。体で耐え、根性でガードする。

ガードし——そして、触腕を掴んだ。

引っ張る。

引きずられ、相手はたたたらを踏んだ。わずかに隙ができた。その瞬

た。

「……いったい何が……」

そもそも、彼の敵がこれ一人だったこと自体なにかがおかしい。たしかに強い敵だったが、決して勝てないというわけではない。

オールマイトを殺すなどと言い張る敵が、なぜこの程度の敵しか配属していないのか。それを考えたとき、正答が出てこないのだ。なんの思惑があったのか、わからない。

いや、しかし。

自分に回すぶんのリソースを他に注ぎ込んだとしたら？

そこに思い当たったとき、切島鋭児郎は振り向いた。死体など、考えている暇はない。今はただ、その不吉な予感を払拭するために仲間の元へと走っていく。

——背後の死体がゆっくりと起き上がったことに、彼は気付くことはなかった。

◇

問題があるとすれば、自分に充てがわれた敵が弱すぎることにあ
る。——尾白猿夫は、一人で辛うじて制圧することができた敵を見
て、そう思う。

「——おい！ 尾白！」

「っ……切島か。そっちも一人だったのか？」

「おう！ ……なんだ、一人で制圧完了してるじゃねえか。今手え空
いてるか？」

「空いてるけど……どうした？」

「俺のところ、敵が一人しかいなかったんだ。ひよつとするとどつか
別のところにリソースつぎ込んでるかもしれねえ、救援に向かおう
！」

「……マジか。わかった！ 急ごう！」

敵は……一人で制圧できるレベルだった。転がしておいても問題
はない。なら、すぐに向かおう。

そう判断し、尾白は切島と共に走り出した。

「……どこに向かう!？」

「水難エリア!」

「んなつ! 正気か!? 一番リスクのある場所だぞ!？」

「リスクのある場所だからこそ——だ。そこにいるやつが一番危ういってことだろ! 梅雨ちゃんとかがそっちにいないとしたら、ガチで死ぬ可能性だってある!」

言われ、たしかにと尾白は納得する。

水難エリアの凶悪さはこの場合トップに上がってくる。何故なら、こちら側はなんの準備もできていないのだから。

引きずり込まれ、息ができずに殺される。

そういう危険があるからこそ——仲間がいる場合、そこが一番危ういことになる。

故に走り——水難エリアへとたどり着いた。

案の定、そこには敵が散らばっている。想像通りだった。

しかし助けに行こうにも難しい。船の中に籠城しているのか、その近辺に群がっている——向かえない。

そちらへ行くと、確実に敵に把握される。

どうするか——決めあぐねていると、水が凍結し、足場を作り出した。こんなことができるのはクラスの一人だけだ。

「よお」

「轟! お前、平気だったか!？」

「ああ。……水の中に生徒がいるかもしれねえ。仕方ない。足場を作る。引きずり込まないように仕留めよう」

「わかった!」

「助かるよ!」

轟焦凍が水に手を翳した——水面に、足場ができあがる。その上を走り、尾白は船の中へと入り込んだ。

「……いた! 二人とも、こっちに!」

「助け!?! すまねえ、助かる!」

「ありがとう尾白ちゃん、助かるわ」

いたのは、蛙吹梅雨と峰田実の二人——梅雨ちゃんがいるのなら、なんとかなつたかもしれないと思いつつ、尾白は二人を抱えて氷の上に飛び降りた。

露払いをしている切島が、その様子を確認して頃合いを見て離脱する。

生徒全員が水の上から退いたとき、轟が水のすべてを凍らせて、全ての敵の足止めをした。

「……………こも、やっぱり凶悪なヤツはいねえな……………」

「……………いや、わからない。今ここにいるのは五人だろ。もつと強い敵がいる場所があるかも」

と、言った直後だ。

極大の爆破が起こり——そして、空中で戦闘を繰り広げている姿に気づく。

◇

腕は二本しかない。しかもそれで滞空を制御しているのだから、空中戦では翼を持つ相手に分があるに決まっている。

爆豪勝己は、しかしそれでも不敵に笑う。

細かく手を爆破し続けることで宙に浮いてこそいるが——当然、空中、それも落下死を免れない高度での戦闘は初めてだ。しかしそれを理由に負けることはプライドが許さない。

顔面へと向かってくる、翼を持った異形の腕。それを紙一重で回避し、手を爆破して接近する。相手が腕を伸ばすこと、それさえ誘い込めれば懐に潜り込める。

厄介なのが、自分と同じように相手が遠距離攻撃できるといふ部分。であれば、その遠距離攻撃の隙についてインファイトへと持ち込む。

腹に触れた。相手の太い脚に着地し、片手を籠手へと。そして、引き金を引いた。

直後、空が爆ぜたと思えるほどの爆裂が起こる。

この爆破は威力を発揮するまでに時間が必要という制限があるが、しかしこういうたぎる戦闘であればスパンも短い。体は温まってきている。故に、今の爆豪勝己は最高火力技を容易に放つことができる。

一度は消し飛んだ敵が、再生していく。それを見るのは二回目だ。しかし、再生には制限がある。

リカバリーガール曰く、治癒は体力を消耗する。つまり、相手は残機制なのだ。ストックさえすべて消し飛ばせば、仕留めることができる。

苦し紛れか、弾丸を吐き出してきた。それも回避すると、また接近するために爆破で浮遊する。

「ハッ——お前の得意な空中戦で俺に二回も殺されてるあたり、実力自体は高くねえだろ」

「爆豪!!」

「あ?」

爆豪は呼ばれたほう——下だ。そちらへと一瞬視線を向ける。

「援護いるか!」

「要らんわ!」

「了解! 任せる!!」

うぞうぞと蠢く肉塊——その視線は、別の場所へと移っている。爆豪勝己ではなく、下の五人のほうへ。

「チツ……」

案の定、相手はそちらへ向かおうとしている。させない。爆破で即座に接近し、首を掴んで、

——そのまま、地面へと。

爆破で推進力を稼ぐ。そのまま、相手を捉えたまま地面へと墜落していく。

さながら隕石のように。

抵抗をその身に受けつつ、攻撃されながらも爆豪は下へと向かい続ける。

腹を蹴り飛ばされても、執念で離さない。あまりの速さで視界がく

めていない。

茶味の砲撃に対してできることは、足にワン・フォー・オールを使い走って戦うことだ。5パーセントでもそこその機動力はある。オールマイトのように超速移動はできないが……だからといって、それが遅いというわけではない。

顔面に放たれる弾丸を回避する。それは緑谷の後ろの岩を消し去り、更に着弾の余波で周囲の地面をえぐり取った。

確実に急所を狙いにくる攻撃は読みやすい。問題は、その速度が視認すら不可能なことだ。

直感、そして十八番である分析による予測で辛うじて回避しているが、確実に避けられないレベルのものは100パーセントで相殺する以外にない。

現在、万全の右手に対して左は親指だけが残っている。

つまり、四回も100パーセントを使わされたということだ——それほど、せざるをえないレベルの攻撃が撃たれた、ということになる。

しかし、収穫もある。100パーセントを放てば相手にダメージを与えることができるということだ。だからこそ、緑谷は完全に劣勢というわけではない。

いや、目や口から出血しているぶん相手のほうが満身創痕と言って差し支えないだろう。

「——はっ、ヒーロー！ お前まだ見習いのくせにクソ強いじゃねえか！」

「……それは、どうもツ!!」
「だからこそ確実に摘む！」

乱雑に投げ放たれた無数の鉄球の弾丸。そのどれもが空中で一瞬止まり、縦横無尽に戦場を駆け巡る。当たれば確実に死ぬレベルの弾幕をあっさりとばらまいた茶味に、向かってくる弾丸の数を見て、緑谷はそこからほとんどノータイムで腕を振りかぶった。

判断の是非は考えている余裕がない。過剰だったとしても、足りない

くて死ぬよりマシだ。

だから——腕を犠牲にする、100パーセント。

それは放たれた鉄球の全てを消し飛ばし、そして普通の人間では耐えきれないほどの威力を纏った風圧が、威力そのままに茶味を襲った。

「ぐ——ぶ」

茶味は打たれ脆い。それは、個性の許容する衝撃を食らうと、その体の中で衝撃が炸裂するからだ。意識して衝撃は溜め込むものではなく、無意識に衝撃は溜め込まれる。

だからこそ、攻撃を貰うこと自体が危険なのだ。

茶味は、指だけでもかなりのダメージを負う。

そこに、先程のダメージとは比べ物にならない威力が飛んできたら？

「はッ——は」

目から、耳から、鼻から、口から。

血が零れ出る。まともに立つことさえままならない。足が震える。一歩歩く度に激痛が走る。これは全身がくまなく損傷している。

間違いなく重傷だ、くそつたれ。

「くっそ……」

鉄球を取り出すことすら覚束ない。どうすればいい？ 負ける。

これは、完全に負けただろう。高火力系の敵はこれだから卑怯だ。

心の中で吐き捨てて、ほとんど気合で立ち上がる。

「——ヒーローにだけは……」

走馬灯、だろうか。在りし日の記憶が浮かび上がる。最悪だ。最悪な気分だ。けれど、それを見て、——自分の原点を思い出す。

「——ヒーローにだけは——負けてやらねえ……！」

最悪な過去。忘れ去ってしまいたい過去。どこにでもありふれていた少年、茶味が明確に人生のレールを踏み外した過去。

それを思い出して——茶味は震える手で、一つの鉄球を取り出した。

それは黒く澱み、ドス黒く塗りつぶされ、そして晴れて蒼へと変化

する。

「ああ、これだ」

放つのは自分へ。なにかに導かれるように、個性が瞬間的に進化——いや、あるべき姿へと戻っていく。

「——!!」

それを見て、緑谷出久は走り出した。マズい。なにかがマズい。なにがマズいのかもわからないが——あれを、碎かなければいけない。

勘と呼ぶべきなにかが警鐘を鳴らしている。そう、あれはだめだ。撃ち込ませてはならない。

だから片足だけ100パーセントを開放して、即座に距離を詰める。

「——」

が、届かない。わずかに遅れた。緑谷が手を伸ばす、その目の前で茶味はその弾を自分へと撃ち込んだ。

——直後、突風。

全てを呑み込む、蒼の奔流——。

第21話

有象無象はあらかた片付き、死柄木弔は作戦の進行具合を考える。抹消ヒーロー・イレイザーヘッド……その実力を考えると、そろそろ自分が動く頃合いだろう。それはそれとにおいておいて、今考えることは——プランの移行をどうするかだ。

「プランA——今後の動きによるな」

イレイザーヘッドは強い。たしかに強い。だが今回はオールマイトを殺すために用意した改造人間が存在する。それにそれだけでは心もとないから、

三年前から蓄え続けた四百二十一体の怪人・脳無を用意してある。これでプロヒーローが大量に現れた場合も戦うことができる。いや、それどころか全てをヒーローを抹殺できるだろう。

確実に勝てる保障があるからこそ、実行。だからこそ、間違いなく負けることはないだろう。

イレイザーヘッドが、雑魚刈りに集めた手下をすべて片付けてこちらへと向かってきている。仕方がない。

自分で動くことにする——と、死柄木弔は歩き始めた。

「こんにちは」

捕縛布が飛ばされる。それを弾き飛ばし、死柄木は嘆息した。

「おいおい……仮にもヒーローだろ？ 挨拶は返せよ」

足へと向かってくるそれを、踏み潰し、つかみ、逆に引っ張る。戦い慣れているのだろう。得物だろうに即座に手放して体勢を崩さないその姿。なるほど強いな、とすぐに判断する。

だからといって——この程度ならば負けるわけがない。強い敵は今までもたくさんいた。それらと比べたら、イレイザーヘッドは個性を消されるだけだ。

余裕、と言うわけではないが。

それでも、今まで戦った強敵と比べると——弱い。

今までの戦闘はすべて観察していた。だからこそ、一定の間隔で髪が下がる瞬間があることも把握していた。そのときが個性を使って

いるときだろう。そう考えるとわかりやすい。
相手のまばたきの隙に触れる。それだけで、相手は容易に仕留められる。

武器を奪われたイレイザーヘッドは、そのまま殴りかかってくる。それを確認し、死柄木弔は拳を正面から受け止めた。

崩壊が始まる。

肘が砕けたことに反応し、即座に個性を発動して跳び去った姿は確実に優秀のそれだ。それが近接系で輝く個性持ちだったら、と考える
と恐ろしい。

しかし、相手は残念ながらただの無個性も同然。純粹に、圧倒的な力では対応できないだろう。

「——脳無」

死柄木弔は宣言した。それはある種、死刑宣告にも等しい。イレイザーヘッドでは確実に勝てない敵だ。だからこそ、呼び掛けた。

それに応じ、ずっと佇んでいた巨漢が動き出す。それを見て、死柄木は吐息を吐く。

「——死柄木弔」

「……黒霧。どうだった」

「生徒に一名逃げられました」

「わかった」死柄木弔は宣言する。「プランBの発動だ」

◇

撃ち込まれたのは、過去と今を繋ぐ楔。

過去と現在の境界を貫き、彼が自らに施した封印を解くもの。

髪が蒼く染まっている。ああ、またこれだ。またこの姿だ。

この姿になったのは何年ぶりか。彼——茶味は考える。封印したのは、あまりの凶悪さにだったか？ それともあまりの悍ましさだったか。

そんなのはもう、関係ない。

そう——関係ない。茶味は吐息と共に、拳を握った。元々個性の

半分を封印していたのだ。それが開放されて、個性は本当の力を取り戻した。

「——ま——」

直ぐ近くにいる、緑谷出久へと拳を放つ。位置は少し離れている。関係ない。何故なら今から放つのは、相手が放ってきた攻撃そっくりそのままなのだから。

「わりいな」

何もかもを消し飛ばすかのような威力の拳だった。その直撃を喰らった緑谷出久が、遙か彼方へと吹き飛んでいく。

見えなくなるほど吹き飛んだ緑谷出久を見て、茶味は漸く息を吐いた。あの様子では死んだだろう。しかし悪いとは思わない。ああしなければこちらが死んでいた。

それに——今更誰が死のうと、悲しむことはない。

彼は未だ目を覚まさない狐のもとへと歩いていく。ゆっくりと。未だ体の痛みは収まっていないが、それでも自己再生力ですぐにすべて回復するだろう。

そういうものだ。

——だからこそ、自分も娘も化物扱いされていたのであろう。

「なあ、狐さんよお」

茶味は未だ目を覚まさない彼女へとゆっくり声を掛ける。

「俺さ、誰が死んでもどうでもいいんだけど……スイコとお前さんが死ぬのはちよつとだけ悲しいぜ」

誰かを惜しむ感情は、遙か過去に捨てたもの。それは人生を怨んだときに錆びついてしまったもの。

なのに、この二人だけは例外のように、少しだけなにかが痛むのだ。それが何故かと考えたとき、気づいた。

似ているのだ。

彼女に。

「狐さん、そろそろ起きろ。……まさか死んでねえよな？」

ふと疑問に思っ、茶味は狐の首に手を当てる。呼吸はしている。それを確認して、何故まだ目を覚まさないのかを疑問に思ったとき

に、
顔を殴られた。

「!?」

「——やっと——戻ってきた——」

そのまま吹き飛ばされる。今度は受け身を取れなかった。それより困惑と疑問が勝り、わけのわからないままに聞く。

「お前……どうやって……」

「——折れた足でも——ぐっ——はあ——ふっ——頑張れば走れる」

「——!? 嘘だろ!? お前、走ってきたのか!? あの傷で!」

そこに立つのは緑谷出久。左腕は使い物にならないほどに壊れ、右足は骨折しており、さらに先程殴られた体は前面が裂け、中の肉が露出している。立っていることも奇跡のような状態だ。

そんな状態で——走ってきた?

いよいよ驚愕する。自分のように壊れた体を勝手に修復してくれるような能力があるならまだしも、それではなくただの気合だ。

鬼気迫る——そんな言葉が似合う、狂気すら顔を覗かせるようなレベルの正義感だ。

——こんなヒーローばかりだったら。

ふと心の中に湧いた思いを、首を振ってかき消す。そして茶味はポケットに手をつ突っ込んだ。持ち出すものは鉄球だ。

触れた瞬間、個性が作用し変化していく。蒼い、矢へと。

放った。先程の鉄球より明らかに速いそれを緑谷出久は見て、

「——スマッシュユー!」

——壊れた左腕で以て相殺する。

「ま……マジモンの馬鹿かよお前……!」

そして、壊れていない右手の人差し指で攻勢に出る。近くに落ちてあった小さい石の破片を人差し指の全力で打ち出した。

「……っ、あぶねえ!」

「……………」
鉄球で相殺しつつ、悍ましきを感じさせる緑谷出久から一步遠ざかる。

「——なあ、お前……ヒーローって、どんなものだと思う」
ふと、そんなことを聞いていた。意識は朦朧としているだろうに、そんな問いかけに対して緑谷は律儀に返答する。

「——誰かを助けるために戦える人だ」

「……………」

その答えを聞いて。

茶味は、笑った。

「……ヒーロー全員が、お前みたいなやつだったらよかったのにな」
「……………」

お前には姫様^狐は救えない、だなんてことを言うことすらせず、彼はぼそりとつぶやいた。

——そのとき。

「ん——うゆ」

狐が目を覚ました。

「——っ！ 死染さん！」

「ん……んう？ あ、あはははは。あははは。あはは」

緑谷が駆け寄る。

「大丈夫だった!? ええとええと……どうしようか。一人で逃げられるかい!? 安全な場所へ——」

「——いただきましゅう」

え？ と、緑谷が反応するより早く。

人食い狐の牙は、緑谷の腕へと突き刺さった。

◇

それは助けへと向かう最中の出来事。

「——なにか来るぞ」

轟が呟いた。この状況において、そのことで狼狽えることはなく全

員が冷静に立ち止まり、警戒しないわけがない。

空から墜落するようにやってきたのは——切島が、先程死体を確認したはずの敵。それを見て、一瞬困惑する。しかし気を取り直して、情報を叫んだ。

「あいつは俺と戦ってたやつだ！ ぶん殴ったら破裂した！」
「なるほど」

と、轟はいう。そして手を翳し、

「俺には関係ない」

瞬間で体を凍結させる。氷像になった敵は、先程のように膨れ上がり——そして、爆ぜた。

「また死んだ!？」

「……違う、死んでない!？」

尾白が踏み出した。降りかかってくるその肉片を拳で捌きつつ、意思を持って襲いかかるそれを弾く。

「くっそ——動けないようにできればなんとかなるか……!？」

「俺の氷じゃ駄目そうだな……拘束系の個性はいるか？」

「お、オイラの個性がそうだ!？」

「拘束力は?？」

「今日の調子的に一日はくつついたままだと思う!？」

「なら任せた。……尾白、蛙吹。一箇所に集めてくれ」

「梅雨ちゃんと呼んで」

「すまん、蛙吹」

弾く位置は一定に。一点に集め、そこに峰田が個性の産物である球体——もぎもぎを投げつけた。

完璧にぴったりくつつく形に。

「……さすがに拘束できただろ」

「じゃあ急ごう。まずは先生のところへ——俺たちみたいな対人向き個性が必要だろ」

そう言って、動こうとして、

——ふと、空に何かがいたような気がした。

「……………今、なにか見たか?？」

「……俺は見えた。けど……確証は持てない」

「なんの話だ？ 見えたって？」

「オイラにはなんも見えなかったけど……」

「……気の所為かしら」

蛙吹梅雨はつぶやく。

「なにかがたくさんいたかのように見えたのだけれど」

◇

上鳴電気、絶賛苦戦中。

振られる攻撃は戸惑いながら回避……この調子だと、いつやられるのかわかったものじゃない。基本的に、当たればアウトの戦いでしかないのだから。

いかに冷静に、攻撃を回避するか——なのだが。

先日まで中学生だったのだ。まともに戦うなんて、やってこなかった。個性でできる幅を増やしてなかった——ミスだ。

「あーえーと——耳郎！ なんか案ないか!？」

「こつちが聞きたいくらいなんだけど！ あんた電気遣いでしょ？

なんかできないの!？」

「俺は電気を纏うだけなんだよ!」

「纏う——でしたら！ 持っている武器も一緒に電気を纏うんです

の!？」

「あ!?! ……ああ！ そのはずだ!」

「ならば考えがありますわ」

同じ場所へと転移させられていた八百万百が、その個性で刃を潰した剣を作り出す。

「これを使って時間を稼いでください!」

「でも俺剣とか使ったことねえよ!？」

「剣は素人が使っても扱いやすいものです！ がんばってください!」

「あーもう！」

拳を振り下ろす敵の姿を避ける。避け、そして首筋へと剣を当てた。

「ぐぎやああああ——!?」

「あ、かなり効いてる」

ほんの数秒当てただけだが、相手は昏倒するように倒れた。

「いやあ——キツツ。上鳴の放電が通じるんなら一網打尽なんだけど」

「……出来た！」

「はえ？」

八百万の身体の中から、巨大なシートが生成される。それはそばにいた耳郎響香の姿も共に隠し、ぱさりと落ちた。

「厚さ100ミリメートルの絶縁体シートです。上鳴さん！」

「……なるほど」

意図は察した。先程耳郎が言ったように、放電が通じる環境が完成する。

「これなら俺は——クソ強え!!」

故に放電した。

特大の雷を放った。周囲を飲み込み、全体を制圧するほどの雷。それにより、目に見える場所にある敵を全滅させた。ワイラン

放電が終わった現場を見て、八百万は眩いた。

「皆さんの場所に移動しましょう」

「あの……それより服が凄いいことになってるんですけど……」

「また創りますわ。……上鳴さん？」

問いかけながら、服を作り着る。

「うえーい……」

「!?!」

二人がアホと化した上鳴に気を取られた、次の瞬間。びたり——と。

その首筋に一本のナイフが突き付けられた。

「動くな」

「……!?!」

「うエイ!?!」

それを突きつけたのは、電気を指先から見せる一人の男。伏兵であると理解したのは一瞬だった。

「動いたらこいつの命はないものと思え」

ナイフを突きつけているのは、電気が通用しない可能性を考えてだろう。あるいはナイフが弾かれたとして、電気によって殺せるように考えた結果なのかもしれない。

「そうだ……俺の命令には従ってもらおうぞ」

「……………」

思考を回す。人質を取られた場合の対処法。どうすればいいのか、と考える。

「どっちもいい、か」

「……………」

「そうだな……お前ら、服を脱げ」

と、男は言った。要求に困惑し、動きが止まる。どうすべきかを迷う。

結果、一步も動けないまま時が進んだ。

「……………ペナルティだ」

そう言つて、男は上鳴の右目へとナイフを這わせ、

「……………う、ぐあああああああああああ!?!」

——そのまま、それをくり抜いた。

ぼとりと地面に眼球が落ちる。そして、額へと一本線を刻んだ。

「これは戒めだ。お前らは俺の命令に従わなかった。……警告する。命令を聞かない限り、その数だけこいつの額に線を刻む。そして体のどこかを潰す。やめてほしければ命令を聞け」

「……………」

「もう一度言う。お前ら、服を脱げ」

「……………」

ただ、無言で。

ゆつくりと服の端に手を掛ける。そのまま、わずかに迷うように手

が止まり、そのまま歯を食いしばり、勢いよく脱ぎ捨てた。上着を脱ぎ、シャツを脱ぐ。

「そうだ。それでいい」

上半身の裸身を晒したところで、手は止まった。

「……ははは」

男は狂ったように笑い声をあげる。

「ははははははははは！ ははは！ はははは！ ヒーローが俺の言うことに従わざるをえない状況！ 楽しいなあ、嬉しいなあ、楽しいなあ!! 未来の芽を潰す！ これほど愉快なことはない!!」

「——うるせえよ」

電撃。

そして、腹部を襲う——衝撃。

いくら刃が潰された剣だといえ、殴打されるとそれなりに痛い。振り払われた剣は、相手を押して倒しながらその持ち主を開放する。

「な——き、貴様——」

「痛みで目が覚めたぜ……クソが」

「な、な——なあ……？」

楽しみを邪魔した少年に、男は怒りをぶつけようとした。しかしそれは失敗に終わる。

空に浮かぶある一点。そこに、ぼんやりとだがなにかがいることに気付いてしまったから。

「なんだあれ……？」

目を凝らして、その正体を確認しようとする。

それが過ちだった。

「が——き、ぐあ……ぐ、……？」

ぱちん、となにかが弾けるような音がする。そして視界が断ち切られた。なにも見えない。おかしい。なにが起きた？ わからない。困惑する男の前で、その正面に立っている少女二人は直感する。

——死んだ。

ゆつくりと、体が折られたたまるるように勝手に変形していく。骨が折れる音、血が滴る音、男の悲鳴。その光景を呆然と見ていた。

「なに……あれ……」

「……響香さん、響香さんはほんとに響香さんですの……?」

「え……? 何言ってるの、ウチはウチだけど……?」

「ですよね! そうですよね! ……そう、そんなはずがありませんわ! 響香さん。そこにいるのは響香さん……響香さん? 本当に!? あなたは本当に響香さんですか!」

疑われた、耳郎響香は困惑する。首を掻きむしりながら困惑する。おかしいな。自分は自分だ。なにをわけのわからないことを言っているのだろう。

八百万百の眼球が落ちるのを幻視しながら、いつまでも泥が滴り落ちる首を掻き筆って困惑する。

「……いえ、うそ……うそですよね」

恐れ慄いたような表情。

その顔が溶け落ちた。

「……そもそも響香さんって誰でしたっけ?」

「さあ、誰だろうね?」

笑い合う二人。顔のあちこちにある眼球が開いて、それらはすべて自分を見ている。口からごぼりと脳みそがごぼれ落ちた。

「あははは「ははは」「はははははは」

「——すまん」

上鳴電気は、首筋にあたるだろう場所へと剣を押し付けた。強めの電気を流し込み、もう片方も同じように処置し、狂った二人の意識を奪う。

「……さーて、これで助けは見込めない」

嫌に冷静なのは、それは現在何も見えていないからだだろうか。右目は失った。左目は血が流れ込んできて開けない。これも額に切れ込みを入れられたせいだ。拭おうと考えたが、しかし嫌な予感が走ったためやめた。視界がないまま戦え、というらしい。

痛みに対しては何も感じない。それがヤバイことくらいわかる。自分はここで死ぬのかな、と漠然とした——確信にも似た予感を懐きつつ、握った剣を何度か振って、調子を馴染ませる。

目を失ったからか、生体電気というのか——人の所在はわかる。死体も、意識がない人物も、正常な状態の人も、その脈動で感知できる。

だから今、近くにただ一人意識のある誰かがいることは気づいていた。

「ははっ……入学直後からハードモードか」

相手がいるだろう座標へと向かう。ぐちより、となにかを踏み潰した。なんだろう、と考えて、すぐに思い至ったのは自分の眼球だ。

これでもう万に一つも再生の目はない。今後一生、隻眼だ。

ヒーローは怖い。こんな博打を打たないといけないのだ。心臓がばくばく言っている。死ぬ気がしてきた。怖い。なんで俺がこんなことをしないとイケないのだ——と、考え、ネガティブな思考をすべて振り払った。

なにも見えない。頭は回らない。血が溢れ出て違和感がある。武器も貧弱。個性を使うとすぐに馬鹿になりそうな気がする。

しかし意志はある——ならばいい。当然、至極快調だ。

「来いよ変なの。命に代えても勝ってやる」

やってやる、と男は言った。

第22話

真つ黒の世界の中、逃げろと勘が叫ぶ中逆らって剣を振り払う。

敵の挙動は電磁波を通して筒抜けだ。しかし、視界に全く頼らない戦い——それが本当にあるものなのかを不安に思い、躊躇で手がおぼつかなくなる。

そして同様に体幹もあやふやだ。目を瞑ると体は自然に震えるというが、そのとおりだ。機動力に頼ることはできない。だからこそ、捌くことを十分に考える。

放電は使えない。周囲に人が倒れているからだ。だから完全に一対一——なんだこれは、なんの地獄だ。そう思う。

しかし——視界がないことがプラスに働くこともあるのだろう。縛りプレイを強いられている身だが、そう思う。

おそらく今戦っている敵は、見たらいけない敵だ。

見た瞬間、そこから個性に囚われる。幻覚を見、そして極限までその世界に囚われると、実際に死ぬ。

自分の目を抉った敵の男は死んでいた。しかし、その死因はシヨック死のようなもの——自分の死亡を脳が現実と思い込み、死んだのだ。

つまるところ、極限まで初見殺し……どころか、人間殺しの個性。

上鳴は、自分をつかもうと伸ばされた腕を払い、そして剣を突き込む。触れる一瞬だけに個性を発動すれば、上手い具合に耐久戦もできるようになるだろう。

だから、それを狙う。振り切られる剣を敵は不格好に回避し、さすが心臓へと手を伸ばす。

「はっ——」

それを返す刃で振り払う。

「お前、戦うのは下手だな!？」

それこそ、戦闘自体は素人に近い上鳴ですら圧倒することができるところ。

相手を即死させることができる個性だ。戦闘をする経験がなかつ

たのだろう。いや、それでも個性不使用で戦う経験を作る必要があった。

自分が特例だとしても、それを捻じ伏せることができるくらいの実力は用意しておくべきだった。

喉下から脳天を貫き通そうとする動きを回避。相手が急所ばかり狙ってくるぶん読みやすい。動きは一本に収束するのだから。

凌ぎ、削る。武器に刃こそないが、こちらはスタンガンのようなもの——触れただけでダメージが入るのだから、この調子で進めれば勝つのはこちらのほうだ。

そして、刃の扱いにも慣れてきた。プロと比べると明確に劣るが、しかし振り方は効率化されていく。

剣が閃いた。

それは、一本の線となり敵を殴打する。

インパクトの瞬間に、力を込め強く打撃した——同時に個性を発動する。そろそろ思考力が奪われてきた。脳がショートしてきた証拠だ。しかし、目を使わないぶん正常の生活よりはまだ楽である。

「——」
——相手の動きが止まる。疑問になりつつ、自分の体も止まった。

「私は——」

声が聞こえた。それは女の声だった。耳を疑う。おぞましい声を想像していたが、しかしそれは普通の女の声だ。

「——お前には——敵わない——」

「そうか。大人しく拘束されてくれると嬉しいんだが」

「——けれど——負けはしない」

……そのとおりだ。

自分の攻撃は通用しない。純粹に、火力が足りない。

「長くやったらわかんないぜ？ 俺の体力切れを狙えば殺せるかもしれない」

「——それほど——時間はない——助けを呼ばれた」

——助け。

誰だかわからないが、なるほど……だれかがやってくれたようだ。ならば、自分もそれに恥じない動きをしなければならぬ。

せめて。

自分だけが対策できる——こいつを確実に仕留めなければならぬ。

そう思い、キャパオーバーを承知で全力でやってやろうと決心し、剣を握った直後、

相手の姿がかき消えた。

「……あ？」

逃げられた、と悟ったのは一瞬だ。相手の生体反応がこつ然とかき消えた。どこへ行ったのかはわからない。しかし、ミスった——逃してはならないやつを逃してしまった。

それを惜しみながら、未だに流れ続ける血を拭って視界を確保した。

突然視界に入ってきた光に目が眩み、少しだけ慣れるのを待つ——悠長なことをしている余裕はないだろうが、しかし確認しなければならぬことがあった。

目が慣れてきて、ちらりと地面に目をやった。少し離れた位置に、潰れたなにかが落ちている。

「あ——やっぱり、目か」

なにか、踏んだもの。なんなのかを考えた通り、それは自分の眼球だった——最悪だ。もう治る見込みはない。

「ヒーローになるってこういうことなんだろうな——」

怖くて泣きそうだ。最悪だ。なんでこんなことになったのか、それがわからなくなる。けれど、同じ状況に囚われているのは自分だけではない。

自分が気絶させた二人。

ちらりと目をやって、すぐに逸らした。

「……ガチで上、裸じゃねえか……」

自分が捕まったときにこうなったのだったか。弱点を伝え忘れた自分のミスだ。ならば、目を失ったことも自業自得——だろうか。

しかし、まあ……恥ずかしかっただろうに、自分のためにこうまでしてくれた二人には感謝以外の言葉がない。近くに落ちていたシートを掛け、最低限露出を避ける。着せるのはさすがに変態扱いされるだろう。

「……さて」

二人を放つていくわけにはいかない。が、自分ひとりでは担いでいけない。ならば動けない。

わずかに個性を発動し、連絡できないかを試す。電気系の個性持ちは死んだ——となると、あれが通信を妨害していた可能性だってある。

「……………」

『はい!?』

「……雄英一年A組、上鳴電気です」

『上鳴くんね! ひよつとして通信を妨害してたやつは倒したの!』

「偶然ですが、倒しました」

『ナイスじゃん! 今増援に向かっている! あと少しで着くわ!』

「はい、わかりました! 意識不明のやつが二人いるので俺は動けません、できればいいのでだれか一人お願いします!」

『……了解!』

それで、通信を打ち切った。個性の使いすぎか、血の流しすぎか、そろそろ正常な思考ができない。自分の意識すら怪しくなってきた。なにか、止血するものはないか。服の袖を怪我に押し当てる。今意識を失うのは不味い。さっきの放電が抜けて、起き上がったやつが襲いかかってくるかもしれない。だから、患部を直接圧迫する。

「……………」

足に力が入らなくなった。心臓が早鐘を打つ。あれ、これヤバいかも。ふと忘れていた痛みが襲ってきて——

◇

腕の肉を噛み千切られた。

痛みはほとんど麻痺しているが、だからといって突然の凶行に判断が追いつかない。

「……暴走しやがった」

茶味が小さく言った言葉を、緑谷は聞き逃さなかった。どういふことかと視線を向けようとして、

「集中しろ！ 今は見境なく全員殺しにくるぞ！」

その言葉に、視線を元へと戻す。

先程自分の体の一部だったはずの肉を小さく噛みちぎり、彼女は嬉しそうに尻尾を振った。

その喉がゆっくり動いた。肉を飲み込んだ瞬間、目を見開き、その体から力が抜ける。異変であるとすぐにわかった。

（——ひよつとして、ワン・フォー・オールが継承された!?!）

となると不味い、彼女の四肢が爆裂するか、それか暴走状態の彼女がワン・フォー・オールまで使ってこちらに牙を向くかのどちらかだ。

どっちにしたって最悪でしかない。

酔ったように瞳が力を喪った。眠たげな瞳が緑谷を舐めるように見た。

「……血に酔いやがった……」

「な……なにそれ!?!」

「お前、バカみてーに強個性だろ!?! そういうやつらの個性因子は姫様にとって度数のキツイ酒のようなもんだ！ だから酔った!」

「嘘だろ……!」

「こうなると見境ないぜ——ここいらで一つ、共闘とかどうだ?」

「……は?」

茶味の言葉を、一瞬理解できなかった。崖から飛び降りてくるそいつは、頭を掻きながらいう。

「姫様はこうなるとリーダー以外谁也を殺しにくるからな。酔いから覚めるまでの間、共闘しよう」

「……だれがお前なんかと……」

「言ってる場合じゃねえんだ。俺一人じゃあ酔いが覚める前に確実に死ぬ。お前一人でも確実に死ぬ。だから共闘する以外の選択肢が

ねえんだよ」

「……………今だけだ」

そう言つて、緑谷は拳を握る。

骨折した足がズレて、コケてしまいそうになる。少しだけ足を上げて、体勢を持ち直した。重心の移動にも気を遣わなければならない。

左腕は二回目のスマッシュで動かすことすらかなわない。だから、右腕だけで彼女を相手しなければならぬ。

——狐の姿がブレる。

一瞬で後ろに回られた。目で追うことすらできない。直後、なんの容赦もなく放たれた尻尾は、確実に人を一人殺して余りある威力をしている。

それを、茶味がその身で受けた。大きく吹き飛ばされながら、一瞬ではるか彼方へと吹き飛ばされ、

その後ろに既に回り込んだ狐の拳が、その腹をなんの抵抗もなく突き破った。

「……………」

「——が——はっ、はははははは！ 嘘だろ、絶好調すぎんだろ！」

おい緑谷、お前の個性強すぎるぞ！ 強化の性能が尋常じゃねえ！」

「んに…………」

「おっと狐さんそこをひっぱられると俺が耳なしチャージになってしまっていたたたたたたたいたいたいた——痛いなおい！ いい加減離しやがれ！」

茶味が狐の腹にその肘を当てる。

直後、弾け飛ぶようにして狐の腹が爆ぜた。

それさえも瞬時に復元される。服はちぎれ飛び、その白い肌が露出している。その体には傷一つない。

いまこの瞬間、腹が消し飛んだことなどなかったかのような有様だ。

ずるり、と茶味の腹から腕が引き抜かれる。血を吐き、穴の空いた腹に内臓が零れ落ちないように気をつけて手を当てて、そして背後の

狐を見た。

——指の先が、伸びている。

「あ」

変身の応用で作ったのだろうか。まるで鉄のように硬化し、大剣のように肥大化し、USJの天井を貫くほど長く伸びた五指がそこにはあった。

振り下ろされる。

ドームを切り離し、遙か遠くの森エリアまで深い溪谷のような傷跡を残し、すぐそばにいた茶味の体を両断し、

——大地に五つの谷を形成する。

「——は——？」

かろうじて直撃を免れた緑谷出久は困惑する。とんでもない規模の攻撃だ。尋常ではない。まずありえない。わけがわからない。

掠っただけの腕の端が消し飛んでいる。どれだけの威力だったのか。その直撃を食らった茶味は、生死など考えるまでもない。

「——あれ？」

◇

目を覚ますと、ぼくの指がなにか妙なものに變化していた。これはなんだろう。変身を無意識に使っちゃったのかもしれない。とりあえず元に戻しておく。

やけに体が熱い。満腹感がある。体に視線を落とす——その途中で、変なものが見えた気がしたので目を戻した。

「あ、茶味だ」

言つて、ぼくは治癒を発動する。体が真つ二つになっている。ひよつとしてぼくがやったのか。体に生命力が満ち溢れている。治癒を発動した——と、いうより蘇生か。

ほとんど死んでいた茶味の体を修復する。意識も同時に。自分に蘇生ができるんだから、他人への蘇生ができないわけがない。とても生命力を消費するが、まるで減った気分にならない。

ぶつちやけ、今のぼくは二十回死んでも平気だろう。そこらへんでようやく枯渇する、と言ったところか。

……いったいなにを食ったのだろう。

と、少し離れた場所に緑谷くんを発見した。

……どう見ても折れた足で立ってるのだけれど、あれはどうやっているのだろう。というか、地味にお腹から内臓がこぼれ落ちそうになっている。なんて怪我だ。

なんでこれで立てるのか、ちよつとわからない。

ぼくの評価は正しかった。緑谷くんはとんでもないほどの狂人である。

走って、近寄る。その体に治癒を使った。折れた腕も、砕けた足も、欠けた腹も、元通りに戻っていく。

しかし、わずかに欠けた腕の肉はもとに戻らなかった。どういこうとだろう。治癒は完璧だったはずなのに。

「……緑谷くん、ぼく、君になんかした？」

「え……いや、……あの……」

反応でわかった。ひよつとすると、ぼくは緑谷くんの腕の肉を食ったのかもしれない。ほとんど意識なんてなかったとはいえ、申し訳なくある。

と、いうかぼくの食人習性が人にバレてしまう。誰にも言わないかな、たぶん言うんだろうなあ、と思っていると、緑谷くんは立ち上がった。

「大丈夫」

「……え……？」

「僕は平気だから」

と、言っただけで彼はどうしようもなく壊れていた腕をこちらに見せる。

「……自分じゃどうしようもなかったんだろ。そもそも、君は治そうとしてくれたじゃないか」

それだけで充分、と言っただけで緑谷出久は立ち上がった。

「その個性が、人に襲いかかるリスクを背負っているとしても……それも全部、活かし方次第なんだよ」

だから、と言って。

「どんな爆弾であつたとして——敵サイランなんかには渡さない」

緑谷くんは、個性を発動する。また壊れるんじゃないかと不安になったが、しかし制御できる範囲まで抑えているのであろう——腕が壊れることもなく、個性が制御されている。

「腕だけじゃなく——足も！」

そして、今度は足にも個性を発動する。

両腕、両足。どちらにも個性が作用し、彼の実力を更に上へとステップアップさせる。

「……さっきの……見たろ……」

茶味も相対して起き上がった。

「暴走のリスクを孕んでいる。一歩間違えれば市民を見境なく殺してしまうような人間だ……！ だからこそ、お前らヒーローには渡せない！」

「そのときは僕たちが止める！」

「無駄だ。彼女は止まらない」

「できなくても止めてみせるんだ。たとえ命に代えてでも」

「そうかよ……じゃあ、共闘は終わりだ」

茶味は個性を発動する。

蒼い鉄球を、自分へと。

弾けるのは閃光だ。周囲を満たす蒼の奔流。その流れが、大地の色を塗り替えていく。

世界が蒼へと染め上げられた。

「——ようこそ、ここが俺の世界」

無限の蒼が連なる世界で、彼は自嘲混じりにこう言った。

「クソほど空っぽの世界だがどうか楽しんでいってくれ」

第23話

爆豪勝己は疾駆する。

先程の巨大な刃がなんだったのか、その正体を確かめるためだ。敵であればそれは仕留める。味方であれば利用する。

だが敵である可能性が高いだろう。クラスの中にあれほどの力を使える人間はいなかったはずだ。故に、あれは敵のそれであると考えるのが一番早い。

「の、はずなんだが——誰もいねえな」

先程、刃が起った場所へとたどり着く。しかしそこにはなんの姿もない。移動したのか、と考えるがそうではないと勘が告げる。

妙な石があちこちに落ちているのを確認した。蒼い石だ——なんなのだろう、これは。周囲を確認し、なにもないことを確信する。なんだ——と、思っていると、何かが近くに着地した。近い。

振り向く——途端、視界が幻惑的に歪む。なにが起こっているのか、と理解するのは一瞬だった。

視界がジャックされた。

相手の個性によるものだろうと考える。この場合、対策はどうするか……それを考え、眩む頭を振る。

……視界がジャックされる、と言ってもあんまり強くはない。精々視界が瞬きすらしていないのに歪むというだけ。ならば耐えられる。

「こんなもので俺が呑まれると思ってるやがるのか——!?!」

純粹に、苦しいだけならばヘドロ事件のときに一度耐えた。そこにわけのわからなさを追加したとしても問題ない。世界が狂っている。自分の眼球がこぼれおちた。しかし視界はある。ならば目はある。まやかした。爆豪勝己はものともしない。

何故なら彼は爆豪勝己だからだ。

——尋常ではないプライドの高さが、気を狂わせることをよしとしない。正面から視界のジャックを払い除け、そして爆破で近づいた。

先程上鳴電気と拮抗していたのは、あれがお互いに素人の戦いであったためだ。しかし爆豪勝己は戦闘力だけで雄英入試をのし上がった男。

プロすら認める実力である。

そんな二人の衝突の結末は——もはや、語るまでもない。

◇

「——相澤先生!？」

広場へと戻ってきた五人は、謎の黒い敵サイランに捕らわれている相澤消太を発見する。その腕は完全に潰れていた。

そのことに、誰もが一瞬躊躇した。

「手エ離せ」

真っ先に行動したのは轟だ。氷を操り、器用サイランに敵の足伝いに体を凍らせていく。腕が砕け、上半身と下半身が断割される——それは即座に修復された。

「あー……戻ってきたか。最近の生徒は優秀だぜ、なあ？ 黒霧」

「そうですね……であれば、逃げられたのも致し方なしということだ」

「それはお前が不甲斐ないだけだ」

「愉快にお喋りしやがって……!」

「待て」

切島が踏み込もうとしたところを、尾白が止める。

「相手の個性がわからない。峰田の個性で先手拘束を狙うべきだ」

「お……オイラか!? マジかよ!？」

「無理ならいい! できればやってくれ!」

「お……おおおお!!」

峰田が、頭のもぎもぎを投げた。死柄木の足元へと落ちたそれを見て、死柄木が首を傾げる。

「なんだその個性……情報にねえな」

と、いつて、死柄木が触る。

その瞬間、誰もが勝利を確信する——しかし、それは勘違い。

もぎもぎが崩壊するように、塵となって消えた。手を払い、死柄木は峰田を睨めつける。

「なるほど……拘束特化。いい個性してるなヒーローの卵は……」

「……死柄木弔。どうしますか？ 転送したところを捕らえる——」

「そうまでして警戒する相手じゃない。脳無で十分だ——脳無。あの子供を殺せ」

脳無と呼ばれた異形は、その指示に従いレーザーヘッドの腕から手を離し、立ち上がる。

近づいてきたところを——轟が、全身を氷漬けにして動きを奪った。

それすら物ともせず——全身がばらばらに砕けることさえ気にもとめず、そのまま動く。砕けた端から再生していくのだ。

勝てる予感がしない。死ぬかもしれない——と、思う。

高速の移動。それを、肌で察知した切島が一步前に出て、可能な限り体を固め、その身で拳を受けた。

天井まで吹き飛ばされる。

拳を受けた前面は粉々に割れ、血が溢れ出た。辛うじて意識は繋ぎ止めてはいるが、しかし思考力は定まらない。呆けたように、何が起きたかを理解できなかった。

直後——激痛。当然だ。大怪我なのだ。体が割れるなど、通常ではありえない傷である。五体満足なことをなによりも喜ばなければならぬ。

落下する。

そこを、蛙吹梅雨が舌を伸ばして確保した。

「危ないわ」

「……サンキュー、梅雨ちゃん……」

ゆつくりと地面に降ろされる。震える足でなんとか立ち上がり、そして吐血した。心配そうに眺める蛙吹に指を立て、切島は立ち上がった。

た。

「あの威力……尋常じゃねえ。あと三発も受けたら不味いな」

「命を捨てる気か」

「俺は盾だからな」

「誰かが死んだら負けだ」

「だが俺以外が受けると危ないだろ……大丈夫だ。まだ耐えられる」

「……わかった」

死ぬな、と言って、轟は氷を放った。今度は一切容赦しない、極大の大氷結だ。レーザーヘッドを巻き込まないように制限してはいるが——それでも、可能な限りの最大出力。

それを、脳無は正面から殴り碎く。

いかに強度があつたとしても関係ない。オールマイトと戦うことを想定して設計されているのだ。

オールマイトができることを、できないわけがない。

「……全然効かねえ」

「切断には弱いんじゃないのか!?!」

「たぶん耐性がある。特大の火力があれば抜けるかもしれないが……物理的な攻撃は基本的に無力だと思っぜ」

「じゃあ俺たちじゃあ勝てねえってことじゃねえか……!」

その会話の中で、峰田がもぎもぎをばら撒いた。相手の足場を制限するように配置されたもぎもぎは、迂闊に動くことを許さない。

「……ナイス峰田!」

「……す、すまねえ……俺にはこれくらいしか……」

「それを言ったら私は今何もできてないわ峰田ちゃん。そんなに気に病まないで」

「……爆豪や、緑谷ほどの火力があればあるいは……」

「ないものねだりだ。俺らのできることを考えよう」

「あれ? ——つーか尾白は?」

だれも気づかなかつたが、尾白がいつの間にかいなくなっている。どこにいるのか——と考えると、脳無の向こう。死柄木弔と呼ばれた男に、ワープゲートの男と対等に渡り合っていた。

その背後にはイレイザーヘッドの姿がある。

「……相澤先生を……！　なるほど、……梅雨ちゃん！　尾白の補佐に回れるか!？」

「ええ……でも切島ちゃん。さつきみたいなのがあつたら……」

「そのときは俺がカバーする。蛙吹、先生を助けに行ってくれ。くれぐれも、触られないように気をつけてな」

「……わかったわ」

「お、オイラは!？」

「待ってくれ。相手に個性が通用するかどうかを見てからだ」

脳無が動いた。もぎもぎを上から踏みつける。そして、足をあげようとする——その足は、地面に粘着されているままだ。

「……つ、通用する……?　オイラの個性、通用してる!？」

脳無は地面を引つ剥がし足を持ち上げた。

「通用しねええええ!？」

「相手が悪かったな」

「……でも、姿勢が崩れてる。ひよつとするとお手柄なんじゃ……」

鬱陶しかったのか、脳無は自分の足をもぎ取った。

その足が再生する。

「卑怯くせエな」

「……再生にも限度があるだろ！　轟、できる限り相手の体を凍結させ続けてくれ！　峰田も撒けるだけバラ撒いて!？」

「わかった」

「お、おう!？」

——ヒーローはまだこない。

◇

回避すら厳しい弾幕を掻い潜り、振るった拳は片手で止められる。

放ったぶんの威力をそのまま跳ね返すように、横に放り投げられる——

——地面に小規模なクレーターが出来た。その速度で、地面に叩きつけられた。

幸い弾かれ浮き上がったので、空中でむりやり体勢を直して着地する。相手の個性が変化したのか、明らかに先程よりも許容可能な衝撃量が増している。

だが、その考え方は適切ではないかもしれない。なぜなら先程見たからだ。体が真つ二つにされていたのを。だからこそ、わかる。

許容量以上は吸収できないのではなく——もともとダメージを跳ね返す能力だとしたら？

あるいはそういう性質へと変化したのかもしれないけれども……その解釈が一番しっくりくる。圧倒的再生力のせいで吸収されているように思えるが、しかしあくまでその程度。

だからこそ、下手に100パーセントは放てない。下手に放ったが最後、その威力をそっくりそのまま返される——いや、おそらく一度返された。

先程は幸いなことに、内臓が露出する程度で済んだが……次直撃すると、どうなるかわからない。それこそ、腹が弾け飛び、死ぬかもしれない。

そう、さっきのは運がよかった。

茶味は弾幕で自らの身体を守っている。突っ切るには被弾覚悟でなければならぬ。しかし頭蓋骨程度容易に貫けるだろう鉄球の旋回だ——ひよつとせずとも、踏み込めば死ぬかも。

「どうした！ こないのかあ!？」

「はっ——！ 冗談！」

ワン・フォー・オールの出力、8パーセント。体が軋む。まともに動くこともできない。だが動けないほどではない。

(なんだこいつ、速度が上がって——!?)

茶味は、あつという間に近づかれた緑谷に対応することができなかった。顔面へと向かってくる拳をガードしようとして、——直後、その左拳が炸裂する。

「——スマッシュユ！」

それは100パーセントの力だった。確実に顔面へと叩き込めるタイミングだった。故に、博打に出る。問答無用の100パーセント

で、顔面を殴り飛ばした。

茶味の体を遠くへと弾き飛ばす。すぐに起き上がった茶味のもとへ、緑谷は既にたどり着いていた。

「—— Detroit ——」

「ヒーローにい——」

「——スマッシュ!!」

「負あああけええるうかああああああああ!!」

放たれた100パーセントに合わせるかのように、茶味は右腕を振りかぶった。

互いのスマッシュが炸裂する。顔面を叩き潰すかのような勢いで放たれた拳は、先にダメージを食らっていたぶん茶味のほうが力で押し負けている。

「ううううううがああああああああああ!!」

「ああああああああああ!!」

そして、互いによるめき、

「—— 1000000パーセント ——」

壊れた右腕を構えている緑谷が、尋常ではないほどの力を右腕に込める。先程までの、100パーセントとは確実に違う。

そんな、とんでもない威力の攻撃。

「Detroit おおおおおおお——」

それに対し、茶味は先程食らったダメージをそのまま返そうとし、視界の眩みが一瞬動きを止める。

ああ、ここまでかクソツタレ。茶味はこころの中で毒づいた。口が血まみれだ。せめてもの抵抗に緑谷を正面から睨みつける。

「——スマあああああああッッシュ!!」

そして、右腕が放たれた。



右腕はもう、蘇生レベルの修復をしないと元に戻りそうにはない。あるいはそれ以上に生命力を食われるかもしれない。そんなレベルでの怪我になっている。

緑谷くんの怪我を見て、ぼくはそう思った、

茶味が組み上げた蒼の空間は解除され、周囲は先程の模様がある。ぼくは周囲を確認した。

……誰かが近くに倒れている。誰だろう。わからなかった。どこにいるのかすらわからなかった。必ずどこかにいるはずなのに——

—そう考えて、まずは緑谷くんを治療しなければならぬと考える。ここで治療をしないのは不自然だからだ。緑谷くんに対しては慎重に、仲間を装わないといけない。

敵対を考えたとき、ぼくでは緑谷くんに勝てない。それがわかりきっているからだ。先の戦いを見て特にそう思った。

治るかもしれないからといって、躊躇なく腕を破壊したのだ。しかもそれを平然と行う。

……先生にも似た恐ろしさを感じる。ひよつとすると、オールマイトもこういう人間なのか。そう考えると、とんでもなく恐ろしい。

「……大丈夫?」

「あ……死染さん。ありがとう。でもまだ動けるよ」

「……ほんと?」

「うん。そのために足もある。左手もがんばったら使えるし、だからあと八回は100パーセントも使える」

「……そ、そうなんです?」

なにこのこわい。

ぼくがこうまで怯えるのは異常だぞ、と思いつつ、治療を発動した。だいたい蘇生四回ぶんほどを利用し、完全に体を治療する。今の彼の体力を消費すると危険なので、ぼくの生命力で補った。だからそのぶ

ん、消費が大きい。

あ、でも回復事故を装って殺せたかもしれない。なんて思いつつ、ちらりと茶味を盗み見る。

意識はあるらしい。ただ、体が全く動く気配もない。それだけ強力だったのだろうか。

やっぱり緑谷くん怖い。

「……広場に戻ろう。相澤先生が心配だ」

「……うん。わかった」

ぼくは緑谷くんの言葉に返事して——そして、いつのまにか茶味の頭を膝に乗せている姿があることに気づいた。

まったく気配がなかったそれは——見覚えがあった。茶味の母親の姿をしている。

ぼくが先程感知した、正体不明の人物の正体だった。

緑谷くんは警戒して拳を構える。そのことに、まったく反応を見せずに、茶味の母親は言った。

「バカ息子め」

それは、彼女にしては珍しく、言葉に寂しさを滲ませていた。頭を撫で、そうしてその唇に唇を落とす。

彼女はにっこりと笑い、こちらを見る。

「ねえ、ジョンちゃん」

「……はい」

「……死染さん？」

「もつとあなたとお話したかったけど……それももう最後。このバカと、娘のこと、よろしくね。——さよなら」

「……え……う？」

即座に、緑谷くんが身構えた。しかしそれは意味もない。茶味に溶け込むように、彼女の体が消えていく。

——それは幻想的な光景だった。蒼が空に立ち昇っていく。彼女の体が解けていく。

最後に茶味に口吻して、彼女の体は完全に、鉄球へと変化した。

「……………なにが」

緑谷くんが理解の追いつかない、と言った表情で呟いた。その視界の中で、茶味が目を覚ます。

「……クソババア」

茶味は、鉄球を構えた。

黒い鉄球は、触れた瞬間にその色を変え——そして、なによりも眩いような、純白へと変化する。

「男の決着に水差しやがって……まったく風情のわかってねえ」

顔を上げた茶味の目には、涙が溜まっている。しかしそれは決して零さないようにして、茶味はその鉄球を放った。

自らへと。

その瞬間、世界は純白に包まれた。

第24話

世界を満たす純白が、空を塗りつぶした。世界すらも呑み込み、世界を新しい姿へと変質させる。

そこに死染妖狐は弾かれたらしい。つまり、これは完全に一对一の勝負。

どういう事情かはわからないが、緑谷出久はその超常現象を観測していた。なにが起きているのかはわからない。だが、一つだけわかることもある。

——相手にも、譲れない何かがあるということ。

相手からすれば、死染妖狐はそれだけ大切な存在であり、そして先程の母親と呼ばれる存在曰く——彼女は、サイラン敵の中ではそれほど酷い扱いを受けていたわけではないらしい。

実際、彼はどれほどボロボロになっても立ち上がろうとしていた。それだけ譲れないなにかがあるのだと、その姿が教えてきた。

なるほど、認めよう。サイラン敵ながらあっぱれ天晴だ。だからといって、彼らを許すわけにはいけない。

彼らは罪を犯しすぎた。だからこそ、緑谷出久は——理解をしつつ、相手の前に立ち塞がる。

世界とは残酷にできている。どれだけ頑張ってもそれが報われるという保障はない。こうして戦うことになる以上、どちらかが負け、どちらかが勝つ。

仕方のないことだ。

だけれど、一つ思う——誰もを救えるヒーローは、その重圧に向かうとき、恐れを吹き飛ばすためにこうするのだ。

緑谷は笑った。拳を構え、笑う。守るべき対象を背中に、負けるわけにはいかないから。

恐ろしい——敵は強大だ。形振り構わず、命すら賭してまでこちらに全力でぶつかってくる。だけれど、負けるわけには——負けてやるわけにはいけない。

ヒーローとはそういうものだ。

「——ありがとう。最後まで、守らせてごめん」

蒼から変化した純白の髪を揺らす茶味が、俯いたままいう。顔を上げたとき、そこには決意の瞳があった。

「——だから、せめて——お前は俺に倒されろ」

「……できない」

「だろうな。もうわかった。お前は強情だ。譲るようなやつじゃない。それが敵連合俺たちにとって、なによりも脅威だから……だからお前はここで断つ」

茶味は言う。

「たとえ命を燃やし尽くしても」

受けて、緑谷は言った。

「最高のヒーローってのはさ……敵をヴァイランやつつけるだけじゃないんだと思う」

笑みは保って。一粒汗がこぼれ落ちた。当たり前だ、先程とは違う緊迫感。相手も本気だ。戦えば、やられるかもしれない。

「……」

「相手の信念に対して正面からぶつかれる人じゃないといけないと思う」

「……」

「だから——僕が勝つ！」

「……」

茶味は、鉄球をばら撒いた。触れた地面が光り輝く。鉄球は動き、文字を形作った。

「言葉の力は軽んずるものじゃない」

——刻まれる。世界に干渉する言葉が。

「自分の言葉で潰されないように精々気をつけろ」
重力が倍加した。

「——!?!」

足で耐えきれなくなり、一瞬膝をついた。ワン・フォー・オール——駄目だ。足と腕では間に合わない。どうするべきか。

判断しかねているわずかな間に、白は胎動する。地面から伸びてく

る光の奔流に対応するために、拳を放ち、

それが腕をすり抜ける。

体を肩を刺した。こちらの攻撃を回避し、相手側からの攻撃は刺さる。卑怯だ、と思う間もなく、光は脈動しこちらへと向かってくる。

(どうすればいい)

考える。どうするべきか。いや、殆ど体が勝手に動いていた。考えるまでもなかった。

(――全身へ)

全身へとワン・フォー・オールを発動する。体をまんべんなく強化し、バランスの悪い状態を脱却する。

重力の増した空間でも、それにより立ち上がることができる。

襲いかかってくる光の槍を、間一髪回避しつつも、一先ず距離を詰めなければ始まらない――走って、距離を縮めようとする。

「甘いぞ」

と、茶味の声。どこからくる――全方位を警戒する。しかし攻撃が来たのはその何処でもなかった。

体の中から光の槍が飛び出し血を溢す。同時に血を吐きながら、全身に張り巡らせたワン・フォー・オールも途絶え――地面へと縫い留められる。

「や……ば……っ」

と、焦燥する間は一瞬。

腹の下から生えてきた光の大槍は、緑谷出久を貫き遙か天高くへと聳え立った。

◇

「悪く思っなよ」

茶味は手を翳したままの体勢でそう言った。視線は未だ、緑谷出久に向けたまま。それは彼を明確に脅威だと認めているからであり――そして、だからこそ、万に一つも緑谷の勝ちはありえない状況だった。

体の中で母親の残響を感じる。母親は自分の命をすべて個性に融かし、茶味へと与えた。茶足の個性はエネルギーを溜め込むことが主になっていくが、実際はそうではない。

わけのわからない存在になる。それが一家が代々繋いできた個性だった。だからこそ、血に親和性のある母親の力は茶味に取ってなによりも受け入れやすいもの。

母の個性は先述した通り、なにかわけのわからないものになる個性。だからこそ、一家は代々怪物扱いをされる。自らも通った道だ。母も同じであると聞いたし、娘もそうだった。

一家の宿命とも言えるものか。

正常な人間の誰からも嫌悪される怪物になる。そんな宿命。

だから個性の能力もグロテスクに出来上がっている。自己再生能力が高く、脳みそだけになっても生き返ることができる。名状しがたい異形へと変化することもできる。見たものの正気が喪われるような、悍ましい姿。それが一家代々の本性だ。

液体状の、名状しがたい怪物。そんなもの、だれにも受け入れられるわけがない。そんなの当たり前だ。自分だって敬遠するだろう。だって、化け物じゃないか。

だから自分は力のすべてを封印した。

そんな一家に生まれ、母親は早くに気を病んだ。狂っていないと世の中は生きづらいから。だから人になることを学んだ。

父親が異端排斥の結果死んだと、伝聞で聞いていたから。

人にならないと、人に殺される。だから人になることを強いられていた。母親の母親——即ち祖母に当たる人物は、母親を育てている最中にどこかへ消えた。

帰ってきたのは頭だけ。頭をもぎ取られ、送られてきた。だから母親は一人で暮らすしかなかった。

ヒーローは、いなかった。

だから、母親は自分を守るために、普通の人のように生きて——結果、茶味という男が生まれた。

優しい人だった。口ではクソババアだのと言いながら、なによりも

尊敬していた。

そもそも母親は見た目は全く変わらない。だからババアと呼ぶには厳しいものがある。液体の要素を濃く含んでいる家族は、成長のある一定段階になると成長が停止するのだ。

だからこそ、母親も娘もどちらもある一定で成長が止まるのだろう。自分は違う。ただ、少しだけ異端の成分が混じっている。

母親からすればこんな息子はまったく別人の子供のようだっただろうに、よく育ててくれたと感謝さえしている。そんなことを思っているから、どうしても謎なのだ。

——なぜ自分のために、命を捨てたのか。

視線の先で緑谷出久が蠢いた。なんだ、と視線を向けると、緑谷は光に触れ、

「——そんなの、愛しているからだろう……!?!」

——へし折った。

◇

光を通じ、相手の思考や感情が流れ込んでくる。だからこそ緑谷出久は立ち上がった。

そうせずにはいられなかった。相手のどうしようもない勘違いも、怨嗟も、全てを受け止めて、正面から打ち破ると宣言した以上——緑谷出久には、立ち止まってられない。

「おおおおおおおおおおお——!」

「光、なのに……! なぜ砕ける!」

「ほんとに光なら触れるか! はつきりわかった、その個性! ——いろいろなエネルギーを操作して器用にあれこれ作ってしまうんだ! だから、イメージが強固になる瞬間でなければなににも触れれない……!」

光の槍が襲いかかってくる。問題ない。発生からまだ数秒だ。イメージ力を源泉としている以上、これは自分に刺さらない。

一度刺さった場所から体内に感染するが——だからといえ、体の

中にあるぶんの力を使い切れれば、再びその中に補充するまではダメージが通らない。

イメージを固め、こちらに襲いかかってきた光の槍は——そのまま碎ける。蹴って破壊した。足を止めるな。まだ走れる。

「……なんでだ……!？」

「強固になれば——こつちも触れる」

「……ちい……!… 能力の把握間違いか……!…」

光の壁を作り上げる。だが遅い。イメージが完成し、壁の中に閉じ込められることを恐れずに緑谷はそこを突つ切った。そして、そこには茶味と彼を阻むものはなにもない。

「——5パーセントデトロイト——」

光の壁の建設は間に合わない。これはそのまま受けるしかない。だがこの拳に危険性は感じられない。ならば耐えられる。

そう、茶味は判断した。

「——スマッシュユー！」

——だが、痛む。

殴られた頬がひどく痛む。先程より威力は弱いはずだ。何故ここまで痛むのか——そう考え、今の動きが振り下ろしの物であることに気づく。

強くなった重力のぶんの力さえ利用した——と、いうことか。

自分で作り上げたフィールドの特殊効果が自分に牙を剥く。なるほど、自分に相応しい間抜けな敗因だ。だがしかし、それにしても先程よりは弱い。

「——負けねえ……!…」

今の衝撃を跳ね返す。着地した姿に、拳を振り上げる。だがその姿がかき消え、躊躇した。

「——スマッシュユー！」

今度は、後頭部。

衝撃が走り、そのまま足が地面から離れてよろける。だからといって、倒れられない。何とか耐え、再び視界から消えた姿を探す。

「どこだ……!… どこに……!…」

「……だよ」

背後——いや、上か。

下から殴り上げられた。その隙に再び姿を消す。

全く見つけられない——どういうことだ、と考える。先程までは、こういうことはなかった。どうしてここまで翻弄されている？

——速くなっている。

相手の動きが、速くなっている。どんどんと速くなっている。目で追えない速さになってきている。さらに、相手の死角へと入り込む動きで行動を完璧に隠蔽していた。

「……成長……か……!?!」

光の壁を建設する。攻撃を躲すためだ。しかし、完成した瞬間に蹴り壊された。かなりの強度で作ったはずだ。何故このようなことになった。

「——15パーセント」

聞こえた言葉は、明らかに出力を増した数値。

「——この——反則野郎があ——!」

「デトロイト——スマッシュ!」

明らかに、威力の増した威力が突き刺さる。100パーセントよりはマシだ。だが、それも何度も受けているとダメージは蓄積する。

いや、むしろ大きく反撃が狙えるぶん、100パーセント一発のほうがまだ受けられる。だからこそ、こうしてそこそこの威力を連発されると——体が耐えきれなくなる限界が近いだろう。

光を大きく振り回し、全方位を300キロの光の刃で薙ぎ払う。それも、空中に出ることで回避され、そして顔面を打たれる。

血を吐き捨てた。

「戦闘の中で成長する……! いいよなあ! 才能のあるやつつてのは! 俺たちは成長できずに燻ってんのに! いいなあ! ずるいなあ!!」

「——僕だって」

ワン・フォー・オールの出力はますます増していく。体が耐えきれぬ限界? そんなのもうとづくに超えている。筋繊維が千切れる音

が聞こえている。100パーセントのように一気に壊れていないというだけで、全身の出力が増していくことに体は悲鳴を上げている。

——35パーセント。

崩壊は加速する。だがそれで動く。まだ動ける。四肢は爆裂してないからだ。制御を失敗すると体が弾ける？ そんなの考えている暇はない。

「——才能はなかったよ!!」

——腕の出力、50パーセント。

「——デトロイト——スマッシュユ！」

緑谷は放つ。充分緑谷の限界を通り越した一撃を。度重なるダメージの蓄積で満身創痍な茶味の体は、その拳が嫌に芯に響いていた。

「——それは悪かったな！」

反撃の拳が振られる。空気を破壊する恐ろしい一撃だ。しかしそれも怖くはない。耳元を掠めていった。鼓膜が破れる音がする。

「——50パーセントおとおお——」

「させるかよ」

腹の下から、光の槍が放たれた。それは大きく緑谷の体を後ろに突き飛ばす。距離を取られた。

「——デトロイト・スマッシュユ！」

だが関係ない。そのまま放った。風圧が体の形に。茶味の頬を打ち付ける。

拳が痛む。限界を超えすぎた。50パーセントを解除する。腕はもう、痛覚の塊のようになっていく。痛みはまだ超えていない。

ならばよし。光の槍を腹から引き抜く。どろりと血が溢れた。もう何度血を流したかわからない。

狐の治療が血の量まで再生していなければ、間違いなく死んでいく。

「負けねえ……! 負けられない……! 俺の思いだけじゃねえんだぞ?!」

立ち上がれ……茶味! お前の足は何の為にある!?!」

風圧で殴打された腹部を押さえながら、傷ついた体に鞭打って茶味

が立ち上がった。

「——光」

その言葉をきっつけに、全身を光が満たしていく。茶味という主のために集まっていく。

ほとんど動かない体を、能力を利用して無理やりに動かそうとしているのだろう。まるで、自らを操り人形にするかのごとき行為。

緑谷の体にある光が炸裂した。ついに体の中から痛覚が消えた。だけれど、かわりにこの体を突き動かすものがある。

——光を通して伝わってくるのは、茶味の感情と、決意。

封じ込めた在りし日の過去。

救いを求めるように鮮烈に流れてくるそれに、緑谷はもはやまともに動かせない体を操って迎え撃つ。

相手のわだかまりを打ち砕くために。

——ワン・フォー・オールが、わずかにその輝きを増した。

第25話

人生は生まれた頃からレールが敷かれていて、テキトーに生きてもそこから逸れることはない。

そういうものだと思っていた。

すべては大いなる流れに導かれ、その流れに逆らうことは愚かしいことである。

そういうものだと思っていた。

だから、全ての行為にも感情にも感傷にも意味はなく。ただ一つの在り方として、いずれ滅び行く星の一人として——ただ、その流れに従うように生きる。

そういうものだと思っていた。

——そんなことを考えたのが、幼稚園を卒園し、小学校に上がってすぐだったか。

どこまでも人間として不完全な一家に生まれた以上、賢くならなければ死んでしまうような人生だった。だからこそ勝手に賢くなつていったし、世界の成り立ちまで勝手に想像した。

世界には愛だとか、恋だとか、そんな上っ面のものは一切なくて、どいつもこいつも自分勝手な生き方しかしていないものだど悟ったのは小学校二年生の頃。

ヒーローになるんだ、なんて漠然とした夢を語る少年少女が、その実彼を化物と呼び、排斥する。ヒーローなんて上っ面のものではない。どいつもこいつも大層な理念ばかり口から吐きやがって、実際のところなにも考えちゃいない。

空っぽだった。

すべてのものがからっぽだった。だからこそ、彼——茶味からすると、ヒーローなんかに意味はなく、どいつもこいつもろくなものではなく、死んだほうがいいとさえ思える——そういうものばかりだった。

頭の中がろくでもないやつらに、茶味は興味を示さない。争いは同レベルでしか起きない。茶味は周囲と比べ早熟だった。早熟の天才

だったのだ。

だからこそ、自分が存在することで周囲が勝手に狂っていくことに気づいていたし、それをわかっていたいなにもしなかった。

それが間違いだと知るのは——遠い未来のこと。

◇

ワン・フォー・オール、出力5パーセント。制御は安定しない。もともと制御を手放し、ここですべてが終わってもいいとさえ思えるほどに自暴自棄になにもかもをかなぐり捨てた結果、先程のように制御しきれない——扱いきれない段階まで、止まることもなく行ってしまったのだ。

だから制御できなくてもいい。全身に張り巡らせたワン・フォー・オールが、その生命の鼓動に対応するように脈動するのを感じながら、緑谷は拳を握る。

……いや、握れない。わずかに指を動かすので精一杯だ。だから、これはもうほとんど死に体と言って差し支えないだろう。だが、それでも気合で拳を握った。

対する相手は、まだ健在。体はかなりダメージこそ来ているだろうが、未だ自分のそれに比べるとマシなレベルだ。

結論。圧倒的不利——だ。

足こそ壊れていないが、腕はもう駄目だ。ろくに扱えない。蹴りを主体にした動きでいこう、と考え、踏み込む。

敵との距離は幸い遠くはない。光の槍は恐ろしくはない。イメージが形作られるまで、六秒ほど猶予がある。そこを突ければ突破できる。

ひやひやさせられるが——しかし、実際にノーダメージで抜けられる。

「おおおおおおおおおおああああ!!」

下から、蹴り上げる。光を扱うことを中断し、その蹴りを掴んだ茶味の拳が体を打つ。血を吐いた。ダメージは深刻だ。

そしてそんな状況なのに、相手は徐々に力の扱いに慣れてきているようだ——光を操ることに固執せず、機転を利かせた咄嗟の格闘。——拳を通じて、記憶が流れ込んできた。それは彼の歩んできた血みどろの記録と、それに至るまでの物語。

◇

「母さん。俺の髪、どんどん黒くなってるんだよ」

「へー。偉いじゃん。バカ息子のくせにしつかり制御できるようになってきてるのね。この調子だと、人間になれるのもそう遠くはないかも?」

「……そうだといんだけどね」

化物一家に生まれた少年である茶味は、人間に紛れ込むことができるように、その髪の色をゆっくりと変質させていく。

蒼から、黒へ。黒はあくまでも力を制限した状態だが、その状態であればまだ人間に近い状態である——ということである。だから、蒼を封印し、二度と扱わない。

母親と、茶味の誓いにも似たものだった。そして、これから続く家系には生まれたときから黒になるように、ゆっくりとその力を弱く、弱くしていく。

それが母親の望みだった。黒でもまだ化物として進行は進むが……だが、それでも蒼よりは遥かにマシだ。

学校では、今日も今日とていじめが続く。黒に近い蒼であるその髪は、やはりまだその効力を持っていない。担任から見放され、茶味は孤独な日々を過ごしている。

……否。まるつきり孤独、というわけではない。

思考回路が狂っているのか、茶味に話しかけてくる女子がいるのだ。彼女はどうにも明るい人物で、全ての人に平等に接するような、夢から覚めていない——言わば夢遊病患者のような女だった。

いや、それは正しくない。どちらかというと世界を明晰夢であると勘違いしているような女だった。だが茶味はその女の馬鹿らしさが

なによりも心地よかった。

だから、いじめなんて平気だった。

「いたい」

個性の訓練、と評し、サンドバッグにされるのももう慣れた。痛みなどとうに感じてはいないが、それでもひどく出血しているのだ。それくらいは言わなければ、気味悪がられると思った。

「やっぱり俺の個性が一番強いな！」

「えー!? 俺だし！」

そう言つて、放たれるのは水。体を引き裂き、小さく出血する。

「いたい」

これもまた、痛くはない。こんな傷は一分もあれば余裕で治る。だからこそこのような役に抜擢されているのだから。

と、いうか。茶味は思う。流石にどいつも個性が弱すぎるだろ。やる気があるのだろうか。

少なからず半身を引き裂かれる程度の目にあつたことがある以上、このくらいならば全然普通に耐えられる。だからこれは、ただの子供のストレス発散に付き合っているだけ。

そこに彼女がやってきた。

「ごらー! いじめはやめなさい！」

「うわ! 出やがった！」

「さーて、私の拳骨を喰らいたいやつはだれかな……?」

「逃げる! 頭が二つに割れちまう！」

去つていくいじめっ子たちを見届けて、彼女は嘆息する。

「どいつもこいつもいくじなしね」

「……………だから、俺に構わないでいいって」

「せっかく助けてあげたのにその言い草は酷いよ。喜んでくれない?」

「お前のそれは善意の押し付けだ」

「そんなんじゃないわよ! 私はただ、あなたと仲良くなりたいたいだけ」

「十分仲良しだ。これでいいか？」

「よくない！」

はあ、と今度は茶味が嘆息し、

「この世の中には馬鹿と阿呆と愚図という三つの病がある」

「そうね、あいつら全員が罹ってる病気だわ」

「それならお前は重症だ。自分が含まれてないと考えてる時点で三重苦」

「えー？ でもヒーローならみんな、これくらいやるでしょ？」

「……………」

今どき珍しい、まともにヒーローに憧れる少女だった。言葉に裏表のない、あけすけな女の子だったと覚えている。

だからこそ、茶味のことを気味悪がらなかったのだろうか。いや、そんなのは関係ない。すべて偶然だ。

……いや、偶然か？ 母親でさえ結婚し、子供を生んでいる。父親の顔こそ見たことはないが、恋愛結婚だったと聞いた。

ひよつとすると、自分を恐れない頭のおかしなやつが世界にはもつといるのだろうか。

——そんなことを、思ったりした。

そんな少女が消息を絶つたのはそれから二日後。

半年後、彼女は死体で見つかった。



——知っている。

その記憶を覗き、自らの頭の中に蓄えたデータからどういふ事件であつたのかをすぐに思い出した。

ヒ・ロ・ーによる犯罪。

守るべき市民に手を出し、あまつさえ死に至らしめた最悪の事件。

見つかった少女は全裸で、性的暴行を受けた跡が見られるという事件であり、犯人である男は留置所で発狂死した。

なんとも後味の悪い事件であると、緑谷は覚えていた。

「……………ヒーロー女兒殺害事件……………」

「!?!」

「……その、当事者だったのか」

「なんで、知って——!?!」

落とされた拳を掴み、緑谷は血を吐きながらも茶味を睨みつけた。握力などほぼ入らない体だというのに、その指は茶味の腕にめり込んでいる。どれだけの力なのかは、その傷からは想像もできない。

そして、完全に確保された体勢から、

「——スマ……——ツシュ!!」

痛烈な足が叩き込まれる。

茶味は弾かれ、緑谷はその隙に体勢を直す。壊れているその腕に、強く力が宿る。瞳は死なない。どころか、一層強くその輝きを増している。

その瞳に気圧されるように。

茶味は、一歩だけ後ろに退いていた。

「なんだよ……」

光が放たれる。塊となったその槍を、流れに従うように、体全体で絡め取り、そこから投げつける。それを回避するそぶりもなく、茶味はつぶやいた。

「ずるいだろ、それ」

肩を貫かれ、腕の肉を抉られつつ、涙さえ浮かべて茶味は叫ぶ。

「ずるいだろ!?! お前らどいつもこいつも——!。なんで俺ばかりこんな目に遭わなけりやいけなんだよ! 俺はあの日から、誰が死んでもまともに悲しむこともできなくなったのに……!!」

それは、心が死んだ——ということなのだろうか。

茶味にとって、その事件は過去の自分を殺したものであり、人生のレールを踏み外してしまった日。

少女が死んだと聞いたとき、彼はなにより悲しんだ。

母親以外のだれにも肯定されなかった人生を、唯一肯定してくれたのがその少女だった。彼女のためなら死んでもいいとさえ思っていた、そんな在りし日の記録。

「好きだったんだ」

偽り続けた感情を、吐き出す。

「好きだった。大好きだった。なのに死んだ。クソ野郎に殺された。悲しいよ。悲しいさ。あれ以上の悲しみはないだろうとまで思ってた。なんで俺は最後まで憎まれ口しか叩けなかったんだとまで思ってる……」——お前は

腕の振り上げに、光が呼応する。世界から生み出されたそのエネルギーは、莫大なものだ。当然だ。尋常でないものを創り上げるのだから。

ここは想像の世界。茶味の想像が、全て反映される世界。だから、

——創り出された太陽が、世界に向かって落ちてくる。確実に、世界が終わるどころの話ではないレベルの凶行。

「お前はっ！ お前にはあ！ そんな経験なんてないだろうがッ!!」

「——だからっ！ 他人を同じ目に遭わせていいだなんて道理はないだろ!!」

ボロボロの拳を握る。出来るか出来ないかでいえば——判断が正しくなければ、できないだろう。だがやる。試しもせずに結論づけしてしまうのには、もうさよならだ。

「——デトロイト・スマッシュ」

100パーセントを超えた、許容限界すら超えた拳。それを放つ。茶味に……ではない。太陽に。

本来勝てるはずのないそれに、緑谷は本気で勝利を考え、拳を放つた。まず勝てるはずがない。だが、確信があった。

——これは、割れる。

その確信を裏付けるように、太陽はそのスマッシュにより粉々に砕け散った。

「——な——あ——」

「……太陽がほんの少しでも近づいてきたら、その瞬間人は干乾びて死ぬはずなんだ。でもそうじゃなかった。だから——想像力にも

限界があるってことだろ……！」

「……ちくしょう」

光をかき集める。急いで次の弾を作り出さなければ。槍を作り上げ、放った。

「——クソ、クソ、クソがあ——」

「お前の事情はわかった！ 背負ってるものがあることも、はつきりわかった！ だからといって——お前は人を殺した！ それを許すことはできない……！」

焦りのせいか構成が甘い。速度も出せず、全てを避けられる。緑谷は近づいてきている。早く次の弾を作り出さないと。

地面から鉄球を引っ張り出した。重力の制限が解除される。なにやってんだ。判断ミスだ。俺は馬鹿か、などと心の中でいくら言っても関係ない。

「お前の抱えているもの、背負っているものを全て踏み躪ったとしても……！ それでも僕は負けられない——」

「……頼むから……！ みんなのぶんも背負ってるんだ……！」

「——ワン・フォー・オール——！」

重力の制限が解除され、相手の動きは格段に速くなった。その姿に、鉄球を放つ。自分が最も扱い慣れた鉄球の弾丸は、緑谷の両肩を破壊し、腹に大きな穴を空けた。

「——頼むから、俺に勝たせてくれよ……！」

「——セントルイス・スマッシュ——！」

腕は完全に砕かれた。だが、まだ足は残っている。ならばそれを使えばいい。後先なんて考えるな。

ただ——全力で、確実に。

「……ごめん、母さん……」

上から振り下ろすように放たれた足蹴り。

それは100パーセントの力で以て茶味の意識を刈り取った。

第26話

緑谷くんと茶味が消えてから、ぼくはその場を動くことなくしつぱをいじっていた。

どちらが勝ったとしても関係ない、結局のところ勝利に違いはないのだから。少なからず、茶味にあれだけ苦戦するようなら緑谷くんはそこまで脅威ではない。

ただ——しかし、相手の実力に合わせてその実力を伸ばしてきそう、という懸念はある。いや、間違いなく伸ばしてくる。だから困る。ぼくからして、やはり緑谷くんは戦いにくい部類の相手だ。実力帯が違うが、だからといって負けないとは限らない。

どれだけ強くても、負けることはあるのだから。だからこそ念には念を入れ——弔の言葉に背いてでもいいから、緑谷くんを謀殺しておいたほうがいいのだろう。だがどうする？

周囲を見回す——監視カメラが用意されている。そりやあそうだ。ヒーローの施設だから。だれかが無力化してくれていればいいが、そうでなかった場合にぼくの正体がバレてしまう。

……だれか壊してくれないかなあ、と思っていると、ワープゲートが開いた。周囲のカメラを引きちぎり、どこかに捨てたあと、ぼくの隣に現れる。

こういうとき黒霧の便利さは光るよなあ、と思いながら、ぼくはそちらに視線を向けた。

「なあに？」

「……全ては十全に。そちらは何かありましたか？」

「うーん……ちよつと暴走しちゃったっぽい？ わかんない。けど、そんなに問題はないと思うな」

「……そうですか。こういうとき、どこに目があるのかわからない現状は恐ろしいですね……なるべく私に誘惑ていされるという体を保っていきましよう」

「ん、了解。……ねーえ、黒霧。とむらはどう？」

「……あなたは本当に死柄木甲が好きですね。彼の考えていることは

よくわかりません。……ですが、先生の後継としての成長は確実にしています。本当にオールマイトの殺害を成功させるとまで感じさせてくれますよ」

「そう？　えへへ。とむらはすごいでしょ？」

「ええ。彼こそが王として君臨するに値する人間だ。……どうです？」

「本当にお姫様になってみては？」

「ん……」

黒霧のその提案は、たしかに魅力的だ。だからといえ、ぼくが弔を好いているように弔がぼくを好いているとは限らない。ぼくがオスであることも弔は知っているし、そんなぼくに好かれても迷惑ではないだろうか。

弔とぼくは、どうやっても釣り合わない。弔の眩さは、ぼくを遥かに呑み込んでしまえるものだ。

その光に——ぼくは目が眩んでいるだけなのだろう。羨望し、自分のできないことを弔に求めているだけのような気がするのだ。

間違っているにせよ、合っているにせよ、ぼくと弔じゃあその価値は釣り合わない。そもそも弔にはそんなことをしている余裕もないだろう。だからこそ、否定する。

「とむらにぼくは釣り合わないよ」

「そうでしょうか？　あなた以外に死柄木弔に並び立てる者がいるようには思えないのですが……」

「あのね、黒霧。ぼくは自分ができないことが多すぎるから、勝手にとむらにすべてを求めてるんだと思うよ」

「それは死柄木弔だって同じだ」

「違うの。ぼくがとむらのことが好きなのは、きつとただ心酔してるだけ。とむらはぼくのことを手下としか思っていないでしょ。そんなのが、お姫様だなんてばからしいし痛々しいにもほどがあるよ」

「……お互いにここまで鈍感だとは……」

黒霧は、大きいため息を吐いた。しっぽで地面を叩いていると、空間が割れ、そこからボロボロの緑谷くんと茶味が現れる。

「——あ——死染、さん——」

緑谷くんの方は、ぼくを見て、そして気絶する。二人とも意識がない。

黒霧に視線を向ける。どうするべきかの判断を委ねるためだ。黒霧は、わずかに迷ったようなそぶりです。緑谷くんを見る。

「……………どうするべきか」

それは、殺すべきか、殺さざるべきかという思案だろう。ほどなく、黒霧は結論を導き出す。

「……………殺しましょう。お願いします」

「んー」

感傷なんてない。ぼくは、緑谷くんの手を当てた。そこから、治癒を発動する。

そもそも、治癒とは体力を消費する行為だ。緑谷くんの治癒に消費する体力を先程までぼくが補っていたため、とんでもない重傷でも治すことができたが……………その処置をしない。

衰弱死を装える。

傷が治っていく——と、同時に緑谷くんの呼吸がどんどんと浅くなっていく。この調子でやれば、一分と経たずに殺すことができる。

「——クソモヤァ！ 死ね——！」

爆豪勝己が現れた。

思わず緑谷くんから手を離れた。黒霧を奇襲し、その姿を吹き飛ばす。

「またあなたですか——！」

「……………あ？ クソ耳野郎じゃねえか。それにデク……………。チツ、仕方ねえな。お前は後でぶっ殺してやるから失せろ」

「……………」

黒霧は、無言で姿を消した。それを見届けて、爆豪くんはぼくのほうを見る。

視線がこちらを射抜く——知っている。これは疑心の目だ。心の声を聞いた。完璧にぼくを疑っている。

鋭い……………と思うし、同時にそりゃあそうかと思う心もある。黒霧がいて、ぼくがいたのだ。さらに繋がりがあるときは、はつきり疑われ

るに決まっている。

「……こないだ雄英の防衛機能が破られたな。それはわかる」

爆豪くんの手の中で小さく爆発が起こった。

「が——わからねえのがそれだ。デクの野郎がそこで寝てやがる。見る限り、そこで伸びてる野郎と引き分けたんだろうな。それもわかる」

と、いつてこちらを見た。

「お前、なんで戦ってねえんだ」

「……………」

「……お前が敵の仲間でないんなら、どうしてお前は戦わない」

「……………」

「答えろよ」

……………どうしよう。

これはもう、完璧にぼくを疑っている。内通者の存在なども疑っている。だがこれに関しては……ぼくも、一つ主張ができる。

「一回胸に穴を開けられてさ。蘇生に時間がかかっちゃった」

「……そうか。じゃあ、なんであのモヤ野郎と戦わなかった」

「……ほら、知り合いで躊躇しちゃってさ。でも相手も敵意はなかったっほいし」

その言葉は最後まで言えなかった。

顔を爆破される。それも、かなり大きい爆破だ。生きてこそいるが、それでもかなりの大怪我であることは間違いない。

「ふざけてんのか」

「……………え？」

「お前ふざけてんのか？ おい。この状況で敵意がないだの頭に蛆が湧いたみてーなことよく言えたよ。元はと言えば全部お前のせいだろうが。なあ。なんとか言えよ」

服の襟を掴まれ、持ち上げられる。どうしよう。怒りが心を占めている。これはどうするべきか。頭は回らない。ああ、もう。どうしてこんなときに働かないんだろう。

わけがわからない。これだから人間って嫌だ。全部死んでしまえ。

最悪だ。喉に言葉が支える。吐き出すことを躊躇する。

「……え、と」

「半端な覚悟でヒーロー目指すんじゃないねえ。迷惑かけんな。次ふざけたこと吐かしたら殺すぞ」

「……でも」

「なんだよ」

「……いや、半端じゃないよ……？」

殴られた。左の頬が痛む。手を放された。地面に落ちる。

「もういいよ」

緑谷くんを引つ張って、ぼくの前に落とす。

「さっさと治せ」

「……………」

言われたとおりに、治癒を施した。さすがにここで殺すことを狙うほど馬鹿ではない。体を完治させる。

戦闘の疲労までは回復していない。意識が戻ってくるのはまだ先だろうが、体自体は万全の状態だろう。

「失せろ。雄英辞めて二度と俺の前にその面見せんな」

「……………」

そういつて、爆豪くんは緑谷くんを雑に掴んで持っていく。ぼくはなにをすることもできず、ただ呆然としていた。

……関係はもう、二度と修復できないだろう。最悪かもしれない。この状態で雄英に潜入し続けるのは厳しいかもしれない。

鼻血が溢れていた。治癒でさっさと治す。立ち上がって、ぼくは小さく体を伸ばした。すぐ側で倒れている茶味に治癒を施す。残り蘇生回数は……六回ほどか。やはり他人の治癒は苦手だ。無駄に生命力を消費する。

頬を叩くと、茶味が目を覚ました。狐につままれたような表情でぼくの顔を見る。

体の調子を確認し、手を握って、「駄目だ戦えねえ」と呟いてから茶味は個性を発動する。

個性自体は利用できるが、体は疲労が溜まりすぎてまともに動けな

いらしい。治癒ではそういう部分まで取り除けないからなあ、と思う。茶味がこちらに向き直って聞いた。

「……狐さん、なんで俺を治したんだ？」

「んー……気分？」

「緑谷は？」

「生徒に連れて行かれた」

「おい、鼻血出てるじゃねえか。どうしたんだ？」

「殴られちゃった」

「……は？ 誰に？」

「緑谷くんを持ってった生徒」

「マジか……」茶味は、服を漁りながら言う。「そいつ、自殺志願者かなにか？」

さり気なくぼくをディスプレイしてないだろうか。茶味はポケットからハンカチを取り出した。血の染み込んだハンカチだ。その惨状を見て、数秒固まり、ハンカチを光に包んでこの世界から痕跡すら残さず消し去った。

「いや、マジで自殺志願者だろ……リーダーにぶっ殺されるんじゃないのそいつ」

「えー、とむらでしょ？ ないと思うなあ……」

「狐さんのその自己肯定感の無さはなんなの……？」

そうわけではないが……だって弔だもん。仕方ないね。

『半端な覚悟でヒーロー目指すな』、だってさ。うふふふ、よりによってぼくにそれを言う？ って感じの発言だよな」

なにせ、ぼくは生まれてすぐから自然の中で殺し合いの日々だ。殺さないと生きられなかった。こういう反則的な力があっても関係ない。それはぼくという本質には関係しない。

……ぼくも、人としての生活が長いから、一つだけはつきりしてる感情がある。首を掻きむしって——その皮が破れ、肉が露出し、さら下——白い骨が現れるほどまで掻きむしって、このままじゃ喋れない。傷を修復し、血で手をぐちゃぐちゃに汚しながら、ぼくはぼそりと呟いた。

「苛立つなあ」

茶味がぼくを見て、「リーダーそっくりだ」と言った。その言葉に、ちよつとうれしくなる。

弔にぼくが近づいている気分がするから。だから、それが何よりも嬉しい。口端を指で持ち上げ、ぼくは笑顔を形作る。笑え。にぱーつと。笑い飛ばせ。

「……全員、殺しちやいたいなあ」

今まで関わってきたすべてのヒーロー関係者、それら全てに苛立ちを覚える。ヒーローになるだとか、ヒーローだとか、正直そんなくならないこと。いつまで固執しているのだろうか。

腹立たしくある。

「待て、緑谷は殺さないでくれよ」

と、茶味。どうしたのだろうか。ひよつとして、少しだけ絆された？ いや、ぼくもそのことはあるかもしれないから、茶味にそれを責めることはできないのだけれど。

「……なんで？」

「あいつはちゃんとしたヒーローに成れるからだ。潰すのは勿体ない」

「なにそれ。お願い？」

「……ああ、お願いだ」

「そつか。聞く義理ないね」

蘇生が六回……ということとは、変身はまあ余裕にできる。ならばそうしよう。今の自分の姿でやってはいけないことがある。

ぼくは変身を使用した——作り上げる姿は、昔のぼくがずっと使っていた、へそ出しファッションの女の子。少しだけ増えた髪の毛の量と、耳がなくなっただけにぼくは違和感を覚えつつ、しかし動ける——

——問題ない。

「……そんな顔しないで……」

思いつめたような表情の茶味をぼくは手で捕らえた。その頭を適

当に手で撫でて、言う。

「わかった。緑谷くんは殺さないであげる。その代わりだけどね」
なるべく脅かさないように、ゆつくりと笑顔を形作る。

「プロヒーローも殺しちゃお？」

「……………」

なにが悪かったのだろうか。怯えた顔で、こちらを見る茶味にぼくは首を傾げた。なにがおかしいのだろうか。なにか変かな。わけがわからない。

首を掻きながらぼくは困惑する。

——扉が壊れた。

そこに、オールマイトの姿があった。

「——私が来た」

「あのセリフ、やけに偉そうだよね」ぼくは笑った。「見てるこっちが恥ずかしいや」

◇

ぼくは弔の元に向かった。

「やつほー、とむら」

「……懐かしいな、その姿」

「でしよでしょー？ ちよつといらつとしたから、ぼくも戦っていい？」

「……………」

迷うように、弔が額に手をやった。

なにを考えているのだろうか——いや、わかる。ぼくが戦うことに関してだ。だが、この姿であれば弔のやりたかったことを邪魔しないであろう。

前の姿のぼくの奮闘はきつと緑谷くんが証明してくれる。だからこそ、ぼくは別のぼくに成り代わった。

姿を変えて——こうすれば、弔も許可を出してくれるだろうか。

「……………」

弔は言った。

「餌は自分で取ってこい」

第27話

なんというか、すべてのことに対してきつと正解はないのだろう。ヒーローだなんだと言ってしまったって、結局のところどいつもこいつも浮かれてしまっているだけだ。ぼくにはそうとしか思えない。正義だなんだ、少し皮を剥いてみると見えだすのは汚さだけだ。

全員が全員、ろくでもないやつらでしかない。だからこそ理解できない。ヒーローと言う存在の意味を。意義を。まだ自らの心に忠実なぶん、自分たち敵のほうワイランが100パーセントマシだ。だからこそ理解解しない。興味もない。

肯定もしない。だが否定する。いわば心の中まで暴いてしまう自分が異端なのだろうか。あるいはそうではないのか。思考を紐といていけば、果たして本当にそこに答えはあるのだろうか。

いや、ない。あるわけがない。腐った論理を切り落として、人は呼吸を続けなければならぬ。それは言わば終わりのない遠泳。ただ疲れ果て、死に至ることを待ち続けるだけ。

人生なんて、ろくな意味を持っていない。すべてを喪失している。だからこそぼくには、その生き方を握りつぶせるような、弔の光に見惚れたのかもしれない。

わからない。脳みその小さい狐にはなにもわからない。わかることさえわからない。

人のように多彩な感情も持ち合わせていない。だからなにもわからない。善悪でさえも、そんなことに興味はない。

免罪符にするつもりはないのだけだ。

——だから、今日もぼくはいつものように人を殺す。



「おはようございます、オールマイト」

と、白々しくもぼくは言った。その姿に、疑問を持ちつつオールマイトは警戒を解かない。その拳は固く、ぼくなんかかたんに吹きち

らしてしまうだろう。

恐ろしいなあ。なんて思いながら、ぼくはお辞儀をしておいた。

「……君は、なんだ？」

「やだなあ。いわゆる敵ヴァイランですよ。当たり前じゃないですか。そりゃあ、こんな場所にいる時点でそれではわかりきってるでしょうけど」

「違う。そういうことを聞いているんじゃない。君はなんだ」

勘がいいのか、なんなのか。ぼくに対して、なにかの違和感を覚えているらしいオールマイトはよくわからない。ぼくが人ではないことに気づいているのか、そうでないのか。心の声は不鮮明だ。感情だけが伝わってこない。

精度を上げたほうがよかっただろうか。そのほうがきつと役に立つのに。

まあ、後悔は先にはできないし、今後すればいいだけだ。

個性を発動する。

「脳無、やれ」

動き出しに合わせて、弔が脳無に命令した。体を最大限に強化したぼくより、少し速い程度の速度だ。このクラスの脳無は生産が難しいので、他はここまで強くはない。

ただ数はたくさんあるらしいので、あんまり困ることはないだろう。

脳無がオールマイトを殴り飛ばした。そこを上から踏み潰す。動きに拳を合わせられたが、だからといえ今のぼくは生命力のストックがある。だからこそ、拳を受けても全然耐えられる。

地面に墜落するオールマイトは、腕を地面に放つ風圧で下に待ち構えていた黒霧を弾き、着地する。

「……キミら、なんで今まで私を襲撃してこなかったのかな」

「時期は見計らうものだろ」

弔が答える。脳無がオールマイトを殴りつける。当たり前のようにその姿を吹き飛ばし、植えられている木々をへし折った。

攻撃を受けきった体勢で固まっているオールマイトが、肩で息をし

ている。ああ、そういうえば活動限界だの、なんだの言っていたような気がする。しつぽのない感覚に違和感を覚えながら、ぼくはそんなことを思う。

脳無が突貫する。それを、オールマイトは正面から殴りつけ、吹き飛ばした。あの脳無はショック吸収も持っていたはずだが……などと思っていると、

体が不意に凍りついた。

氷の個性……誰だったか。轟焦凍だ。そうだそうだ。ぼくの体はものが見事に凍っている。身動きを取るのも危険かもしれない。

「俺らのこと無警戒はさすがに嘗め過ぎだ」

体を動かそうとする。いちおう、氷漬けになったとして体は動かせるらしい。無理して氷を破壊する手段もあるが、そんなことをせずとも正統派な攻略方法はある。

体に火を纏う。それだけで、氷はあっけなく溶けてしまう。

濡れた体が冷たい。体の中に火を灯して体温を調整した。

「そっういや忘れてたなー。弱すぎだもんね」

「……テメエ」

「事実じゃん。なにが悪いの？ 弱いじゃん。やーいぎーこぎーこ。それでヒーロー志望？ フィクションも大概にしとけよってかんじい」

「後悔すんぞ」

——大氷結。

巨大な氷の塊が、突如として出現する。極端な大きさだ。USJの天井を貫いてしまうほどの氷塊。

しかし、自分から視界を削ってしまうあたりやはりヒーロー候補生とはいえ弱い。変身で体を本当の姿——小さい狐の姿に戻す。久しぶりの四足歩行だが、それに違和感はない。

そりゃあそうだ。ぼくからすれば、二足歩行のほうに変なのだから。だからこそ、こちらの体のほうがよく馴染む。

こちらの姿のほうが、ぼくの能力は高い。

そしてこちらの姿のほうが——小さいぶん、相手の意識の虚を突

ける。

氷塊を乗り越え、背後に回り、元の姿を作り直す。

「な——」

そして、足を切り飛ばし、動けないようにして、

そのまま心臓を抜き取った。

握りつぶす。

生きるのに必要不可欠な器官を潰された轟くんは、血を吐いて地面に倒れた。

「と——轟?！」

あんまり好きじゃないが……今手に持っているものを、口に含む。人の肉を喰らった。生命力が多く充填されていくのを感じる。さすが、ヒーロー科。優秀な個性だ。だいたい蘇生四回ぶんの生命力の回復ができた。

近くにいた少年たちに目を向ける。

「……轟ちゃん……?！」

「お、おい！ 梅雨ちゃん！ 見るな！」

「う、嘘だろ……あの轟が瞬殺だぜ……? 勝てるわけないじゃんか

よ……」

「……心臓を……喰った……?！」

指差し確認。梅雨ちゃん、切島くん、えーと……峰田実、尾白猿夫。

四人。轟くんや緑谷くんと比べると劣るが、それでも十分食べごたえのある相手であることには間違いない。とはいえ、轟くんを心臓だけで済ませるといいうのも勿体ないし……どうしようか、と悩んでいると、オールマイトが氷塊に叩きつけられ、こちらへと吹き飛んできた。

「……ぐ、ぐ……サイラン敵め……」

「お、オールマイト！」

切島くんが、ほとんど絶叫にも近い声音で言った。

「轟が……轟が！」

「……な……」

オールマイトが、倒れた轟くんを見て、ぼくを見る。そこで、固まった。

「……敵……」

脳無がその姿に襲いかかる。背後を見ることもなく、オールマイトはその体を殴り飛ばした。

見れば、脳無がダメージが入っているようなそぶりを見せている。ショック吸収の上からダメージを与えた、ということだろうか。これだからパワータイプは恐ろしい。

でも、それでもぼくは悪くない。元はと言えば——ぼくを苛立たせた爆豪勝己のせいではない。彼曰くそうだ。

「弔たちの目的がぼくだったから、全てはぼくが悪いらしい。」

「ぼくが殺すことを決意したのは、彼のせいだ。」

だからぼくは悪くない。結局、悪いのは爆豪勝己だ。だから恨むならぼくではなく彼を恨むべきだ。それが筋というものらしいから。

「貴様は——人の心を持っていないのか!!」

「うん、そうだよ。だってぼくは人じゃないし」

言った直後、顔面を殴られる。殴り飛ばされる。人の拳が顔に当たり、その衝撃で宙に浮くというのは意外にひさしぶりな経験だ。大きく吹き飛び、着水。

水難エリアまで吹き飛ばされたようだった。浮き上がってみると、少し離れた位置に弔と黒霧の姿。垂れてくる水が鬱陶しいので、炎で乾かしながら、垂れてくる前に顔を振って水を弾く。

服が濡れてすこし気持ち悪い。さっきから濡れてばかりだ。変身し直したらそれもリセットされるが……けれど、そのためだけに変身するのは勿体ない。

「ねーねーとむらー」

「血イ拭け」

「やだ。生徒ひとり殺せたの！ 褒めて褒めてー?」

「……どの生徒だ?」

「氷使い!」

「……脳無を殺してたやつか。ナイスだ」

弔が頭を撫でてくる。体が冷たいから、その手がなにより温かい。久しぶりに撫でられた。ちよつとうれしい。

ふと、弔の手が止まった。なんだと思うと、オールマイトが脳無を空の彼方へと吹き飛ばしている姿が見えた。

攻略法としては間違っていないが、しかし……さすがに馬鹿なのではないかと思う。オールマイトは活動制限があるらしい。それがあるのに、何発も殴って脳無を吹き飛ばす。

「やはり衰えた。全盛期であれば5発も撃てば充分だっただろうに……300発以上も撃ってしまった」

——完璧に悪手。相手の判断ミスだ。

「……チートが……」

連打はそれだけ体力の消耗を招く。相手はそれこそ血を吐く覚悟で戦っていたのだろう。元々疲弊しきっていた敵だったのだ。さらにそこからまた消費の激しい行為を重ねればどうなるか。

判断力の低下を招く。

ぼくは駆け出した。それこそ、脚力を最大限まで強化して。生命力が十分に存在するのだ。だから、ほんの一瞬で移動を終えることができる。そして、腕を強化する。少しだけ変身を混じえ、刃のように爪を作り上げる。

「しまっ——」

オールマイトの声は、焦っているもののそれ。

狙うのは、意識のない緑谷くんと相澤先生を守るように立っている爆豪くん。

「——待て」

あまりに遅い言葉だった。その声が聞こえてくる前に、爆豪勝己の両手両足を切断した。

◇

倒れた爆豪くんの首に手を当てると、オールマイトはぴたりと静止した。ぼくはにっこりと笑いかける。

「……なんだ、人質が通用するのか」

弔が言った。

「取引しようぜ」

「……なんだと」

「呑んだらそのガキの傷、治してやるよ。うちのお姫様にはそれができる」

「……………姫様？」

「あー……知らねえのか。死染妖狐だよ。お前も知ってるだろ？ あの回復なら、四肢欠損だって治せるからな」

「……………死染少女に、なにをした」

「何って……しよぼくれて一人で泣いてたから、回収したただけだ」

弔が平然と嘘を吐く。

その言葉に、爆豪くんが砂を噛んだような表情をした。心の声が流れ込んでくる。どうやら自分のせいだと思っっているらしい。粗暴な態度であるが、意外と根は素直なのだろうか？

少しだけ溜飲を下げる。

「なんでだろうなあ……レイザーヘッドが苦手とする正面戦闘をしてまで遠ざけた死染妖狐を一人にしたのは誰なんだろうなあ！」

弔は笑う。特に事情を解説してはいないのだが……と思っ、たとえば茶味を黒霧が回収しにいったか、と思いつく。

そのときに諸々の事情を聞いたのだろうか。しかしそれほど多くのことを説明したわけではないのだが……。

と、いうか恥ずかしい。これじゃあぼくが完全に逆ギレしてるようじゃないか。そう思うと、ぼくを見る黒霧の視線がどことなく生暖かいもののように感じる……。

忘れよう。

「……………要求はなんだ」

「お前、俺に殺されろ」

「……………」

オールマイトが、黙る。少し考えるようにして、

「……………わかった。好きにするといい」

その拳を解く。爆豪くんの心が、大きく揺れた。それがおかしくてたまらない。あれ、ぼくってこんなに性格悪かったっけ？ と思う

が、そんなことはどうだつていいのだ。

感情なんて、結局はどれも意味がないし。

「きみのせいだね」

ぼくは笑った。爆豪くんが、歯が砕けるほどに歯を食いしぼる。しかし彼には何もできない。足も、腕もないから。彼の個性は手のひらが必要とするものだ。個性が腕のない状態に慣れていない以上、この土壇場で進化することはない。

「くふふ」

「——と、思ったが」

弔がそう続けた。手を離し、こつそり変身して四肢を治すつもりだったぼくは、その言葉に面食らう。確実にオールマイトを殺せる機会だというのに、なにをするのだろうか。

「やっぱりやめた。お前、覚悟決まってるもんな。自分が死ぬことを受け入れようとしてるもんな！」

だから、と続け、弔はぼくに手招きする。爆豪くんを捨て、ぼくは弔に近づく。

頭を撫でられた。そのまま、頬を撫でられる。今日は珍しくスキンスリップが多い。これはテンションが上がっているのだろう。

笑いながら、弔は言った。

「取引の話は嘘だ。そいつは今後一生身体障害者！ 自分一人じやなにもできず、だれかの手を借りないと生きられない！ ……はははは、傑作だろ？ 個性はもう死にスキルだ。掌じゃないと爆破できないもんな！ 順風満帆な人生がたった一瞬でゴミになる！ これほど愉快なことはない！」

最後に。

「残念だったな平和の象徴。お前がここにいるからガキどもはそうだった。そのことを存分に悔いて死ね」

「——この——」

弔は笑った。ぼくも笑った。

「敵 共おおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

怨嗟の声さえ心地よかった。弔が笑っているから。
ああ、世界は最高だ。だって弔が楽しんでいるもの。

第28話

オールマイトはすでに限界だ。足を動かすことすら叶わないだろう。そんな状態にも関わらず、オールマイトはぼくのほうへと向かってくる。気合で限界を超えるタイプは怖い。緑谷くんを幻視する。

いや、緑谷くんがオールマイトに似ているのか……だが相手はすでに疲弊している。そして弱体化も著しい。伸びしろのある彼と比べ、オールマイトはまだ恐ろしくない。

……そんなにやる必要はないと思うが、一応能力を引き上げた。本気を出して、確実に殺すことにする。

腹へと放たれる拳を手で跳ね除け、逆にカウンターを図る。しかしオールマイトの巨体は重く、速く、ぼくの体は吹き飛ばされてしまった。

足を地面に突き立て勢いを殺し、そして突進してくるオールマイトに対応するために跳躍する。

足を掴まれ、地面に叩きつけられた。腕を蹴ることで手を離させ、そしてようやく体勢を立て直す。握られていた足が痛い。だがそれも一瞬のことだ。すぐに治る。

「——おいおいオールマイト。助けを求める生徒を見捨てていいのか？」

「——！」

黒霧のワープに絡め取られ、弔が触れる直前になっている梅雨ちやんの姿がそこにはあった。オールマイトが気づき、即座に反応する。

だが遅い。弔は指を動かすだけだ。必ず遅れる。弔が指に触れた。個性が発動——

しない。

「……チツ、イレイザーヘッドか……」

見れば、いつの間にか相澤先生が目を覚ましている。発動系の個性を阻害できる個性……やっぱり早く殺しておいたほうがよかったな、と思う。

脳無が一番相性がよかったのだが……ぼくでは相性が悪い。個性

を阻害されるとなにもできないのだ。

しかし見ることが条件の個性だ。ならばやりようはある。視界に入らなければいいだけだ。

「——っ、いかん相澤くん！」

「……………」

オールマイトの呼びかけも虚しいものだ。しかし隙を与えた相手が悪い。

そもそもオールマイトの体格のせいで、視界を遮っていたのだ。その状況で、目に見えない速度で視界から逃れ、そして背後に回り込む。そのまま上に押し掛かった。

跨がるようにして、相澤先生に押し掛かった。その胸に指を食い込ませながら。

「今なら遺言を聞いてあげよう。期間限定サービスだよ？ えへへ、ぼくはとっても優しいのです」

えっへん、と言いつつ、言葉を少し待つ。オールマイトが考えなしに向かってくるようならば殺せる。人の肉など、指で貫けるものではない。

オールマイトが動いた瞬間、ぼくは相澤先生を殺す。そのつもりだ。

「……………殺せ」

「ん、そーする」

お望み通りに、心臓を貫いた。そういえば、先程殺した轟くと相澤先生、脳無の材料に使えばいいものができそうだ。

うん、素体にしよう。これには弔も賛成だと思う。あ、先生欲しがるかも。先生は死んでからじゃ個性を盗めなかったはずだ、と遅れて気づき、こっそりと心臓を再生した。

意識こそないが生きてはいる。下手に動かれても困るので、爆豪くんのときのように四肢を切り落とした。少しだけ治癒することで出血を止めた。

「黒霧ー。これ、持って帰ってー。あと轟くんの死体も」

「わかりました。……先生に渡せばいいのですよね？」

「よくわかってるじゃん。えらいえらい」

黒霧が、相澤先生を転送する。そして次に轟くんの死体を回収した。

オールマイトのアクションがない。どうしたのだろうか、と考えていると、ついに動きがなくなっていた。

活動限界……だろう。一步も動けないほど消耗しているのだと思う。こちらを睨みつけているので、その姿に笑顔で返す。

すぐそばで転がっている爆豪くんを見つけた。ああ、腕もないから起き上がることしかできないのか。

その頭を撫でる。

すべては君のせいだ、だなんて思いながら。

「オールマイト、オールマイト。同僚が死んだんですよ？ 少しはなにかしたらどうですか？ それとも動けないの？」

「……………」

「動けないんだね。動くことすらできないなんてかわいそう！ なにそれ！ 平和の象徴ってその程度なの？」

「……………」

「なにかしやべらないの？ それともしやべれないの？」

「……………」

「生徒を殺せばしやべるかな？ 爆豪くんはおいといてー……そこで寝てる、緑谷くんとか！」

「……………」

少し反応があった。ぼくは笑う。それでは緑谷くんになにかがあると告げているのと同じではないか。

——謎に満ちた増強系。バスの中で梅雨ちゃんがいついたように、オールマイトに似た個性。そして今のこの反応を見るに、間違いない。

緑谷くんはオールマイトの子供である。

うん、間違いない。だったらその精神性が似通っていることも理解できるし、個性の共通点もわかる。一つわからないことといえば、見た目がまったく違うことなのだけど……ほとんど母親からの遺伝

だったと考えれば辻褃も合うだろう。

完璧な推理だ。しかし……そうだとすれば、今のうちに殺しておかないといけないだろう。

茶味との約束があるしなあ、なんて思いつつ、少し迷う。殺すべきか、殺さざるべきか。なんて思っていると、悲鳴が聞こえてきた。

何事か、と目を向けると、梅雨ちゃんやんが弔に捕まっている。その体が崩壊していき、ものの数秒で塵になって消え去った。

「……オールマイト、どうした。止めないのか？ ほら、生徒が死んだぞ。これで二人目だ。どうしてそこで突っ立っていられる？ 平和の象徴、今ここで若い芽が摘み取られたぞ。卵を潰されたぞ。戦わないのか？」

「ところが残念とむらくん！ オールマイトは体力切れでもう動くことすらできないのです！」

弔の言葉に、ぼくが便乗した。一瞬なんだコイツ的な視線を向けられたが、しかしそれでも弔はそれを聞いて言葉を続ける。

「……そうか。動けないのか。残念だな、それはそれは残念だなあ！ ならそこで突っ立って生徒が殺されるのを黙ってみてろ」

「——せ」

「あ？ なんだった？ 聞こえねえな」

「——殺すなら……私を殺せ……」

「ははははははは！ なんだった?! 全然聞こえねえ！」

黒霧のワープゲートが展開された。そこから峰田くんが顔を出す。

「ひっ、ひいひいひいひい!! た、助け——」

弔の指が触れた。顔が解け塵になり、頭を失った人の体がワープゲートから吐き出される。残った体もゆっくりと塵になっていき、梅雨ちゃん同様に峰田くんも息絶えた。

「……これで生徒は三人目……実際の被害はもつと多いかもなあ……？ どうだ、お前はなににも守れない。聞いたか？ 今のガキ。『助けて』だってよ。なあ！ 助けを求められたぞ！ ヒーロー！ お前はなぜ動かない？ はははははははははは……No. 1ヒーロー、どうしてこんなことになった？」

「……………」

「決まってるよなあ。お前のせいだ！ お前が雄英に来なければ生徒が戦いに巻き込まれることはなかったし！ お前が戦えれば生徒は救えたはずなのに！」

「……………」

「……飽きたな。何も喋りやしねえ。殺す価値があるのかすら疑わしいぜ」

そういつて、弔はオールマイトに近づく。確実に殺そうというのだろう。オールマイトは動かない。ただ、やってくる死の運命を無言で受け入れている。

「ただまあ、できるだけ不安要素は摘んでおくべきだよな」

弔が、その指で触れようとし――

その手を撃ち抜かれた。

銃弾に撃たれた。飛んできた方向を見る。そこには、プロヒーローの姿がある。

「……………あはは」

ぼくは笑う。そして眩いた。

「相澤先生がいないんじゃ、君らに勝ち目はないよね」

◇

状況を離れて眺めていた生徒もたくさんいる。プロヒーローがきた現状――彼女らは自分たちが助かる可能性について希望を持ったことだろう。

オールマイトから手を離し、ぼくのほうへと向かってきた弔がぼくの頭を撫でた。

「プロの大群のおでました……どうだ？ いけるか？」

「ん、余裕。余裕すぎて涙が出るくらいなんだよ」

「そうか……じゃ、ちよつとだけヒーローの芽を摘んで帰ろう」

弔の言葉に頷いた。個性を発動する。まず一番厄介なのは、的確に射撃をしてくるスナイプだ。だが照準が上手い――ただそれだけ

だし、銃遣い。火力はないのだ。だからこそ、かんとんに近づけるし、かんとんに殺せる。

近付いて、手刀で首を打った。少しだけ変身を使って刃のような形状にしている。だから、手は首に食い込み、

そのまま首を切り飛ばした。

「——!?!」

「遅いほうが悪いんだもんねっ、悪く思わないでねっ?」

そして、次に狙うのはセメントスだ。めんどくさきさきでは一位に近い。だからそれを殺して——と、思い飛んだとき、

後ろから引っ張られた。

「んにやつ!?!」

「——!?!」

「やー、もー! お腹ベとベとするう……」

瀬呂くんが、その個性でぼくを絡め取った。お腹をぐるぐる巻きに拘束されている。粘着が気持ち悪くて、思わず声をあげてしまった。

しかしそれ、デメリットのほうが大きい気がする。そう思っ引っ張ると、テープが切り離された。

つまり、今完全にぼくは空中に囚われているわけだ。どうしようか。下を見れば、プロヒーローが各々構えている。これからぼくは一斉攻撃を食らうのか、しかし攻撃に向いた個性持ちはいなかったはずだ。

と、思っていると音に殴られる。

そのまま吹きとばされた——痛い。そういえば忘れていた。プレゼント・マイクは音で戦うのだったか。

その直撃を貰って、少しだけ体の中身がイカれた。すぐに治癒で治すが、選択を間違えたかもしれない。高火力の敵を先に倒すべきだった。

地面に落ちると、セメントスが体を拘束する。体が飲み込まれ、顔と肩だけが出た状態になる。

なるほど、これは強敵だ。弱っているオールマイトとくらいいしか口々に戦っていなかったから、少し舐めすぎていたかもしれない。

——襲ってくるハウンドドッグが、ぼくにその口の拘束を解きぼくに噛み付いた。筋肉がそれで絶たれた。普通の人ならどうしようもないかもしれないが、ぼくにはそれも治癒で治せる。

「へえー……」

笑う。

野生の動物ではよくある、こういう殺し合い。昔クマを殺したときに、互いの肉を喰らいあつて勝利したのだけれど……そのときを思い出す。

だから肩を噛んで、相手の牙が抜けない間に、

——ぼくは彼の首に噛み付いた。

首を噛みちぎり、口の中に血と肉が流れ込む。そして、そのまま怯まず噛みつきを強くする相手に対応するために、余った腕を拘束から解き放ち、ハウンドドッグの肩を掴んだ。

首へと噛みつき、そのまま首を引き抜く。

自分の肩に人の首がくっついているという、愉快的状況になっている。それに対して、セメントスは拘束の量を増やした。通常なら圧殺されるほどまでその拘束が増やされる。

生き埋めになった——しかし、それでも抜け出せる。体の強化倍率を引き上げ、体を無理やり動かす。

内側から拘束を破壊した。

「んな——」

肩にくっついたその頭を持って、そのまま投げた。驚愕しているセメントスの前に立つブラドキングが、それを弾く。

だが遅い。わずかな隙に自分の体を差し込んだ。そして、拳を握り込んで、セメントスの腹を叩き割る。

次の獲物。プレゼント・マイク。彼は適当に口につけたスピーカーを破壊し、四肢を切断する。おそらくスピーカーがないと味方を巻き込んでしまうのだろう。

だるまにしてしまえば、殺すまでもない。そのままお荷物だ。

「……なーんか、プロヒーロー飽きちゃった」

相手がやるのは相手の得意を押し付けてくることだ。だから、連携

はうまい。確実に並の敵なら拘束されてしまっているだろう。

だが今のぼくは絶好調だ。負ける気はしない。だから、今の程度の連携を食らったとしても正面からすべて叩き伏せることができる。

そして今のプロは、個性の扱いが上手いからこそこのように強力なのだ。個性自体は強すぎるということはない。強いていうなら校長とブラドキングが強いのだが……しかし彼はスイコちゃんの担任だ。だから殺さない。スイコちゃんはぼくと違い演技が下手だ。きつと担任が変わっても前担任の心配のそぶりも見せないだろう。

だから殺さない。

——ただ、その場合飽きがくる。

だから、ぼくは生徒に目を付けた。

——狙うのは、いかにも優秀そうな飯田くん。黒霧の壁を乗り越え、救援を呼びに行った生徒だ。

クラスの中でも、上位に食い込んでくるほどの才覚を見せている。

だからこそ——餌には、もってこいだ。

だからこそ、ぼくは飯田くんへと向かって走り出し、顔を殴り飛ばされた。

「——あれ？」

誰だろう。頬を撫でて、ぼくは周囲を見回す。

そして、見つけた。

飯田くんを守るように立つ、緑谷くんのその姿を。

第29話

「んむう……邪魔なんだけど」

顔をさすりながら、ぼくは起き上がってつぶやいた。どうするべきか。少し膨らませてみたりして、すこしおふぎけがすぎるとすぐにやめる。

緑谷くんはぼくを睨みつけて、言った。

「……なにをしようとした」

「プロヒーローには飽きちやっただよ。せつかくだし、生徒でも食べちゃおっかなーって」

「そんなこと、させると思ってるのか!」

ブラドキングがぼくに向かってくる。しつぽで迎撃しようとして、なかったのだったと思い出す。しかし問題はない。手で突き飛ばして、その場をやりすげす。

「違うよ、するんだよ!」

緑谷くんに関しては、あんまり気にすることもない。不完全な治療を少し施している。ほとんど衰弱して、ろくに動くこともできないはずだ。実際、ぼくの拳に対応できなかった——意識を奪う。そして、飯田くんを狙うことにした。

横合いから飛んできた鞭は掴んで引っ張る。人数が固まっている場所では睡さんの個性は使えない。だから、武器を取り上げれば相手はなにもできない。

飯田くんへと向けて手を伸ばし、その指が心臓をえぐり取る軌跡に、割り込んできた姿があった。

切島くんだ。その身でぼくの手を受け、耐えた——腕は割れたが、しかし硬化の個性。やはり強い。もっと出力をあげなければならぬ。

個性の出力を上げ、そのまま拳を振りかぶった。拳は最大限まで強化している。切島くんを殴った——体が割れ、後ろへと吹き飛んでいく。

壁に打ち付けられ、切島くんは意識を失った。少し手を振り、その

後付着した血を舐めとる。割る労力に比べ、味がかなり微妙だ。切島くんは無視しよう。

幸い、眠ってくれてるみたいだし———そう思い、今度こそ飯田くんへと手を出す。

「———ま、待てー！」

「……………」

なんだろう。飯田くんが、いきなりぼくに向かって言い放った言葉に首を傾げる。呼びかける理由がわからなかった。

「なあに？」

「君は、見たところ14歳くらいだろう!? なぜ敵サイランに味方する!？」

「えへ。そんなの、ぼくの居場所がここだからに決まってるじゃん」

「……………どうして!？」

どうして、どうしてだろうか。ぼくは少し考えてみる。指で頬を突っついて、なにかいい言葉を探してみた。

どうして、だろうか。ぼくが拾われたから? ぼくがそうでないと生きられないから? それとも弔が好きだから? ぼくはどうして、弔の味方をしているのだろう。わからない、わからない。

なんでかなあ、と考えていると、弔がぼくの横へと立った。頭を撫でる。いつものことだ。ぼくは弔に頬を擦り寄せ、言い訳を考え———そのすべてを、捨てる。

「わかんないー！」

「はあ!？」

「じゃあ聞けけどさー。飯田くんはなんでヒーローになろうと思ったの? 憧れだから? でも結局のところ、流されてつてところもあると思うんだにやあ」

「露骨なあざとキアピールはやめろ」

弔にツッコまれた。てへ、とだけ言って、ぼくはピースをする。

「それで、どうなの? 君はなんでヒーローになろうと思ったの?」

「僕は……兄の姿に憧れたからだ」

「そうなの? そっか。なるほど。すごいねえ。そんな大それた信念、ぼくは持ってないから羨ましいんだにやん?」

「だからあざとだって」

「もー、とむら！ そんなこと言わないでよー！」

「いや、あざといだろ」

「……あざとい、わね」

睡さんにまで言われた。少しだけショックを受けたのでほっぺを膨らませて抗議する。

「……ところで、今聞き捨てならないワードが聞こえてきたわね。そのあなた」

「はっ！」

睡さんが、弔を指差した。怪訝そうに弔が返すと、睡さんは言う。

「ジョンちゃんがよく話す』とむら』……っっていうのはあなた？」

「……そうだが」

「女の敵イ——！」

「……急になんだよッ！」

石を投げられた。ぼくがそれを受け止める。

「ジョンちゃんはね！ あなたのことを何よりも好きで好きで堪らないなんて感じで私にずっと惚気話してきたのよ!! なのにそんなあなた——女の子を侍らせてるなんて……！」

「…………オイ」

弔の目がこちらに向く。睡さんの裏切りによりぼくの今までの話の内容が弔にバレてしまった。とんでもなく恥ずかしい。顔の造形が違うからか、久しぶりに表情が勝手に変わった。今は顔が真っ赤になっっている自信がある。

「ジョンちゃんの純情に詫びなさい！ サイラン 敵であることを隠してあんな優しい子に近づいて、さらにそんなにかわいい子連れて……ジョンちゃんのことにはやっぱり遊びくらいにしか思ってたのね!？」

……周囲の空気が、若干冷めたような気がする。

「——あなたはここで確保します。そしてジョンちゃんに『今まで弄んでごめんなさい』と謝らせるからね」

「待て、確実に勘違い——」

「——問答無用！」

睡さんが個性を発動した。周囲が慌てて息を止め始める。タイツが破られ、周囲に香りが流れ出した。強制的に眠らされる個性——特に男性に効き目が強いんだったか。なら弔には天敵だな、なんて思
い、

——意識が落ちそうになる。

「……はへ？」

「……おい」

弔がこちらを見て呟いた。なんだろう。……これは、眠気だ。しかし男性に対して効き目が強いんじゃないか？ と思い、少しだけ考えて——元々の自分の性別を思い出す。

オスである。

「はにやああああ……？」

そつちが反映されるのか、と思いつつ、意識はゆるやかに眠りに落ちていった。

◇

「チツ……」

眠りに落ちたジョンを、黒霧がワープゲートで手早く転送する。こちらの最高戦力がかんたんに無力化された。死柄木弔は息を止め、近寄ってくるミッドナイトから距離を離す。

——頃合いか、と死柄木は判断した。生徒は三人も殺害している。ならば、さらに捕らえる必要はない。これだけでも、雄英側には大きなダメージを与えることができた。

ならばあとは逃げるだけ——と、思い、ヒーローから距離を離す。

（——最後に一つ）

大きな仕事がある。

いつの間にか立つことすらできなくなっている、オールマイト。彼を最後に殺して帰ることにする。脳無のゴリ押しも考えたが、しかし……だ。脳無にも状態異常は通用する。基本的に男体ベースで作られる脳無は、ミッドナイトの個性にひっかかりやすいだろう。物量作

戦が通用しないわけではないはずだが、それは自らも巻き込む諸刃の剣だ。

——相性が悪かった。これに尽きる。彼女が味方を巻き添えにすることを厭わず、全力で個性を使えば間違いなく敗北するのだ。……判断を誤った。ジョンにミッドナイトを最優先で殺させるべきだったのだ。

だがもう遅い。平和の象徴は目の前だ。いける。

地面を踏みしめたとき、
大地が崩れた。

「——ッ!？」

「させると……思うのか……?」

「我々ヲ舐メスギダ」

「ハハハハハハハ！ 浅はか！ 浅はかだよ敵ヴァイラン！ 君たちがオールマイトを的にするのはわかりきっている！ 残念だったねハハハハハハハハハハハ!!」

「チィ……プロヒーロー……!」

戦力を隠していたのか。地盤が崩れていた場所の、周囲にエクトプラズムが立っている。落下していく——だが慌てることはない。冷静に、黒霧を利用する。

そしてオールマイトの背後へと転移した。

「——取った……ッ!？」

「残念！ それも読んでいるのさ！ もっと頭を使いなさい頭を！
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

気が狂ったような笑い声が響く。オールマイトの背後には、そもそも足場が存在しない。一瞬で落下していく——これは、黒霧の確認不足か。落下しながら思う。

「——お前のミスは——お前が取り返せ」

「——ええ、死柄木弔」

あえて突飛な場所を。水場の上へと転移し、浅瀬に着地した。

「読めていても……関係ない一撃があるだろ……」

黒霧が、オールマイトをワープゲートに僅かに引きずり込んだ。

そして半分入ったところで、ワープゲートを閉じ、オールマイトの体が分断される。

「——あつ」

それは、だれの声だったか。

平和の象徴が、生存の余地なく断割された——それも、きれいに前と後ろで真っ二つだ。内臓の断面が出来上がり、教科書に載せられるほどに綺麗な断面が外気に触れる。

血と、様々な液体が途端に溢れ出した。それが平和の象徴の死亡を確信させる。

「——う、うそだろ……?」

それはだれの声だったか。誰もが動きを止めた。それだけ、平和の象徴の死亡はあっけなく、それだけに衝撃的なことだった。

「……もういいか。黒霧、帰ろう」

「はい。……オールマイトの死体はどうするのです?」

「利用する。持って帰るぞ」

「わかりました。——それでは皆様、さようなら」

「……ッ、待てエ——ッ!!」

ワープゲートが開いた。それは黒霧と死柄木、そしてオールマイトの死体を飲み込み消えていく。

ヒーローの声も遅い。あまりに遅すぎた。既に象徴は絶たれている。誰もが刻み込まれた敗北感に、意気消沈し、

——再度、ワープゲートが開く。

「なっ……なんだ!?!」

「向こうから来たのか……今度こそ捕らえてやる……!」
その中から現れる姿、

——脳無、四百二十一体。

疲弊しきった戦場に、さらなる苦難を投げ込んでワープゲートは消えていく。

◇

ぼくが目を覚ましたとき、弔はぼくのすぐそばに置いた椅子に座り、新聞を読んでいた。

なにか、音が聞こえてくる。これはテレビのものか？ ヒーローを賛美するメディア嫌いの弔が珍しい。

なんて思いつつ、あくびを溢して上体を起こす。あ、耳としっぽがない。変身で元の姿に戻しておいた。

全然お腹空かないなあ、なんて思いながら、ぼくは弔に声を掛ける。

「おはよー」

「お、起きたか。……ちようどいい、見ろよあれ」

「んー……？ なに……？」

「今面白いところだ」

『これは雄英の防犯設備に問題が——』

『これだけはつきり情報が流れてくるとなれば、やはり校内に敵が潜入している可能性も——』

『平和の象徴は、その姿をこつ然と消してしまい——……』

『教師四人、生徒三人の死……重傷が十二名、そして一人が誘拐されたと——』

『中には心を病み、自主退学を行うものも——』

それは、すべて雄英に関してのスクープなのだろう。どれもこれも、知ったような口を聞いて、ろくな話をしていない。だがそのどれもが雄英の問題点を確実に刺激していた。

「わあー……って、オールマイイトも殺したの？」

「ああ。平和の象徴をぶっ殺してやった」

「わあ……！ やったねとむら！ 夢が叶ったよ！」

「——だが、まだここからだ。これは開始点。これからはお前を最大限に利用する。いいか？」

「もちろんだよ！ ぼくでよければどんどん使って？」

「ありがとう」

弔が頭を撫でる。気持ちいい。お腹に顔をうずめるように、ぼくは

頭を前に突き出した。

「ふやうっ!？」

「……あれ？ 耳、そんなに弱かったか？」

「……んにう、ひ、久しぶりだったから、っ……？」

「ふうん。……やっぱ手触りいいな」

「………いちゃつくのも結構ですが、死柄木弔。この場に
いるのは二人だけではないですよ？」

黒霧の声が、どこことなく冷たい。言われて周囲を見渡すと、二つほど知らない顔を見つける。

ぼくの視線に気がついたのか、大柄な男はびっくりとその体を震わせ、その様子を少女が窘めた。

「ああ、忘れてた。新しい仲間だ」

「忘れるのは酷くないかね？」

「紹介を忘れてたってだけだ」

「……まあ、いいが」

会話はそこそこ気安いものであるらしい。弔と意気投合できる人は珍しいので、少し新鮮に思う。

「どっちも優秀だ。性格に難こそあるが……俺たちの理念に共感してくれる」

「……敵ライアン連合の理念に共感したわけではないよ。暴力的な行為は好きではない。もっと優雅にあるべきだと私は思う。……ただ……」

彼は言う。

「死柄木弔。君の、その少女に対する理念にはなにより共感する。私にも、それに似た思いがあるからな」

「……ジエントル……」

「わかってるよ。だから俺たちはお前らを仲間と呼んだ。動画投稿者なんて馬鹿なことをやってはいるが……どこかで俺たちも動画をあげてみるべきだと思うしな」

弔が、ぼくの頭を撫でて言う。

「紹介しよう。ジエントル・クリミナルとその相棒のラブバだ」

一つが終われば、また次へ。
物事の道理に従うように、世界は昨日とはまた違った出来事を運んできた。

三章

第30話

街は完全に葬式ムード、といってもいいほどブルーな状況である。だれも活気がない。それも仕方ない、平和の象徴が崩されたのだから。だれも喜べるような精神状態でない。

しかし、逆にパレードかというほど盛り上がる集団もある。

平和の象徴がいなくなったムードで敵の活性化は進む。彼らが別になにかを成したわけでもなく、そもそもオールマイトにでくわす敵が少ないのにも関わらず、彼らは調子に乗って暴れだしていた。

その喧騒を、ぼくは見ていた。

さすがに姿は変えている。実行犯としての姿、死染妖狐としての姿どちらも使うことはできないので、適当にゲームの——今回はモブキャラである女の子の姿になった。普段より身長は下がっている。マイナーなゲームだからわかる人は少ないだろう。しかもモブキャラだ。バレない。

人ごみに溶け込みながら、ぼくは周囲の状況を探っていた。

まず、オールマイトの殉職によりエンデヴァーがN.O.1ヒーローになった。愛想の悪さが目立つヒーローだし、オールマイトのような絶対的な実力もない。

だからこそ、エンデヴァーに疑問を寄せる声も多い。

次に雄英についてなのだが——こちらはあまりお咎めなしだ。世論では不信を寄せられているが、だからといって根津校長の天才的な頭脳がなければ運営すら厳しい高校。

謝罪と様々な穴を埋める、ということで落ち着いた。

これはまあ、仕方ないのだろう。オールマイトが勝てなかったような敵であったことはだれしもわかっている。だからこそ、そのことについてだれも糾弾することはできない。

良くも悪くも、オールマイトはそれほどの希望だったのだ。

ぼくは服の中から飴を取り出した。包み紙を解き、口の中に放り込

む。

「ラブラバはさ、今の現状をどう思う？」

「……寝耳に水だったのでしょうね。オールマイトが負けるなんてこと、だれも考えていなかったのでしょ」

「そうだよねー。ふつうはそんなこと考えるわけもないか」

現在、顔が割れていない連合メンバーは事件の後に参加したラブラバくらいだ。ジェントルはもともと動画投稿者として活動していたので除外。

その動画に出ていなかったラブラバは今こうしてぼくと一緒に活動している。

「……ねえ、これはどこに向かっているの？」

「もーすぐつくよー」

少し歩いて、そして到着。

路地裏である。

その中に少し入れれば、すぐさま敵の巣窟だ。奥から湧き出る敵の群れに、ぼくは一つため息を吐いた。

「……ねえ、なんでここに用があるの？」

「いや、オールマイトを倒した敵連合を倒して箔付けしようっていう輩があんまりにも多くてさ。ただ弔たちは警戒が多くてまともに外も出歩けない状況だし……。黒霧だつて室内に向かって転移しないとバレてしまうかもなんだからさ」

「ああ……それで顔の割れてない二人で攻略を……。でも私を連れてくる必要はあったのかしら？」

「んー……経験を積ませるみたいなお惑があるんじゃないかな。ラブラバってジェントルと一緒に行動するし、場慣れしておくべきだと思っただとか？」

「これでもかなりの修羅場を踏み越えてきたと自負しているのだけど……」

「殺し合いに関しては慣れてないと思うからねー。……つと、終わり」
わずかな会話の間に、出てきたぶんはすべて殺し終える。あまりに弱すぎる。やる気があるのか、などと思っただが、あんまり強い個性を

持っていれば普通はヒーローになる社会なのだ。仕方ないのだろう。手を振り、血を払いながら死体を踏み越え奥へと向かう。



「ただいまあ」

「おう……なんだ。どんだけ振り回したんだ？」

「そんなに振り回してないよ？」

「ちよつとはやったのか」

「……まあ、ちよつと……ね？」

「ジェントルううううう……怖かったわああああ……」

あんまり耐性がなかったらしい。主犯だろう二人くらいを治癒を利用してつつ死なない程度にいじめたのだが、それを見てラブラバが怖がってしまった。

まず一人を動けないようにし、もうひとりを治癒を使いつつちよつとずつ削っていく。治癒を使って死ぬことのできない肉塊を作り上げた。

そのあともう片方を少しだけ手を抜いていじめていたのだが……まあ、なんというか。あんまり心は強くない相手だった。すぐに音を上げたので、それで切り上げて帰ってきたのだ。

もっと心の強い相手なら楽しかったのだろう。今度は人と人同士をくつつけて見ようかな、なんて思っていると、弔にデコピンされた。「……せつかくの新メンバーを怖がらせるな。お前、雄英に入ってから考えが過激だぞ」

「むう……だめ、かな？」

「駄目だ。自重しろ」

「はい」

あんまり自覚はなかったが……というか、ぼくって昔からこうじゃなかったか？　なんて思いつつ、とりあえず謝る。殺すことばかり考えていたからだろうか？　わからないけれど、とりあえず肉を口に含んだ。

なんだかんだ久しぶりに食べる気がする。

「……それが人肉でなければ、まだ愛らしい一幕で済むのだが……」
「慣れてくれ」

「ああ、わかっている。しかし……なんというか……こう、わかっているもぞわつとするというか……」

「慣れる。小学生だって適応してたからな」

「それはその子の肝が太すぎるだけじゃないのか……?」

血が滴って指を伝う。それを舐めとり、生命力の調子確かめる――まだまだ全然のこっている。というかこれに関しては緑谷くんが異常である。いまだに空になる様子を見せない。なにもしなければ、一年くらいは普通に過ごせそうな感じである。

あんまり好きではないが、あれほどなら内臓も食べれそうだ。とりあえず補給したぶんを使って、変身する。死染妖狐の姿に戻った。

と、緑谷くんと思いついたが。

「チャージは?」

「仲間集めに県外出張中。今は四国のほうにいるはずだ」

「……それはまた……遠いね……」

「あんまりヒーローもいないからな。敵も少なヴァイランそうだが、使えるやつがいるかもしれない」

可能性こそ低いが、と付け加え、カウンターに座っている弔はぼくに手招きする。近寄っていくと、膝に乗せられた。

「なあに?」

「なんでもない」

「ふへー……」

「なんだよ」

「なんでもない」

「……………」

少し無言が続く、

「……次はなんのアクションを起こそうか」

と、弔が言った。少しばかり真剣な話だ。ジエントルたちも近づいてくる。黒霧の前あたりに二人は座り、話すには十分な距離を確保し

た。

「まず、^{サイラン}敵連合の目的を公開するべきじゃないかしら」

「動機も公表するべきだろう。目的と理由のない悪には人はついてこない。だが……明確なものがあればそれに感化される人も出てくるはずだ」

「たしかに……ありかもかもしれませんね」

「問題はなにで公開するか、だ。お前達の使っている動画投稿サイトに投げ込むのもいいかもしれないが……悪質なデマで流される可能性もあるだろ」

弔の言葉に、全員が黙り込んだ。なるほど、ネットだとそういうこともあるのか。知らなかった。

弔の体にもたれかかりながら、ぼくは考える。あんまりいい案は降りてこない。ここらへん、みんなに任せることにしよう。

「……私のほうで宣伝すればいけるか？ 悪名だけは高いだろう」

「でもジェントル、初動が早いと癒着を疑われるわ！ それだと目的と離れた方向に行っちゃうかもしれない」

「……私のような者でさえ参加している、というアピールができる。やっていることが小さいなどとよく酷評されるし、連合の規模を知らしめるには丁度いいと思うが……」

「……いや、それは駄目だ。お前達が動きづらくなる。……なるべく隠せるものは隠すべきだろう。不意打ちも見込めるしな」

「……こういう作戦会議、基本的にぼくが省かれるのは悲しいなあ、と思う。なんでだろう。一応ぼく、雄英に入学できる程度には頭いいはずなんだけど。」

やはり飽きるのが原因か。

でも興味ないことには集中できないのだ。

仕方ない。

「……適当に、どこかの掲示板に投げ込むか？ あいつらの情報拡散能力だけは信用できる」

「……私は異論ない。それで良いだろう」

「ならば動きは早いほうがいい。……どうします？ もう撮りますか

？」

「ああ。……なあ、こういうのってどうするべきなんだ？ 場所を移すべきか？」

「……流石にバレるといふことはないと思うが……事の重要度が違うから、バレる可能性を考慮して移動したほうは良いと思う」

「そうか。……黒霧、場所を移すぞ。遠くの適当な山奥でいいだろ。開け」

「ええ。……ですが死柄木弔」

と、黒霧は聞く。

「まずはジヨンさんを起こしては？ もうほとんど寝てますよ」



397 名無し

【動画】

398 名無し

えっなにこれは

399 名無しさん

ネタだとするなら悪質すぎるんだよなあ……悔い改めて

400 名無し

でもあの狐の女の子どう見ても誘拐された子にしか見えねえ！

くそっ！ かわいいなあ！ くそっ！

401 名無し

これは……荒れるな（確信）

じゃけんどんどん拡散しましょうね〜

402 名無し

女の子俯いて動かないんだけどこれって眠らされてる？

403 名無し

そうじゃね？ 逃げられないように意識奪つてるとかだと思う

ただそうする必要があったのかは不明

狐ちゃんのためだって可能性もあるからなんともいえない

404 名無し

ヴィランから生まれたヒーロー志望かあ……しかも個性がめっちゃくちゃ強いときた

ヴィラン側からしても逃したくはないよなあ

405 名無し

気になる発言あったぞ

こちら側にいないとこいつは生きていけないとか

ひよつとしてなんか闇深な感じ？

406 名無し

絵の撮り方どう見ても慣れてるやつが撮ってるよな

絶対そっちの方向の協力者いるじゃん

407 名無し

それ言ったらわりと編集も凝られてるぞ

映像については慣れてるやつが作ってると思う

敵連合人材豊富か??

408 名無し

連合の人材豊富とかどう考えても終わりじゃないですかやだー

409 名無し

世界を変えないといけないって

中二かよとか笑いたいけど実際それだけの力があるように見える

のが悪質だなこりゃ

410 名無し

ワープゲートも手だらけの男もどっちも本物臭い

つか内容的にもガチ連合だこれ

連合じゃなかったらおかしいもん内容的に

411 名無し

普通に考えちゃ許せないことやってるけど

これ聞いたらなんか向こうも向こうでどうしようもない事情があるっぽいのがなあ……

キーになるのが狐さんなのには間違いなさそう

412 名無し

なんで掲示板使ったのか謎だが連合間違いなしだよなあ……
けど美少女が生きられる世界を作るっていうのは共感した
狐さんという二次元から出てきたみたいながチ美少女が死んだら
世界の損失だし

——突如、インターネット掲示板に投下された一つの動画。

それは瞬く間に拡散され、オールマイトを殺した連合という存在を
世界に知らしめると共に——その理念まで広くに伝えていく。

その動画で語られたのは、なぜ犯行に及んだのかの理由。深くまで
は語られなかったが、しかし全てが一人の少女のためであると語った
彼らに対して共感を寄せる声は想像以上に多く、

だからこそ——全ては、敵^{ヴァイラン}連合の目論見通りに進んでいた。

第31話

弔とのんびりと眠り、目が覚めては街へと出て遊び、少し仕事をしてから帰る——そういう日々を過ごしていた。

雄英体育祭のシーズンは過ぎ去っていた。一年生はA組の不参加により、スイコちゃんが優勝したと聞く。そう、A組は不参加だ——参加せずに、一部のメンバーがその実力を伸ばすためにずっと訓練室にこもっているらしい。

そりゃあそうか。オールマイトを目の前で殺された生徒たちだ。体育祭はヒーローにアピールをするポイントではあるが、そんなことより大切なこと——その能力を伸ばし、戦闘力を上げるということのほうを重視するだろう。

ぼくは思った。

——何をしているのだろうか。

のんびりしている割合が大きい。というかほとんどのんびりしている。なにをしているのだろうか。連合は今が大切な時期だ。活動をしなければならぬ。オールマイトの死亡により活気づく敵たちの中にはそこそこに有能な人たちもいるのだ。

そういうメンバーも仲間にしていかなければならない。

「だからとむら、一緒に出かけない?」

「それが目的ですかこの狐は」

黒霧が珍しくツッコんだ。言葉も少しばかり荒い。びっくりする。

「言われなくても仲間探しはしています。ですから今は無意味に危険を冒してまで外出する必要はない」

「……まあそういうわけだ。俺たちも別に引きこもっているわけじゃない。だから外には出ないぞ。暑いし」

「……そんなに働いてたっけ」

「ああ」

弔は堂々とそう言った。なにをしていたのか、と思って、聞くことにする。

弔は言った。

「まずは世論調査だ。掲示板やSNSを巡回して連合についてをエゴサする。考察スレとかも出てきてるからな。だからそういうところを巡回して、適当に荒らしてる」

「遊んでるだけじゃん」

「世論調査だ」

どのような取り繕っても結局やってることはインターネットを使ってのんびりと遊んでるだけだ。しかし弔からすればそっちのほうがいいのだろう。ううむ、とわずかに唸りつつ、自分の意見のほうを取り下げることにした。

「……………死柄木弔。それは流石に……………」

「なんだお前。間違ってるだろ」

「ですがこう……………言い方というものが……………」

「事実だろ」

「あの……………まあ、ただ室内にいてできることと言えばこういうことくらいですし……………ね？ 仕方ないんですよ」

「……………む……………」

「……………あの……………」

「わかってるよ。そりゃあれだけの大事件だもん。うかつにそこにはでれないよねー」

「……………後半棒読みだぞ」

弔に指摘された。なんと。ぼくの演技力は完璧のはずなのに。

しかし人から聞いてそうだったということはそうなのだろう。素直に事実を受け入れよう。

実際、外に出ることが危険だということはよくわかる。だけど人は意外と人の顔を見てないし、顔を隠しておけばバレないんじゃないかと思うし……………と考える気持ちもあり。

まああまり困らせたくはないので、自分の意見を飲み込んだ。

「なにもまったく働いてないわけじゃない。黒霧が大物に予約を入れててくれる」

「……………大物？」

「近頃細々流行りの敵ヴァイランき。仲間になるかはわからないが、可能ならば

仲間についてもらう」

「……だれ？」

「ヒーロー殺し。聞いたことだけはあるんじゃないか？」

「……ヒーロー殺し？ 首をかしげたぼくの反応に、弔は黙った。黒霧が補足する。」

「名前のとおり……ヒーローを襲う敵ですサイランよ。実力は数多のヒーローを活動不能にしてきたことから証明されています。仲間にするならちようどいい手合いですよ。……向こうも参加に肯定的です。近々面接を行う予定なので、そのときは立ち会ってもらいますね」

「……なるほど。よくわからないけど、強い仲間なわけだ」

「仲間になるかはまだ決まってない。強さは証明されてるけどな」

「強さだけで仲間に入れるほど甘くはない、と弔は断言した。例えば、と言つて弔はぼくの頬を突き、

「お前が弱くてもお前は仲間だ。強くある必要はない。俺たちの仲間に入れる連中は、俺たちの仲間にするやつらだけだ。それは信念……度胸……実力も視野に入れはするが、様々な分野を見て判断する」

「……茶味たちは？」

「こちらに協力する気だったことと、実力を評価した。あときはひとまず仲間を増やすことが一番だったが、な」

「なるほど……」

「……そういえば、茶味はどこだろう。周囲を見回すが姿は見えない。ジェントルもだ。仕事があるとは聞いていないのだが。」

ぼくの視線で気づいたのか、弔は言う。

「三人は今訓練中だ」

「訓練？」

「ああ。オールマイトにやられた脳無いただろ？ あいつより若干ロスベックの脳無と戦ってる。死なない程度にボコれって命令してるし三人で戦ってるからなんとかなるだろ」

「ああ……ジェントルは死闘経験がないし、茶味も進化した個性に体がなじんでないからなあ……」

「そういうわけで、絶賛戦闘中だ」

「ちなみに弔は戦って勝てる？」

「崩壊が通じるデカさなら。デカすぎると駄目だ」

そりゃあそうか。弔の個性は基本的に、全ての生命に対してメタともいえるレベルの強さを有している。最近ではその強さも増し、崩壊の速度も増してきた。

オールマイトはその巨体と強さゆえに崩壊はわずかだしそもそも掴むことすら厳しいが、速度が劣る相手であれば今の弔ならば勝てる。

だから問題は——個性の発動条件が接触に限定されるということころだけだ。

なのだが……どうにも最近はその様子も変わってきており、崩壊もさらなる進化を遂げようとしていた。

元々強かった個性だが、だが成長を経てさらに凶悪な性能へと変わってきている。今では戦闘向きプロヒーロー相手にも快勝することだってできるだろう。

——あるいは、もとあるべき姿に戻ってきているのかもしれない。

さらに素の身体能力が優秀だ。だからこそ、弔に勝てる相手というのは本当に少数だろう。

だから、その発言はまったく不思議ではなかった。むしろ当然とも思えるほどだ。ぼくは小さく息を吐いて、どれだけの強さだったら対応できるのかを考える。

極限状態で相手の個性が進化することを考慮して……それでも、エンデヴァーならば勝てると思う。オールマイト、と言わないのは彼の強さが未だ未知数だからだ。

死んでしまったが。

とはいえ、全盛期のオールマイトならばぼくは確実に負けるだろう。なんせ、あの先生でさえ負けてしまうのだから。ぼくが勝つなんて絶対に無理だ。

そう考えると、エンデヴァーは妥当なあたりだと思う。そもそも彼の攻撃はぼくには通用しない——今のぼくなら、蒸発しても三回は

復活できる。

心臓が止まった状況からの復活なら二十回くらいだろうか？
オールマイトの肉を少しもらったから、それを食べて今はとんでもなく回復している。

そういえば……オールマイトの死体は、ドクター預かりになったの
だっけ。オールマイトから脳無を作るのかもしれない。

そうなった場合、最強の脳無ができあがることは間違いないだろ
う。そこに相澤先生の個性を加えなどすれば、ヒーローはすべて抹殺
できる。

ただ相澤先生はその個性の希少性からおそらく先生が持つことにな
るんだろなあ、と考えると、その選択はないか。

「……茶味の進化……あれは使いようによつては便利だしな。そして
ジェントル・クリミナル。あれで意外と戦闘力はある。だから、ラブ
ラバナしでの対応力を上げて……ラブラブも、生存力を高める」
「ジェントルって強いんだ……」

「あれは相手が強いほど逆に強くなるタイプだからな。お前ほど強け
れば逆に狩られる可能性だつて出てくる」

「えー？ うそお」

「お前、自分の全力を全部跳ね返されるとどうなると思う？」

「えーと……吹っ飛ぶね」

「どれだけ吹っ飛ぶ？」

「んー……わかんないけど……たぶん数十キロ」

「ジェントルにはそれができる」

「えっ」

となると……まずい。ひよつとして天敵かもしれない。相澤先生
は瞬きの瞬間に殺せるし、そもそももう排除し終わってるから大丈夫
だけでも。

味方でよかった、と今は少し思った。

しかし……あのジェントルがそんな個性を持っているとは。使
いようではヒーローになれただろうに。

たしかジェントルは昔ヒーローになりたかったのだと聞いた覚え

がある。……すべて個性を伸ばしきれなかった学校の怠慢のように思えて仕方がない。

もつたいない。ヒーローにしておけば、ぼく为天敵を作り出せただろうに。

「世の中はままならないのね」

「……どうした？」

「こっちはなしー」

「……そうか」

少し口が寂しくなって、冷蔵庫から飴程度の大きさの肉を持ってきた。オールマイトの肉だ。この程度でもとんでもなく生命力を回復することができるのだから、平和の象徴は伊達ではない。

しかし……純粋な回復量だけでいえば緑谷くんのほうが多かった。やっぱり彼はオールマイトの息子なのだ。だからこそ、きつちりと相応の舞台で殺してやる必要がある。ぼくはそう決心した。

「……そろそろか。黒霧、迎えにいつてこい」

「わかりました」

と、黒霧がワープゲートを作り出した。

その中から、訓練を終えた三人が出てくる。全員顔に元気がない……どころか、全身が傷だらけだ。どれだけの訓練をしていたのだろう。

ひとまず全員に治癒を掛ける。奥においてあった椅子に並んで座った彼らに感想を聞いた。

「どうだった？」

「死ぬかと思った……」

「見えても対応できないな……あれがプロの世界なのだね」

「地獄だったわ。何度死を覚悟したことか」

「まあ……そりゃあ単純換算で現No.1ヒーローレベルの相手だからな」

弔が言った。

「見えただけ十分だ。問題がわかってるんならそれを直せばいい。」

……対応、だったか」

直後、弔の手がジェントルに向かって突き出される。あわやその五指が触れる——といったところで、ジェントルが俊敏に反応し、弔の手が空気の膜に弾かれた。

「……なるほど。まあまあ戦えるじゃないか」

「……いや、今死ぬかと思ったんだが。反応できた自分をめっちゃくちゃ褒めたい気分なんだが」

「ジョンがいるし死にはしねえよ。ただ痛いだけだ」

「……まあ……痛みには慣れたが……」

とてつもなくなくなにかを言いたげなジェントルを弔は無視する。

「茶味」

「ん？　なんだ、リーダー」

「お前が戦ったガキ……なんだったか」

「緑谷出久？」

「そう、そいつ。そいつとあの脳無はどっちが強かった？」

　少しだけ茶味は考え、

「殺しにきてるぶん脳無かな。ただ、強さでいったらどっちもそんなに変わらない」

「……マジか。最近のガキは強くて嫌になるよ……」

「ぼくなら緑谷くんでもまっさつできるよ！」

「狐さんがとんでもなく物騒なアピールしだしたぞリーダー」

「いいアピールじゃないか。自分のセールスポイントをわかっている」

「駄目だ……狐さんのことでリーダーに同意を求めちゃいけなかった……」

　なにがいけなかったんだろう。

　ぼくからすれば一番いいアピールなんだけど。

「……戦闘力で言えば、俺たちの中で一番ジョンが強い。ただこいつは馬鹿だし……もっと別の役割もある。だからこそ全員がそこそこ以上に戦えるようになってもらえないと困る」

「えへへ……」

「いや、罵倒されてるんだが……」

「とむらのこれは愛情表現だもんねー？」

「……………」

「……惚気はいいので、話を進めましょう」

こほん、と咳払い。

「……オールマイト殺害で、先生からの支援も多い。配布される脳無もそれなりにグレードが高いやつだ。だから安全……かつ戦闘経験の積める今、可能な限り能力をあげなければならぬ」

「……ただ、あんまり同じ敵と戦っていると慣れがくるんじゃないか？」

「そこも想定してある。ドクターに頼んで製作コストが甚大すぎるハイエンドを適当にいくらか借りた。……脳無の中じゃあトップクラスにヤバい化け物だ。これは普通の脳無とは違い知能も持つてる。だからこそ経験値稼ぎにはもってこいだろ」

……ハイエンド。名前が示す通り、脳無の枠に収まらないような化け物なのだろうと思う。ぼくでも勝てるのかわからない。

「そんなレベルのを複数借りた……となると、そりやあ変なクセが付くとか、そういうことを考えている場合ではない。なにせ脳無も成長するのだ。」

相手の動きに慣れるだとか、その動きを狩りにくるに決まってる。それだけの化け物……それを、さらに複数だ。ローテーションを加え、絶対に慣れる合間なんてないと断言できる。

弔は言った。

「強くなるぞ——パワーレベリングだ」

第32話

炎が顔を掠める——体はまともに動かせない。そりゃあそうだ。今のぼくは個性を封じられているのだから。だからこそ、今はすべて素の状態で戦っているということになる。

近づいてくるだけでも汗が滴る熱に対応するのは難しい。今のぼくは絶望的に火力がない。身体能力もない。だから、かんたんな話戦うことはできないのだ。

だが回避はできる。自分の力をすべて防御に費やせば、相手の意識の隙間——攻撃の合間が見えてくる。だからこそ、極限まで集中する必要こそあるが、生還することはできる。

「危ないね——つと」

今度は氷結。範囲がでかいから絡め取られないように逃げる。紙一重では伝染する。だから余裕を持って回避した。

今度は——氷と炎の、両方。空気が膨張し、熱気を吹き散らす。風の爆発がぼくの体を絡め取った。

その威力で砕けて吹き飛んだコンクリートの粒を足場にしつつ、なんとか地面まで逃げようとする。襲いかかってくる炎はなんとか回避しながら、かろうじて地面へと到着した。

そこに氷結が迫る。跳んで逃げようとしたが足に負荷がかかって膝が崩れる。地面に足を着きながら襲いかかる氷結に対しての対応を一瞬迷う——だが、氷の柱がぼくの姿を相手の視界から外した。その瞬間個性が復活する。相手が油断したのだろう。個性を一瞬解除したのだ。

だからその隙に体の強化を最大まで引き上げ、地面をめぐりあげた。コンクリートに指がめり込み、骨組みを含んだ板状のそれが壁のように展開される。

氷結をひっくりかえしながら、壁を避けてホーミングするように迫ってくる炎を拳を振って起きた風圧でかき散らし、どうやって攻撃するかを迷い、

そのまま、拳を振りかぶった。

風圧が放たれ壁か木つ端微塵に砕け散り、尋常でない風圧が部屋一帯を満たす。壁のあちこちが威力に耐えきれず崩壊した。空気の爆裂が世界を駆ける。自分で繰り出した風圧だというのに自分が吹き飛ばされてしまうほど、その威力は大きかった。

世界がひっくり返ったかと思うほどの衝撃のあと、風が収まり縮こまっていた体を戻すと、相手は壁の遥か向こうで動きを見せない。個性が使えるのかを試してみても、それが使えることを確認し、相手の意識を刈り取れたことを理解する。

よってぼくは胸を張った。最近成長しているような気がする胸を。そうして目元にピースを添える。

ぼくは勝ち誇った。

『……やり過ぎだ馬鹿』

ノイズに塗れた弔の声が、廃墟のようになってしまった部屋の中に響いた。

◇

「なんとというか——お前、そんなに強かったか？」

訓練ルームから帰ってきたの弔の言葉だった。はて、と首を傾げる。強くなった気もしないのだが……前からこのくらいはできたような気がするけれど。

「相手の視界を遮っている間に最高火力で薙ぎ払う——なるほど間違っていないな。できるかどうかはさておいて」

「でもできたよ？」

「前のおまえならあれだけの火力出せなかっただろ」

少し考えて、頷いた。言われてみれば火力は上がっている気がする。そもそも風圧で敵を打倒はできなかつたと思うし。風圧を繰り出すことならまだできたが……それもあんまり火力はない。

たしかにとんでもなく強くなっているような。

戦闘でびちやびちやな体をタオルで拭いながら、考える。訓練を始めて大体三日。その間の成長は、どう考えても尋常じゃないものだ。

ハイエンドとの戦闘もなんだかんだ、個性が使えればかんたんに勝てるようになってきた。

パーカーの前面を開き、下着の中にタオルを通した。巾と黒霧しかないし大丈夫だろう。タオルを伸ばし、肌を押し付けそのままぐにーっと横にスライドさせることで肌の湿りを拭き去った。

やっぱり服は熱が中に籠もる。着ることはもう慣れているが、実のところあんまり好きではない。ショートパンツは面積が小さいのでまだ許せる。中が大変だが。

問題は上半身だ。少しだけ服が厚いので熱が籠もりすぎるのだ。気持ちが悪い。

衣替えの時期だと思う。

新しいタオルをとり、最初に拭いきれなかった髪の毛の水分を取る。

暑さに頭が変になりそうだ。水分がほしい。冷蔵庫の中からお茶を持ってきて、喉に流し込む。体の中から冷えた気がして、心地がいい。

「……ジョン、ちよつとこつちこい」

「はえ？」

言われたとおり、巾のほうへと向かう。立ち上がった巾がぼくの頭に手を当てた。

そのまま少し撫でられる。今は汗くさいだろうからちよつと嫌なのだが……ただ、巾の命令だ。動きはしない。

「……お前、背エ伸びたか？」

「……え？」

……あんまり違和感はなかったが。言われてみると、たしかに巾の顔が普段より近い。なんだろうか。体の構成が崩れてるのかな？
と思つて、軽く手を作り変えてみたが変身の精度自体はおかしくはない。

構成がおかしいときはすんなり変形するから、少し変形に抵抗があったということは構成はおかしくないということ。

「……んー……純粹に成長してるのかなあ……？」

じゃあ胸が成長してる気がするというのも気の所為ではないのだ

ろう。

考えられる要因は二つ。

この三日の戦闘経験からくる肉体の最適化。

そしてもう一つが、オールマイトの肉を食っていることによる生命力のオーバードローの可視化。

どちらかといえば後者のほうが正しいだろうが……しかし、たしかに身長はぐぐんと伸びている。甲とびったり30センチも差があったけれど、それから5センチは伸びたのではないか？

なぜ気づかなかったのかが疑問だが……ともあれ、体が成長しているのならば攻撃範囲も増すし力を捻出できる量も増えるので問題はない。

ただ小回りが利かなくなるのだけは注意するべきだろう。

この体をベースにした構成に慣れているので、あんまり変えるつもりもなかったが……勝手に成長しているのであれば問題はないだろう。最適化されている、ということと動きが鈍ることもないはずだ。

「このまま成長するんなら変装は必要ないかもな」

「そうだねー」

自分の手のリーチを確認しながら、そう言った。暑さもそろそろ引いてきた。パーカーの前面を閉める。

「黒霧、もうこっち向いて大丈夫だぞ」

「……そうですか」

他所を向いていた黒霧が、ゆっくりとこちらを向く。なぜだろう。体を見るのを避けたとかならうか。けれどそれも全部今更だろうに。

「そういえばー、みんなの調子はどんな感じ？」

「……茶味はハイエンドと互角に殴り合えてる。ジェントルは……まあそこそこだ。対応力も上がってきているし……ヒーロー殺しとの対談がどう転ぼうとも、どのようにもできるだろうな」

たとえばそれが協力であれ、敵対であれ。

甲は小さくそう言った。

◇

ヒーロー殺しとの対談日。黒霧が連れてきたヒーロー殺しに対し、
弔は座ったまま言い放つ。

「よお」

「……お前が、連合の頭か」

「まあそんなもんだな。後ろのやつらは俺の手足。ここに居るのが不
適切だとか、んなことは言わねえよな」

「……ああ」

弔の少し後ろに立ちながら、ぼくはヒーロー殺しを観察していた。
実力は……なるほど、高そうだ。少なくとも弱くはない。個性は未知
数であるし、そもそも一対一ならば絶対的な勝率を誇っている相手
だ。警戒しないほうがおかしいだろう。

だから、いつでも殺せるように体の強化をし続けている。

この場所は狭い。だからこそ、相手がなにか不審な動作を見せたら
茶味により空間を作成し、確実に相手を殺す空間を作り出す。ヒー
ロー殺しの足止めをするぼくが異空間へと締め出されれば、その瞬間
に相手を殺す。

全く楽観しない、完璧なハメ殺しの手筈。

「オールマイトを殺したんだっただか……動機は？」

「お前はネットを見てないのか？ ……簡単に言うなら、こいつのた
めだよ」

弔はぼくを指差した。

「こいつは人を殺して食わなきゃ生きていけない。だがこの社会は人
殺しが悪だと断じられる！ ……だからこそ、こいつが生きていける
社会を創るために——世界を変えてやらなきゃいけない。雄英襲
撃も、平和の象徴の殺害も、どれもこいつのためさ」

「……そいつにそれだけの価値があるのか？」

「俺にとってはお前の言う『本当の英雄』以上にはな」

「……嘘ではないらしい」

警戒していたのだろう。すぐに動ける体勢を崩さなかったヒー
ロー殺しは、隠していた手のひらを解いて座り込む。

「わかった。仲間になろう——目的は共通しているようだしな」

「……波風立てなくて結構だぜ」

弔が指を鳴らした。ぼくは強化を解き、茶味は握っていた鉄球をポケットの中に戻す。

同様に、ヒーロー殺しも袖に仕込んでいたナイフを落とし、収納した。

「交渉が成立してよかった……お互いに無駄に傷つきたくはないからな……」

「だよな。俺もそう思うぜ。……せつかくだ。良いことを教えといてやろう……仲間だしな」

「……なんだ」

弔は壁に貼り付けてあった写真を引き剥がし、ヒーロー殺しに投げ渡す。

「お前の言う『本当の英雄』……それに該当するだろう英雄のガキだ」

「……詳細」

「仲間を助けるためになんのメリットもない勝負に命を掛ける……最大出力はオールマイトレベルのパワーを発揮する……ピンチになれば平気で限界を超える……俺の一番嫌いなタイプのガキだ」

「へエ……『良い』……な」

「平和の象徴までのし上がってくる可能性もある。……そういえば、英雄はそろそろ職場体験の時期だな。早いやつはもう始まってんのか？」

「始まってるぜ」

茶味が言った。

「今年のA組は体育祭に出てないが……それでも生き残った全員に依頼は出てるらしい。体育祭のときに生徒の個性がプロヒーローにこつそり知らされたらしいぜ」

「なるほど。……だ、そうだ。自分の目で確かめて見たければそいつの職場体験場所を紹介しようか？」

「……いや……俺にはやらなければならぬことがある」

弔が怪訝そうに声を漏らした。あんまり機嫌を悪くしても困る。

ぼくはしつぽで弔の背中を撫でた。

手で掴まれる。危うく声を洩らすところだった。そのまま、わさわさとしつぽを撫でられる。成長に合わせて少しだけ感度も上がっているような気がしないでもない。快感に吹き飛びそうな理性に、指を遊ばせてそれでなんとか平静を保つことにする。

「保須だ……あの街の誤りを正す」

「……それは、ヒーローを殺して回ることに関わりがあるのです？」

黒霧が問う。

「その通り。間違いを突きつける」

「間違い……とは」

今度は、ジエントルが問いかけた。

「本当の英雄を取り戻さなければならぬ……偽物しか現れないあの街に、警鐘を鳴らす」

「……そうか」

「……ふと疑問に思った。お前、なんでオールマイトを殺した俺たちに協力しようって気になった？」

「正義と正義がぶつかったとき、弱いほうが敗北する……当然の摂理だ。お前はお前の正義を主張し……そして打ち勝った。そこに異議を申し立てるほど、俺は無粋じゃあない」

「……へえ。俺が正義、か」

「世界は……正義があるのか、ないのかだ。相容れない正義たちは衝突する……そこに軽いも重いもない、全てが真に平等だ……お前はお前の正義に殉じたただけだろうか？」

「……かつこいいなあ。やけに心に来る……その言葉。嬉しいぜ、ヒーロー殺し」

「ステインだ」

ヒーロー殺しは言い放つ。

「その名は通称……俺のことはステインと呼べ」

「……わかったよ、ステイン」

そこからは、少しの間無言が続く。

弔がぼくのしつぽを弄る手を強めた。声が出そうで危なかったの

でとつさに変身で声帯を消し去る。これで喉を締め上げる必要がなくなつた。息が荒いが、それくらいは別に問題ないだろう。

零れそうになつた唾液を舌を使ってなんとかセーブする。

しつぽでこれなら、耳はどうなるのだろうか……？　そう思うと、今の体の変調を少し恨めしく思った。

「……なあ……ステイン。お前の流儀からして、エンデヴァーはどう思う？」

「……贗物——だ」

「そいつが聞けてよかつたよ」

弔は笑う。殺意と狂気を滲ませて。

「次の楔だ」

ぼくは、ハイエンドの中の一体を思い出す。

「エンデヴァーを殺す」

間違いなくエンデヴァーに勝ち目はない。そう確信できる、ドクター最高傑作の脳無のことを。

「……それこそが……世界を変える次の一手だ……」

どれだけ頑張ろうとも、ヒーローに勝ち目は存在しない。

永遠に繰り上がるNo. 1ヒーローは、どこまで落ちていくのだろうか？

殺戮は繰り返される。世界の変革が訪れるまで。

そのすべてがぼくのせいだと知っていても、ぼくにまったく負い目はなかった。むしろ嬉しささえ感じられた。

だって、弔がぼくのことを想ってくれるんだもの。

第33話

拳を振るうことは好きではない。力を振りかざしている気分になるから。それもちっぽけな力だ。同じ力であつてもその本質は決定的に違う。彼の力は薄っぺらく誰も守れず、正しき持ち主の力は誰かを救い切ることできるもの。

その決定的な違いは埋められない——それはいくら努力しようとも、埋まることはない。

拳を振るうことは好きではない。自らの理想の高さがどれほどのものなのかを悟らされ、そしてその理想の凄絶な死を思い出してしまふから。

理想に殉じて死ぬ——そのことが、怖くないような人間であればよかつた。モニターの向こうで現実味のない光景だと、超常を持たぬ体で指を啜えて見ていればよかつた。そうすれば、こんな苦悩はありえなかつた。

拳を振るうのは好きではない。

好きではないが——強くなるためにはそれしかないのだから、仕方がない。

緑谷出久はそう心の中で呟いて、流れてきた汗を拭い去つた。

英雄だ。英雄にならなければならぬ。それこそが自分に残されたすべてだ。亡き恩人に報いるために、彼がやらなければならぬことだ。

立ち止まっている暇はない。ステップアップは一段飛ばしどころか三段飛ばしで。無理くりにも強くなる必要がある。

オールマイトは最初から100パーセントを扱えた。それはつまり、土俵にすら立てていない。そんなもので英雄になるなど——ヒーローになるなど馬鹿げている。

だから、延々と体をいじめ抜き、リカバリーガールによる筋肉痛の治癒というズルをしつつ、彼は尋常でない速度でその実力を伸ばしていた。

……彼だけではない。そのように、訓練の沼に足を踏み入れたのは

彼だけではなく——生き残った生徒たちの、殆どがそうしてなにかに取り憑かれたかのようにその実力を伸ばし続けている。

先日の惨劇の代価として、彼はある程度の出力であれば息をするように扱えるようになっていた。

それは破滅願望が生み出した成果であるとも言える。

——緑谷出久は、心の奥底で死にたがっていた。

密かに尊敬していた幼馴染の未来を奪われ、友の未来を奪われ、恩師たちを奪われた。憎しみさえもはや湧き上がってはこない。ただ、そのすべてを阻止することができなかった自分の無力を恨む。

死んでしまえばいいのに——と、思ってしまう。けれどできない。思い返す。尊敬していた恩師の、最後の教えを。

自らの死期を悟ってか、彼は一步も動けない緑谷に向けて、その瞳で言ったのだ。

——次は君だ、と。

だからこそ、緑谷には立ち止まっている時間なんてなかった。象徴の不在。それはモラルの低下を招くことを知っている。だからこそ、緑谷ははやく次の象徴にならなければならぬ。

そう、これは義務だ。愚かな無個性の子供が、オールマイトの後継になった。それに課せられた義務がこれだ。

だからこそ、緑谷出久は強くなることを強いられていた。それこそが、オールマイトのちからを継ぐべきものに継がせなかった、愚かな緑谷出久という男に課せられた義務なのだ。

「——ッ!!」

思考が荒ぶって、100パーセントが暴発する。最初に比べ、怪我は軽微だ。内側から破裂するような痛みにも慣れたし、しかも今回は筋肉が生きている。

全身50パーセントは、まだまだつらい。このようにうっかり100パーセントが出てきてしまう。

だがそれで死ぬるのなら、緑谷にとってそれが一番幸福だった。

それがなにも守れない緑谷出久に許された逃避だった。

苛立ち混じりに、あえて100パーセントのスマッシュを放った。

腕に激痛。ただ表面的な傷は見えない。進歩している。

しかし遅い。彼に許された時間はあつという間に過ぎていく。

——職場体験までもう少し。そのときに、頭角を現し……そしてインターンシップで、結果を出す。それが緑谷に課された使命。

だから、こんなところで立ち止まってはいられないのだ。誰もを救えるヒーローになるには、まだまだ足りないのだから。

「……緑谷」

声を掛けられ、緑谷は張り巡らせていたワン・フォー・オールを解除した。全身に筋肉痛。リカバリーガールに治してもらえば、このぶんのステップアップを踏めるだろうと考えながら、彼は声を掛けられた方向へと振り向く。

「……あ、切島くん」

「気持ちわかるがやりすぎだ。……体、壊れてねエけど……中身はどうなってるのかわからんだろ」

「……うん……ごめん、心配させたね」

「……俺も人のことは言えねエな。偉そうに言つてすまん」

「いや、いいよ。あ、そういえば例の必殺技つてどうなったの？」

「出力がちつと足りねえわ。完成さえすればタイマンではそこそこ戦えるようになると思うんだがな……」

「瞬間的に体を限界まで硬化させるんだつたよね。将来的には衝撃インパクトの瞬間に使うって高火力と高防御を両立できると思うんだけど……」

「それには実力が足りなさすぎるわ。瞬間硬化を練習してるけど、やっぱり胸を部分的にとかってなるとちよつともたつく。まだまだ課題がありすぎる感じだな」

しかし……そこまで自己評価ができているのか。それだけ洗い出した、ということなのだろう。

自分も切島のように瞬間的に必要な火力が出せればいいのだが、と考え、しかしそれに必要な労力を考えればフルカウルを完成させてしまったほうが早いと考える。

と、いうかおそらくそれはフルカウルを扱えるようになってからの発展課題だろう。だからこそ今は手を出さないほうがいい。

それよりは体作りのほうが大切だ。

「——うおお、これが俺の空中瞬間拘束——ッ！」

ダークシャドウ

「黒影、全て薙ぎ払え」

「うおおおマジかよ!? ……両面に粘着力があるようにできたらいいか……?」

「それよりは瀬呂本人の戦闘力上げたほうがよくない?」

「ばら撒きはかなり上手くなっているが……問題は当人の対応力か? 撒いている最中に自分への意識が疎かになっているような気がする」

「そもそも黒影がテープを裏から切るなんて卑怯なことやってるのがずるいだけだし今のは相性っしょ」

「あ、瀬呂くん! ちょっと確かめたいことがあるからちよつとだけ模擬戦しない!?!」

緑谷は声を上げた。少しばかり試したいことがあるのだ。快諾してくれた瀬呂が放つ不規則なテープの嵐——その中心で、緑谷はフルカウルを発動する。

猶予はわずか10秒もない。それまでに、テープの弾幕を掻い潜らなければならぬ。どこかに触れた瞬間詰まるようになっていて、拘束技としては理想にかなり近いレベルのものだ。

その隙間を、10パーセントで駆け抜けた。速すぎて小回りが利かない——だが、そこは自分の肉体制御力の見せ所だ。頭の中でルートを描き、その軌跡に沿って体を動かそうとし、弾幕を抜ける、といったところで、

一枚のテープが顔に引っ付き、視界を奪われる。

その瞬間に絡め取られた——失敗したか、と判断し、50パーセントでテープを引きちぎって、顔に貼り付いたぶんを引き剥がした。

「……あー、駄目だったか」

「あれを抜けられるとこっちも困るべ? というか緑谷、風圧で抜けられたるあれ。わざわざくぐってたのはなぜ?」

「自分の体をどれだけ動かせるのかなあって、ちよつとした実験……まだただけどね」

「いや、一応こっちも必殺っぽい技だしあつさり抜けられると困るんだけどな」

自分の体の動かし方がまだ甘い。だからこそ、そこは立ち回りでカバーしなければならぬ。戦闘理論に関してはまだ煮詰めきれてない分野もあるが……まあ、そこはおいおいだ。

「今の必殺、切島くんには通用しないんじゃないかな」

「あ、マジ？ あーでもそうか……硬化の度に鋭くなるもんな。そういう敵にはどうするべきか……」

「俺の場合だとコスチュームを狙うとか？」

「お、いいなそれ。ちよつとやってみる」

実験的に戦い始める二人を見て、自分の改善点について考えながら、時計を見た。

「ごめんみんな！ 先に帰るね！」

「お、お疲れ！ じゃあな！」

「ばいばい！」

「グッバイ☆」

皆のさよならを背後に、緑谷は訓練施設を退出する。



……少し電車に揺られ、たどり着いたのは一つの病院。 雄英襲撃事件での重傷者は全員そこへと入院している。

中へ入ると、フロントでセメントスとプレゼント・マイクが話し込んでいた。緑谷が入ってきた姿に気づき、二人は緑谷に向けて挨拶する。

「二人とも、もう動けるんですか？ その、腕……」

プレゼント・マイクは例の敵に手足を奪われている。なくなった腕の部分に存在するのは、無機質な金属の腕。歩けない足を補助するのは、車椅子だ。

痛ましい姿であると、だれもが思うだろう。

「これでも一応プロだからな。手足がないからっていつまでも寝込ん

じやいらねえよ。……イレイザーのやつだってそう言うだろ」

「……相澤先生なら、そう言うでしょうね」

「……すまん、湿っぽくなつた。生徒の前じゃこんなとこ見せたくな
いんだけどな……」

「……緑谷くん。二人のお見舞いだろ？ きつと待っているはずだ
よ」

「……あつ、そうですね。すみません。それじゃあ、お大事に」

——緑谷が去つたあと。

プレゼント・マイクは弱々しく呟いた。

「……………はっ、ろくに笑いもできねえや……」

「……………泣いているのかい？」

「冗談。……だといんだけどな」

「泣いてもいいのさ」セメントスは言う。「友の死に泣けるのは、弱さ
ではないんだから」

◇

部屋へと向かっている最中に、ぼつたりと爆豪と遭遇した。

プレゼント・マイクのように、無くなつた腕を義手で支え、車椅子
で動いている。そんな幼馴染に、緑谷は声を掛ける。

「おはよう」

「……………もう夜だけだな」

器用に義手を扱つて、車椅子を操作する。一人ですでに動き回れる
ようだ。よかつた、と思う。

……自分と、相澤先生を守つての負傷だつたはずだ。だからこそ少
し、負い目に感じる自分がいるのには間違いない。

「……………腕のことだけだな」

珍しく、爆豪のほうから話しかけてきた。そのことに少し驚きつ
つ、言葉を待つ。

「ひよつとしたら、個性が使えるようになるかもしれないよ」
「……………っ！ それって……………」

「義足は自分に最適化されたヤツがまだ出来てねえけど、それさえできれば……ヒーロー活動ができるようになるかもって」

「……本当に？」

「ああ」

「……よかった」

爆豪は、「それだけ」と言つて車椅子を反転させて去っていく。動きはすこしぎこちない。車椅子に慣れようとしている最中だったのだろう。

緑谷は、目的の病室へとたどり着く。

ノックし、扉を開いた。

「……あ、デクくん」

そこに、麗日お茶子がいる。

◇

思い返すのは自分の過ち。オールナイトが死亡した現実に直面し、呆然としていた緑谷は——迫っていた脳無への反応が、遅れてしまった。

しなる、鞭のような触手だった。崩れ落ちた緑谷の、首を吹き飛ばす軌道のそれが迫ってくる。

——死ぬる、と思った。死ぬ、と思った。

そのとき、緑谷を庇ったのが彼女だった。

首を吹き飛ばしてしまうほどの、低い軌道は少女の下腹部を殴打して、

◇

「今日も来てくれたんやね」

「……うん。今日はどうだった？」

「駄目。まったく動けん。足が動いてもくれないんだ」

「……そっか……」

自分の、せいだ。

そう責めるのは、自分が楽になりたいからだ。誰も責めてはくれなかった。だからこそ、自分で自分を責めるしかなかった。

責めてくれないことが、これだけつらいだなんて思ったこともなかった。それだけ彼女の背負ったダメージは深刻だった。

『——う、い、たい……いたいよ……やだあ……』

すぐ脳裏にあるオールマイトの死と、麗日お茶子の怪我。

ダメージは深刻で、下半身は動かすことも叶わないらしい。そして、同時に彼女は、子を成すことすら叶わなくなった。

——それはすべて、緑谷のせいであるのに……だれもそれを、責めようとはしないのだ。

「……デクくんさ、私が動けなかったとき、私を助けるために……人を殺したよね。何人も……」

「……うん」

否定、しない。すべて事実だ。

あの脳無が人にカテゴライズされるのはわからないが、しかし——脳無を殺してしまったのは事実である。

殺人に対して、命を奪うことに対して感じたことはなかった。それだけ、緊迫した状況だった。

「……ごめんね」

「……いいよ」

「……ね、デクくん。手、握ってよ」

「…………わかった」

言われるがままに、手を握った。

「あのとき……あのときも、こうやってくれたよね」

「……うん」

「前も言ったけど……ありがと。死ななかったけど、私はいま、とってもうれしいです」

——記憶の中にある、地獄。すべてを拭い去ることなんてできず、今との乖離に悩まされる。

思うに、これは贖罪だ。エゴで固まった、独善的な安直な贖罪。

だからこそ、緑谷出久は死んだほうがいいのだと。
緑谷出久はそう思う。

第34話

幻想しうるすべてのことは結局『本物』に敵うことはない。

想像が現実には勝つことは少なく、どれだけ考えてもそれは結局醜い現実に押しつぶされる。だからこそ想像が現実に敵うことはない。

全ては最低な現実という存在がにじり寄るといふ結論。すべてが勘違いでしかないと思ったところで、そんなの関係ない。

だけれど——想像の世界に逃げ込んでしまうのは、悪いことではないんだと思う。

少なくともぼくはそう思う。それをよく思わない人がいたとして、ぼくはそう思うのだから関係ない。関わるな。お前の正義をぼくに押し付けてくるな。黙ってお前はお前の意見をお前だけに強いていろ。ぼくを巻き込むな。

さては頭の中に残留する他人の価値観に脳を奪われているような錯覚を保っているにすぎない。喉の奥に隠した嗚咽を爪でひつかきえぐり出し、現実の這い寄る静かな音に一人恐怖する。

——これは夢だ。そう、わかりきっている。夢でしかないのだが、だがその夢はある種の確実性を持って頭の中に爪痕を残し続ける。引っ搔いてくる。いたい。ぼくがいつたい何をしようんだ。痛い。痛いから、やめて。

『——お前は人間じゃないだろ』

冷たい声だ。ふと、視線を上げてしまった。声に覚えがあつたから。だれの声だ。これは、誰の声だ。想像と違ってほしい。いや、この世界は結局すべて想像なのだが……その中でさえ、想像であることを祈っているのはどうしようもない。

顔をあげて、そこにいたのは弔だった。受容せず、排斥の眼差しでぼくを睨みつけている弔がそこにいた。ぼくはそれを見た。見てしまった。口から水分がなくなつた——吐き出そうとする言葉は覚えぬ。口をうまく開くこともできず、舌も動いてくれず、ろくな言葉が出てくることはない。

まるで、喋り方を忘れたような気分だった。というかまさしくそれ

だった。どうやってしゃべるのか、それを忘れてしまっている。喉は鳴らない。それをするこすらできない。

ただ、かわりに涙が溢れてきた。胸の中にあるものを吐き出すことができず、もどかしさと恐ろしさは、ぼくの臆病さを祟って涙となって溢れてくる。

「……あ、あの……と……とむら……」

『人じゃないお前が俺に近寄るな』

と、甲は言う。いや、彼はそんなことは言わない。これはすべて想像だ。結局自分が恐れているのだ、排斥されるのではないかと。最悪のことを想像しているだけだ。涙は溢れて、口からは溜まったつばがこぼれ落ちる。それを飲み込むこすらできないのだ。嗚咽が、それをさせてくれない。だから今、ぼくの顔はひどいことになっているだろう。

……これは、単純にぼくが変わってしまったているのだろう。昔なら悩むことはなかった。そんな感情を持ち合わせていなかった。すべてがふりであるはずだった。でも駄目だ。

ずっと真似をし続けていたら、それがどんどんほんとなった。

今の自分の感情がだれかの真似なのか、それとも組み上がったしまった本当なのか。それすらわからない。自分がわからない。これは、なんだ。なんのせいだ。急にこうなってしまうのは、どうしてだ？ 息苦しくて、自分の首を爪で抉る。そうすることではなにかが得られる気がしたから。なんにもならない。血が溢れてしまうけど、痒くて仕方がないから爪を走らせる。

首をかいて、まるで喉を食い荒らされているみたいになってしまった。それがさらに自己嫌悪を加速させる。人間はこんなふうにならないから。これはぼくのありえなさ。これだけ体が損傷しても、それでもなにも感じずに淡々と治す。

それって、ほんとに人間って言えるのだろうか。

それは脳無と変わらないだろう。人間らしさを喪失して、気持ちの悪さをのこした脳無と。それは……どうしようもなく、人になり損ねたぼくを浮き彫りにする。

「……やだなあ」

ふと、言葉が洩れてしまった。ああ、それは嫌だ。だから……こんなぼくはぼくじゃない。全部死んじゃえばいい。古臭い体を脱ぎ捨てるように、昨日の自分にさよならを告げた。

ここは夢だ。望めば叶う、そんな世界だ。想像が許す限りの暴虐を行えばいい。檻に自分を閉じ込めて、ぼくはそれに背中を向けた。ぼくはそれから一歩行く。後ろ髪を引かれる思いだけれど、そんなのは全部勘違いだから。

いつものように、感情の仮面を貼り付ける。そうだ、これがぼくだ。さよなら、うじうじ悩むぼく。おちゃらけて、何も考えてないような馬鹿なぼくのほうがみんなは好きみたいだから。だからお前はそこにいろ。

雄英襲撃後から、ずっとぼくはこうしている。こうでもしなければ駄目になってしまいそうな気がして。感情の密度だけで言えば、あそこは恨みと悲しみが尋常でなく濃密なところだった。それにあてられてしまっているだけ。

だから、こんなうじうじはぼくではない。すべてまやかしの幻影でしかない。どうかしている。人間になりたい、だなんて。ぼくはぼくだ。人間になったからといって、弔に好かれる道理もなく。だからこれはすべてまやかし。想像で、現実ではないものだ。

バカなぼくは脱ぎ捨てた。大人になるべきときは来る。停滞はやめだ。変化を受け入れて、ぼくはぼくであるべきだ。

……それができたら最初から苦労なんかしてないんだけど。

◇

「……うゆ……あつい……」

「……………。……俺のほうがな」

「うやあつ!?!」

弔がぼくのしつぽに触れた。驚いて、微睡みがすべて吹き飛んでし

まう。

「……酷いよお……触るんならもつと優しく……」

「悪いな、それはできん」

「なんでえ……?」

「泣かせたいからな」

しれつととんでもない発言が飛んできた気がする。ぼくは聞かなかったことにした。ぼくは成長するのだ。なにか怖いことや知らないほうがいいことを、平然と流せる程度には成長した。

弱みを見せまい、と、いつの間にか流れていた涙を拭ったぼくを見て、弔は一言。

「……今日はまた、格段にデカくなったな」

「んえ? そう?」

「ああ」

弔が腹を撫でた。びつくりして、体の動きが止まる。肉を摘まれた。それをはたき落とす。さすがにぼくでもセクハラは寛容しないのだ。

……しつぽやらは、そんなに嫌じゃないから別に許すのだ。

「昨日はそんなに服、キツくなかっただろ? どう見てもサイズが合っていないぞ」

「えー? そうでもなくない?」

ぼくは服を見下ろした。小さくなっている、と言われればたしかにそうだ。明らかにサイズが合っていない。とりあえず、変身を使ってサイズを変化させておく。デフォルトの体に合っていないのだから、サイズを調整して、それに合うように設計しておくべきだ。

とりあえず変身情報の更新を終えた。これで問題はないだろう。なんとか動くことだってできるはずだ。

服のサイズもかなり変わってきている。特に胸が大きくなってきているのか、これは。服を少し押し上げる程度には膨らんでいた。

成長が著しい、と思いつながら、ぼくは体を落ち着け、再びリラックスした体勢に戻る。これならまた眠れるだろう。……寝はしないが。

弔の服の端を掴み、そうして体を押し付ける。嫌われたくない。駄

目だ、夢が頭の中になんり影響してきている。ぐっと握ったぼくの手を、弔の指が這った。思わずふと力を解く。そして、再び力を入れた。おかしい。明らかにおかしい。こんなの、ぼくじゃない。だけど……これは体の熱さのせいなのだ。ぼくは決して悪くない。

「……は……あ……」

「……おい」

「……んう？」

「おいおいおいおい、お前はなにをしようとしている」

服の前面を開き、弔の手を取って自分の胸へと向かわせる。個性も発動した。抵抗するそれを、無理やり自分へと引き寄せていく。けれどいざ触れる、といったところで振り解かれた。

「……あ」

「……待て待て。どうしたんだ急に……変だぞお前」

だめだ。そういうわけではないのだろうが、拒絶されたというだけで涙が溢れてくる。こんな弱いぼくはぼくじゃないのに。冷静さを欠いている。いつもの無表情が仕事をしない。感情がすべて抑えられない。すべてが外へと出てきてしまっている。

しどろもどろでろくなことを言えないぼくを、弔は黙って抱きしめた。

「……あー……なんだ……家族なんだし、なにかあるんなら言えばいい」

「……なにもないよお」

「お前がそれでいいんならそれでいい。言いたくなったら言えばいい。……一つだけ、お前がなにを悩んでるかとかは知らんが……俺に言えることなら言えばいい。俺にできることならやってやる」

「……ほんと？」

「ああ、本当だ」

「……ん、今は、それだけで嬉しいかな」

ぼくはそう言っつて、弔に抱きついた。

◇

「——せんせー！　せんせええええええええ！」

『……久しぶりだね、ジョン。元気なのはいいんだけど……元気すぎるね、君は』

「お褒めに預かり光栄なのです」

ぼくは久しぶりにアジトから元の家へと帰り、先生に話しかけた。これはまだ割れていない家だ。先生の力でいくつもの家を持っているから、そのうちの一つにやってきた、ということになる。

一応黒霧には伝えてある。なにかあつたときに迎えに来てもらうためだ。しかし弔には内緒にした。

何故ならこの家、先生と話ができる以外にはなにもない。ここにくるなら普通にアジトで話をすればいいとなるし、疑問を持たれるだろう。だからこそ、場所を変えて内緒に話をすることにしたのだ。

「先生！　せんせー！　人間になる方法ってないですか!？」

『……………』

先生が悩んでおられる。

『……どうしてそんな質問を?』

「人間になりたいからです!」

『オーケー、それはわかるから。なんで人間になりたいのかな』

『……なんというか……ぼくって狐じゃないですか』

『うん、そうだね』

と、先生は言った。先生は真摯にぼくの話聞いてくれている。有り難い。ので、ぼくも熱意を伝えよう。

「つまり人じゃないわけです!」

『……うん。うん?　まあ、うん』

「ぼく、例えばどれだけ傷を負ってもすぐに治せるし、痛いって思いはするけどすぐになにも感じなくなるし……」

『……まあ、そこが長所でもあるよね』

「だから人になりたいんです」

『ごめん、なんでそうなったのかわからない』

先生は、ぼくの言葉にそう返した。なんと、と少し仰天する。先生

ですらわからないことがあるのか。

今のはぼくの説明が悪かったのだろう。言葉を考えつつ、どうにかわかりやすい文章を頭のなかで組み立てる。

「えーと……あの、なんかそういうのって気味悪がられそうじゃないですか!? 人っぽくないし! だから人になりたいんです!」

『……もう立派に人だと思っけどね……?』

「……え、そうですか? なんかこう……人間味に溢れてないとか、そんなのではないですか!」

『……今の君は完全に人間そのものだよ。君を人でないと思う人は、今はいないだろうね』

「……ほんとですか!? ほんとにほんとですか!」

しつこい、と思われるだろうか。しかしこれが本当であれば、ぼくの懸念は全部必要がないものであるかもしれない。

そうであれば、どれほど嬉しいことだろうか。

先生の言葉であれば、自然となにもかも信じられる。だって、先生は間違えない。だからこそぼくは先生の言葉を絶対視する。

『ジョン。人間らしきっていうのはね、悩んで、考えて、迷うところにある。君が人間らしくないだなんてだれも認めないだろう。あまり考えすぎないほうがいいよ。君はいま、誰よりも人間なのだから』

——とは、先生の言葉。

先生から肯定されたことに、ぼくはなによりも自分が正しいのだと、人間らしくあるのであると、自分に自信を持つことができた。

だから、悩む必要はない。ぼくはぼくでいいのだと、最も偉大な人が言ってくれた。

故に、自分は自分らしくあろう。

——このときは、まだ、そう思った。

第35話

周囲を見渡した。そこには立派な街がある。街だ。大きい街だ。行き交う人々の数が、それを証明している。ともあれ、ぼくはさらに大きくなり……大人に容姿が近づいてきた、ということもあり、普段とは装いも変えていろいろなものを漁っていた。

普段のデパートに行けばいいのだが、しかし歩いて店を探すこの感覚もまた一興——少なからず楽しみの一つであることは間違いない。手に持ったかき氷を口へと含み、気分は夏祭りのそれだ。近頃の暑さは馬鹿にならないので、こうして体を内側から冷やす必要があるのだ。

ぼくは冷却方面への適正が皆無なので、体に熱を溜め込みやすい。だからこそ普段の服装は露出が多いものになっているのだが……あんなものを外で着ているなんて、さすがに気合が入りすぎる。

寒さには対策できるから、個人的にはあれが一番最適な格好なのだが……派手さがすぎるので、あんまり普段から着はしない。

と、いうことでひとまず繋ぎということでも適度に涼しい服装を見繕ってもらった。変身で服装の情報を変更するのは若干難易度が高いので、あんまりやりたくはない。

そもそも服装に関しては容姿のおまけ程度でしかない。服を変えようとするのと体ごと変えてしまうことになるのだ。それは流石にめんどくさい。

と、言うことで買ってきてもらった服はあんまり派手でなく、人目も惹きづらいもの。

よって人混みに紛れやすいというわけだ。

そりゃあ耳としっぽでそれなりに目立ってしまうのは仕方ないとして、まあまあ街に馴染めているのだから問題はないだろう。掬った氷を口の中へ。冷たい。夏の暑さを逃れるのに、やっぱり氷菓子は必須だと思う。

超常社会ということで、やはりそれなりに治安は悪い。特に都心ともなればなおさらだ。田舎であれば問題はないのだが。

のんびりと歩いていると、正面からやってきた集団の一人に肩がぶつかった。まあそういうこともあるだろう、と無視して歩くが、しつぽを掴まれてその足を止めざるをえなかった。

「……なあに？」

「いやいや、それはないっしょ。人に当たっつといてなにも言わないとか」

「なんで？ なにかを言わないといけないの？」

と、気づけば周囲を取り囲まれていた。こういうことがあるのか……なんて思いつつ、全員を殺すのに必要な時間を考える。

二秒で殺せるな、と判断した。

その個性だろう……ぼくの首に、針金のようなものを突き付けられる。切断力があるのか、ぼくの首に少し食い込んだ。血が溢れる。

「状況、わかる？ こっちはぶつかられてんだよ。ほら、さっさしないとやっちまうぞ？」

「なにを？ なにをするの？ なにをしろっていうの？」

「……だから、謝れっつてんだよ」

「謝ればいいの？ ん、わかった。ぶつかっちゃったよ。ごめんね？」
とりあえず言葉にして謝っておく。面倒な輩に絡まれたな……と思う。相手の心に目を向けると、その中には情欲の炎しか宿っていない。どいつもこいつもこの超常社会で頭がどうにかなってしまったている。

……気色悪い。

「悪いと思っつてんなら、俺らと来てよ。な、それが誠意つてもんだろ？」

「んー、やだ。ぼくやることあるし」

首に、さらに食い込んできた。金属の冷たさがちようどいい。だがそれもぼくの体温ですぐにぬるくなってしまった。少し不満だ。

周囲の声がるさい中、ふと心の中にある別のものが混じった。それはこちらに近づいてきている。同時に——存在感の強い姿が、人の隙間からちらりと見えた。

ぼくの首にモノを当てている男に、炎が向けられた。とはいえとん

でもなく弱い炎だ。やけどする程度のものが一瞬だけ迸り、その体を巻き込む。

それだけで容易に男の意識を刈り取り、沈静化したのだった。

「……さて、流石に看過できない状況だが……貴様ら全員確保と行くか？」

「……え、エンデヴァーだ！ 逃げろ！」

「逃がすと思うか？」

炎が迸る。集団の退路を絶ち、そしてその後にごく弱い炎で焼いた。それだけで、全員の意識を奪い去る。

警察に連絡し、そしてエンデヴァーはぼくに話しかけた。

「……大丈夫だったかな、お嬢さん」

「あ、はい。大丈夫ですけど……」

「……ヒーロー殺しが出ている現状、警戒態勢が上がりあまり活動的な敵はないと思っていたのだが……これはヒーローの怠慢だな」

「いえいえ、大丈夫ですよ！ それより、助けてくれてありがとうございます！
います！」

自分でも白々しいセリフだ、と思った。しかしこの状況でお礼一つも言わないのはなにかがおかしいだろう。

「ごつちも仕事だからな。……すまない、一つ聞くが……」

「はい？」

「死染妖狐、という子が親戚にいたりはないか？ この間の事件で誘拐された雄英生徒だ」

心臓が口から飛び出るかと思った。

まさかその言葉が出てくるとは思わず、かなり驚いた——見た目もかなり変わっているし、わかる人はいないと思ったのだが。

ただ、自分が気づいていないだけで面影はある、ということなのか。それともプロヒーローの観察力が鋭いだけかもしれない。なんて思いつつ、ぼくはひとまず否定する。

「……いえ、知りません」

「そうか……お嬢さん。貴女の名前はなんと？」

「……え、と。……道原紫苑（どわらむらさき）です」

ぱっと思いついた偽名である。ぼくの本当の名であるジョン・ドウをベースに考えついた名前だ。あんまり不自然な名前じゃないからか、そこに疑問を持たれることはなかった。

「……すまない、妙なことを聞いた。容姿が似ていたのにな」

「いえー！ 紛らわしい自分の見た目が悪いんですから！ こんな狐の耳としつぽ、なかなかないと思ってたんですけどねー！」

「ああ。とても似ていると思ったよ」

……。やっぱり耳としつぽはひっこめておいたほうがいいだろうか。

その後、ぼくはエンデヴァーと別れた。また街に行く。かき氷はもうどろどろに溶けていて、また買い直さないといけないなあ、と思った。

ぐずぐずに溶けたかき氷は、もはや味のついた飲料だ。カップに口を当て、残ったぶんを飲み干した。勢いよく傾けてしまって、少しだけこぼれてしまう。首を伝って落ちていく水滴の流れを指で止め、ぼくはべたつく肌を軽く弄ぶ。

「うふふ」

笑う。笑え。笑ってしまった。

当然だ。今から死ぬとも知らないそのNo. 1ヒーローは、一体なんの冗談か和やかにぼくと別れてしまった。もつと深入りすれば、きつとどこかでボロが出ただろうのに。

だから、ぼくは笑ってしまう。

ケータイ電話を取り出した。それは弔と連絡する手段だ。連合と通ずるものでもある。

ぼくは弔に電話を掛ける。ヒーロー殺しは動き始めるだろう。ならばぼくはぼくで、弔に言われたとおりに動くのだ。

——エンデヴァーを殺すために。

◇

「——誤りを——正さなくては……」

物騒に眩くステインに、ぼくは話しかけた。引き連れているのは、三体の通常個体に一体のハイエンド。つまりは脳無だ。

「精神統一ってやつかな」

「……来たか。待ちくたびれたぞ」

「ごめんね？ でもぼく、保須ははじめてなんだよ。ちよつとくらい下見してもいいじゃない？」

「……確かにな。逃走ルートの確保は必須、か。俺が間違っていた」

「そういうことなのです。とはいえ、相手がヒーローな以上このハイエンド一体で皆殺しにできると思うんだけどなあ」

何故ならこの個体は、ヒーローの天敵……どころか、この超常社会においてすべての存在に対する天敵とも言える存在だ。

相手の個性を封じ込めてしまうのだから。

故にそれはハイエンド。先生とドクターが作り上げた中でも、特に凶暴な一品。それをぼくに託してくれたのは、先生なりの信頼なのだろう。

ちよつとうれしい。

「……どうだ、狐。この保須の誤りを見て……なにを思った？」

「んー……そうだね。鬱陶しいやつに絡まれたし、ヒーローは来るのが遅いし……やっぱりヒーローって、やだな」

「……それはすべて、贗物だ……ヒーローと呼ぶに値しない。だからこそ俺たちは正さなければならぬんだ……」

「……んふふふ。そうだね。そうすれば、弔の望む世界を……」

「……相思相愛……か。お互いに惚れ込んでいる」

「……んふ、んふへへへへ……」

「……………」

嬉しいことを言ってくれた。にへーっと笑うぼくに向かって、ステインは言う。

「……そろそろ、動くぞ」

「はーいー」

ここからは、別行動。ヒーロー殺しは彼のやるべきことをやり、ぼくはぼくで弔の目的のために動き出す。

ステインが飛び出して、いなくなった場所。そこでぼくは脳無へと話しかける。

黒霧はいない。弔もない。脳無以外にはぼくとステインだけ。だがそれでもやれるだろう。なぜならこの脳無はそれだけ強い。

「それじゃあ行くっか」

ぼくは脳無へと話しかける。

その合図で十分だった。一人の脳無が飛び立ち、そして消える。今は人を襲っているだろう。そこにヒーローは集まるはずだ。

ならば——そこにエンデヴァーがいる。



——脳無が現れた。その情報を聞き、状況は即座に動き出す。

戦闘力に優れるエンデヴァーは現場へと駆けつけ、炎で早速一人目の脳無を焼いた。周囲には人の姿。サイドキック、また別のヒーローが一般人の避難を合図している。

「……敵^{ヴィラン}連合……！ やはり動いていたか……！」

「——正解でーす！」

そこにぼくが現れた。流石に姿は変えている。雄英襲撃のときの姿だ。牽制用脳無がやられてしまったのは痛い、今のうちにヒーローがいらない場所へと脳無は飛ばしている。だから問題はない。

エンデヴァーの上から、落下するようにして強襲する。炎を放ち、そののブーストにより回避したエンデヴァーがぼくに炎を向けた。

ただ、それへの対策はもう取っている。

「おっと、いいのかな？ いいのかな？ ヒーローが一般人を見捨てていいのかな？」

「……た、たすけ……」

「——!？」

周囲の動揺が心地よい。たった一瞬の間でも、ぼくはもうその間に移動することができるようになっていた。

だからこそ、安全圏にいたと勘違いしている一般人を引き込むこと

など余裕だった。

肌触りのいい若い女性だ。あるいは、少女といったほうがいい年齢かもしれない。逃げられないように、肩を脱臼させておく。

骨が外れ、気味のいい音が鳴った。同時に、女性の叫び声上がる。そのことに、自分の心が燃え上がるのを感じる。理性が蒸発するように、ただ本能の赴くままにぼくは彼女へと指を這わす。

「——あああああああ!!? なんで!!? なんでこんなことを!?

え、やだ、ちよ。いた、痛——やめ、腕はそっちには曲がらなあああ——!?!」

「あら、とれちゃった」

腕を捻って後ろに引っ張って遊んでいたら、ちよつと力を込めすぎたのかぶつりと腕が千切れた。

もらう気はなかったのだけれど。そう思いながら、折角だ。その腕の肉を噛みちぎって、食べる。二口だけ食べたところで捨てた。飽きたのだ。

オールマイトを食べてから、いかんせんあの味が強烈すぎるせいか……没個性の肉は、食べても美味しくなく感じるようになった。

美食家の兆候だろうか。しかし、こう……なんというか、面白い反応してくれる。ヒーローも、人も。雄英のときは腕を切ってもだれも叫びすらしなかったから、あの空間がどれだけプロの精神に溢れていたのかがよくわかる。

「ほら。がんばれ、がんばれ? まだ腕一本だけじゃない? まだあと三つもあるよ? 気を失うには早いよ?」

「や、やだあ……助けて……いや……!」

「だそうですよ? ヒーローさん、もつと頑張つてよ。助けてだって!」

「……く、クソ……ッ……!」

「そんなこと言ってもなにも解決しないよ? ほら、ほら。ヒーローさん、なにもできないの? ほら、はやく、はやく」

と、急かすけれどヒーローはだれも動こうとしない。遅いなあ、と思いつながら、ぼくは彼女の足に触れる。

「……………」

首を弱々しく振る彼女の顔は、涙に濡れて、その目は虚ろであり誰も同情を誘うだろう。ぼくは彼女に笑いかける。

そして、変身で指を変形させて刃の形に。ゆつくりと足の根本に切れ込みを入れた。

彼女が穿いていたスカートはそのカットしたぶん、右側が落ちる。そのきれいな足に血が滴り、白い肌を赤く染める。

「い、いた……っ」

「ゆつくり」

「——あっ!? つ、う、ああ……やつ、あああああ——
——っ!」

ゆつくり、その肉に刃を食い込ませていく。あえて骨はすぐ切れないう程度の切れ味にした。肉に吸い込まれるように刃が消えていき、骨に当たる。

このままでは切れないので、のこぎりのように前後させて骨を削る。それはさぞ激痛だろう。ただ、治癒を利用して意識は絶対に失わせないようにしているの、彼女の悲鳴が途切れることはない。

「やあああああああ——! やだあ! 助けて! 誰かああああ——! 痛い! 痛いの! ひうっ、ちよっ、やだっ、あ、あああああつ——まって、やめて、とめてきれちやうからおねがいだれかため——」

「えい」
骨をようやく切断した。そのまま、肉をゆつくりと切り落とし、完璧に切断した。女性の体と、ぼくの体はほとんど密着している。だからこそヒーローはだれも行動しない。下手には動けない。

女性の足が切断されたとしても。

「あああああ……切れちゃった……あ、わたしの……足……」
「でも大丈夫だよ、これくらいなら治せるしね」

と、いつてぼくは治癒を発動する。女性の足をくつつけた。腕は止血だけしておく。傷がふさがったせいで再び切り落とさないと腕は治すことはできないだろう。

エンデヴァーは絶大な炎を展開する。熱がぼくのもとまでやってきた。なるほど、本気になればここまでできるのだろう。ただ、それでもハイエンドにとっては敵ではない。

ぼくは手を二回叩いた。それは合図として、ハイエンドに作戦開始を知らせる。

——ぼくの体を、氷が覆う。それはとても大きな氷塊だ。ハイエンドが陰から放ったそれに、エンデヴァーはわかりやすく反応した。

「——焦凍オ!? 焦凍! やはり生きていたんだな! 焦凍!!」

「……ちよ、エンデヴァーさん! 敵の可能性だつて……!?!」

そして——ぼくの背後から現れたのは、轟焦凍の姿そのものだ。ぼくが奪った腕は相澤先生のを植え付け、それにより長さは不均等なものとなっている。

轟くんは、エンデヴァーのもとへと歩き始めた。

「敵のフリしてずつと機会伺つた」

「……焦凍! よかった……お前が生きていてくれて……! 俺は信じてたぞ! ——本当によかった……!」

「……ありがとう、親父」

轟くんは、エンデヴァーへと視線を向けた。

途端、エンデヴァーの炎は消え去った。個性が強制的に解除された、ということだ。

「——お前がバカで助かった」

「——な——」

そして、エンデヴァーが足元から凍っていった。その炎は発動しない。体がゆつくり凍っていき、動かすことすら叶わない状況でエンデヴァーは、まるで馬鹿な父親のように。

縋るような目で轟くん——ハイエンドを見た。

「……焦凍……これは、なんの冗談だ? 嘘だろう? ……はは、はははは……」

ハイエンドは、答えない。ただ、溶かされないようにエンデヴァーをまばたきすらせずに見ている。

「——はははははは! ははははははははははっ! ……ああ、わ

かった……俺が愚かだった……敵など、確保だけでは生ぬるい……すべて殺してしまわねば……！」

エンデヴァーを助けようと向かってくるサイドキックは、全員炎で焼かれ死ぬ。ぼくも氷を砕いて、そこから這い出た。

「——忘れるなよ……貴様ら……俺が死のうとも——ここで息絶えようとも——必ずやヒーローが貴様らを捕らえ……貴様らは地獄に堕ちて死ぬ——！」

「それ、ヒーローの言葉なの？」

——エンデヴァーが完全に凍りつく。その氷像を、ぼくは軽く小突いた。それだけでエンデヴァーは崩れ去った。

あっさりと、No.1ヒーローが死亡する。

砕け散るその輝きを見て、ぼくはおもしろみがないと呟いた。

第36話

——轟焦凍型ハイエンド。

轟くんと相澤先生の死体を利用して作られた脳無だ。と、いうよりは死体を無理やり動かしているような感覚と行ったほうが正しいか。蘇生し、人格をすこしいじってから相澤先生の個性を移植した存在。成り立ちから他の脳無とは違い、どちらかといえば普通の被検体と言ったほうが正しくはあるのだが、改造人間であるため脳無と呼ぶことにしている。

あるいは、^{シックス}666。

改造人間であり、その順列を示す数字だ。どちらも呼称として通用するが、なによりも恐ろしいのは二つの強個性を持っている、というただそれだけでハイエンド認定された尋常でない人類特攻と呼べる能力を持つことだ。

身体能力はあまり高くはないが、それでも個性の使用に長けているため大体の敵は炎と氷で仕留められる。しかもそれに加えて相手の個性を抹消する能力まであるのだ——エンデヴァーの上位互換のような個性のうえ、さらに発動型個性の天敵とも言える個性を持ち合わせているのである。

だからこそそのハイエンド。ほとんど手を加えられていないにも関わらず、ハイエンドとして認定された実力はたしかなものだ。

無理な改造をしないのは、轟くんの見た目を崩さないためだ。英雄に再侵略するときには轟くんの見た目を使っていれば、ヒーロー側の動揺を誘うことができる。

だから、素の身体能力にも調整を加えられている脳無の中では弱い部類に入る。

ただ、このヒーロー社会において単純な戦闘能力だけを売りにしているものはどれだけいるのだろうか？ 一応、ヒーロー殺しは個性の関係がない戦闘力を保有している。探せばそのようなヒーローも存在するだろう。だがそういうタイプにはまた別の脳無をあてればいだけ。

ステインはたしかに強力だ。戦闘力でいえば、前のぼくが苦戦するくらいはあっただろう。連合の前の戦力では足りなかっただろうことがかんたんに想像できる。

今は普通に勝てるだろうけど。

まあ、そんな事情もあり——利用できる駒として、これほど優秀な脳無もない。事実、エンデヴァーをあつという間に仕留めてしまった。

その制圧力は驚愕に値するものだ。

「それにしても退屈だったね」

「……ああ。No. 1ヒーローのくせに味気ない」

「というか普通に喋れるんだ。ベースが轟くんだから？ 状態としてはどんなかんじになってるの？ んー、ちよつとわかんない。あ、ねーねーハイエンド。ぼくのこと、なんて呼ぶ？」

「死染だろ」

「轟くんのベースを弄ったのかな？ なるほど、なるほど。あるいはなにも考えてない可能性もあつたりするかもだにやん？ そこんところどうなのさハイエンド」

「……よくわからん」

「そうだね。帰ったら先生に聞いてみよつと。んー、ハイエンドって呼ぶのもあれだな。それじゃあ轟くんって呼ぶことにするね？ それでいい？」

「ああ」

No. 1ヒーローの死体は……いらぬ。轟くんのほうが優秀だからだ。体はいじっていないとはいえ、個性だけは少しだけ出力を増している。だからこそエンデヴァーに価値はない。

肉も、どうせ美味しくはない。ならばぼくには必要がなく、ならば氷像は放置しておいたほうがいい。

No. 1ヒーローの敗北が伝わるのだ。そちらのほうがいいに決まっている。

ふと、気配を察知した。心の声も同時に聞き取る。不意打ちを狙っているようだ。空中にいるらしい？ 後ろを振り向き——その瞬

間に、地面へと叩き潰された。威力は相当なもので、どうやらぼくの背後の地面が割れている。

そして、自分の腹が潰れているのにも気づいた。普通の人間なら致命傷だ。少し痛い。相手の背が低いから、轟くんもぼくを巻き込むのを恐れてか個性の発動を躊躇する。

「撃つて」

だからこそ命令する。そう言えば、即座に炎を放つ。それはそこそこの大きさであり、ぼくを巻き込みながら駆け抜けていった。

治癒を施して、一瞬で後ろへと飛び去った相手の姿を見る——老人だ。到底戦闘能力があるとは思えないその姿は、しかしコスチュームを着ている以上ヒーローなのだろう。

少し面食らいつつ、ぼくは体を起こした。相手から離れてくれた以上、ハイエンドの個性が発動できる。ぼくの治癒を邪魔しないように、先程は発動しなかったようだ。

たしかに個性を封じられた状態で死ねば、ぼくは蘇生ができずに死亡するから……その判断は間違つてはない。

「いきなりお腹ぶち抜いてくるとかヒーローは酷いなあ。痛かったんだよ?」

「死んでも死なねえようなヤツだろうが。それにな、ヒーローには汚名を被つても相手を殺さざるをえないときがあるんだよ。わかるか?」

「なんで? それって敵ほくたちと同じじゃん。ヒーローって名目があったら人殺しも許されるの? おかしいよ」

「お前らみたいなイカレ野郎共に対抗するための最終手段だよ。お前の戦闘能力を考えて……捕らえるのはほとんど不可能だ。拘束もすべて碎かれるだろうしな……現に轟のやつがやられちゃまって。だからこそ、これはもうなりふりかまつてられる状況じゃねえ」

「んー……おかしいよ。変じゃない? ねえ、それ、なにかおかしいよ」

「No. 1ヒーローを二人殺したような人間だろ。生き延びたところで死刑は免れない。それだけ重い罪なんだよ……お前らと出会った

場合、殺せと俺達は指示されている。それだけのことをやらかしたんだ、お前らは」

「変だもん」

「変じゃねえよ」

「それでヒーローって言えるの?」

「悪人を切り捨てても市民を守るのがヒーローだ」

「へえー……人質を見殺しにするヒーローさんのくせに、そんなこと言えるんだ」

怪訝そうに、老人の目が細められる。ぼくは少し周囲を探して、先程いじめた女の人の死体を指差した。

「ほら、あれ。エンデヴアーは見殺しにしたよ? 助けてーって言ったのに。おかしいね、おかしいね。市民を守るヒーローなのに人を見捨ててるよ? おかしくなあい?」

「……安い挑発だ」

老人はいう。

「人を嘗めるのも大概にしろよ若造。お前らみたいな人間捨ててるやつに、人の力つてのを思い知らせてやる」

「えへ、個性もないのにできるわけないでしょ」

「そうか? 俺はそうは思わねえけどな」

老躯であるというのに、その気配は尋常のものではない。

思わずぼくは一步下がってしまう。しかし、今の現状ではぼくまで個性を抹消されてしまうので、下がったのは正解だったと言える。

「轟くん」

氷が這ってゆく。老人の体へと迫り、その身を凍てつかせようとする——が、しかし、それは回避されてしまった。

そりゃあそうか。あれだけの速度を持てる個性、それを制御する肉体は強靱なものでないわけがない。だが個性で速度を得て、そこから威力を捻出するタイプなのだろう……こちらに攻撃は仕掛けてこない。

堅実に立ち回るヒーローだ、といった印象を思わせる。面倒だ。手早く片付けるべき……なのだが、勝負を急ぐと轟くんが邪魔になる。

だからといって抹消を使わないのは不安が残るし、持久戦は避けた
い。

応援を呼ばれると面倒だからだ。幸い、ヒーローの初動が遅くて助
かったが……それでも、またすぐに駆けつけるだろう。

「……むー、めんどくさいなあ。轟くん、個性解いていいよ。ぼくがや
る」

「……わかった」

抹消が解除される。それにより、ぼくは個性を不自由なく発動する
ことができる。体の強化を利用し、老人へと躍りかかった。

相手は空中へと逃げることで、ぼくの初撃を回避する。足の裏から
空気を噴出しているようだった。優れた個性だ。空中でも自由に軌
道を変えることができる時点で、空中戦は分が悪い。

ひよつとするとエンデヴァーより断然強いかもしれない……まあ、
戦闘力だけで見ればエンデヴァーより強いヒーローはもつといるの
か。そりゃあ当然だよな、と自分の思考にツッコみつつ、ぼくは空中
を駆け上がった。周囲のビルの壁は、蹴るには丁度いい幅をしてい
る。それを利用すればぼくだって空中で戦える。

老人に蹴りかかった。そこを回避され、足を払われてバランスを崩
す。勢いも失速し、早速制御を失った。

慣れていないことはするものではない。老人が上から叩き落とそ
うと画策しているのを直感し、ぼくは上へと体を向けた。降ってくる
彼のリーチより、ぼくのリーチのほうが長い。だからこそ、相手の攻
撃がぼくに入ってくるまえに、ぼくは足で蹴り上げて——はるか空
へと打ち上げた。

反動で、自分が勢いよく地面に落ちる。老人のほうは高く打ち上げ
られ——抹消を恐れてか、ビルの屋上に立っていた。

地面へと追突して、道路が派手に割れる。自分が隕石になったよう
な気分をするのは久しぶりだ。痛い。地面にめりこんだ体を起こし、
老人をにらみつける。

「相手が空から降ってくれば抹消で仕留められるんだけど……」

と、思ったが相手は降りてくる姿を見せない。

揺さぶられている。

ちくしよー、とぼやきつつ、しかし相手がアクションを見せないのならこちらにも考えがある。

民間人を適当に犠牲にすればいいのだ。

そう思つて軽く周囲を探したがだれもない。やはりここらへん、逃げられちやつたか、と思う。どうにかする方法はないか、と考えて、ビルの中から一人の男性が出てきた。

「……えへ」

彼は周囲の閑散とした状況に困惑している。外の情報を仕入れることはできなかつたのだろうか。しかしそれも仕方ない。ことが起こつたのはついさっきの出来事で、報道機関がまだ仕事はまだ仕事をしていない。

中から外の様子がわからなかつたのだとすれば、それは仕方のないことだつたのだろう。

ぼくは男性に近づいた。そして、いつかの先人に習つたように、彼の体の中に炎を生み出す。

「……………」

男性があつさりと思切れたというのに、なぜか老人は降りてこない。ヒーローの怠慢だ、と思いつながら、ぼくは彼に視線を向けた。

……なにかがおかしい。さすがにヒーローというのに、これだけ降りてこないというのものもあるのか？ 何故だろう。なにかがおかしい。疑問に思つて、ぼくは飛び上がった。ヒーローが人を見殺しにするのはおかしいから。ひよつとすると、なにかの罠に掛かってしまったのかもしれない。

屋上に到達する——のと、背後から狙撃されたのはほとんど同時だつた。

肩を撃ち抜かれ、ぼくは制御を失う。落ちまいとかがうじて屋上の端に掴まり、撃たれた傷を治す。

その手を、老人が踏んだ。

「あ……………」

「だから甘えよ、若造。会社が何やってるかくらいしつかり把握しと

くんだな」

「や、待って、落ちるの痛いから……ね、考えなおそ？ あぶないよ、落ちたらあぶないよ？」

足を踏む力が強まった。耐えれないことはない。握力に関しても、無理やり強化したことでコンクリートにめりこんでくれている。だが……それが崩れてしまえば、お終いだ。

落ちるのは嫌だ。ぼくだけ痛い目をみるのは嫌だ。割に合わない。手玉に取られたような気がして、お腹の奥がむかむかする。

「お前は今まで助けてといった敵を助けてきたのか？」

「あるよー！」

「そうか。で、その敵はどうなった？」

「えーと……たしか、襲ってきたかな」

「ならそれが答えだろ」

「ちよ……っ……やあ、痛いって……！」

「悪いな」老人は、ぼくの足を踵で踏み潰す。「落ちろ」

体のバランスがおかしくなってきた。あやふやだ。まずい、これじゃほんとに落ちる。それは嫌だ。嫌だから……足を強化した。

そのまま、大きく足を振った。バランスはおかしくなるけど、それでもいい。どうせ落ちるなら巻き添えにしたい。自分だけで落ちるのはしてやられた気分になるから。

なにを、と困惑する老人を置いて、ぼくは屋上を持ち上げた。先程の蹴りで天井を破壊しておいたのだ。だからこそ、筋力を強化して——落下しながらも、ぼくは屋上を持ち上げた。

「狙撃手、いるよね？ 痛かったんだもん。やりかえしていいよね？」

「……ぼっ……！」

指を引き抜き、片手で老人を捕らえた。もう片方の手で、屋上を狙撃手がいると思われる向かいのビルへと投げつける。

真つ二つにビルが割れた。

「……く……っ！」

老人はぼくを蹴り、手から離れていく。しかし無駄だ。ぼくは轟くに合図を出した。その瞬間、個性が抹消される。

ぼくも、老人も、どちらもの個性が消し去られた。

「じ、自爆戦術か——!?!」

「違うよお。ぼくは落ちてもたぶん大丈夫。……死にたくないけど、死んだら死んだでそのときだし」

「…………ぐ、く…………」

「えへへへへ。それじゃ、おじいちゃん。さようなら?」

地面に打ち付けられるまで、あと少し。尋常でない速度で落下するぼくたちは、高度を考えるに確実に死ぬだろう。

それは嫌だけど…………まあ、運が良かったら生き残るかも。ぼくの蘇生判定が、個性を使えるようになったときに行われるんなら問題ないと思う。

だから、怖くはない。恐ろしさもない。落下でぐちゃぐちゃになることも、怖いことなんてなかった。

なんて言って、少しだけ恐ろしく感じていることがある。

ぼくが死んだら、弔はどう思うのかな——なんて。悲しまないでほしい。ぼくなんかで悲しまないでほしい。けれど、悲しんでくれることが嬉しいぼくもいる。

ああ、やだな。やっぱり死ぬのはこわいかも。

蘇生できたらいいのだけれど——なんて思った直後、地面に体が打ち付けられた。

激しい衝撃で、体の外に内臓が飛び出した。衝撃で体は潰れ、破裂して血を撒き散らす。内臓が喉からにゅつと出てきて、気持ち悪さに吐き出した。頭も割れて、目も飛び出して。もう人の原型は保っていない。

——意識は薄れる。自分の体の崩壊を、なんととはなしに感じ取ったけど。

これで生きてたらすごいよなあ、だなんて考えて。

同様に落下した老人の血だろうものが、ぼくの体へと飛び散ってきた。

そのことだけに安心して、僕は意識を失った。

第37話

生が喜劇であるのなら、死は悲劇に彩られるのだろうか？

ヒーロー殺し・ステインは自らの死に際を想像し、それで一人悦に浸る。ヒーローによって殺されるのか、それともはたまた道半ばで惨めに死ぬのか。ろくな死に方をしないというのは彼自身わかっている。しかし、どちらに転ぼうとステインからすればそれもまた良し——だ。

生半可な敵に負けるつもりはない。しかし、自らの死により誤りが正されるのであればそれでいい。さては凄惨に死ぬのでさえも、彼にとっては変わりなくすべてが十全だ。

人の本質は容易に変わらない。正しても正しても——すべては結局、やがて元に戻る。しかし変わらないものはない……時間が経ち、ヒーロー殺しの畏怖は消え去りすべてが無為へと舞い戻っても、それでもいい。

変わらないものはない。それはステインでさえも。ただ、その中で変わらないものだってたしかにあるのだ。

ステインは変わってしまった。それは、死柄木弔と出会ってからだ。それはまさしく——運命と呼ぶべき出会いだった。

思い出す、あの畏怖を。英雄には必ず倒すべき敵がいると言うが……それが必ずしも悪であるとは限らない。

ダークヒーローなんて言葉があるように、ヒーローが正義であるとも限らない。ならばこそ、ステインは考える——死柄木弔は英雄である、と。

そう、死柄木弔はヒーローだ。サイラン敵という立場ではあるが、彼は間違
いなくヒーローだった。

ヒーロー……それは英雄である。蛮勇を正当化できてしまうものだ。畏れを覚えるほどの、常人には理解も及ばない理屈で行動し、そして結果を出してしまう。

だからこそ、死柄木弔はヒーローなのだ。

言わばたった一人を護るヒーローか。世界と一人。ヒーローであ

れば、世界を取つてしまおうが……死柄木弔はたった一人を選んだ。選んでしまった。だからこそ、彼は敵サイランという立場でありつつも英雄であると言える。

……死柄木弔の行く末を見たい。たとえステインが死んでも死柄木弔の理想の世界は完成する。そのとき、世界の誤りは正されるだろう。死柄木弔という英雄に対抗するヒーローがいるとするならば、それは英雄であることに間違いがない。

たった一人を切り捨て、世界を救わんとする英雄。

——ならば。ステインが道半ばで息絶えたとして、ステインの理想は成就する。

「……………ぐ……………クソ……………」

刀を突きつけた贗物ヒーローが、呻きをあげる。体を動かそうとしているが……それは、うまく動かない。ステインの【個性】だ。相手はしばらく、動くことはできないだろう。

それは十分以上の隙になり得る。ステインがヒーローを殺すときでさえ、その体は動かない。

だから、あとは刀を振り下ろすだけ——だ。

(味気ない……………)

正直なステインの感想だ。あれだけの英雄を見てしまうと、このような輩がヒーローを名乗っていることに憤りすら覚える。オールマイトすら超えた、仄暗い闇を湛えた輝き。それに一瞬で塗りつぶされるような、淡い光。

情を掛ける余地もない。弱い方が淘汰される。それが世界の常識だ。

「……………この、死ね……………ッ！」

「ハア……………ヒーローの遺言にしては適しているとは言い難い……………やはり、贗物だ」

——刀を振り下ろす。生かしておく価値もない。この間のヒーローよりも、よっぽどこいつは弱い。

自らも相当な物語を背負ってきた。相手も物語を背負ってきたのだろう。だが、その物語も幕を閉じる。全ては密度が薄かった故

に。信念が温すぎたために。

万歳三唱！　ここで相手の命は散るだろう。まごうことの無い現実が其処にある。振り下ろす刀の軌跡は、緩やかになることもなく一瞬だ。当然だ。ステインは、相手に圧勝した。善戦すらできずに敵は散ったのだから。

だから、ステインの刀は相手を刺し穿っているはずだった。

背後から、第三者の気配を感じ取るまでは。

「――！」

「――ぐあつ……！」

相手は虎視眈々と不意打ちを狙っていたらしい。しかし、それも甘い。刀を後ろへと回して斬撃を放つ。殺気が隠しきれていなかった。……暗殺者としては二流だろう。

戦闘経験は浅い。敵について、そう判断し……そこでようやく、相手の姿を見た。

「……コスチュームを着た子供。……何者だ？」

さては、ヴィジランテか。覚えがある。敗北の記憶を思い出し、しかしあのときの敵よりは間違いなく弱いと判断する。

殺意を感じられる……そして、その瞳。

「お前を追ってきた……こんな早く見つかるとはな！」

「その目は仇討ちか。言葉には気をつける。場合によっては子どもでも標的になる」

「……標的、ですらないと言っているのか……」

そいつは猛々しく……憎悪を隠そうとすることすらなく。

「では聞け、犯罪者。僕は……！　お前にやられたヒーローの弟だ……！」

——誰だ。今まで倒したヒーローの数は、それこそ数え切れな
い。

「最高に立派な兄^{ヒーロー}さんの弟だ！　兄に代わりお前を止めに来た！　僕の名を生涯忘れるな!!」

ヒーロー。そうか、しかし……その澱みを見れば、彼が英雄に値しないものであるとすぐに理解できる。

少なくとも、ヒーローを自称するのであれば。

「インゲニウム。お前を倒すヒーローの名だ!!」

「そうか、死ね」

ステインは無感情にそう言った。

◇

インゲニウムの名に覚えがないとは言わない。だが、だからと言って手を緩めはしない——憧れに呪われた、ヒーローを騙る幼き犯罪者に対して容赦などする必要がない。

相手はどうせ、ヒーロー免許を取っていない。それはだれがどう言おうと、犯罪行為であることには間違いがない。それが英雄として相應しいものを見せるのであれば、まだよかった。ステインも容赦はして殺すとまでは行かなかった。だが、相手はその資格を見せなかった。

「——だから死ぬんだ」

夢が現実になるように、すべてが上手くいくなんてことはない。結局のところ、誰もが誰も正義を掲げ、その衝突は醜いもので、崇高なことを嘯いたところで齎す結果は生産性のない凄惨なものだ。

結局のところ、怒りに目が眩んだか、幼児的全能感が抜けきらなかったのだろうか。刀をあてがい、そのまま力を込めれば相手は死ぬ。「ヒーローを騙るんならば……せめて私情を持ち出すよりも先に、人を助けだそうとするべきだったな……死体が一つ増えるだけだ……ハア」

「……ぐ……クソお……!」

「それで。俺と戦って……どうするつもりだったんだ？ 捕まえるか？ 殺すか？ どっちにせよ、お前がお前の正義を持ち出して俺の正義と対立している以上……強いほうが勝つに決まっている」

「……黙れ……」

「実力を磨いて殺しにくればよかつたものを。私怨で動き、大局を見れない……間違いない愚か者の結末だ」

「……黙れ……！」

「言葉に棘が混じったな。凶星を突かれて怒ったか？ ならばそうしておくべきだったんだ」

「黙れ!! お前が何を言おうとも、その本質は変わらないだろう……!?! どれだけ言葉を並べ立てたところで、お前は兄を傷つけた犯罪者だ!!」

——その言葉の瞬間、だったか。

気づけばステインは、浮いていた。

いや、浮いていたというよりは——吹き飛んでいた。路地裏の深くへと吹き飛び、眠っていた猫を巻き込みながら地面に落ちた。

一目散に逃げていく猫を尻目に、ステインは何が起こったのかを把握するために殴られた方向を見る。だが、視界にはなんの変化もない。なんだったのか、考える間もなく。

「——デトロイト——スマツシユ！」

「——!?!」

上。それも、はるか上空だ——隣であるマンションの、その天井付近。拳を振りかぶった人影があった。それは落下しながら近づいてくる。

ステインは、反射的に刀を振った。ナイフを撒いておくことも忘れない。だが、それも無駄だった。圧倒的暴力の前には無駄でしかなかった。

瞬間的に近づいてきた姿は、ステインの刀が振り始められるよりも早くにその姿を間合いへと侵入させる。直後放たれた拳の振りは、まるで人を殺すことを厭わない——何もかもを薙ぎ払うかのような、暴虐。

殴打され、地面になぎ倒されて、尚もステインは立ち上がった。自分を倒さんとする、圧倒的な存在の姿を見るために。

その姿には見覚えがあった。……そう、たしか、死柄木が渡してきた自分の求める英雄の条件を満たした男。

良い、良い、良い、良い！ 絶頂不可避だ！ こんなことがありえるのかとステインは思わず息を漏らした。

恍惚。正しくそれがステインのすべてを満たしていた。彼は英雄というものが何であるかを理解している。オールマイトから始まり、全てを余すところなく継承してステップアップしている！ それは間違いなく、オールマイトが守ってきた火を継ぎ、その身で燃焼させるが如く。緑谷出久という少年は、オールマイトの後継としてあるべく姿を晒していた。

ステインは、間違いなく敗れるという予感を湛えたままに緑谷へと襲いかかる。その実力を、自分の体のすべてで確かめたい！ 死んでもいい。それだけのものを見た。近頃は収穫が多い。それだけで、もう悔いはない。

真逆の英雄が立ち上がったこと。その始まりをステインは目にすることができたのだ。いつ死んだっていい。その結末を見届けられないのが残念であるが、今、緑谷に殺され糧とされることもそれもまた一興。

——新しい時代を担う存在を、知ってしまった。それがステインにとって、なによりもの絶頂だった。

振るう刀は、鋭く靡く。緑谷の小さい体ならばどこに触れても割断できる。だがその小さいという部分を活かし、彼はステインの股を抜けて回避した。

即座に刀を後ろへと放った。見ていなくとも、ある程度推測は可能。牽制にも、必殺にもなる一閃は——外れる。

ステインは、頭上にある緑谷の姿に歓喜した。これほどまでに、すでに出来上がっている！ 本人はかなり堅実なタイプなのだろう。あれだけ豪快な力を持っているに関わらず、それによるゴリ押しではなく相手を分析し、確実に仕留めようと画策……今の行動で、慎重さを垣間見ることができた。

「——スマッシュユ」

直後の攻撃は、尋常ではないものだった。ステインの頭を殴打し、

一瞬でその意識を奪い去る。

——自らの活動が終わると直感しても、それは惜しくはなかった。これほどまで完成した英雄を見られたのだから。

英雄の不在。後継となる英雄の新たな完成。そう、ならばこの後の退屈を考えても惜しくはない。

——光と闇。互いが互いを助長し合う立場の喰らい合いは、どちらの勝ちで終わるのだろうか？

今はただ、それだけが気がかりだった。

◇

ヒーロー殺しの体をゴミ捨て場にあつたロープで拘束し、緑谷は歩けるようになった飯田に未だ動かぬ被害者を背負ってもらおう。戦闘の余波でか、意識を失っていた彼とヒーロー殺しを運びながら、大通りへと出た。

「しかし……虚無感というのか、これは「？」」

「……あれほど恨めしかったヒーロー殺しだが、あっけなく緑谷くんにやられてしまったのを見ると……ね。自分がなにをしていたのか、何をすべきなのかわからなくなってしまった」

「……………ああ」

復讐者が復讐を終えたあと、残るのは徒労感と無力感だけであるとされる。きつと、彼もそうなのだろう。

だが緑谷は、彼には立派な目標があるということを知っている。だから、言った。

「飯田くんは何を目指してるんだい？」

「……………わからない」

「僕は知ってるよ。飯田くんは、お兄さんの後を継ぐんでしょ？ なら、それに恥じないヒーローになればいいじゃないか」

「……………俺に、それができるのか……………？」

「僕の知ってる飯田くんならできるさ」

「だが僕は……取り返しをつかないことをしてしまった……恨みのままで動いてしまった……」

「飯田くん。これはよく言われることなんだけどさ」

緑谷は言う。

「失敗してもいい。大切なのは失敗したあとどうするか、だよ」

「……そうだな」

——ふと、違和感を持った。

脳無の襲撃で保須へと降り立った緑谷だが、彼が降りたときはヒーローがたくさんいたはずだ。平和な街の襲撃に対し、対応する人たちがたくさんいたのだ。

しかし今はその影も形も見えず……都会に似つかわしくない、閑散とした街の姿がある。

「……」

お互いに、無言になった。おかしい。なにかがおかしい。雰囲気为重苦しい……人がいない都会は、ここまで虚無感を思わせるのか。

だれかいないかと歩いていき……緑谷たちは、ビルよりも高い巨大な氷塊を発見した。

わかりやすい目印へと向かい走ると、そこには死体がある。

たくさんの焼死体と、目を見開き、内臓をこぼして死んでいる女性。そして、

「……嘘だろ……」

「……馬鹿な」

お互いに、息を呑んだ。

それは間違いなく、バラバラに砕けた現N.O. 1ヒーロー、エンデヴァアの死体だった。

……少し先に、派手に壊れたビルがある。脳が警鐘を鳴らしている。進むな。後悔する。それはわかっている。だが、緑谷出久も、飯田天哉も進んでしまった。

——そこで、二つの、原型すら留めていない死体を発見した。

性別すらわからない。だが、緑谷は片方の……小さいほうの死体の正体を、そのコスチュームで理解した。

「……グラントリノ……」

「……知り合い、かい？」

「……職場体験先の、ヒーロー」

「……そうか……」

一体世界はどれだけの悲劇を運んでくるのか。オールマイト、麗日お茶子、グラントリノ。緑谷を助けてくれた人は全員死んでいく。そんな気分さえしてきた。

……そして、あえて目を逸らしていた、一人の生存者。

「……轟くん、だよ」

腕の長さが、前とは異なっている。体に合っていない、その腕を見て……もう彼が前の通りの人間でないことを理解する。

「……緑谷。それに飯田か」

「……君が、これらをやったのか!？」

飯田天哉は叫んだ。そうせずにはいられなかった。そろそろ、気が狂いそうだったのだ。

死体だらけの保須の街は、それだけおかしなものだった。

「……その老人は、俺がやったわけじゃない」

「……なら、だれが」

と、いつて思い至る。もうひとつある死体。ひよつとすると、それがこの下手人なのかもしれない。

飯田の視線に、轟は肯定した。

「正解だ。……今はちよつと目を覚まさねえが……たぶん、そろそろ……」

何が、と問うまでもなく。

ゆっくりと、叩きつけられ原型を留めていなかった死体が、再生していく。ぐじゅぐじゅと、肉を波立たせて。

生理的嫌悪感を煽るその再生に、二人は啞然とした。盗み見れば、轟も気味の悪さへの嫌悪感を隠そうとしていない。相手にとつてもこの光景は気持ち悪いらしい。

——そして、再生は終わる。途中から人の形を成していたが、完全に整形が終わり新たな人の姿が完成した。

狐の耳に、対応するようにある尻尾。毛はぼさぼさながらも滑らかであり、手の通りは見た目以上に良いものだろう。髪は肩へと掛からないほどの長さの、明るい茶髪。

その特徴で、緑谷は思わず呟いた。

「……………死染、さん？」

……………いや、違う。違うだろう。緑谷の知る彼女とは全然違う。彼女はもっと幼い体格だ。あれだけ凹凸がはっきりとした肉体ではなかったはずだし、身長も20センチほど違う。

だというのに。

「……………うん？ なぁに？」

彼女は反応してしまった。だからこそ、緑谷は受け止めざるをえなかった。……………もはや、何も言えない。言葉にならない。感情さえも枯れ果てる。……………ただ、理解した。

——死染妖狐が、グラントリノを殺した犯人である……………という事実を。

第38話

……やらかした。

蘇生直後でろくに頭が働いていないせいか、うつかりとやってしまった。これはとんでもないミスだ。くそお、こうなるんならハイエンドにはぼくのことをジョンって呼ぶようにしておくべきだった。

しかし……リカバリーはまだ可能だろうか？ 緑谷くんならなんとか騙せそうな気もする。どうするべきか？ この老人……それを殺したのはぼくではないと主張するべきか？

あ、いや、まだ名字でしか呼ばれてないじゃないか。なら家族であるって言える。うん、その方向性で行こう。幸い、今のぼくの見たいは姉であるといえばまだ通用するだろうし。

「君たち、だあれ？」

そういえば今の体、かなり肉付がよくなった気がする。大人になっただけで気分である。胸も大きくなった。……それに加え、お腹も大きくなってるぶん、ちよつと太ったような気分になるけれど。

ともあれ、しらばっくれるのだ。自分が死染妖狐だとバレてはいけない。そう、なら自分は死染妖狐の姉であることを盛大にアピールすればいいのだ。

そう、これが完璧な論理。パーフェクトロジックである。

「……グラントリノを殺したのは、お前だな」

完璧な論理が破綻した。

断定口調であるので、それが確信を得ての発言だとわかる。ぼくはハイエンドを見た。少し視線を逸らされる。バカ野郎！ 心の中でそう呟くも、仕方ない。なんとか矛先をずらし、敵対の方向性から離れなければならぬ。

「……死染さん。君なら治せるだろ？ ボロボロになったぼくを一瞬で治したんだ。なあ、君が死染さんだというんなら……グラントリノを、治して」

「やだ。というか、君たち誰だって聞いてるじゃん」

ぼくは言った。治せるには治せるが……それには生命力を消費する。自分の体の再構成に、尋常じゃなく生命力を吸われている。通常の蘇生よりかなり多く吸われてしまった。……だいたい、蘇生20回ほどか。ちまちまとオールマイトを食べて補給していて本当によかった。

今の蘇生可能回数は10回ほどだろう。しかし、これほど損傷した他人の死体を治すなら自分の生命力すべてが持っていかれてしまう。だから、ぼくは治せない。

「……………」

うん、これで大丈夫——と、思ったのも一瞬。

頭の中を塗りつぶすように、『感情』がぼくの頭の中を埋め尽くした。

それはぼくを呪う怨嗟。すべての負の感情がのしかかるように、ぼくを殺してしまっていく。なにが起きたのかを察する暇もない。一瞬で頭の中を埋め尽くしたそれに、ぼくは耐えきれずに頭を抑えた。

頭が割れそう。処理能力の限界に達している。わけのわからない。なにが起きた？ まともに考える余裕はない。痛い。ただ、痛い。まるで声を抑えきれず、吐息がかすかに漏れるように。頭の隙間からゆっくりと思考力は溶け出していく。それは涙として体の外へと出ていった。

「…………ふざけてるんだな」

棘のある言葉。頭の中がどうしようもなく大渋滞。どうにかなくてしまいそう。嘔吐しそうになるが、それだけは耐える。

「治せよ」

「…………お、おい…………緑谷くん…………？」

「治せよ!!」

ようやくわかった。これは個性が進化しているのだろう。それも、全体的に。体が大きくなっただけではない。心を読む個性が強くなり、それが逆効果になっている。

「…………と、轟くん…………ぼくに抹消を…………」

「あ、ああ」

個性が消え去り、これでようやくまともな思考力を確保できた。さすがすぎと痛みはするが、まだなんとかなる。

……ひよつとして、相手の感情を読み取りすぎてしまうのだろうか。もしくは……緑谷くんの感情がそれだけ莫大なものだったか。それか、頭の中で大量にいろんなことを考えているのであろうか。それを強制的に受け取ったから、今こうして頭痛になっているのだとすれば……まずい。早く緑谷くんを仕留めない。

自分の個性が自分の首を締めるとは思わなかった。……だが、それだけ深く相手の感情にアクセスできるほどの強化だ。他の個性の進化も見られるだろう。

それに期待をすることにしよう。とりあえず、ぼくは今動けない。ハイエンドに緑谷くんを仕留めてもらわないと。

「轟くん。あいつを殺して」

畜生、もっと早く殺すべきだった。敵対したくはないといって日和ったのが失敗だ。真っ先に殺しておくべきだったのだ。

そのツケが、今こうしてやってきている。

「……………」

ハイエンドが、緑谷くんの個性を抹消する。これで相手は無個性も同然。もうハイエンドのカモでしかない。

——大氷塊。それが、眼前にいた人の姿を包み隠した。

……とりあえず、早いところ逃げなければ。ケータイで黒霧に連絡をする。……ステインを見捨てることになるが、それも仕方ないだろう。最初にその可能性は伝えている。それにステインは了承したのだから。

とりあえず、個人チャットへと撤退要請をしておいた。これで、逃げる準備は整っている。あとは黒霧が反応するのを待つだけ。

「……………あれ？」

急に、頭が割れるように痛んだ。これはさっきの感覚だ。さっきより増しているような気がする。まさか、抹消が切れた？ そう思っただけで、ハイエンドを見ると、眼から血が溢れていた。なんだ？ ひよつとして、ぼくを狙撃したやつは殺した？ いや、おかしい。やつは殺した

はずだ。ならなんで？

痛みに耐え、前を見た。

大氷塊が破壊される。個性が復活しているからだ。——抹消は、発動されない。

一瞬で近づいてきた緑谷くんが、ハイエンドを殴り倒した。

「……う、うそお……」

ハイエンドは、体を改造されていない。だから負けることはあるだろうと思っていた。だがしかし、これだけ一瞬で倒されるなど、想定すらしていない。

……しかし、これではくも痛む頭を抑えながら戦う必要があるわけだ。体を起こし、尋常でない速さで殴りかかってくる緑谷くんの拳に、被弾覚悟で自分もその顔面へと拳を通す。直後、吹き飛んだ。両方が弾けとぶように吹き飛んで、そのまま後ろの信号機に叩きつけられ、それを押し折りさらに後ろへと飛んでいく。

電柱にぶつかった衝撃でようやく止まることができた。背後にある電柱は、こちら側へと倒れてくる。今の衝撃でへし折れたらしい。ここまで強くなっているのを感じると、失敗した。

あのときに殺しておけば——という後悔は尽きない。だが、これほど短い期間でここまで成長するなんてだれが想像するのだろうか。さすがはオールマイトの子供。見た目こそ全然違うけれど、その強さは確実にオールマイトのそれ。むしろ弱っていたオールマイトよりも強い。

口から血がこぼれた。中身の損傷だろうか？ とりあえず、治療で回復しておく——もちろん成長しているのか、普段より生命力の消費を抑えて回復できた。

「——まずっ!?!」

急いで体を横へとずらす。ぼくが立っていた場所を風圧が抉った。それはコンクリートで出来た壁に風穴を空ける威力のもの。

容赦がない。そりゃあそうか。ぼくが肉塊から蘇生したこともどうせ知っているのだから。ならば仕方ないだろう。

相手も殺す気で殴りに来ている。それだけ怒りを抱えているのだ

ろうか。いや、そうだ。頭の中で、ずっとだれかの映像が流れている。……オールマイトの死の様。麗日お茶子の情景。原型を留めない、グラントリノと呼ばれた人物の死骸。それを見てなにを思ったのか。彼が何に成り果てようとしているのか。

……そろそろ、頭の痛みにも慣れてきた。ちよつとずつ増しているような気はするが……それにも慣れてくる。振り下ろされる拳にはこちらもそのまま対応できる。拳を振り抜いて、それで丁度相殺されるのだから、個性が強くなつていて助かったと心の底から思った。

「——死染さん。君が裏切り者だつて疑いは最初からあつたよ」
……そりやあそうだろう。あれほど不自然な襲撃事件というものもない。

思えば順風満帆にいったように見えて、結局は穴だらけだ。そもそも姫つてなんだ。あんな突貫工事のような演技、疑われるに決まつている。当然だ。

「……事件が終わつて、君への疑いは強まつていった。けど……信じてたんだ」

「あははは、信じるだけで救われるんなら、誰だつて祈るもんね！ 裏切られることだつてあるよ！」

「僕がいたところだけ監視カメラが破壊されてるんじや、そりやあだれだつて君を疑うさ……！ 相澤先生を殺した女性が、そこからやつてきたつてので、君が裏切つていたんじやないかって……！」

「それでそれで!? あははははははは！ なんだ！ ぼくが必死になつて姿変えたりつて無駄だつたんだ！ あはははははは！」

「……っ、デトロイトおお——っ！」

拳が握られる。それはさすがに避けるべきだ。殴り合つても生命力を消費するだけ。だから、ぼくは体を横にスライドさせるように射程から逃れようとする。

だが、範囲は尋常じゃなく広い。それだけでは逃れられなかった。風圧に煽られ、体が一瞬停止する。

「スマッシュ!!」

体が吹き飛ばされた。まずい。宙に浮いては体を動かせない。

ぼくの足を掴んだ緑谷くんが、そのまま地面に叩きつけた。頭が割れる音がする。治癒をして、瞬間的に対処した。空いた足で緑谷くんの腕を蹴れば、手は解かれる。

よし、反撃だ。着地のときに、力にものを言わせて足を蹴る。それだけで踏み込みを完了した。地面を吹き飛ばし、ぼくは緑谷くんへと一撃を与える。

顔を殴られた彼は、しかし拳を既に振っていた。それはぼくの顔へと当たり、吹き飛ばす。

激突したビルに、クレーターのように穴が空いた。クモの巣状に出来た亀裂は、それだけの威力があったのだと思わせる。

殴られながらの攻撃でこれとは、やはり恐ろしい。

頭の中に流れ込んでくる感情が一気に増えた。……どうやらこのビルは生きているらしい。声も届いてくる。そのすべてが不安と恐怖のそれ。

追撃にやってくる緑谷くんの拳を、あえて自分で受けた。ビルを貫通し、中を吹き飛びながらぼくはまともに動きそうにないほど消耗した体を治癒する。それで全ての損傷が消え去った。

……しかし、やはりこちらも消耗している。残り蘇生回数は4回が限界だ。おそらく心を読む能力が一番邪魔をしている。消耗しすぎだろう。

とんでもなく扱いづらい個性に進化してしまった。

「ヒーローさん、いいのかな？ いいのかな？ 人を怖がらせてるよ、いいの？」

「あの高度なら、人には当たらない。なら大丈夫」

「あつははは！ 緑谷くんったら冷酷になっちゃって！ ぼくのことだって、死んじやってもいいみたいに殴ってくる！ そんなのでいいの？ ねえ、君が成りたいヒーローって、ほんとにそんなヒーローなの？」

「最近ちよつとした心変わりがあつてね。大切な人を守るためなら、それでいいと思うようになった」

「あつはははは！ あつははははは！ それってヒーローって呼べるの

かな!? ねえ、ほんとに。それはヒーローって呼べるの?」

「ヒーローである以上、^{ライラン}敵とはどうしても敵対するんだ。ヒーローには敵は救えない。なら、自分の救える最大限の人を救うだけだ!」

拳が振られる。それは人を巻き込まないように放たれた、上空へと向けた一撃。ぼくの頭を殴りつけ、潰すような一撃。

吹き飛びながらも頭を再生した。……蘇生カウント1。残りは3回だろう。まだ黒霧はこない。遅い、と思うが、ぼくの座標を探しているのかもしれない。位置情報を送らなかつたぼくのミスだ。

これを最大限に強化した。当たれば倒せる。そう、これはそういうレベルの一撃だ。自分の速度も強化する。かなり生命力を食ったが、仕方ない。早く倒さないといけないんだから。

——その拳で、緑谷くんに殴りかかった。一撃にすべてを込めるように生命力を込めれば、自分の限界以上の威力が出せる。

その拳で、殴りかかる。

速度も強化している。たった一撃で尋常じゃなく消耗するが、これならば緑谷くんは反応すらできずに殺せる。

事実、彼の目は追いついていない。その体に確実に拳は当たる。

勝ちを確信した。オールマイトの後継とも言える、絶望的なまでの実力の持ち主。ここで片付けておかなければならない。だから、拳を振り下ろし、

横合いから弾かれ、その拳は緑谷くんから逸れる。

「——な——」

それは無粋な闖入者の足を千切り飛ばし、緑谷くんの体を遠くへと吹き飛ばす——だが、そのどちらも死んでいない。

「……飯田くん」

完全に忘れていた。そうだ、飯田くん。まったく戦闘に関わってこなかったから完全に頭から抜けていたのだ。

後ろを見れば、拘束されたハイエンドと、ステインの姿。もうひとりいたプロヒーローの影はない。

……逃していたのだろうか? しかし、失敗だ。一対一なら勝って

いた、というような状況なのに。

「……最悪だあ……」

飯田くんの足は根本から千切れ、動くことはないだろう。彼はどのみち動けない。だが、緑谷くんは吹き飛ばされこそしたが、彼のせいで致命傷を負っていない。

決着を焦った。いや、ぼくの性格を知って、焦って勝負をつけにくいところを狙っていたのか？ どちらでもいい。ただ、ぼくは緑谷くんを殺せなかった。その結果だけだ。

その結果は——最悪に限りなく近い。今ここで殺しておかないと、彼は強くなる。殺しておくべきだったのだ。

——緑谷くんは立ち上がる。それがなによりも、最悪に近いものを思わせた。

完璧に失敗だ。

「……けど……たった一人じゃ、弔の邪魔はできない……」

それは最早言い聞かせるような状態に近い。心の中じゃ、最大の障害になるだろうことは感じている。だが、そう思うしかないじゃないか。

ああ、だめだ。もう頭の中が正常じゃない。頭痛も激しい。どうすればいいんだ。くそお。

ここでぼくは——負けるのだろうか？

緑谷くんが立ち上がった。その拳が近づいてくるのを、ゆっくりに感じる。

……今の生命力だと、2回は蘇生できるだろう。だが、そうなるとぼくからはもう、ろくな戦闘力は確保できない。

くそ、個性の成長が逆に悪い結果を生むなんて。……冷静になれば、茶味の敗因もこれに近かった。なんて罠だ。強くなれば、逆に負けるだなんて。

このやろー。できることといえば、ぼくは緑谷くんをにらみつけることだけだ。

拳が振り下ろされる。それは、ぼくの顔を狙ってやってくる。

——奇跡は起こらない。すべてが間に合う道理なんてない。世

界が地獄でないという証拠はない。

だから当然のように、その拳はぼくの顔を打ち抜き、吹き飛ばした。意識は薄れる。……もう生命力も限界なのだろう。お腹、空いた。久しぶりのその感覚に、懐かしささえ覚える。

……このまま捕まれば、ぼくは死んでしまうだろう。きつと、世界からすればそれが正しいのだ。

夢を見た。ぼくがすべて間違っていると批判される夢を。それはきつと、ぼく以外の全人類だ。だれもがぼくが死ぬことを望んでいる。これは幻聴かな。幻覚のそれ？ でも、どれもが本当のことだった。少なくとも、頭に流れ込んでくる歓喜の念は、ぼくがやられて喜んでいるそれは、ぼくが死んでも喜ぶんだろう、と。そう思った。

だつてしようがないじゃん。ぼくはそうしないと生きられないんだもん。人を食べたつていいじゃん。なにがいけないの？ やだよ。ぼくは死にたくない。ぼくはまだ、生きていたい。何にもできてないんだよ。まだまだやりたいことがあるの。

……あ。

この感覚、ぼくが今まで殺したみんなが、こんなことを思ってたのかな。

なんて酷いんだろ。そんなぼく、死んでしまったほうがいいじゃん。ぼくがみんなの立場だったら、指を差して死ねつて言うもん。きつとそうなんだよ。

だれかを殺さないと生きていけないぼくは、とんでもない欠陥製品なんだよ。

やだなあ。この間、ぼくはぼくなんだつて言われたのに。ぼくつてなんだつたつけ？ 頭痛のせいかな。そんなこともわかんない。

死にたくない。

死にたくない。死ぬのはやだ。ほんとにこわい。

これは弱さなのかな。人なら当然の感情なのかな。獣のままだったら、そんなこと考えないで済んだのかな。人になろうとして、ぼくは弱くなったのかな。

やだな。

だっておかしいじゃん。ぼくは死にたくないだけだよ。人だつてそうしてるじゃん。自分が死にたくないからつて、他の生き物を殺してるじゃん。なんで？　なんで？　なんで？　自分たちになつたらだめなんて、そんなのおかしいよ。

それでも、頭の中に流れこんでくる。ぼくが倒されて喜ぶ人の感情。なんで。どっちも同じじゃん。同じ暴力でしかないじゃん。なんでなの？　ひどいよ。どろどろとした感情だ。どれもこれも、混ざり合つて気持ちが悪い。

ぼくが負けたことにだれもが喜んでる。なんで？　どこに隠れたの？　ビルの中？　おかしいじゃん。なんで？

幸せに生まれたお前らに、ぼくの気持ちなんてわかりやしなくせに。

——そんな感情の中で、別の感情が混じつた。それは、ぼくを糾弾するすべてに対する怒り。心の声が聞こえる。どろどろとして、混沌として、全く聞こえなかつた心の声……ぼくのために世界を変えようだなんて本気で思つてたなんて、意外すぎて笑っちゃいそう。

彼は、仄暗い輝きでぼくを肯定してくれていた。

「——間に合つた」

なんとなく理解する。だからぼくは、甲のことが好きなのかもしれない。なんてことを考えて、完全に意識は消え去つた。

第39話

大いなる運命というものがあるとすれば、そいつはきつとんでもなく性格の悪いやつなのだろう。紡がれる運命の糸は、どこまでも緑谷出久に苦難しか与えない。

その結末が悲劇になるのかは——それは、彼次第であろう。そのような予感がしている。だが、やはり思うことは、なにかに導かれるように体が動く——ということだ。

まるで都合よく、緑谷出久を生かし、強くし、戦いの中へと身を置くべきだと言わんばかりに、彼はずっと戦い続けている。

あるいはそれは、ワン・フォー・オールのせいなのかもしれない。大いなる力であるワン・フォー・オールを所持していることで起きてしまう、一つの悲劇——とんでもなく最低だ。緑谷は吐き捨てた。

だがそのことを飲み込み、戦うと決めたのは彼自身。憧れに身を焦がすかのような状況だ。最低だ。運命を呪ってしまいそうだ。だがすべて、自分が決めたこと。憧れに殉じて、力を所有していることに関しての責務を果たすのみ。

周囲には自分よりも経験豊富なプロヒーローの姿。ハイエンド、ヒーロー殺しを手早く警察へと引き渡しに行ってくれた人たちもいる。これで、これ以上の乱入はないだろう。

……とはいえ、そんなものがなくても相手は尋常ではないのだが。雄英襲撃。その主犯格である者たちが、今己の目の前に立っている。

背後には、市民の姿。何人かのプロが避難の案内をしている。数の利はある。しかし……それで勝てるなど、確約されたわけではない。

死染妖狐はワープゲートにより回収された。相手の中でもトップクラスの実力者に逃げられてしまった。なるほど、今後が面倒だ。可能なら今捕らえておきたかった。

ワープゲートから出てきた手だらけ人間——死柄木弔は、緑谷を

鋭く睨みつけている。彼の個性は厄介だ。映像で確認するに、手で触れられるとアウトなのだろう。触れた人間を塵にしてしまう。

だから、まともに近づくことはできない。だが、相手の個性はそれだけだ。先程の敵のように化物じみた戦闘能力はない。

殺傷力だけ。ならば、戦える。

「——ははっ」

気づけば、笑っていた。自分のことなのにわけがわからない。何故だ？ どうしてだ？ わけがわからない。ただ一つわかるのは、自分がどういいうわけか相手に向かっていることとしていっているということだ。なにをやっているのか。わけがわからない。

わけがわからないが——同時に納得する自分もいる。オールマイトを殺した相手だ。いわば相手は仇。憎しみが、体を勝手に動かしているような感覚。

ひよっとすると、恨んでいたのだろうか。

これじゃあ飯田君のことは言えないな、なんて考えつつ、いつものようにフルカウルを発動した。

自分の体を壊し、治し、そうして今では100パーセントでも体が壊れることはなくなってきた。それは度重なる無茶に耐えられるように、体が進化を遂げたように。だから……今の自分は、当時とは全く違う。

相手を殺そうと思えば殺せる、それだけの力を持ってしまった。

だからいつものように移動して、死柄木弔を殴る——誰も反応できない。当然だ。100パーセントの移動力。全盛期オールマイトのそれと同等だ。だから、誰にも反応はできない。普段のように近づいて、死柄木弔を殴りつける。

しかしその体は、膜のようなものに動きを完全に止められてしまった。

「——な——」

反発する。

自分の力すべてが跳ね返されたかのように、遠くへと吹き飛んだ——どこまで吹き飛んだのか、はつきりとわからない。遠くへと吹き

飛ばされ、そして派手に地面へと着弾し、それからも滑り続け、……ようやく動きが止まった。

周囲の景色は先程とは全く違うものになっている。そのことに驚きつつ、今の自分のいる場所を確認する……都内から放り出されてしまったのだろう。見たことすらない場所へとたどり着いた。

見れば体はボロボロだ。一体どういう個性なのか。自分の力すべてが跳ね返されたような感覚だ。実際そうなのだろう。

誰の個性かはわからないが、しかし相性の悪い個性だと感じる……遠距離から殴るべきか。ともあれ、急いで戻る。足に力を込め、走る

——その、途中に。

いつかに戦った相手、茶味が立ち塞がっていた。

「よっ」

「——どけー！」

「させるかよ」

空間が輝いた。知っている。別の空間へと隔離されようとしている。急いで抜け出そうとするも、範囲はかなり広がったのか能力に絡め取られた。

久しぶりの、空間。だがそのデメリットがないわけがない。緑谷は躊躇せずに踏み込んだ。

相手のリソースはほとんどこの空間作成に割かれているだろう。つまり、この能力を発動している間は相手は本来の実力を発揮できない。なにか、特殊なギミックがあるならまだしも——この空間は、なにもないまっさらな空間だ。

ならば相手のこれは、言うなれば自ら実力を削っている状態。だから本体は相応の弱体化をしている。

だから、なんの躊躇も容赦もなく、緑谷は100パーセントを叩き込む。それも一発ではない。連撃だ。出し惜しみはしない。早期に撃破する。

空間が解除された。それは一瞬だった。一瞬で茶味を仕留め、緑谷は走り始める。

未だ強くはなかった頃の緑谷が、気合で勝利できたのだ。あの頃よ

りもワン・フォー・オールが馴染んできている彼が、勝てないわけがない。

走る。瞬間で保須の街へと戻り、死柄木に向かって拳を振り上げた。

「させるか！」

と、長身の男が緑谷の前に飛び出してきた。空間を撫でるような仕草を見て、緑谷はその空間を回避するように空気を蹴り、体を跳ね上げる。そして風圧を放った。それは死柄木の頭を殴りつける。病んだ瞳が緑谷を刺した。だが関係ない。向かってくる男を100パーセントの連撃で撃退し、緑谷はいよいよ死柄木へと相対した。

「……………今ではつきりわかったんだがよ」

死柄木は、緑谷に向けて話しかける。そんな暇もやるものか。殴りかかった。まるで当然のように回避しながら、死柄木は言う。

「お前、敵が死んでもどうでもいいとか思ってたんだろ？」

その通りだ。緑谷は無言で肯定する。敵の生死はどうでもいい。

ただ敵の敵としてでもいいから、捕らえてしまえばそれでいい。

「それならどうするんだ!?!」

「……………それがヒーローかよ」

「——お前が——ヒーローを、説くな！」

ワン・フォー・オールがますますその力を増す。100パーセントを超えた…………その威力。体が壊れるかと思っただが、しかしそうではない。ワン・フォー・オールのこととはよくわからない。どこまでが許容範囲なのかもよくわかっていない。だが、出力を増したのならばそれでいい——その拳で、緑谷は死柄木を殴った。

だが死柄木はそれに対し、怯むことなく手を伸ばすことで対応した。100パーセントの力に対して、足の力で踏ん張り吹き飛ばすこともなく手を差し出した。触れれば死ぬ。問答無用で死ぬ。そういう強すぎると評していい個性を振りかざし、死柄木は静かに燃えるような意思を宿した目で緑谷を見る。

拳の外側から叩き、手を逸らす。わずかに体を掠めたその指に、しかし崩壊は発動する様子がない。しかし弾かれた途端に俊敏に動き始めたもう片方の腕が、緑谷へと近づいてくる。

問題はない。元より超至近距離。足を僅かに振り、その風圧で死柄木の動きを停止させる。それは踏ん張らなければ耐えれない威力の攻撃だ。だから、死柄木は攻撃の手を一瞬緩めてでもその場に留まることを選択した。相手を殺すために。すぐに動き出す腕。

しかし、それよりも早く緑谷の拳が死柄木を吹き飛ばす。今度は耐えきれず、背後のビルの壁に激突し、そこでようやく体を止めた。

「……………俺は、お前を認めない」

「知らないよ。どうでもいい」

だから早く死ね。自分のものではないかのように、体は当然のように悪感情に傾いた。それを疑問に思う暇さえなかった。ただ当然のように、殺意が拳に込められた。

「……………ま……………待て……………緑谷君……………」

ふと、声が聞こえた。同時に足首を掴まれる。足元に目を落とすと、そこには飯田天哉がいた。

足が千切れたから、どうやら這って近づいてきていたらしい。溢れ出した血の痕跡は、赤く——もう助からないだろうことを伝えてくる。

「緑谷君……………駄目だ……………」

その瞳に涙さえ浮かべながら、飯田は言った。

「憎しみに……………呑まれちゃ駄目だ……………それ以上行ったら……………もう、戻れない……………」

「……………飯田、君」

「……………今の……………君は……………さっきの俺だ……………だからわかる……………もう、戻れない……………」

「…………………………」

「……………君は、なるんだろ……………オールマイトみたいに……………！……………なら

……憎しみで動いちゃいけない……だろ」

「……僕は」

「お喋りとは余裕だな」

死柄木が、緑谷に近づいていた。既に間合いの中。対応はできない。腕を振ることは、間に合わない。風圧で相手を引き剥がすこともできない。

死ぬ、だろうか。緑谷がそう思うのも一瞬、引つ張られる。誰に？ 決まっている。飯田だ。飯田天哉に、だ、地面に引き倒され、そしてほとんど上半身だけと言っているいい体で、緑谷に覆いかぶさった。

——その体は、緑谷の盾として死柄木の手を受け止める。

「……飯田君!？」

「……緑谷くん」

その体を、崩壊が染めあげる。またたく間に、だ。だが……それでも、飯田の意思が働いているかのように、その体は一瞬で断割されることはなかった。

死を間際に飯田は微笑んだ。これで死ぬ、のだろう。それは怖くないと言ったら嘘になる。だが、最早助からない身だったのだ。万が一の保障すら失い、完全に助からなくなっただけ。

「……なれよ、ヒーローに」

もはや背面は全て塵と化し、人であった痕跡も消え失せようとしている。やって来た死の前に、飯田は短く、緑谷に言った。

「………僕、は………見ている………から………」

「———」

飯田の体が完全に塵になる。死柄木の手が迫る——その直前に、緑谷は死柄木を殴りあげた。

ガードの腕をへし折り、その姿を空へと打ち上げる。

そして、即座に飛び上がり地面へと撃ち落とす。地面を砕くだろう速度で振り落とされた死柄木は、即座に展開されたワープゲートにより墜落を免れた。

力には必ず何かが付き纏う。

人を殺そうと力を振るったことが、飯田天哉の死によって糾弾さ

れ、人を殺す覚悟がないことが麗日お茶子の重傷によって糾弾されるのであれば——そもそも、力を手にしてしまったことがオールマイトの死によって糾弾されているのだろうか？ それともグラントリノ？ 相澤消太？ 爆豪勝己？

もう、頭が駄目になりそうだ。けれど戦わなくては。戦わなければ、きつと力が緑谷を糾弾する。ワン・フォー・オールという力が、緑谷に悲惨な運命を背負わせる。

だから、立った。どれだけ非道い現実でも、緑谷にはそれをしないとけない理由がある。友の死も、恩師の死も、無駄にしてしまう——戦わなくては。

結局、緑谷は逃げていた。殺すだけの実力を身に着け、敵を全て殺してしまえば……なにも怖くはないのだから。けれど、それは逃げだった。だから相應の罰が与えられる。

——ワン・フォー・オールが齎す試練を乗り越えて、緑谷は最高のヒーローにならなければならない。一種の義務感だ。だが、それはきつと勘違いではないだろう。

だから、人を殺してしまうことを覚悟し、誰も殺してしまわぬように拳を握った。

遅すぎる。遅すぎる……が、やり直せないことなんてない。生きている限り道が続くのなら、決してやり直せないことはないのだ。

戦え。ワン・フォー・オールに唆されるまま、緑谷は拳を握った。

「……遅いぞ、黒霧」

「ですが死柄木弔。アレを持ってきました」

「……なら許す」

……気になる言葉が聞こえた。秘密兵器だろうか？ なんにせよ、悪寒がする。激闘の予感、おそろく間違っではない。

「——緑谷出久。俺はお前が嫌いだ」

「……」

「嫌いだから……どうやったらお前が苦しむのかを考えたよ。お前のことを調べつつ——な。そして俺は思いついた」

「……何をだ」

として立ちふさがった。

「わ・ワWaWaわワワ◇、ワタ」

声。狂ったような、意味を成していない声。おぞましい。絶望を助長するような、狂った声が耳を撫でた。

彼は言う。

「——私が来た」

第40話

オールマイトの拳が振るわれる。高速のそれは、ワン・フォー・オールの出力を引き出すことができるようになった緑谷からしてもかろうじて受け止められる程度の力だった。

(体格差か!?! いや、ワン・フォー・オール of オールの馴染み具合……!?!)

どちらにせよ、現実を述べるならば……そう。つまるところ、オールマイトの攻撃を受け止め続けられれば消耗し、先に倒れるというだけである。なら関係ない。いくら尋常ではない攻撃であれ、当たらなければまだ戦える。

オールマイトの拳が振られた。それを、緑谷は受け止めずに、正面に向けていた右半身から体を旋回させるようにして、オールマイトの姿を回避した。こうしていなすのであれば、消耗は少なく耐えきれ。問題は拳に付随する風圧だ——自分の背後には、市民の姿。流石に平和の象徴が敵となつて現れたとなれば、集まっていた野次馬も当然のように逃げ出していくのだが、問題はその数だ。かなりの数がいたせいで、避難に時間が掛かってしまっている。めんどくさい。拳を振り、それで風圧を相殺した。

早く逃げてくれるのが一番楽なのだが、全員が撤退するまでは緑谷は『守る』戦いをしなければならぬ。そう、それが課題だ。だが問題は無い。これだけの力を持って、オールマイトは平和の象徴として戦い続けていたのだ。前例があるのなら、無理だと言っているひまはない、オールマイトがやっていたのだ。そして今、同じ力を持っていて。ならば緑谷はそれができるはずだ。考えろ。脳みそを作り変えるようにしろ。お前は今から平和の象徴がやってきたことをするのだ。緑谷出久の脳みその中身を憧れで満たすように、過去のオールマイトの行動から緑谷は戦う術を見つけ出す。

問題はない。それは今まで、何度も見てきた。今更脳内再生——そしてその模倣くらい、できないわけではない。命を燃やせ。今まで蓄えてきた、膨大なオールマイトファンとしての、一般公開された事例に対する対応。幼い頃からずっと見てきただろう? オールマイ

トの動きをしろ。象徴の代わりを今、果たさなければならぬ。

オールマイトの拳を、正面から受け止めた。かなり避難は進んでいる。だがまだ人はいる。最悪だ。思う限り最悪の類だ。あんなりの衝撃に痺れを覚える右腕から意識を離した。痺れて拳がおかしいのであれば、その拳に意識を向けなければいい。腕が復活するタイミングでそちらに意識を戻せばいい。だから、オールマイトの猛攻には右腕を除いた四肢——いや、可能ならば頭も使え。頭突きもできるだろう。つまり五体だ。頭は右腕の代わりにならないと思うが、それでも十分以上の働きはしてくれるはず。オールマイトの拳が放たれた。だんだんと威力が増している。そろそろ向こうのギアも上がってきているようだ。このままあっさりとやられてしまうのだろうか？ いや、それはさせない。体を張れ。オールマイトの、ますます上がってきた攻撃力に、自分もワン・フォー・オールを上げることで応対する。

背後を盗み見た。避難は完了したようだ。よし、これで人を巻き込むことを気にしないパワーバトルが可能になる。戦闘経験が浅い自分分は、能力を最大限に発揮できはしないだろう。そこを、若さゆえの出力でカバーする。知つての通り、オールマイトは現状かなり弱っている。オールマイトである以上、今の相手はワン・フォー・オールの出力を全盛期よりも発揮できてはいない！ 緑谷の判断を裏付けるように、緑谷がオールマイトに押し込んだラッシュはオールマイトの抵抗を押し切つてまでその体を吹き飛ばした。

緑谷は基本火力押しだ。相手よりも経験が劣る以上仕方ない。だが、だからこそ自らが信頼を置く火力に関しては疑うことなく、世界で見てもトップクラスの性能をしている。だが、そんな緑谷の、茶味から一瞬で意識を奪ったほどの連撃を受けても、オールマイトは堪える様子を見せない。ひよつとすると、見た目はオールマイトだがその中身は脳無のように改造されているのだろうか？ わからないが、オールマイトはきつとそれほどのダメージを受けていない。不味い兆候だ。オールマイトが活動制限という限界を取つ払っているのであれば、このままだとジリ貧で敗北。……そう、敗北だ。そうなる

どうなる？ きつと緑谷は死ぬだろう。そして、オールマイトという絶対的な敵を抱え、きつと日本は……いや、世界は混乱に陥る。だから負けられない。ぶつぶつと不気味に、狂ったようにつぶやいているオールマイトへと向けて、蹴りを放つ。

「私が来た！」

「——っ！」

空中へと打ち上げたオールマイトは、そのまま拳を背後へと放った反動で緑谷へと迫る。それよりもはやく緑谷は間合いに入り込み、アッパーカットのようにし、オールマイトを空中へと跳ね上げた。そのまま、緑谷は首を撫でる予感に従うように、頭を下げて体を前進させる。オールマイトの拳を辛うじて回避し、その後緑谷は指を立て、拳ではなく抜き手でオールマイトへと攻撃を仕掛ける。ワン・フォー・オールがその抜き手を、まるで細剣のように鋭く、鍛え上げた。緑谷は貫く。オールマイトへと振り抜いた抜き手が、その強固な肉をたしかに穿った。ダメーヅらしいまともなダメーヅだ。ようやく通ったか、と思う間もなく、その傷が再生していくのを見て、やはり体を改造されているのだろうと判断した。

そして、ぶつぶつと同じ言葉を呟く姿からもはや自我も残っていないのだろう。緑谷はだからこそ、オールマイトへは拳で相対する。いけない。感情的になっている。いや、それでもいい。感情は力の源だから。だから、感情を昂ぶらせて、頭の中から余計なものを排除する。体の中を戦うための機械へと作り変える感覚。そう、それが近いだろうか。だがその感覚で生まれた機械は、サイラン敵にのみ起動するのだ。そう、それがきつと緑谷の求める先。ヒーローと呼ぶにはあまりに人間らしからぬ、どこまでも敵と戦うための機械のようになり果てる——救済のない、永遠の旅路。緑谷が、ワン・フォー・オールがそれを望んでいる。だからそれに体は応え、その身をたしかに変質させて行った。

戦え。その心のままに。オールマイトがその巨体で押し潰しにきた。とんでもない質量の相手が、尋常でない——音をも平然と超えた速度で向かってくる。周囲への被害を全く考えていない。ソニツ

クブームが起るほどの速度であり、当たれば緑谷はろくなことにはならないだろう。その巨体に対し、しかし回避する術はない。体で受けるか。ワン・フォー・オールを発動し、即座に衝撃に対してを考えろ。雷鳴が轟くような轟音と、内臓が破裂したかと勘違いするほどの尋常ではない体の痛み。見れば、オールマイトは緑谷へとぶつかり、そのまま長々と直進していたようだ。ストリートから中心駅まで相当離れていたはずだ。だがその駅を真つ二つにして尚、オールマイトは直進している。痛みが体から消えた。知っている。これは危険の証拠。ワン・フォー・オールを全開にして、オールマイトを蹴り上げる。自分は地に落ちるが、オールマイトは空高くに吹き飛ばされた。問題はない。地面に墜落して、緑谷は激しく咳き込んだ。

その中に血が混じっていることで、おそらく想像以上の深手であるのだろうことがはっきりした。それはそうか。オールマイトの全力の、手加減なしの突撃だ。今こうして生きていることこそが奇跡。まるで運命が逃えたかのように、上出来で傑作な奇跡だった。人をどこまで愚弄するのか、運命つてやつは！ そんなことを心の中で叫びながら、首筋を撫でる死の予感から即座に緑谷は飛び退いた。先程までいた場所にオールマイトが墜落する。その威力を全く殺さず、地面へと派手に打ち付けられたオールマイトは、体の前面から派手に血を流し、その身を真つ赤に染めながらも立ち上がる。

普通じゃありえないほどのダメージだろうに、そのすべてで一瞬で治ってしまうのだろう。なら、そんな化け物にどうやって勝てばいい？ ふと頭の中をそんな疑問が掠めた。心が折れそうになる。一度考えてしまつたら、悪い想像は無尽蔵にあふれ出てしまう。心の弱さを糾弾するように、緑谷は喀血した。なるほど、逃避は許されないと言うわけか。戦うしかない。いや、もとよりそのつもりだが。その不吉な予感を断ち切るように冷静な思考力を破棄する。互いに血塗れだ。違うことといえば、緑谷はすでかなりのダメージが溜まっているのに対し、オールマイトは未だ健在である。この差は大きい。ならどうやって勝つ？

——オールマイトの死に様を思い出した。……そうだ。オール

マイトは体を二つに割かれていた。あの強大な力でもオールマイトは死んだのだ。なら、問答無用で体を二つに引き裂けるほどの破壊力があれば……いや、そうではない。一瞬で相手を木っ端微塵にできるほどの力があればいい。そしてそのために必要だろう威力を捻出できるものは……そう、知っている。大丈夫だ、なんとかできる。……きつと、勝てる。

だがそれはオールマイトを殺す以外にないという証明。つまり、緑谷は試されている。今ここで死んでオールマイトを野放しにするか、オールマイトを殺し、^{ヴァイラン}敵を撃退するか。迷うことはなかった。緑谷はすぐに決断した。きつと、オールマイトはそうしろというだろうか。だから緑谷は迷うことをしない。ただただ、受け入れる。

「私が来た」

「……ありがとうございます、オールマイト」

緑谷はぼそりとつぶやく。そうしなければ決意が保てそうになかったから。そして、言葉にしたことで完全に決意を固めることができた。

オールマイトを殺す、という——決意を。

「私が——わたし、ワタ死が、ワタしが……わ、だ——……み、みど……」

ノイズが混ざる。オールマイトの声に、ノイズが混じった。それに耳を傾けない。緑谷は恩師を殺すという決断をした。けどその決心は鈍ってしまいそうだったから。体の調子を確認めた。腕がほとんど死んでいる。体の調子は最悪のようだ。特に内部。ぐちゃぐちゃになっているだろう。マトモに戦えはしない。だが、立ち上がる。立ち上がれる。なら大丈夫。立ち上がれるんなら……とりあえず、まだ負けることはない。

時間は？ 緑谷は、周囲を探る。巨大な時計を発見した。そろそろか。そう思いつつ、緑谷は自らの狙いを気取られないように、オールマイトへと殴りかかった。

「——や、み、ワ、私ガ……私、が——！」

オールマイトの拳が緑谷を抉るように放たれた。もうぐずぐずに

蕩けてもおかしくなくらい損傷した緑谷は、自らの狙いであるものがやってくるまで待ち続ける。殴打が腹部を刺す。血を吐いた。血、だけではない。なにかを吐き出した。喉の奥になにかがへばりついている。なんだろう、と思ったら、それは体の中から溢れ出た肉片だ。まずい、もう体が持たないか？ 薄れゆく意識で、狙いを待つ。まだか？ まだか？ まだか？ まだか？ ——音が、した。

来た！ 緑谷はろくに動かない頭で、ワン・フォー・オールを発動した。タイミングはシビア。だがそれ見計らって——いや、ほとんどなにかに導かれるように、オールマイトを吹き飛ばすつもりで、全力で——いや、全力以上で放ったワン・フォー・オールは、緑谷の腕を押し折るといふ代償の代わりにオールマイトの巨体を跳ね飛ばした。すぐに地面を蹴り、オールマイトを逃げないように捕らえた。腕を両手で握って、拳を利用するオールマイトが、とつさに動かすことはできないように抑えつけた。そう、握る。強く強く、握りしめる。「わ——私、が——！」

尋常でない速度で進む体は、同じくとんでもない速度で進むそれに向けて激突する。足で、オールマイトの脇を蹴りつけた。わずかに抵抗が緩んだ。ひよつとすると、弱点は治りきっていないのだろうか。だがこれはチャンス。オールマイトの力が緩んだ、ということはその堅牢な防御も多少は緩んだ。

「……僕も、貴方も——共に逝きましょう」

「——ワ タ シ が——」

オールマイトを倒すには、これしかないのだ。緑谷の実力で確実に仕留められる、と想像できるのはこれしかなかったのだ。だから、緑谷は自爆覚悟で向かう。

進行する新幹線——その車線上に。

横合いから、超速で突っ込んだ。ぶつかる！ 回避することはできず、確実にぶつかる。自分を褒めてやりたい。あれだけのダメージで、ろくな意識はなくて、ぶつつけ本番の角度、タイミング調整。緊張が抜けていたのがよかつたのだろうか？ まあ、そんなこと今感がけてもあやふやだ。どうせすべてが次の瞬間には無為に帰す。だか

ら——と、思っていた緑谷を、誰かが後ろへと押し出した。

「!?!」

誰だ、と考える。いや、それは決まっていた。オールマイトだ。そう、オールマイトに決まっていた。だが、何故？ 押し出して距離を稼ごうとした？ だが無駄だ。オールマイトはそこにいる。逃げ切れはしない。何故だ？ そう考えている緑谷の耳に、シャツトアウトしていたオールマイトの声が届いた。それは新幹線の音にかき消されて、よく聞こえなかったが、それでも、それだけはたしかに聞こえた。

「——すま——な——い……しよ——ねん」

そしてオールマイトが新幹線に轢き潰され、弾け飛ぶ。

「——あ」

いくら攻撃を受けようと死にはしないオールマイトだが、それはすべて質量の伴わない拳だからだ、と推測していた。だから新幹線が直撃すれば弾け飛ぶだろうと推測はしていた。

——だが、それは……それは、あんまりじゃないか？

死に損なった緑谷は、まるで殺させないという意思を感じるほど都合よく木へと落下した。枝をクッションにして落下した。ワン・フォー・オールは衝撃で切れてしまったので、今のは落ち方によつては死ぬ危険すらあったわけだ。だが、それもさせてくれない。それが運命だというかのように、緑谷は都合よく生き残ってしまった。

「——は、は……」

また死ねなかった。オールマイトを殺すだけ殺して、緑谷は生き残ってしまった。最悪だ。気分として、最悪の気分だ。ゆっくりと歩く。体が痛い。もう動けやしない。倒れそうだ。それでも、最初の地へと向かわなきやいけない。だってそこには敵ライランがいるのだから。

「——は、ははは……」

世界がどれだけ試練を運んでくるのかは知らない。だが、緑谷はこの戦いが終わったあと、ろくなことにはならないだろうと思っていた。当然だ。公共交通機関の妨害。到底許される行為じゃないし……そもそも、ヒーローの資格を持っていないのに敵と戦ってしまつた。全国にその顔は晒されてしまっているだろう。逮捕されること、間違いなし……か。

そうまでいかなくとも、なにかの処罰はあるだろうと思つた。

オールマイト。オールマイト。オールマイト。ああ、憧れの人。自分にヒーローを指す夢を与えてくれた人。ヒーローを指せると言ってくれた人。そのための力を与えてくれた人。そんな人を、その手で殺しておいて……今更、なにをすればいいのか？

血を吐いた。

体は動き始める。そうすることで、痛みは軽減できた。戦うことが本懐であると言わんばかりに、戦闘を求め……『悪』を倒すことを求め、体は動き出す。一步踏み出そうとして足が滑つた。転んだ体を起こそうとして、うまくいかない。息を吸って、踏ん張って立ち上がった。息を吸うだけでも尋常ではない痛みがするし、うまく息は吸えない。肺が破れてしまったのだろうか？ わからない。が、それでも立てた。だから歩き始める。

ゆっくりと。しかし確実に。

そうして、最初の大通りへと戻ってきた。

そこに、死柄木弔がいる。

「——化物かよ」

戻ってきた緑谷に、死柄木が言う。最早满身創痕であることは見て取れる。右腕は折れているし、体に疲労とダメージが溜まっているのだろう。足取りすら危うい。フラフラだ。だから、それは確実に勝てる相手であるはず——なのに。

鬼気迫る、といった風貌の緑谷に、どうして気圧されてしまうのか。

「——いや、勝てる。勝てるはずだ」

頭を振り、悪い想像を振り払う。死柄木は踏み込み、緑谷を殺すた

めにその腕を翳す。そう、それが触れた瞬間確実に殺せる。緑谷はその攻撃を確認することすら、緩慢な動作であり、それこそが死柄木に勝ちを確信させた。

だが、死柄木の腕は緑谷の左手に弾かれた。

「……は？」

そして、緑谷の腕が握られる。そこに込められたのは、全力の緑谷の拳。明らかに危険を感じさせる緑谷の拳に、対し死柄木は対応することができない。

その拳は、握る動作の瞬間には死柄木の腹にめり込んでいた。

100パーセントの威力を受け吹き飛んだ死柄木は、腹を抑えて緑谷を睨みつけた。

「……また、強くなってやがる……!」

「……なんでだろ、なんか……しつくりきた」

どう見ても重傷。傷だらけのはずなのに、どうしてか緑谷に勝てる未来が見えない。死柄木は一步後退する。オールマイトを前に臆すことのなかった男が後退する。それだけのなにかを、緑谷は持っていた。

——そんな死柄木の後ろで、一つの姿が動く。

「リーダー、逃げてくれ」

「……は？ 何を言ってるんだ。ここで確実に仕留めるぞ」

「駄目だ。なんとなくわかる。今のまま戦ったらリーダーはきつと、負ける。そうなったら俺たちの負けだ。……だから、リーダーは逃げてください。俺があいつと戦うから……」

「……その傷じゃ死ぬぞ」

「……連合の中じゃ、俺が一番重要じゃない。捨て駒にするなら俺しかない」

「だからって死ぬのは駄目だ」

「そうしないともう駄目なところまで来てるんだ。だから俺を切ってくれ。頼むよ。あんたのために命を捨てるってんなら、それでもいい」

なつて今は思うんだ」

「……………」

死柄木は、少し考えるようにして、

「……………わかった」

茶味の提案を受け入れる。

そしてワープゲートが開かれる。茶味を除く連合メンバーがその中へと吸い込まれていった。緑谷が超速でそれに続こうとするが、そこを茶味が蹴り飛ばし、妨害する。

「……………すまない」

と、死柄木は言つて消えた。彼にしてはわかりやすい、なにかを堪えているような表情で。

「……………はは」

取り残された茶味は、小さく笑つた。

「怖いなあ。泣きたいなあ。やだな。怖いよ。ああ怖いさ。けどやらないとなんだよな」

ほとんど死に体の緑谷を前に、茶味は個性を発動する。

(母さん。そっちにいくよ)

個性が発動される。思考力が枯れた。茶味という存在がなくなつていく感覚がする。

自我が溶けた。

——そして、茶味という『人間』はこの瞬間、死亡する。

緑谷は見た。緑谷よりはるかに巨大なその姿を。人間の女性のような上半身に、奇妙な下半身。足が無数に存在し、目は無数に存在し、八本ある腕で下半身から生えた角のような、男性の上半身を抱えている姿。女性の顔はぐちゃりと潰れ、そこから血のような粘液を吹き出している。男性の顔は狂つたような笑顔だった。

尻尾にくつついた眼球が開き、そこから笑い声を響かせる。

右腕を動かすこともできない緑谷の前に、その怪物は立ち塞がった。

「……………これが、『化物』」

かつて恐れられた化物一家。その代々受け継がれる個性の、本当の

姿。

あまりに巨大で醜悪なそれに向けて、緑谷は拳を握る——こともできなかった。恩師との戦闘で、そんなことをできる体力さえも使い切ってしまった。だが、さも当然のように飛び出した化物が彼のまえに立ちふさがる。

どうしようもなく勝率のない勝負へと、緑谷は握れない拳を軽く振って挑む。ワン・フォー・オールが叫んでいる。ここではない。お前の死に場所はここではない。

もつと地獄へ。そう叫んでいた。

だから緑谷は化物が怖くなかった。もつと怖いのは、自らが立ち止まることだった。

——だから、緑谷出久は、無造作に踏み込んだ。

第41話

時に現実には尋常ではないくらい残酷だ。

たとえば、憧れが実ることはないし、努力が報われることもない。時々それで成功した人間こそいるが、大多数はそんなことはない。そもそも大前提として残酷だ。頑張った人間以外は報われない。そんな世界は残酷だ。

誰もが適度に頑張つて、適度に幸せになれることがあればそれが一番正解、というのが現実だろう。だがありえない。現実とは最後は力。

純然たる暴力が全てだ。

いくら弁明しようとも、それは変わらない。国家権力、筋力、戦闘力。どんなものであれ、生きることが戦いであり、そして戦いには勝者と敗者が存在する。

だから——いくら覚醒しようとも、いくら強くなろうとも、純粋な暴力には敗北する。

都合よく戦いに水を差す人間はいない。都合よく助けにくる人間はいない。残酷なまでの現実、一人の男が命を賭けたところで何一つ変えられはしないのだと嘲笑っていた。

——異形の怪物が、その身を震わせた。その体から溢れた血が、地面を浸す。そこから形成される刃が緑谷の首を切り落とそうと迫るが、それも拳の一振りで打ち払われた。

ゆらりと揺れた異形の女体が男体を撫でた。そこから耳を疑うような絶叫が起こる。聴くものの精神を溶かし、そこから殺してしまうようなおぞましい声を受けて、緑谷は動じもしない。なぜなら既に死にたがっているから。心の底から死にたいと思っている人間を無理矢理ワン・フォー・オールと憧れ、そして責任感が動かしているようなものだ。言わば、緑谷は既に殆ど死んでいるようなもの。そんな人間に、死の旋律を聴かせたところで効果はない。

片腕が使えないにも関わらず、状況は異形の劣勢という状況で進んでいる。ほぼ死に体の人間と戦って、攻めあぐねている時点で戦況は

『——ら』

そろそろ決着をつけるべきか、と緑谷は自らの体力を確かめながら考える。いけるな、と思い、拳を握った。そろそろ足を動かそう。もはや殆ど棒のようになっていた足を、解凍するようにわずかに振るった。

緑谷は一步進む。イカれた右腕をぶら下げて、確実に異形へと決着をつけるために。

持ち上げた拳を、右足の踏み込みとともに。大地を踏み砕く、震脚とも似通ったそれで以て肉薄し——緑谷は、その異形を殴りつけた。

四散する。

「……………」

決着、だろう。吹き飛んだ異形は、細々と散った。だが油断はしない。相手がなにをしてもいいように、緑谷は警戒を解かずに見る。見続ける。

弱くは、なかつた。むしろ強い部類だろう。だが、まだ人間態のほうが強かった。それは人の持つ意思によるものだろうか……死にもぐるいで勝ちにくる、という気迫がなかつたのが原因だろうか。ともあれ、緑谷はいともたやすく勝利した。圧勝、とも言えるだろう。死に体で挑んで、危うげない勝利だ。万全ならばきつと瞬殺も可能だった。

だからこそ——そう。

きつと、現実はいびく残酷なのだろう。ひどい。とんでもなくひどい。命を捨てて、人であることを捨てたとしても、結局は一つの暴力に屈してしまう。

だからこそ——現実とは、戦いを止められない人生とはひどく悲しいものだ、と緑谷は思う。

……様子は見た。動き出す予兆はない。これは警戒を解いていいのか？　と思うが、隙を伺っていたことを考えると……あんまり、軽率な判断はできないだろう。

だから考える。警戒を解いて逃げるべきか、ここで警戒を続けるべ

きか、とどめをさすべきか。

警戒を解くのは最悪の事態を招きそうだ。だからなし。しかし警戒を続けられるほど時間の猶予があるのか、と言われると疑問しか湧いてこない。となると消去法で……とどめ、と言うことになるか。

緑谷は拳を握って近づいた。結局、こうなるのか。緑谷は状況を恨み、そして自分の判断に嫌気を感じる。迷わず殺すということを選択できたのは、きつとなにかが壊れてしまっているからだ。殺さざるをえないときは殺す。そういう覚悟をして、すぐその場面がきたのか。最悪だ。ワン・フォー・オールを恨みたくなってくる。だが仕方ないのだろう。

世界は残酷だ。それは間違いない。だから、緑谷は緑谷の役割に殉じるように——運命に導かれるように——ただ、流されるように、異形の怪物に対して拳を叩きつけた。

だが、その瞬間怪物は弾けて無数の人型になり、溢れ出す。

まるで泥が溢れ出すかのように、体液が人間の形となり、そして逃げ出していく。翼がある個体、足が速い個体、様々な個体差があるようだ。緑谷はすぐに追おうとするが、体を体液に絡め取られたせいで動けない。

「——くそっ！」

軽率だったのはこの選択肢か。なにもしないことが正解だったのだろう。結果として、^{ザイラン}敵を市街地に逃がしてしまった。100パーセントで体に纏わりついたものを振り払い、そして今もなお人型が現れ続ける母胎となっている異形の怪物へと、100パーセントを連打した。

痕跡を残さずに消え去った異形から、人型が溢れ出るのを防ぐことができた。そのことに一先ず安心し、そしてすでに逃げ出した人型を追って市街地へと向かう。

「……なんだ、これ」

そこで見たのは、異形が戦えない市民を一方的に『捕食』する姿だった。男も女も関係なく、何もかもを喰らう姿があった。抵抗も虚しく人々が食い殺されている。そんな、残虐な光景があった。

「あつ……！ た、助けてっ、ヒーローさん！」

緑谷に手を伸ばす女性は、背中にまとわりついた人型にその首を引きちぎられた。市民を守ろうとしたヒーローは数の群れに敗北し、群がった異形によってあつという間に食い尽くされた。人々があつさりと殺されていく光景を見ながら、緑谷は呆然と立ち尽くしていた。

「……………」

「た、助けてくれ……………」

「く、くそっ！ こつちに来るな！」

「うつ…………！ な、なにを…………ぎ、ぎい…………あ、あああああああああ!!？」

「…………は、はははは…………なんだよこれ…………」

人を食うたびに巨大化する人型は、いつの間にか人の二倍ほどの大ききさになっていた。巨大な闇のような人型が、なにもない顔に口だけ浮かべ、人々を貪る姿を——緑谷は見ていた。

一緒に逃げようとした友を囿にした男は、巨大な人型に囲まれて食われた。それを緑谷は見ていた。死の気配と血の匂いに、頭がおかしくなりそうな緑谷は、ただそれを見ていた。

「お…………お前！」

なんだろうかと、声が聞こえた方向に緑谷は顔を向けた。

「ヒーローなんだろう!? 助けるよ!? なあ！ お前！ 助ける…………助ける!?! た、助けええええええ…………!?!」

男がいた。なにかを喚いているようだが、それもすぐに人型が食い殺してしまって、何を言っていたのかわからなくなる。

ただ、ヒーローがどうかと云っているような気はした。

体が痛む。ワン・フォー・オールが言っている。戦え、と。既に生者は殆ど無く、血があちこちに散乱していた。だが死体はほとんど残されていない。…………すべて、食べられたのだろう。

「…………そうだよな」

認めよう。これは緑谷のせいだ。すべて緑谷の判断ミスのせいだ。すべてそれが招いた事態だ。……だから、死者のすべては緑谷の責任だ。そう、彼が悪い。残酷な静けさが残っている。その中で、巨体が動く音だけが喧しく響いている。

餌を無くし、緑谷へと向かってきた巨体を殴りつけた。それだけであっさり、その巨体は死亡した。再生の兆しはない。

緑谷は一步だけ、足を踏み出した。そうだ。踏みとどまるのは彼らしくないだろう。ワン・フォー・オールが告げる。彼が殺したすべての人間が告げる。進み続けろ、と。

彼は走り出した。それは死へと向かうための疾走だった。



『――保須の敵^{ヴァイラン} 連合襲撃事件について、犠牲者は2000人を超える数であることが判明しました』

フードで顔を隠しながら、街に響き渡るテレビの音声を耳にした。

『No. 1ヒーローとなったエンデヴァアを始めとした多くのプロヒーローの犠牲を出した今回の事件は、敵^{ヴァイラン}側に行方不明だった平和の象徴・オールマイトの姿があり、敵^{ヴァイラン}連合の脅威を大きく知らしめた事件でもあります』

なにもかも、失うものが多すぎて――得るものが少なすぎた戦いだった、と思う。

『敵^{ヴァイラン}連合と戦い、そしてそのほとんどを撃退したのは一人の学生です。彼は雄英高校一年である緑谷出久であると考えられており、その実力から平和の象徴の再来と呼ぶ人もいます』

……オールマイトのように、自分はなれなかつたけれど。

『一方、ヒーロー免許を有していない学生がこうして戦闘を行ったことに否定的な意見も。同時にそうせざるをえない状況を作ってしまったプロの実力に疑問の声も寄せられています』

歩く。歩く。歩く。

向かうのは病院だ。こっそりと侵入するように、彼は病院へと入り、そして一つの病室の扉を開いた。

「……麗日さん」

緑谷が病室に入ってきたことに対し、麗日お茶子はなんの反応も見せることはない。眠っているのか？　と思いい、少し近づいてみるが、どうやら起きてはいるらしく、椅子に腰掛けた緑谷をその瞳が見つめた。

「デクくん、来てくれたんやね！」

「……うん。……あの、麗日さん！」

「……あれ、なんやろ。やっぱりおかしいなあ。んー……」

「……麗日さん？　どうかしたの？」

何だろう。とてつもなく嫌な予感がする。こういうときの感覚は、よく当たる。だから……そう、心の中に一つの不安を残しつつ、緑谷は聞いた。

「なんか、なんも聞こえんのやけど……」

……聴覚になにか異常が？　緑谷は首を傾げる。だが一体なにがあったというのか。少し疑問になりながら、麗日の耳を確認した。

そこに、なにかが詰められていた。

「なんだ……これ……」

「……ん、なんかあった？　……う、ごめん。見苦しいもの見せちゃつて……」

「……いやあ！　なんでもないよー！」

下手に突くことはいけない、と緑谷はもう知っていた。よく知っていた。だから、彼は不用意に触れようとはしなかった。

しかし彼女は気になったのだろう。んー、と唸りながら耳に触れ、

そして、爆発した。

……なにが起きた？

そんなのわかってる。だが、現実を直視したくはない。緑谷は否定する。そんなはずがない。……そして、肯定する。それはまごうことのない。

死だ。

「……麗日さん……」

耳が破裂したのだ。頭の中はもつとひどく損傷しているだろう。痛いだろう。とても痛いのだろう。麗日お茶子は、耳を抑えて呻いている。

『あーあ』

そんな声が聞こえた。テレビのスピーカーからだ。睨みつけるようにしてそれを見ると、そこには顔のない男の姿があった。

『やってしまったね、緑谷くん。君が止めないから』

「……お前、は」

『彼女は助からない。あとはただ、苦しんで死ぬのを待つだけだ。そういうふう^にに設置したからね』

「……お前は誰だ」

『オールマイトから聞いてないのか。……だがそうだね、自己紹介といこう。僕はオール・フォー・ワン』

……皆は一人の為に？

ワン・フォー・オールの対のような言葉だ。疑問に答えるように、オール・フォー・ワンは緑谷に行った。

『———そうだね。言うなら、君と僕は殺し合うべき天敵さ』

そう告げるオール・フォー・ワンの顔は、醜く歪んでいた。『弔に対してひどくやってくれたようだからね。これは僕のちっぽけな意趣返しさ。気に入ってくれたかい？』

「……お前……！」

『……復讐したいなら、来週だ』

オール・フォー・ワンはそう言った。

『来週、連合で事を起こす。復讐したいのなら来い』

そう言つて、モニターの接続が切れた。言いたいことだけ言つて退場するか、と緑谷は言いたくなるも、麗日に手を引かれ、オール・フォー・ワンから意識を外す。

「で、く……くん」

「……麗日さん」

「いたい、いたいよ……頭がね、いたいよ」

「……」

「今の、聞こえちゃった。私、苦しんで死ぬんだよね。……今、とつても痛いのに……このままゆっくり消えていくのは、いやなの」

「……麗日、さん」

「……おねがい」

「……麗日さん！」

「私を殺して？」

……それは、まるで懇願するかのような目だった。死が救済であると本気で考えているような目だった。

それを見て、緑谷は手を握る。

「……」

もう、無理だ。

いよいよ本当に心が折れた。だから、もう励ますこともしなかった。

緑谷は、彼女の首に手を掛けた。

「……麗日さん」

「……デクくん、最後に一つだけお願いしていい？」

「……なんだい？」

「お茶子って呼んで？」

「……わかったよ、……お茶子、さん」

「呼び捨てにして」

「……お茶子……ちゃん」

「ん、まあいいかな」

そう言って、彼女は目を閉じた。緑谷の手に触れ、彼女は体の力を抜いた。

「……またね、お茶子ちゃん」

そして、緑谷はその細い首を、手で押し折った。

苦しみから解放されたような表情で、麗日お茶子は旅立った。

「……は、ははははは……」

椅子に座り込む。その瞳は開くことも、もうない。死んだからだ。なんで死んだ？ 緑谷、お前が殺した。

……生きる意味は、どこにあるのだろうか。彼にはもうわからない。

ただ、緑谷は椅子に座り込み、項垂れて、

『なんだ、本当に殺しちゃったのかい』

と、テレビから聞こえてくる声に顔を向ける。

『緑谷くん、君は馬鹿だね。敵が本当のことを言う確証なんてないのに』

「……なに、を」

オール・フォー・ワンは歪に笑った。

『麗日お茶子はあれでは死にはしないよ』

……

……もう、どうでもいい。

テレビを殴り壊した緑谷は、荒い息を落ち着かせる。そして、至って冷静に窓の外を見た。そして窓を開き、窓枠に腰掛ける。

「——警察だ！」

そんな声が聞こえてくる。つまり、自分はハメられたのだろう。もう、乾いた笑いしか出てこない。自分は馬鹿だ。どこまでも踊らされてしまっている。最悪だ。死んでしまえ。

「緑谷出久、お前を殺人容疑で逮捕する」

そう言って、にじり寄ってくる警察の姿を無視し——そのまま、後ろに体を倒した。

落ちる

落ちる。

落ちる。

——どうもどう？

終章 第42話

目を覚ました。

ゆっくりと体を起こせば、周囲にはいつもの面々がいる。……いや、違う。一人だけいない。そして普段見ない姿があった。ぼくは眠たい目を擦りながら、軽く耳を動かして体の感覚を確認する。うん、快調。

お腹が空く感覚。どれだけ寝ていたのだろうか？ そんなことを思いながら、動く前に一つ聞く。

「チャージは？」

「死んだ」

返ってきたのはそんな反応。そうかあ、と思いながら、ぼくは冷蔵庫へと向かった。そこから適当に肉を引っ張り出し、食べる。消費期限が近かったようであんまり空腹は満たせないが、だがそれでも小腹を満たす程度にはなる。

とりあえずぼくは座って、そして普段見ない姿の一人に声を掛けた。

「……ここにいて大丈夫なの？ スイコちゃん」

『いえーいはいえーいばっちぐー、全然平気なのですよう。雄英はどたばたしてて立入禁止になってるしね』

「……あれ、そうなの？」

立入禁止になっている、というのは初耳だ。いつの間にそんなことになったのだろう、と思いつつ、いや、冷静に考えればこの間の事件の後かと訂正する。頭を振って、付いていたテレビの中継に目をやった。

「今日って何曜日？」

「水曜だ」

「あれ、じゃあまだ時間は経ってないんだね。それで、雄英の立入禁止ってどうして？」

『Aクラスの生徒が何人か事件で死んだから。それで一旦立入禁止。生徒は登校見合わせなのだよ』

「ふうん。それでスイコちゃん」

『なに?』

「しんどくない?」

『……まあ、いつか死ぬだろうなと思ってたし。わたしがいなかったらだめだめだもん。いつかこうなるかもって思ってた』

そういうものなのだろうか。

自分が弔を失うことを想像してみる。そうになると、心の奥底が冷えつくような感覚がする。こんな感覚を味わっているのだろう、スイコちゃんも。それってすごい寂しいなあ、と思いつつ、心の中を覗いた。態度こそ淡々としているが、しかし深い悲しみに呑まれているようだ。

……個性が強くなったことで、弔の心の奥まで知ることができるようになった。その心の中では、意外なことに仲間への追悼の念が含まれている。いや、皆がそうだ。だからこそ今の連合は、お通夜ムードであると言う表現が正しいだろう。

普段から静かではあるのだが、今回はその雰囲気粘つきが違ってしまった。

こういうとき、悲しめないぼくは一体なんなのだろう。ここでも価値観の違いを思い知らされる。ぼくは狐だ。形こそ人間のものではないが、そのすべてが人間であるわけではない。

だから、ぼくは獣なのだ。何に涙することもない。命を悼むこともない。その飼い主に従順なだけの、心の底からそれ以外を喰い物にする獣。

そんなのに、人間は理解できないのだ。と、そういう事実を突きつけられる気分になる。

重苦しい空気が嫌で、ぼくは部屋の外へと出ていった。

外の空気を感じつつ、屋根の上へと登る。そうかんたんに見つからない位置にアジトは用意してある。そもそも、遠くから見てそれが犯罪者だとすぐにわかる人間がどれだけいるのだろうか。だから、ここ

に關しては用心するだけ無駄だ。

登った屋根の上に、寝転んだ。少し汚いが、それでも足の踏み場も座るところもある。ひよつとすると寝転ぶこともできる。後ろに体を倒し、手で体を支えた。ゆつくりと空を見る。おひさまはもう沈んでしまっている。夜だ。朝は過ぎ行き、昼もいつかは滅び、そして夜が来る。

夜は嫌いではない。狩りの時間だからだ。それに、ぼくたちは夜に忍ぶもの。夜はぼくたちの時間。今まで母親以外の同族に出会ったことはないが、それでもぼくたちはきつと、なにかで結ばれている。それこそが種族だ。そして、それこそがぼくが人間へとなれない事実を示している。

狐は狐だ。ぼくは狐だ。そうだ、それでいい。それでもいい。それでも人であろうとするのは間違っているのではないだろうか？　ぼくからすれば間違っていないのだ。

思えば遠いところへと来たものだ——と、思う。何もわからないまま必死に生き延びて、そうしていくうちに個性が発現して。そこから自我を持って森で生きて、先生に出会って。

そうして弔と会った。

ぼくの一生がどういうもので、それがどんなものであり、最後にはどこへと向かっていくのか。そんなものはわからないけれど、ぼくは空を見上げている。いつかもこうしていたような気がした。それはいつだったか？　森の中でか？

わからない。けれど、これだけ長く生きたのだ。ぼくも、そろそろなにかを思う時間くらいあってもいいだろう。何年生きたっけ？

……なんだかんだ、10年は超えたような気もする。覚えていない。15歳もたぶん超えただろう。なんだ、結構長生きだ。同族はだいたい5歳くらいで死ぬと聞いたことがあった。だから、だいたいその三倍。

もう立派なお婆ちゃんだ。

と、思っただけの性別自体はオスであることを思い出した。そうだそうだ、完全に忘れていた。もうみんなぼくをメスであるという扱

しかししていなかったから、それでぼく自身にも定着しちやつてたみたいだ。

これはいけないなあ、と思うが、ふと思う。少し前までは自分がオスであったとすっかり認識していたはずなのだ。なにかがおかしい。そう思つて、狐の姿へと戻ろうとする。

だが、できない。イメージができない。だからこそ、変身で元に戻ることができなかつた。変身解除で元に戻ろうとしても、それもできない。

ひよつとすると、体の変化が起こつたのだろうか？　しばらく人間の女の姿をとつていたから、そこから元に戻る方法を忘れてしまったとか？

……まあ別にいいか。どうせ変身のベースが今の姿にすぐ変わったというだけだろう。変わりないのだ。ぼくはぼくに違いはない。

むしろ人間に近づいたのだ。これ、喜ぶべきじゃないだろうか。やったー。

……そう言えば、新しくなつた自分の姿は未だしつかりと見ていない。なにか変化があるだろうか。見下ろせば、自分のものとは思えないくらいに膨れ上がった胸部。体に肉もかなりついている。だがそれは太っている、というわけではなく、体も同じく大きくなっていることから、きつと成長している、ということなのだろう。

一気に大人になつたような気がする。というか、ぼくが成長したらこうなるのか。あとで顔の変わり方も確かめておかないと。

なんて思いながら、ぼくは自分のしつぽを確認した。毛がもふもふの自慢のしつぽである。うん、前より少し長くなつているし毛はぼさつとしているように見えるが、絡まりとかはない。大丈夫だ。

少しだけ耳も気にかけておく。うん、ぼさつとした感じ。全然いつも通りである。軽く指で梳いて、そのまま寝転ぶように後ろに倒れた。

空はきれいな夕闇だ。ゆるやかに終わっていくような、全てを飲み込む闇の中にぼくはいる。それが昔はいつものことだったから、少しだけ昔を思い出す。

「隣いいか」

と、言いつつぼくの横に座ったのは弔だった。聞く気がないというのはわかりきっていることなので、ぼくはなにも言うことはない。そもそもぼくが弔を拒むはずもない。

ぼくに倣うように寝転んだ弔は、ぼくと同じ空を見上げる。夜に抱かれているようだ。ゆっくりと眠りにつくように、意識は落ちそうになる。だが重いまぶたを無理やり持ち上げて、ぼくは体を引き起こした。

「ねえ、とむら」

「ん？」

「ぼくのために本気で怒ってくれたでしょ」

「……………気の所為じゃねえの」

「素直じゃないんだ」

ぼくは笑った。すると、髪の毛をくしゃくしゃにされる。ひどい。これでも人間基準でいったらまだ若い乙女なのだ。もっと優しく撫でるべきだと所望する。

「…………一週間後だ」

「…………え？」

「一週間後、全部に決着を付ける。そしてお前が生きられる世界を作り上げるんだ」

「……………たぶん、できるよ」

「ああ。できる…………いや、する。ヒーロー社会を壊して……………そして……………」

その先を、弔は言わなかった。ただ、こちらを少し見ただけだった。ぼくは弔の腕を抱きしめる。そうするべきであると思ったから。手に手を重ね、ぼくは再び空を見た。

宵闇に抱かれている気分だった。どこまでも落ちるように、ぼくたちはその世界に取り残されている。空はそこにある。ただぼくたちを肯定している。

「とむら」

「…………なんだ」

「疲れてるよね。膝枕、いる？」

「……それよりは、こつちだな」

しっぽを掴まれた。体が少し跳ねる。今までつけてきた耐性がすべて消えている。これも進化のせいだろうか？ 弔がぼくのしっぽを枕にし、寝転んだ。

……しっぽが少し長くなっていてよかった。弔が隣にいるのを見れるから。

少しして、横から寝息が聞こえる。眠ったようだ。そんな弔の手を取って、ぼくは彼の手の甲に口吻する。

うん、なんだかんだで今が満ち足りている。それでいい。それでいいじゃないか。今はただ、この幸せを噛み締めていたい。

◇

「おはようございます」

「やあ、ジョン」

と、ぼくに返したのは先生だ。久しぶりに顔を合わせての会話になるだろう。先生に指示されたように用意された椅子に座る。

「個性が進化したって聞いたよ」

「あ、はい。えーと、狐の姿を卒業しました。今のこの姿がデフォになりましたっばいです」

「ああ、わかってる」

と、言っ先生はぼくに手を翳した。体の中から個性が抜けていく。生命力の感覚が無くなった。昔とは違い、今は冷静な思考力も残っているようだ。

「なるほど、なるほど……やっぱり、か」

と、言っ先生はぼくに個性を返した。生命力が溢れるような感覚がある。ひよっとして先生の生命力がいくらか譲渡されたのだろうか？ 先生を見ると、頬を指で吊り上げていた。

先生、やっぱり意外とお茶目なところがある。

「……来週だ。来週、ヒーローと……いや、緑谷出久と決着を付ける」

「とむらに聞きました」

「ああ。……緑谷出久以外、敵ではないよ。ヒーローはね。だからこそ彼を殺して、新しい世界へと作り変える。日本だけではない。そこから世界へと——だ。海外進出して世界征服を目論まないかね、^{ヴィラン}敵としては」

「……先生も世界つて欲しいんですね」

「要らないよ。要らないけど、それを征服したって称号はほしい。それだけだ。そういうものさ。意外とそんなに価値はないのさ。人間にも、獣にも。だからどちらも変わらない」

「……励ましています？」

「珍しく落ち込んでたからね。ぼくは先生だ。君たちを教え、導く者でなければならぬ。先生とは生徒が迷っていたらその悩みを解決するために奔走するものなのさ」

「……ありがとうございます」

と、ぼくは先生に言った。気にするなと言わんばかりに先生は指を振る。

「ジョン。いいかい？ 人はわからないものを恐れる。だから型に嵌めて、わからないものを理解しようとするのさ。——君は、獣だ。ただ強く、喰らい、殺すために育ってきた。そもそも境遇が違うんだよ。人であろうとするのは自分を傷付けるだけだ」

「それでも、ぼくは人になりたいんです」

「……何故だい？ 君は今も理解してくれる仲間がいる。それでいいじゃないか」

「……じゃないと、とむらと一緒にいけないじゃないですか」

「……君だからこそ、弔と並び立てるのだと思うけどね……」

だが、と先生は続ける。

「——君が望むならば、君を『人間』にしてあげることができる」

「……え？」

先生が言った言葉は、すぐには理解できなかつた。それでもぼくが人としてあれる可能性を提示された、という事実——その事実には、

ぼくはどうするべきかを考えた。

なにか条件があるのだろう。先生の次の言葉で、ぼくは自分がどうするのかを考えなければならぬ。

簡単だ、と先生は言った。

「君が戦う力を全て捨てるのであれば——君は、人に成れる」

.....

.....悩む。

少し考えた。ぼくがどうするべきか。

「.....どうする？ 君は、どちらを選ぶ？」

——選択する。

「ぼくは.....」

第43話

息があれば心臓が動いていることくらい当たり前のように、ぼくは今も生きています。だがそれが当たり前でないということだ。だってあるだろうし、ぼくは自分が生きていくということに対して感謝を持つべきなのかもしれない。しれないが——それはともあれ、ぼくは息を吐いた。

結局、ぼくは先生の意見には乗らなかつた。ぼくがぼくであるならば、この個性とは付き合っていけないといけないうし……戦闘力がなくなると、弔のために戦うことすらできないのだから。

これから戦いだ。特に、敗北が許されないほどの戦いだ。いわば連合にとって最大の壁とも言える、それ——社会の崩壊を成すために、最適な機会がここなのだ。だから今日起こる戦闘で負けるというのはならないし、つまりぼくは勝たないといけない。それが弔のペクトとしての役割なのだ。

戦えば、どちらかが死ぬ。その緊張感を思えば、ぼくが生きているということに少しの安堵を覚えるし、同時に疑問も湧いてくる。ぼくはほんとに生きていくのか？ ひよつとして、ほんとのぼくはもう死んでいるのではないのか？ わからない。まったくわからない。ただ、ぼくの生が多くの人にとっては忌避すべきもので、ぼくの命が望まれないものであることはわかる。

なんというか——胡乱、と言うのかな。ぼくは生きているのか、死んでいるのか。今まで何度も死ぬような機会があつたはずだ。そのたびにかりうじて生きている。ただ、そこで死んだぼくだっているわけ。

なんというか——自分が生きていることが少しわからなくなってくる。それがおかしいことだと理解しているが、わからない。箱の中にいる気分だ。それが開かれるまで、ぼくの命の行方はわからない。死ぬのか、生きるのか。どちらにせよ、それが弔のためになるのならそれでいいや。なんて言つて、ぼくは決戦前に体を動かした。

腕を動かす。上半身の動かし方も意識してみる。今までなんと

くでやってきたから、そうやって筋肉の使い方意識を向けてみるとすこし違和感があった。だがやって損はないだろう。なんとなく、ぼくの体は自然の中で最適化されているような気もするが……まあ、やらないよりはやって無駄だったほうがいい。

体中を汗びつしよりにしながら、ぼくは休憩に座り込んだ。息を吐く。呼吸が苦しい。ただ、苦しいことにもそのうち慣れてくる。それに戦闘はもつと疲れないから、これは無理をした反動だ。戦っているならばその最中で休める場所を発見できるのだから。だから、案外こうして疲れることは慣れない。

わずかに息をついて、再び動き出す。動くたびに体と意識のちぐはぐさがもどに戻ってくる。今の大きくなった体は完全に掌握できた。あとはこの感覚を、戦闘までに忘れないようにするだけだ。

踊るように。

あるいは、遊ぶように。

だれかに戯じゃれるように——体が舞う。動く。遊ぶ。動く。体を振り乱して、一心不乱にただ回る。なにも考えていない。そんな間は不要。ただ、本能の赴くままに舞い、踊り、そして墜ちる。

どこへ？ なにに？ 恋に？ 故意に？ わからないよ？ けど、ただなんとなく、こうしているほうが楽しいから。こうして踊っているんだよ。

舞う。そこに意味はない。ただ踊るように、獣が肉を貪るように、小さな花を咲かせるように、鳥が空へと羽撃はばたくように。

踊る軌跡で絵を描く。色はすべてぼくから作る。その濃淡はぼく色で分けられる。同じ場所で踊ったぼくが、そのぶんだけ色を重ねていく。人には見えないその絵は、きつとぼくだけに見えていた。

「——ん、快調」

グリザイユ、だったか？ どころなくベルサイユと名前の似ているような気のするそれを思い、ぼくはゆっくりとその体を戻した。体を前に引っ張るように、意識はせずとも足は進む。ちよつと前まで少し違和感があったわけだから、これで万全だとようやく言えるのだろう。

体を進めて、たどり着いた先は連合の普段の溜まり場だ——全員揃っている。なんなら、見たことのない顔まで揃っている。先生もモニター越しであるがそこにいる。

「おはよー」

と、声を掛けるが何故か全員微妙な顔をしていた。なんだというのだろうか。首を傾げると、弔がぼくを掴んで隣接されているバスルームへと押し込んだ。

「汗拭けよ」

たしかに、床を濡らすほどの汗が溢れている。そりやまあなにか言いたくもなるよなあ、と思いながら、適当にタオルを引っ張り出して体を拭いた。

◇

『今回も雄英を襲撃する』

と、弔が言った。理由は校長にある。彼が現状、一番厄介なのだから。よくわからないが、その知恵を利用されることがなにより脅威である、らしい。そして同時に雄英は未だある正義の象徴でもある。大体緑谷くんのせいだ。だからこそ、だ。その雄英を完璧に失墜させ、そして連合への勝利を導く。

そういう理由で、ぼくは今、雄英にいる。

個性の進化で普通の肉を食べたぶんだけそのエネルギーを蓄えられるようになったので、今のぼくは蘇生を20回行える。そのため消費したのはだいたい200人くらいか。……前より燃費悪くなってるのか？ と疑問に思いはするが、力が強くなったぶんそれは仕方ないのだろう。

そもそもあんまり上質じゃない死体でこれだけ稼げたほうがすごい。昔は生命力のストックが利かなかったからかなり苦労した。今は当たり前のようにストックができているのだから、ほんとに強い肉を食らうって大切だなあと思って思った。

下では陽動のための炎が湧き上がっていた。新人さんなのにしつ

かり働くなあ、と思いながら、ぼくは校長室へと向かって動く。

たしか……茶毘、だったか？ いやはや、かなりの人数が増えている。ぼくもかなり驚きだ。びつくりするよね。いつの間に増えていたのだけか。

そこその実力が揃っているから、あんまり急がなくても制圧は可能だ。……緑谷くんが現れた場合、一瞬で負けるかなあといった感じではあるのだが、彼はまだこない。だから大丈夫。

——そんなぼくの前に、一つの姿があった。

「……あ、睡さん」

そう、睡さん——ヒーロー・ミッドナイト。彼女がぼくの前に立っていた。ぼくの来るルートを読んでいたのだろうか？ いや、ヒーローはなんとなくで勘付いたりするものだ。おそらく、ここに来たのもなんとなくでしかないだろう。

戦う意思の揺らいでいる彼女を見て、ぼくは笑った。

「……ほんとに、ジョンちゃんなの？」

「うん。ぼくはジョンだよ。ジョン・ドウです」

「……………一つ教えて」

「なんですか？」

「あなた達は、何の為に動いているの？」

何の為、か。それは言葉に迷う。言うべきか、言わざるべきか。

どうせ全世界に向けて公表するのだ。遅いも早いも変わらない、か。

そう判断し、ぼくは『事情』を打ち明けることにした。

「睡さん、ぼくはね。人を食べないと死んじゃうんだ」

「……………え？」

それだけの衝撃だったのだろう。睡さんは彼女にしては珍しく大きく目を見開き、その揺れる瞳でぼくを見ていた。その手が鈍る。戦う意思も鈍っている。なんだ、それだけぼくと彼女は絆を結んでいたのか？ わかんないけれど、これは楽でいい。

このまま畳み掛けようか。

「なんて言うのかな、ぼくはこうして生きてるだけで『生命力』みたい

なものを消費しててき。それが切れると死んじゃうの。それで、『生命力』は外部から摂取しないとなんだけど……それが『個性因子』の持った生き物からしかじゃないと取れないんだ」

「……うそ」

「嘘じゃないよ。……この世界で個性を持つてるのって、そのほとんどが人間だから。だから人を食べないと生きていけないの」

「……そんな」

ぼくの個性の強さは尋常ではない。最大限に発揮すればオールマイトに肉薄するという時点で尋常ではないことがわかる。しかもそのうえ、複数の便利能力付き。強個性にすぎる。だが、それになんのデメリットがないわけではないのだ。

「そんなぼくが生きられる社会を、弔は作るって言ってたんだ。全部ぼくのために。だからさ、ぼくのために戦ってくれる弔のためにぼくは戦うの」

「……」

睡さんはなにかを小さくつぶやいた。そういえば、体を強化していなかったな。強化の割合を少しだけ耳に大きく振り分け、全身を強化する。

「……戦えないよ」

と、睡さんは言った。今度は強化しなくても聞こえてくるほどだった。

「あーあ……こんなに迷うくらいなら、仲良くなんてならなかったらよかったのに……」

彼女の正義では、ぼくを捕まえろと言っている。だが彼女の感情は、ぼくに同情している。ぼくの悲劇に同情している。

彼女は決心したらしかった。心の声を聞いて、ぼくはその警戒を解いた。

「ね、ジョンちゃん。こっち来て」

ぼくはそのまま歩いて、睡さんへと近づいた。警戒の必要はない。彼女が選んだほうにぼくは気づいている。

抱きしめられた。

「……………ごめんね。私はヒーローだから……………あなたを捕まえないわけにはいかない」

「知っています」

「でも、私は捕まえたくない。それがどんな犠牲を生むかわかってても……………それでも、捕まえられない」

「知っています」

それは、おかしいか。けどぼくはそれを知っていた。心が読めるから。

「ぼくは人の心が読めますから」

急いで付け加えた。そういう個性なのだ。だから知っていた。

ぼくの頭を撫でる睡さんの指は、なんとというか心地よい。ぼくにお母さんがいたならこんな感じなのだろう。ゆっくりと、優しさに浸るようにぼくは睡さんに体を預けた。

「そっか。他にはどんなことができるの?」

「……………」

言うべき、だろうか。けど……………なんというか、睡さんはぼくと敵対しないような、そんな予感があった。だからそのまま、隠さずに言う。

「見た目を変えるのと、火を使ったりできます。あと体の強化も」

「ずるいわね。……………でもまあ、そのくらいが適切なのかしら? 人を食べないと死んじやう個性なら」

「そうなんです。……………ねえ、睡さん。一つ聞いていいですか?」

ふと、気になった。

ぼくの個性は人を殺さずにはいられないものだ。そんなぼくを、睡さんは許してくれるのだろうか? ……心の声を聞く。彼女は敵対したくはないらしい。それが本音らしい。いよいよいい人だな、と思つて、ぼくは小さく安堵した。

……………でも、ぼくと彼女はその立ち位置から決定的に相容れない。

そんな彼女に、ぼくは聞く。

「ぼくは……………睡さんの友達も、生徒も、殺しちゃった化物です。それでもぼくは——人ですか? それとも人を殺して喰うだけの、獣ですか?」

睡さんは優しい笑みで言った。

「あなたはとつても優しい、人よ。だって、私を殺すのに躊躇してるじゃない」

睡さんの心臓に爪を喰い込ませようとしているぼくに、彼女はそう言った。

命を握られているのを知って、彼女は動こうとはしない。何故だ。それだけぼくを信頼しているのか？ わからない。死ぬのが怖くないのか？ ぼくは怖い。怖かった。だからわからない。睡さんがなにを考えているのかわからない。

怖い。

「睡さんは……なんでそんなに優しいんですか？」

ぼくは、ふとそんなことを聞いていた。しかし彼女は首を振る。ぼくの頭を撫でながら、どこまでも優しい笑みで言った。

「私は優しくくないわ。こんなに優しい子が生きられない世界ならいつそ壊れちゃえて……そう思うだけ。ヒーロー失格ね」

「殺されるのは怖くないんですか？ ぼくは殺しちゃいます。結局どこまで行っても人を殺します。ぼくが怖くないんですか？」

「怖くない。だってあなた、優しすぎるもの」

睡さんがぼくの目元を拭った。その指がなにか濡れているのを見て、ぼくは自分が泣いていたのだと気づく。

何故だ？ 困惑する。何人も殺してきたのだ。昔ならなんの感情もなく殺せた。ただ言われるがままに、敵対してるからといって殺していた。なのに……なぜぼくは彼女を殺すのに泣いているのだ？

「人を殺すときに涙を流せるのは……きつと、あなたが優しいからね」

「違う……優しかったら、人を殺すわけがないじゃないですか」

「だったら私は優しくくないわ。今まで守れなかった人がいるもの。いくら制圧に優れていても、間に合わなかったら意味はないのよ」

「……それは違います」

「じゃあ素直に受け取って？ あなたは優しい。……大丈夫。死ぬの

は怖くないわ」

「なんでです?」

「だって、食べてくれるんでしょ? だったら私はただ死んだわけじゃない。ジョンちゃんの血肉になって死んだ。……死ぬことに意味が与えられるのって、それはすごく幸福だと思わない?」

「……死ぬことは、どれだけ取り繕っても変わらないですよ」

「世の中にどれだけ犬死って言われる死に方をした人がいると思うの? そんな人と比べたら、食べられるのも誰かのために死ねた気がしていいじゃない」

「……変ですね、睡さん」

「そうかしら? このくらい普通だと思うけど」

「そこで、会話が止まった。いつまでも話してられる時間はない。そう、ぼくは先に進まなければ。」

「……もう、行きます」

「そう。じゃあジョンちゃん、頑張つてね。……校長も待っているわ」
待っている? その言葉に引っかけりを覚えながら、ぼくは手に力を込めた。そのまま柔らかい肉に指を突き入れていく。睡さんが、ぼくを抱きしめてその死を受け入れた。

そして、睡さんの心臓を貫いた。

……命を奪った。その感触を感じつつ、ぼくは睡さんの腕の中から抜け出した。

「ごめんなさい。またあとで戻ってきます」

そのときは、食べてあげよう。普段は食べないところも全部。

だから——今は、先に進む。

◇

「やあ! 待っていたよ!」

校長室に入ったぼくに、根津校長はそう言った。睡さんの言ったとおり、本当に待っていたらしい。

けれどその理由は? と疑問に思うぼくに、校長は椅子から立って

ゆっくりと前に出てくる。そうして話しだした。

「君を見たときにね、私は思ったんだよ。——ああ、これは獣だ、つてね」

「……………え？」

「すぐにわかったんだ。君のその殺気、佇まい、冷ややかな雰囲気。すべてが野生の獣のようなそれだったのさ！ 私は個性が発現した動物だ。だからわかる。本能、と言うのかな。それでだ。君が私と同じく、動物に個性が発現した個体である、つてね！」

……校長先生も勘が鋭いなあ、と思う。なんとも言葉にし難いようなその感情を言葉にしようとするが……不可能だった。結局口をもよもよさせるだけで終わる。

「見た目こそ人間のそれだが——本質は、きつとなによりも獣のさ！ だからこそ私にはわかることもあった。君が相澤くんを殺したことも、なにもかもすぐにわかったよ」

「……………怒ってます？」

「いいや。それは君の本能だからね。なんというか……君は殺さずにはいられないのだろう？ そして食べなければならぬ。このくらゐすぐに導き出せるよ。……だから、それに怒ることはない。悲しみはあれど、ね」

「……………ごめんなさい」

「謝らないでいいよ！ そもそも、君が敵サイランになることだって仕方ないと思うんだ。君のその在り方は、一般人には受け入れられないからね。だから君の居場所サイランが敵連合だったことも、なにもおかしいとは思わない」

……わかった。

この人は——ぼくを、全て肯定している。

「君の居場所を作ってあげられたのが連合なのだろう。それは仕方のないことだと思う。だから私にできることは、同じ境遇である君の『理解者』になってあげることだった」

「……………そうですね。ぼくと同じなんて、初めてですから」

「だろう？ 私も初めてさ。だから、仮初でも君の居場所になればい

いと思っていた。理解者になろうと思っていた。……その結果がこれだよ」

「先生は悪くないです」

「生徒を殺させてしまったのは私の責任さ！ だから悪いのは私だ。君は本能に殉じただけだからね」

ぼくは、なにも言えなかった。校長は、ぼくへの嫌悪も憎悪も見せない。ただ、仕方ないと——それがあるべき姿だと言わんばかりに、ぼくを否定しなかった。

人喰いの化物を、否定しなかった。

「先生」

ぼくは聞く。それは先程と同じ問。

「ぼくは——人ですか？ それとも、獣？」

「獣だよ」

即答だった。

「君は獣だ。だが賢しい獣だ。殺して肉を食らう獣だが……君は、人になろうとした。それだけで充分だ。充分……君が良い人だと伝わってくる」

「……違いますよ！ ぼくはただ、殺して食べる……殺しを楽しんじゃう化物です」

「君は臆病なんだね。狐だからかな？ つまり、君は獣だと言われたいんだ。人じゃないとして断罪されたいんだ。そっちのほうが楽だから」

「違います」

「違わないよ。私にはわかる。君を獣と言ったとき、少し悲しんでいた。だから君は獣であるが——人としての側面も持ち合わせている。どちらでもあり、どちらでもない」

だから、と続ける。

「——楽になればいい。君は優しい。だから、獲物を前にしているのにこうして言葉を交わして——迷っている」

いや、それは弱さだ。

昔のぼくなら躊躇なく殺していた。これが成長だというなら、世の

中のすべてはなにかを捨てるのが成長であると言うようなものだ。だから、ぼくは自分のこの優しさは弱さである、と。

唾棄すべきものだ、と思う。

「……そろそろかな」

と、校長が言った。そしてぼくのほうへと歩み寄ってくる。

「……なにを……」

「私を殺しに来たのだろう。そうするといい。君は君だ。何に憚ることもない」

「……なんで？」

どうして、今日あった人たちは死ぬことを良しとするのだろうか？

ぼくはあれだけ怖かった。なんでこんなに受け入れられるのだ？

やってくる死の足音が恐ろしい。そんなぼくのほうが変わらなくてもいいのか？ わからない。

みんな、狂っているような。そんな感覚。

「私は思うのだよ。君のような少女が翳りを覚える世界はいつぞ滅んでしまえ、とね」

「……睡さんも、同じことを言っていました」

「きつとこの雄英のヒーローなら誰もが同じことを言うさ。相澤くんですら言ってくれるだろう。彼は死ぬことをよしとはしないだろうけどね」

「……なんで？ 怖くないんですか？」

「怖くないさ！ こういうのもなんだが……私は、死を救済だと思っている」

「……え？」

「死があるから生がある。死から生は生み出されるし、生から死は形作られる。それが世界の理なのさ！ いずれ滅びただろう我が身が今滅ぶことに、なんの恐怖もない！ ……特に、君に殺されるのらね！」

「……わけがわかりません」

みんな馬鹿だ。大馬鹿だ。死ぬことを一切恐れていない。

だから、今度はぼくの方から校長先生に抱きついた。

「——ありがとうございます」

そう言つて、その首を締め殺す。あつさり、根津校長は事切れた。……ぼくは、その肉を食べる。凄まじい個性だけあつて、かなりの生命力が充填された。根津校長を食べきつた。血以外はなにも残らない。まだお腹に余裕はある。全然食べられる。なら次だ。

ぼくは次に、睡さんの死体のもとへとたどり着いた。そしてその体を、食べる。すべてだ。痕跡さえ残さないほどすべて——食べきる。それは埋葬の意もあつた。ぼくは睡さんと根津校長を食べて、彼らの魂を吊つたのだ。

人一人を平らげたが、普通に動くことはできた。動きづらいなどは特になし。睡さんを食べ終えて、ぼくは派手にコンクリートが舞い散る戦場へと目を向ける。

——きつと、そこに緑谷出久がいる。

第44話

ヘリコプターが気丈に飛んでいる。そこから見えるのは……テレビのカメラだ。あんまり中継するようなことじゃないだろうが、なぜか中継されている。

体を前方へと跳ね飛ばした。意識するまでもなく、ぼくの要望に応える体はそのまま目標地点へとぼくを連れて行く——うん、このボディでも戦える。前回は敗北したが、あれはまだ慣れてない体だったことも原因の中にあるのだ。だから、その体に慣れれば十全以上に戦える。

とはいえ、早期に飛び出すような真似はしない。戦況を確認してからだ。少し戦地から離れた場所に座り、様子を伺った。緑谷くんはまるで鬼神の如く、大人数で囲っているのに全く引かずに立ち回っている……やはり恐ろしい。その戦闘力。やはりオールマイトの子供は尋常ではない。先生も苦戦するだろう。だからこそ小細工を用意してあるのだから。

「……強すぎない？」

ぼくは、迫りくる敵を^{ザイラン}千切っては投げ千切っては投げ……と言った表現が似つかわしいほどの奮闘をする緑谷くんを見ながら、ふとつぶやいた。あれだけ強かっただろうか。茶毘があつさりと跳ね飛ばされそうになったのを、ジェントルが抑えた。どうやらラブラバの手助けも入っているようで、見せる戦闘力は普段のジェントルの比ではない。

だがそんなジェントルを、緑谷くんは一瞬の隙について仕留めた。通常じゃあ考えつかないような踏み込みで、だ。それは茶毘が放った炎を直進して、そのままジェントルを殴り飛ばすという傷つくことを省みない戦い方。

多くの人が躊躇するようなことを当たり前のように踏み越えてくるから、緑谷出久は恐ろしいのだ。殴りかかった新入り……マグネ、だったか？ そいつの腹を貫通した拳を見て、ぼくはふと思ったのだ。

殺すことに躊躇がない。それは美德になりはしない。言つてて自分が悲しくなるが、それは事実だから仕方がない。

とりあえず死者が出たのだ——ぼくは見物をやめ、戦地へと降りた。腹に穴が空いたマグネを治癒しながら、ぼくに対して殺意のままに殴りかかってくる緑谷くんに対応する。

大振りの拳は釣りだろう。あえて誘いに乗ると、想像通り大きな一撃で潰しにきた。気づいているのだからそれに当たることはない。打ってきた拳をそのまま掴んで、反対の腕も掴む。巻き取るように空中へとぼくを打ち上げてきたから、そのまま回転するようにしてしっぽではじき出した。

「……助かったわ」

「ん。気をつけてね？」

「ええ、ありがとう」

一応修復こそしたが、完治はさせていない。血まで作っているとぼくのほうが生命力不足で悩まされる。だからこそ、なるべく後方支援を頼むように言っておいた。

素直に了承してくれたマグネが、前線から引いた。さて、どのように攻め込もうかと考えたとき、大きな炎が放たれた。緑谷くんを飲み込んだが、しかし全く効いていない。

あの耐久力は卑怯だ。どうやって突破しようか、と考えて、弔が緑谷くんへと襲いかかった。触れるだけで殺せるのだ。なら、それをしていない理由はない。一応いつでも修復できるように治癒を待機しつつ、緑谷くんが動きにくいように、弔の援護をする。

だがそれも意味をなさない。まるで完璧に思考が2つに分かれているかのように、緑谷くんはそのすべてを片手ずつで往なす。

完璧に戦闘のためだけに脳が進化しているような感覚。そこに、どことなく獣の面影を見た。

しかし、だからこそ読める。獣であるというのなら——土俵は同じ。獣のぼくだからこそ、獣になりかけているように殺意を滾らせた緑谷くんの動きは読みやすい。

「死染——さん——っ！」

「緑谷くんは……いや、言わないよ。きみには言わない」

「ワン・フォー・オール」

それは眩き。個性の出力がさらに上がる。衝撃波が連合メンバーを襲い、その背後の雄英の校舎を跡形もなく消し飛ばした。出力を増している。それも、尋常ではないほどに。だがその威力は代価を支払い得たものであり、その証拠に緑谷くんの右腕はもはや二度と元に戻ることはないだろうというほどにへし折れている。

隻腕となった彼だが、未だその戦意は衰えていない。一体どれだけ体を壊してきたのか、腕が尋常ではない折れ方をしているというのに顔色一つ変えず、そしてその殺意を鈍らせることはない。その表情が感じさせるのは、痛みに対する『慣れ』だ。つまり、彼はこの程度の痛みならばもはや飽きるほど経験してきたのであろう。

修羅、というべきか。全くなにもかもを捨ててしまえるほどの、自らを省みない戦い方は——そう、全て、ぼくの判断ミスのせいだ。もっと早期に殺しておけば、ここまで成長することはなかった。相手が恐ろしいから、敵対したくない？ 自分がバカらしいと思える。そう思うのならもっと早く殺しておくべきだった。少なくとも、敵対した時点で反対を振り切っても殺すべきだった。

人は力に惹かれる。なればこそ、茶味が緑谷くんに惹かれた理由もわかる。彼はどこまでも人を信頼しなかった。そしてヒーローを恨んでいた。だから、緑谷くんを見て、人の正義を踏み躪ってでも断罪できる者こそを求めたのだ。

気持ちにはわかる。緑谷くんは、あの時点ではひどくまっとうなヒーローで——それ故に、酷く残酷な人間だった。だから、そこに願いを求める理由が理解できる。絶対的な力で、彼の思う悪を言い訳ごと切り裂いてしまえる人間がほしかった。

わかる。とてもわかる。

——なんとというか、緑谷くんと弔は似ているのだろう。そして対極だ。

それはある種残酷な対比だ。本来正義に座す緑谷くんこそが、正義にはなり切れないという事実を突きつけているのだから。

弔は悪の帝王に拾われ、そしてぼくのために世界を犠牲にすることにした。

緑谷くんはオールマイトに憧れ、そして世界のために誰かを犠牲にする。

ステインの言っていたことがわかる。善も悪もなく、世界には無数の正義があり——相容れない者が、争う世界。

世界のために誰かを犠牲にし、自らを犠牲にし続けた正義は今、こうして一人で戦っている。獣に堕ちてまで戦っている。

だがどうか。連合という、弔が作った場所には仲間がいて、今こうして弔の正義のために……いや、思惑はあるだろうが、だがそのために名目に掲げ戦っている。

だからこそ、残酷な対比。その差は何だったのだろうか？

「指導者の差——だね」

と、ぼくの心を見透かしたかのようにぼくの頭を撫でる先生が言った。

「オールマイトは指導者として二流だった。だからこそ、弟子を今こうして戦わせているんだ」

そしてもうひとりの先生がぼくの頭を撫でる。

そして先生は、ぼくを後ろへと放り投げた。

ぼくをキャッチしたのは、トウワイスという新しい仲間。そしてその側にいた少女と共に、緑谷くんが撒き散らす戦闘の余波から避けるように瓦礫の陰へと隠れる。

「なーんか一気に地獄に叩き込まれた気分です」

「……ナイスキャッチい」

「いやいやいやいや！ こいつあキツイぜ！ 余裕だな！」

「緑谷くんがここまで強くなつてるとか思わないよふっ」

「あのあの、ジョンちゃんでもいいですか？」

「んー？ そうだよ」

話しかけてきた少女に返しながら、陰に隠れつつ戦闘を見る。……たしか、トガちゃんだったか？ ……先生がいよいよ本格参戦してきた、ということ……事態はそれほどまでになっているのだろうか？

いや、そういうわけでもない。たしかに先程から余波で雄英の敷地がどんどん壊れているし、しかもそれが先日の戦いの比ではないほど壊れているが、だからといって先生が出る幕ではなかったはずだ。

……いや、そう思っているのは案外ぼくだけなのか？ 緑谷くんがどんだんと獣になっていくから、それに対してシンパシーを感じ取れているだけで……本当のところは、ぼく以外からするとんでもない脅威だったんじゃないだろうか？

「なあに？ トガちゃん」

「いや、いつつもこんな戦いしてたのかなって。命が幾つあつても足りませんよこんな戦い」

「んー……ここまで規模がでかいのは初めてかな。普段はもつとゆるーい戦いばかりだよ」

「そうなんですネー。初陣がこれだとびっくりしちゃうです」

「この戦い怖いよな！ いや全然！」

「……ここはあんまり狙われてないけど、向こう側は地獄みたいだね」
緑谷くんの姿が正面にあるから、その右手側のぼくたちには攻撃が飛んでこない。だが左手側に隠れている仲間たちは攻撃の合間に狙われたりしているようだ。

「……先生が増えているのはトウワイスクんの個性だよな」

「ああ！ 違うな！」

「えっ？」

「違わないぜ！ 違うな！」

「どつち……？」

「違わないぜ！ な！」

「あ、うん。よくわかった」

先生を増やせるだなんてとんでもない個性だ。デメリットも当然あるだろうが、しかしこの利点はデメリットなんかかものともしないほどのものがある。

……恐るべきは、先生二人を相手にして全く互角に渡り合う緑谷くんのほうか。右腕を失っているのに、むしろ失う前より動きがどんどん最適化されていていつている。学習しているのだろう。やはり獣だ。

その感覚は、ぼくにも覚えがある。

だが緑谷くんは正義のために戦うのだろうか？ それに落ちるとどうなるのか、などということは考えなかったのだろうか。

妬ましい。ぼくにはないものを持っていたくせに、それを捨ててしまうような緑谷くんが。どうせ捨てるならそれをぼくによこせ、と言いたくなる。だがそんなみつともないことはしない。だって、睡さんが言ってくれたのだ。ぼくは『人』だ、と。根津校長が言ってくれたのだ。ぼくは『獣』であるが……だが、取り繕うことを知っている、と。

だからぼくは、獣であることを肯定する。ぼくが獣であるからこそ——二人を糧にできるから。食べて、飲み込んで、それをぼくの力にする。二人はぼくの力になった。だから、ぼくが獣であることに恥じることはない。恐れることもない。そして、何に憚ることもない。

——先生の分身が消えた。緑谷くんの、確実に隙に差し込まれる攻撃に耐えきれなかったようだ。……いや、なによりも恐ろしいのは、分身を分身だと見抜いて先に撃破したことだ。それは観察眼によるものか、あるいは勘か。

援護に出るべきか？ 少し迷う。先生はどこことなく、緑谷くんと戦うことを楽しんでいる節がある。だからこそその邪魔はしたくない。少し迷って、ぼくは動かないことにした。

どうせ保険も仕込んでいるのだ。だから、敗北することはない。

ひよつとすると、いくら緑谷くんが命を賭けて戦っても……それはなにも変えられないのかもしれない。

それは悲しいな、と思った。戦いであれば必ず敗者が存在する——それに、緑谷くんはなってしまうのか。あるいは、連合のだれかがそうなるのか。

……かろうじて、連合に死者はない。ジエントルとラブラバは意識を失ったが、死んではない。緑谷くんが本気で殺す気で放った拳を受けて生きているのだから、上出来だ。下手な敵ならば一撃で瞬殺サイランされている。その連打を堪えたのだ。あまり貶すことはない。

新加入のMr.コンプレスは腕を押さえている。瓦礫に潰されたようだ。ぼくは隠れている瓦礫から左手側へと向かい、彼の手を治癒

した。

左手側には先程の二人を除いた全員がいる。それだけ左手側に戦力が固まっていたのだろう。あちらにいた二人は……まあ、役割的には仕方ないところがあるので、仕方ないと言える。

「……マジで腕が治るのか。ありがとよ嬢ちゃん」

「ん。こつち側はあとどれだけの人が戦える？」

「気絶しちまったこの二人以外はいける」

ぼくの問いには弔が答えた。緑谷くんと正面から戦っていたから、その体のダメージは相当なものだ。とりあえず治癒を掛けて、周囲を確認した。

「^ま的が小さいのが怠いな。オールマイトくらいデカけりやまだ戦いようはあるんだが、あのサイズだとどうしてもタイマンを強いられる」となると……ああ、茶毘は攻撃しづらいわけだ」

「……………」

「事実だろうが、凹んでんじゃねえ」

「凹んでねえよ」

ぼくにそう言われてむっとした茶毘が、弔に言われて言い返した。その返答からだいたい感情を察せるのだが、そこはおいておく。

「……先生も、不利だな」

「リーダーが触れりやあ殺せないわけではないだろ。それ狙いしかねえな」

「そりゃあそうだが……捕らえるまでが厄介だろ。二人がかりでも捕まえられる気がしねえ」

「……勝てねエわけではないが、勝つまでがしんどい、と。なかなか厄介な敵だな」

『……捕らえればいいんだよね』

スイコちゃんが言った。マイペースにその体を伸ばしながら。

『一応策がないでもないよ。わたしは液体だしね』

「……絡め取るってことか？ そんなので止まるのか？」

コンプレスの質問は当然のものだ。ぼくはそう思った。だから、スイコちゃんに目をむける。

『止めれる』

と、あつさりと言はる。まるで当たり前であるかのように。まあ、たしかに進化したスイコちゃんの個性の詳細をぼくは知らない。だからきつとできるのだろう。彼女はあまり嘘をつかないから。

「駄目だ」

だが、彼女の意見を弔は却下した。なぜだ、というような目が全員分突き刺さる。その目を受けて、端的に弔は言った。

「死にたいだけだろ」

『……………』

「俺の個性はちよつとずつ強くなっている。……だから、完璧にくつついているやつがいると一緒に崩壊させちまう。どこで勘付いたのかはわからんが、死なせはしない」

弔が言うと、スイコちゃんは黙る。

そういえば、ぼくはスイコちゃんの治癒を試したことがなかった。くつついている状態の彼女だけを治すことができるのだろうか？

……わからないが、そのためにわざわざリスクを背負って検証する気にはなれない。

弔は、緑谷くんを見る。その視線の先で、戦いは既に終わっていた。先生が、倒れている。

緑谷くんに負けたのだろう。先生は倒れ、それを見下ろす緑谷くんは次の獲物——すなわちぼくたちに目を向けている。

「……ふ、ふふふ……やられるとは思わなかったよ。オールマイトより遙かに強い」

「……それで？」

先生が話しました。それにより、緑谷くんの視線は先生の方向へと向けられる。

「……オールマイトより強い。それは明らかだ。だから万全以上の用意をしたんだが……それでも敵わなかった」

「……なにかあるんなら早く」

「そうか。ならそうするとしよう」

先生はなにかのスイッチを押すかのように、指を動かした。

——直後、巨大な爆発が二つ起きて、東京の街を飲み込んでいく。それはまるで地獄のようで、外部から見ればきれいな花火のようであった。方角から緑谷くんはなにかを悟ったのか、その体を震わせている。そんな緑谷くんに、先生は言った。

「緑谷引子、爆豪勝己の二人を爆弾にさせてもらった」

にこやかに先生は言う。表情のない緑谷くんを見て、先生は笑った。そして、個性の詳細を語り始める。

『液体を爆弾にする個性』——世界を探せば、いろんな個性がある。これはあるテロリストから奪った個性なんだが、人の血も爆弾に変えることができる。だからこの間そうしておいた。……ああ、そういえば麗日お茶子にもそうしたかな？ 彼女の死体も一緒に大爆発だ。喜ばしい。死体すら残らずめでたくこの世からの消滅だ」

「……………」

「ところでどう思う？ あの街には君の勝利を固唾を呑んで見守る多くの人がいたと思うけど……あの爆発で、その人達は怎么样了と思っう？」

先生はそう問いかける。その答えはわかり切っている。マグネッサン、トカゲ顔の男……スピナーが少し微妙な表情をしていた。向こうではトウワイスがそんな顔をしている。

まあ、たしかにエグいなあ、とは思う。だが今更こんなことで躊躇しているような精神ではない。全員それを見てその程度の反応しかないのだから、立派な敵たちだなあ、と思った。

「そう」

緑谷くんは端的に言った。そして先生の頭を掴む。

「なら死ねよ、もう」

そのまま力が込められていく。頭が割られることは想像できていた。だからぼくは飛び出す。緑谷くんを蹴り飛ばし、その姿を先生から引き剥がす。

「…………ごめん、助かったよ」

「どういたしまして！……先生は逃げて！」

「いや、まだたか——」

言葉の途中に黒霧がワープゲートで無理やり後退させた。

「差し出がましい真似をして申し訳ございません。ですが、今ここであなたを失うのはまずいと判断しました」

「……まあ、いいよ」

ぼくは体の強化を最大まで引き上げた。緑谷くんはどうせ最大を容易に超えてくるんだろう。ならば、ぼくも限界を超えるほど生命力をつぎ込む。

「邪魔しないでよ」

獣のように妖しく揺れる瞳が、ぼくに殺意を向けた。そしてぼくへと向かって走ってくる。なんとなく、獣という一部分でのシンパシーで相手が放ってくる攻撃を予想できた。そして回避行動に移る。

だが相手も同じくそれを読んでいたのか、あるいは察知したのか回避潰しをしてくる。ひっかくようにぼくの目を抉りにきたそれを少し後退して回避し、そのまま空いている腹へと向けて拳を放った。

それは緑谷くんの腹を貫通し、大地に赤い大輪を咲かせる。

そして腹に拳が刺さったまま、緑谷くんはぼくの頭を吹き飛ばした。

蘇生が始まる。頭を再生しながら、ぼくは緑谷くんから拳を引き抜く。まだ生命力に余裕はある。だが、補給できるならばしておいたほうがいい。べつたりと手に付く血を口にたらし、僅かに付着した肉の破片を飲み込み、生命力を回復させる。

「獣だ」

緑谷くんは静かに呟いた。

「……そういえば、死染さんは……僕の腕を食べて、そこから格段と力が強くなった。ヒーローには救えないって言葉と、今の光景と、その二つを照らし合わせたらわかる。そうだ。そういうことだったのか」
そういえば、ぶつぶつとつぶやく癖があったんだっただか。久しぶりに聞いたなあ、と思いながら、緑谷くんがぼくを見る目に若干の嫌悪が混じっているのを察する。

「死染さんは、人を食べないといけないんだね」

「うん、正解。みんなそこまでよくわかるね？」

と、言つて、せっかくなのでぼくはあの質問をすることにする。ただ、ぼくにはもう答えが出ている。だからこそ、その間に悲観はない。ただ質問として、単純な疑問として質問する。

「——ぼくは人？ それとも獣？」

「化物だ」

緑谷くんは嫌悪を隠そうともせずには答える。

「人を殺して食べるなんて、そんなのはもう人じゃない。だから僕は戦う。そして君を殺す」

緑谷くんはぼくを今この瞬間、なによりも嫌悪していた。憎々しげに、ひよつとしたら先生よりも恨めしいのではないかというほどに睨んでいた。きっと彼の目にはぼく以外見えていない。だからこそ、今から始まるのはぼくと彼との戦いだ。背後に目をやる。手出し無用の意を込めた。それを見て、弔はそのまま受け入れた。静観するように座り込んだままだ。

緑谷くんは嫌悪の念をこれっぽっちも隠さない。

その嫌悪はきつと、同族嫌悪のそれだった。

第45話

緑谷くんの指がぼくの目を貫いた。痛み動きを鈍らせない。その痛みを正面から耐え、そして緑谷くんへとお返しに殴りかかった。血があふれる。これは鼻を潰した感触か？ ひとり言えることがあるとすれば、緑谷くんとぼくは互いに命をすり減らしながら……回避をしない殴り合いを繰り返している。

脇腹が抉られた。中身が溢れる感覚がある。治癒はしない。今はいい。蘇生までとっておけ。お返しに、まっすぐ拳を放った。回避しようとした相手の左肩をかすめ、そして切断した。左手が使えなくなった緑谷くんは、すでに原型を留めていない右腕で殴りかかってくる。ぼくの片耳が半ばから千切れた。痛い。今までの比ではない痛みだ。

「うぐううううううう……!」

「——あああああああああああ!」

ぼとりと、すでにぐちゃぐちゃの目玉が落ちた。だがそれはそれ。別にいい。まだ死んでいない。耐えている。

左手の貫手が緑谷くんの右肘を引きちぎった。ちぎれた腕で殴りかかってきた緑谷くんが、ぼくの喉にへし折れた骨を突き刺した。喉に血が絡んで声を出せない。痛い。目がないから、うまく照準をあわせられない。最悪だ。早いうちに肩を引きちぎらないと。空気の揺れで緑谷くんの腕が振られるのを感じた。避ける。間一髪で避けたが、僅かに掠っただけのあばらの肉が削ぎ落とされ、骨が露出した。そろそろ治癒を使ったほうがいいか？ だがそんなことに意識を割いている間に殺されてしまいそうな予感がある。そうなるは無駄だ。

緑谷くんの右腕が掠った。頬がちぎれた。もう殆ど裸身だ。だがそんなことを考えている余裕なんてない。服なんて、あってもなくても今は変わらない。

なにかが、腹を貫通した。そのタイミングでその手を抑えた。そして肩だろう部分へと、手を振り下ろした。なにかを切断した手応え。

後ろに飛び退いても腹にそれが突き刺さったままだから、きつと腕を切断できたのだろう。吐血しながら考える。

ふと、緑谷くんの気配が消えた。逃げたのだろうか？ 目を修復し、そして街のほうへと逃げている姿を見つけ、その姿を追う。その途中で血を流しすぎて死んだ。

蘇生が発動する。もはや追うのは絶望的か？ どこへいったのだろうか、と、万全になった体で探していると、様々な瓦礫をなぎ倒し、東京タワーが飛んできた。それは狙っていたのだろうか、ぼくへと突き刺さりその姿をはるか後ろへと吹き飛ばす。ぶつちやけどうかと思ふよその攻撃。そんなことを思いながら、直感で横からくることを察知した。腕はもう引きちぎった。だがそのぶん足がある。だからこそ、低い体勢では逆に狙われる。跳躍して、足を狙いにきた攻撃を回避した。そしてからだを捻じり、そのまま蹴りへと派生する。それを緑谷くんは口で受け止め、そのままぼくの足を噛み砕いた。

そして振り上げられた足が体を両断する。蘇生が発動した。残りストックはいくらだ？ 生命力を確認するが、感覚的にはまだまだ残っているはずだ。なら少しだけ使おう。腕を変身で変形させ、巨大なものにする。それによって緑谷くんを驚掴みにした。そのまま握りつぶす——その直前に、緑谷くんが風圧を放ち、ぼくを縦にぶった切った。

蘇生が発動した。失敗した。うまく行けばこのまま殺せる想定だったが、駄目だったか。完璧に失敗だ。息を吐き出しつつ、立ち上がる。ぼくは万全で、向こうは最早死に体。戦うことも厳しいだろう。だが、立っている。ならばぼくは戦わなければならない。

距離を詰めた。早く殺す。今は万全の状態だ。ならば、多少の無茶も押し通せる。心臓へと向けて拳を放った。それを避け、緑谷くんはわずかによろけ——それを利用し、彼はぼくのしつぽを噛み千切った。

「いやあああああああああああつ!？」

緑谷くんがぼくの肉を噛み、そして飲み込んだ。しつぽが痛い。涙も出てきた。あまりの痛みに手でふと抑えてしまつて、そこで首を刈

り取られた。

蘇生が発動し、痛みもなくなる。先程の痛みが今も少し残っているから、ちよつと涙目だ。痛い。とても痛い。

血だらけの緑谷くんは、痛みから警戒しているぼくに対してなにかに焦るように近づいてくる。そこから放たれるのは足で放つ連撃だ。どれも腹を狙ったものだ。だが精彩を欠いている。だからこそ、その攻撃はすべて容易に弾くことができる。

そして、わずかに体勢が崩れたところに、ぼくの手が伸びた。

それはそのまま緑谷くんの胸へと伸び心臓を引き抜こうとする。回避しようとする動きにより心臓から着弾点はズレたが、しかしその腹へと指は侵入していった。

掴んで、抜き取る。

腸。小腸だか大腸だか知らないけれど、それを掴んで引き抜いた。

「う、ぐ……っ」

そして、追撃にもう一度手を伸ばした。それは緑谷くんの首を掴み、そのまま引つ張って地面へと叩きつけた。

——そして、緑谷くんの動きが止まった。

全身がまったく動かない。心の声は聞こえるし、心臓が動いているみたいだから、一応死んではないらしいが……と、思っただけだと、緑谷くんが話した。

「……………ここまでかな」

その言葉に、なんといいかわからなかった。だが、その言葉を最後に、緑谷くんの体が急激に死に近づき始めた、というのはわかる。

「……血、かな」

そう、血を流しすぎたのだ。きつとそうだ。今でも千切れた腕から流れ出す血を、指で搦って舐め取った。わずかだが生命力の足しになる。緑谷くんの血なら普通の人の肉の半分くらい回復するというところで、血を飲むことがどれだけ効率が悪いかわかることだろう。

「……………やつと、止まれた」

と、緑谷くんは言った。

「何も見えなくなってたんだ……これで、ようやく……みんなのところにいける……」

空を眺める虚ろな目は、一体だれのことを想起しているのか。オールマイト？ 麗日お茶子？ 爆豪勝己？ あるいは母親？ もしくは飯田くん？ ひよつとしたらその全員かもしれない。

なんとさえばいいのか、わからなかった。だからぼくは言った。

『死は救済』なんだって」

「……………」

「生きることとは戦いだよ。戦争だ。……だから、死ななかつたら永遠に戦い続ける」

「……………ああ、なるほど」

「だから、『死は救済』なんだよ。たぶんね？ だから、恐れなくていいんだ。もう休んでいいの」

「……………うん」

そう言つて、緑谷くんは空を眺めていた。

なにを考えているのか。もはやノイズだらけの頭の中からは読み取れない。ゆるやかに死が近づいている。緑谷くんは、ついに息絶えようとしている。

そんな彼に、ぼくは言った。

「こういうのはあれだけど、今まで戦った中で一番強かったよ」

「……………」

ぼくに目が向けられた。彼と視線を合わせ、そして笑つていう。

「さすがはオールマイトの子供だなーって思った」

「……………あの」

そう言えば、緑谷くんが何故か微妙な顔をした。

なんだろう。何か間違えたかな？ と思つてみると、緑谷くんが言った。

「僕、オールマイトの子供じゃないんだけど」

「……………わつつ？」

「……………オールマイトから、個性をもらっただけ」

「……………」

「……………」

「……おういえあ」

「……………」

微妙な間ができた。ごほん、と席を一つ。

「……さすがはオールライトの弟子だなんて思った」

「あははは……今のが遺言になったら……化けて出るつもりだったよ」

「こわい。」

「……火は、継がなくちゃ……」

緑谷くんはぼそりと呟いた。そして、ぼくの体の中になにかが溢れてくる。なんだ？ と首を傾げると、緑谷くんは言った。

「……僕の……僕たちの、個性さ」

「……個性……ああ、引き継いだっていう？」

「うん。……はつきりわかったんだ。その力は、正義を求めるから……絶えることさえなければ……きつといつか、正義の誰かへと繋がるって……」

「……ふーん。じゃあ、いつかのだれかに繋がるかもなんだね」

「……そういうこと」

と、言って緑谷くんは目を閉じた。

もう死ぬ。それがはつきりわかるから、ぼくは緑谷くんから視線を外さない。だれかが看取ってあげないといけないような気がしたのだ。最後にはだれかのために自分を捨て去ってしまった彼のことを。

「……ああ……お茶子ちゃん……飯田……く……おか……さ……オールライト……かつ……ちや……ん……」

緑谷くんは、そうだけ言って息絶えた。心臓はもう止まっている。息を吹き返すようには見えない。完全に死んだ。死んだのだ。

ぼくは立ち上がって、緑谷くんを置いて去る。

夜は明けようとしていた。帰る場所があるぼくは、そこへと向かって歩き始めた。

◇

ほとんど廃墟と化した東京ではあるが、人の持つ力とは凄まじいものであり、——五年の歳月を経て、街は元の形に再建されている。

一晩で滅んだ首都の代わりに岡山が首都に据えられ、そちらがどんどんと栄えて行った。故に東京の街は以前と比べ、寂しさを覚えるほどの人数になっている。

そんな場所の、未だ再建の進まない雄英高校跡地に、一人の子供がいた。

リコーダーを吹き、瓦礫の上に寝転んで、その子供は性別の判別できないへによんとした笑みをこぼす。

その頭部に座する狐の耳は、音の度にゆらゆらと揺れた。

子供はとても柔らかい体をぐによんと動かし、そして瓦礫にうつ伏せた。下敷きにしていた尻尾を引き出して、子供は小さく体を伸ばす。

その子供に、瓦礫から降りてきた複数の子供が声を掛けた。

「見つけた！」「見つけた見つけた！」「ぼくだー」「全然見つからなかったねー」「大変だったよ」

「あらー、見つかったよかったかあ」

そのすべてが同じ顔をしていた。彼らは集まり、何をするのかを全員で考え始める。そしてそれに飽きたようで、一人が寝転べば全員がそれに続いて寝転んだ。

そして瓦礫を枕に眠り始める。

そこに、その子供に似た顔をした女性が降り立った。彼女は眠る子供を見て、ちいさく笑い、そして一人を揺り起こす。

目覚めた子供は、彼女を見てにへらと笑った。それを見て彼女もにっこりと笑った。

「おかーさん」

「ん、そうだよ。おかーさんだよ。いい子だから帰ろうね？」

「おういえあー」

と、寝転んでいた子供たちが消える。彼女はそれを見届けて、子供

を抱えて瓦礫のあとから飛び去った。

「おかーさん。どうしてぼくたちは外に出れないの？」

「ばけものが出るからね」

「ふーん」

そして、ある場所にたどり着いた。

それはそこそこの大きさの建物。そこに入ると、一人の男がにゅつと顔を出した。

「おお！ 帰ってきたか帰ってきたか透トール！ 遊ぼうぜ！」

「仁くんうるさいです。トールくんのこと親よりもかわいがってるじゃないですか」

「だってかわいいだろ!？」

「弔くんからの視線が変質者を見る目ですよ」

「そのかわいいじゃねえ！」

「賑やかだねえ」

と、子供——トールはつぶやいた。それに女性もそうだねえ、とのほほんと呟く。そして、部屋の中に入ってしまった。

そこにいたのは、かつて彼らの正義のために戦った敵ヴァイラン連合のメンバーだ。古ぼけた玉座に座るとても偉いといった体勢をとるリーダーは、入ってきた二人を見て言った。

「おかえり」

「ん、ただいま」

「ただいまー！」

物語において、その結末は大抵が凡庸だ。だがそれでいい。それがいいのだろう。

人には『死』があるように、物語にはいつか終わりがくるのだから。そんなところで……そろそろぼくも、この物語の筆を置こう。

ぼくたちが駆け抜けたこの時代が、いつかの誰かに届くことを祈つて。

あとがき

まずは一ヶ月……二ヶ月の間お疲れさまでした。

狐ちゃん奮闘記、完結です。当初の予定ではあんまりシリアスシナリオになる予定もなく、とたたとのほほんとほのぼのとした話になる予定だったのですが、なにを血迷ったのか途中から残酷な描写も増え原作キャラがどんどん死んでいくという事態になりました。当初はそんな予定なかったんですよ。なんででしょうか？

わからん。

テーマは『人とは？』といったとてつもなく範囲の広いものとなりました。よって、途中でだんだんと人になっていく狐ちゃんといった描写を意識して書いたりしてみました。明確に目立つのは最初と最後らへんの対比でしょうか。親しい人を殺すのに躊躇のない狐ちゃんと、ミッドナイトを殺すのに躊躇していた狐ちゃん。ここははつきりと狐ちゃんの成長を描けたかなあと思います。

そして同時に、かなり大切にしたいなあと思ったのは物事には必ず終わりがあるってことですね。ラストはそういうことを直接書いていますけど。

ではオリキャラの紹介。

狐ちゃん。

主人公。動物であり、主人の命令を聞くだけでよかった子。ただ途中から自分で考え始め、どんどん人になっていきました。

後半になるにつれてデメリットがどんどん目立たなくなっていました。チートにするつもりはなかったんや……と作者は供述しており。

この子は『善悪の判断がつかない子供』をイメージして書いてました。その子がどんどん成長していく様子っていうのを表現できてたらしいなあって思います。

まあ子供らしさが顕著だった場所はUSJ編ですよ。あそこから作者の計画も狂っていったのです。かなしいなあ。

まあ、狐ちゃんに関してはある限り語るところもないですね。視点

主としてたくさん狐ちゃんを見せましたし。なので次。

茶味くん。

この子はなんとというか……よくわからないキャラです。印象としては進撃の巨人のフロックに近いキャラなんじゃないでしょうか？全然違うかも。

子供のときの記憶のせいで誰かに期待することを諦めた人。誰かの思いを踏み躪ることのできる暴力に惹かれた人です。重大な立ち位置になるんだろうなあと思ってたらそんなに重大にならなかった人。

このキャラに関してですが、人間らしいってキャラになるんじゃないかなって思います。無気力人間でだれにも期待してなかった人が、暴力に惹かれる。まるで非行少年そのまんまですね。かなりそれをイメージしてました。

ただその最期に関してはあまりにあっけない感じでしたね。実力差がありすぎたので仕方ない。

いくらがんばっても茶味くんって才能がないんですよ。だから非行少年止まりなんです。あれです。一般人にはよくイキれる不良みたい。ボロカスに言ってますけどまあだいたいそんなキャラなので。

スイコちゃん。

影が薄すぎた子。狐ちゃんが雄英のスパイを続ける選択をすれば、活躍の場があっただろう子。

実のところ狐ちゃんに対しての相性がバツグンなので戦えば基本的に負けます。ただ出番がなさすぎた。

イメージしたのは、『人間になれなかった少女』。そういうところは狐ちゃんに酷似してたりします。どこから来たのかその根拠もなく、生きていく証拠もなく、たださまよい続ける子。儂げな雰囲気にくせによく中指立てるファンキーな子。

雄英ルートを通った場合物間くんに好意を寄せられるスイコちゃんが見れたかなって感じ。もつと書いてあげたかったなあって思い

ます。

そしてラストにしれつと登場したトールくん。

狐ちゃんとおと弔くんの子供です。十の通りにワン・フォー・オールを継承する予定の子。狐さんはあくまでも一時的に預かつてるだけだから継承者とは言い切れない感じ。ラスボス二人から生まれた奇跡の子みたいな感じになる設定。

男の娘。

二人の子供ではありませんが、本人は父親を知りません。弔くんがこっそり隠してます。母親が父親にべったりなのに気付かないあたり狐ちゃんのポンコツを盛大に受け継いでます。

『運命に踊らされる哀れな子』というような設定になってます。この子の物語は英雄ルートと堕ちた英雄ルートの2つがあります。英雄ルートだと弔くと「私がお前の父だ」「嘘だあ——!!」をする感じになります。ちなみに別枠でメス堕ちルートも……？

見たい(素直)。

オリキャラは以上ですね。なお狐さんとトールくんは双子かってレベルで見た目が似てます。そして個性は二つが混ざってる感じのハイブリッドなので『ぼくがかんがえたさいきょうのこせい』みたいなキャラになってます。

かわりに狐さんをどこまでも追い込んだポンコツはさらに凶悪になって牙を剥きます。今度余裕があったら続編で書くかも……？

ラストの補足。

今までの物語はすべて狐さんの回想だったんだよ！ って感じのやつ。定番ですね。例えばサンホラの雷神の系譜なんかはそういったお話ですね。他にもいろいろありますが、まあそんなお話。

狐さんは戦いをすべて終え、その当事者の立場から彼女の歩んだ軌跡、そして得た答えを記しました。本にしたら盛大な見出しがつくんじやないかしら……？

まあ、三人称視点なんかも交ざってますし全部狐さんの回想ってわ

けでもないんですけど、狐さん視点のところはすべてこの回想だったのかなあ。

ところで、このお話にはいくつもの分岐点がありますが緑谷くんがアホほど強化されたのはこのルートだけです。理由は早くにオールマイトが死んだから。

緑谷くんがあそこまで壊れたのも全部オールマイトが死んだからだったんだよ!!

物語の踊り手が欠けると代役が必要なので。緑谷くんがなくなつて、それがトールくんを受け継がれるところからも世界がヒーローを求めているのだとわかりますね(???)。

原作が進行中のお話だと、やはり二次創作には致命的な矛盾が出てきます。なので原作とは違うお話にしちやえつて気分書き終えませんでした。だからいろいろ原作との相違点があります。

書いてて思ったのはジェントルお前なんで落ちこぼれたの……? ってことでした。あれは教育が悪すぎる。もっと個性しっかり伸ばしてやれ。そう思わなかったらやつてられないですよえ……。

こんなところかな? 必要かと思つた場所は随時書き足していきます。けれどある程度言いたかつたことは書き終えたので、ここらへんで本当に筆を置くことにします。

それでは本当に読了ありがとうございました。

実はかなりキャラを殺すのがつらかつた作者でした。梅雨ちゃんもつと書きたかつた……。